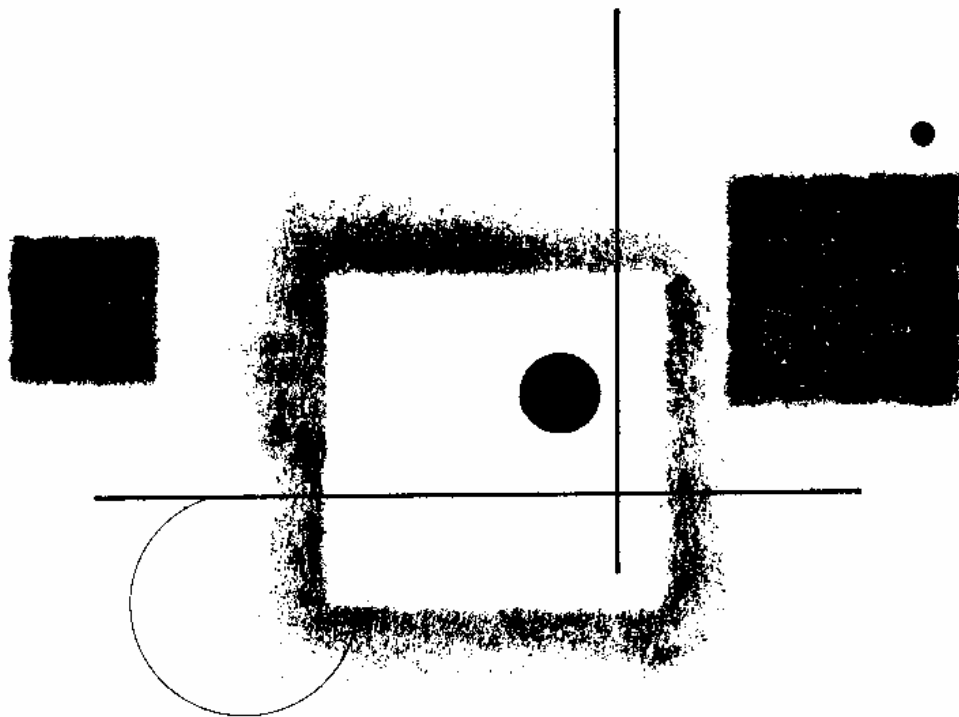


指導と評価の一体化を目指した 授業実践事例集

～高等学校～



平成16年3月

神奈川県立総合教育センター

はじめに

児童・生徒の学習評価については、新しい学習指導要領の告示を受け、平成12年12月に教育課程審議会から「児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価の在り方について」の答申が出され、これからの評価の基本的な考え方が示されました。とりわけ、観点別学習状況の評価を基本としたこれまでの評価方法を発展させ、目標に準拠した評価（いわゆる絶対評価）を一層重視するとともに、児童・生徒一人ひとりのよい点や可能性、進歩の状況などを評価する個人内評価の工夫が求められています。その後、高等学校については、平成13年4月に文部科学省から「(略)、高等学校生徒指導要録、(略)の改善等について(通知)」が出され、国立教育政策研究所からは、平成15年10月の「高等学校における評価規準、評価方法等の研究開発について(中間整理)」を経て、平成16年3月に「評価規準の作成、評価方法の工夫改善のための参考資料(高等学校)」が発表される状況にあります。

新しい学習指導要領の実施で、小・中学校では分析的な評価である観点別学習状況の評価を行い、それを基本として評定へと総括することになり、小・中・高等学校を通じて目標に準拠した評価となりました。高等学校においても、四つの観点による評価を十分踏まえながら評定を行っていくことが求められ、各学校の評価の客観性や信頼性をいかに高めるかが大きな課題となっています。

県立総合教育センターでは、こうした状況を踏まえ、平成15年度の調査研究事業の一つである「高等学校学習評価に関する研究」に取り組んでまいりました。このたび、その成果として、調査研究協力員として御協力いただいた県立高等学校の先生方による授業実践を、観点別学習状況の評価の実践事例として取りまとめることができました。

本事例集が、各学校における評価規準の作成とともに、授業づくりや授業改善の参考資料として御活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、本事例集の刊行にあたり、これまで調査研究等で御協力いただきました調査研究協力員の方々をはじめ、多くの関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

平成16年3月

神奈川県立総合教育センター
所長 鈴木宏司

目 次

I	これからの評価のあり方	・ ・ 1
II	評価の進め方	・ ・ ・ ・ ・ 5
III	実践事例の構成	・ ・ ・ ・ ・ 8

<教科別実践事例>

国 語	・ ・ ・ ・ ・ 9
地理歴史	・ ・ ・ ・ ・ 35
公 民	・ ・ ・ ・ ・ 61
数 学	・ ・ ・ ・ ・ 87
理 科	・ ・ ・ ・ ・ 113
外国語(英語)	・ ・ ・ 137

I これからの評価のあり方

平成 15 年度から年次進行で実施されている学習指導要領の下での評価のあり方については、平成 12 年 12 月 4 日に出された教育課程審議会答申「児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価の在り方について」（以下、答申とする）を踏まえ、次のように考える。

1 評価の機能と役割

答申では評価の改善が示され、その中で、評価の機能と役割について

- ①各学校の教育目標を実現するために教育の実践に役立つようにすること
- ②生徒のよさや可能性を評価し、豊かな自己実現に役立つようにすること

と述べられている。このことから、評価の対象は生徒であるばかりでなく、学校や教員も含まれていることがわかる。すなわち、評価は、生徒のために行うと同時に、学校や教員のためにも行うことが大切である。それぞれにとっての具体的な機能を示すと次のようになる。

生徒にとっては・・・①自らの学習活動の反省をし、改善に役立てる

②生き方の確立や進路の選択に結びつける

教員にとっては・・・①授業計画を確認し、調整に役立てる

②理解に戸惑いやつまずきの見られる生徒の把握と、
必要な手だてを講じるよりどころとする

③指導法の検証と改善に役立てる

学校にとっては・・・①教育課程の見直しと改善を図る方途とする

2 学力の捉え方

前回の学習指導要領改訂で、生徒の自ら学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力などの資質や能力も学力の基本と捉える新しい学力観が示されていたが、依然として知識や技能を重視する授業観が見られる傾向があった。そこで、今後の学力については、知識や技能だけでなく、自ら学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力などの資質や能力などを含めて基礎・基本と捉え、その基礎・基本の確実な定着を前提に、自ら学び自ら考える力などの「生きる力」が育まれているかどうかを含めて学力と捉える必要がある。これは、従前の学習指導要領が示した学力の捉え方を一層深め、学力の質の向上を図ることをねらいとしている。

各高等学校においては、自校の生徒の実態を踏まえ、育むべき学力を明らかにすることがまず第一に必要である。

3 評価の捉え方

これからの評価については、「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」の四つの観点による観点別学習状況の評価を基本とし、目標に準拠した評価（いわゆる絶対評価）を

一層重視するとともに、生徒一人ひとりのよい点や可能性、進歩の状況などを評価するため、個人内評価を工夫することが大切である。すなわち、目標に準拠した評価は、知識や技能の到達度ばかりでなく、自ら学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力などの資質や能力を含めて学習の到達度を適切に評価していくことになる。

(1) 目標に準拠した評価

目標に準拠した評価は、目標をいくつかの観点から分析し、その観点ごとの評価規準を作成し、その実現状況をみる評価のことである。

(2) 観点別学習状況の評価

目標に準拠した評価において、生徒の学習状況を複数の観点から評価し、学力を分析的・多面的に捉えようとする方法が、観点別学習状況の評価である。具体的には、教科目標を、基本となる四つの能力（「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」）に分類して捉え、評価しようとする考え方である。このことにより、現行の生徒指導要録では、能力の分類により観点を立てている。

評価に当たっては、「何を評価するのか」という質的な判断根拠（＝評価規準）と、「どの程度であるか」という量的な判断根拠（＝評価基準）の二つを設定する必要がある、内容のまとまりまたは単元レベルで評価することが望ましい。

四つの観点の中から、「関心・意欲・態度」について触れておくと、次のようになる。

「関心・意欲・態度」は、いわゆる「学ぶ力」の根本的な支えとなっている情意面における発達的特質から捉えようとする観点である。教科・科目の学習内容についての関心や取組の姿勢、学習過程における関心や意欲の持続性、自らの学習に対する積極性や責任感、さらに学んだことを生かそうとする意欲や姿勢などについて評価するものであり、一般的に学習意欲、積極性、持続性、協調性、自覚性、責任感などといった学習者の学力の内実を捉えるものである。学習過程では、専ら「関心・意欲・態度」の観点は導入場面での評価として注目されるものである。しかしながら、その後の学習展開における「思考・判断」の観点、それを通して身に付いたスキル等の評価における「技能・表現」の観点、学習成果として習得された状況の評価する「知識・理解」の観定の三つの観点は、それぞれ「関心・意欲・態度」に支えられているものであり、学習過程のすべてにわたり相互に関連して存在しているものといえる。

そこで、一般的に「見えにくい学力」と称される「関心・意欲・態度」の評価では、観察法や面接法をはじめ、課題レポートの取組状況やポートフォリオ評価等の多様な評価方法を工夫して見取り、生徒個々の学習指導や教員の授業改善等に生かしていくものである。

(3) 評定

高等学校の各教科・科目の評定は、従来から目標に準拠した5段階評価であったが、今回の改善においても現行の評価方法が維持されている。また、高等学校の生徒指導要録の様式には、小・中学校のように各教科・科目の観点別学習状況の欄は設けられていないが、各教科の科目の評定に当たっては、ペーパーテスト等による知識や技能のみの評価など一部の観点到偏しているとか、相対評価的になっているとの指摘もあり、「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」の四つの観点到十分踏まえて行うことが強く求められている。

評価というと、往々にして学期末や学年末に生徒に成績をつけることだと思われている面もあり、評定と評価を同じ概念で捉えないことも押さえておきたい。

(教育)評価とは・・・教育によって生じた児童生徒の変化を、一定の価値基準に照らして判定することを中心に、その変化の背景となっている諸条件の価値をも判定して、教育と諸条件を改善し、その目標を達成するための営みである。

評定とは・・・ある状態や状況を設定し、それぞれに点数や記号を予定する。児童生徒が該当する状態や状況になったときに、予定した点数や記号を付与することである。

(「指導と評価」2000年4月号 石田恒好文教大学教授(当時)による)

4 指導と評価の一体化

目標に準拠した評価においては、生徒の学習の到達度を適切に評価し、その評価を指導に生かすことが大切である。すなわち、指導と評価は別物でなく、評価の結果によって後の指導を改善し、さらに新しい指導の成果を再度評価するという、指導に生かす評価を充実させることが重要である。そのためには、評価は学習の結果に対して行うだけでなく、学習指導の過程における評価の工夫を一層進めることが大切である。また、評価活動を、評価のための評価に終わらせることなく、指導の改善に生かすことによって、指導の質を高めることも一層重要となる。

5 評価方法の工夫改善

評価に当たっては、評価方法、評価の場面や時期などについて適切な方法を工夫し、それらの積み重ねによって生徒の成長の状況を総合的に評価することが重要であり、評価方法を工夫することによって、指導の改善を図っていくことが必要である。具体的に示すと以下のようになる。

評価の種類・・・評価を学習や指導の改善に生かす観点から、総括的な評価のみでなく、分析的な評価、記述的な評価を工夫すること

評価を行う場面・・・学習後だけにまとめて評価するのではなく、学習前や学習の過程における評価を工夫すること

評価の時期・・・学期末や学年末だけでなく、目的に応じて单元ごと、時間ごとなどにおける評価を工夫すること

具体的な評価方法・・・ペーパーテストのほか、観察、面接、質問紙、作品、ノート、レポート等を用い、その選択・組合せを工夫すること

また、自己評価については、自ら学ぶ意欲などを見る上で有効であるばかりでなく、生徒が自分自身を評価する力や他人からの評価を受け止める力を身に付け、自分の能力や適性などを自分で確認し、将来の生き方や進路を探究できるようにするためにも大切である。

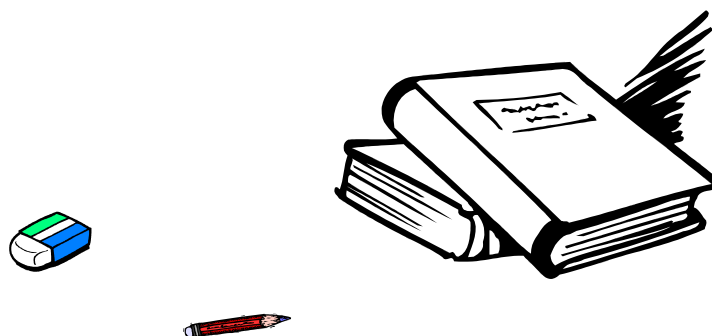
6 学校全体としての評価の取組

各高等学校においては、学校としての評価の方針、方法、体制などについて、校長のリーダーシップの下、教員間の共通理解を図り、一体的に取り組むことが大切である。また、教員が評価についての考え方を深め、評価方法を改善したり、その結果を指導に生かしたりするためには、教員一人ひとりが教育の専門職として自己研鑽に努めるとともに、学校全体で校内研修・研究を通じて主体的かつ積極的に評価の力量を高める必要がある。

7 生徒、保護者等への説明

情報公開の視点から、指導と評価に関しても学校の説明責任が求められている。そこで、評価に関して、生徒や保護者等に対し、入学時や年度当初はもとより、日常的に説明する機会を設けることが必要で、その取組を通して、共通理解を図るとともに指導や評価の改善に生かすことによって、学校への信頼を高めていくことが大切である。

評価の目的に応じて、評価する人、評価される人、それを利用する人が、互いにおおむね妥当であると判断できることが信頼性の根拠として意味を持つので、評価規準や評価方法等に関する情報を生徒や保護者等に適切に提供し、共通理解を図ることが、より客観的で信頼性のある評価へと高めていくのである。



II 評価の進め方

目標に準拠した評価を行うためには、生徒の学習状況を客観的に評価する必要があり、学校・生徒の実態に応じた評価規準の開発が不可欠である。

1 評価活動の手順

教員の主観に流されずにできるだけ客観的で信頼性の高い評価を行うためには、各高等学校の実態に応じた具体的な評価規準を設定し、評価方法等を工夫改善しながら評価活動を進めていくことが大切である。

(1) 評価に関する共通理解

先ず第一に、何のために、何を、どのように評価するのかという評価の基本的なことについて、教員間で共通理解を図る必要がある。具体的には、

- ・生徒・教員・学校のための評価であること
- ・「目標に準拠した評価」を重視すること
- ・個人内評価を工夫すること
- ・観点別学習状況の評価を踏まえて、評定に総括すること

などである。また、共通理解を図るとともに評価についての力量を高め、評価方法の改善充実に努める必要がある。

(2) 教科・科目の目標と評価の観点・その趣旨の共通理解

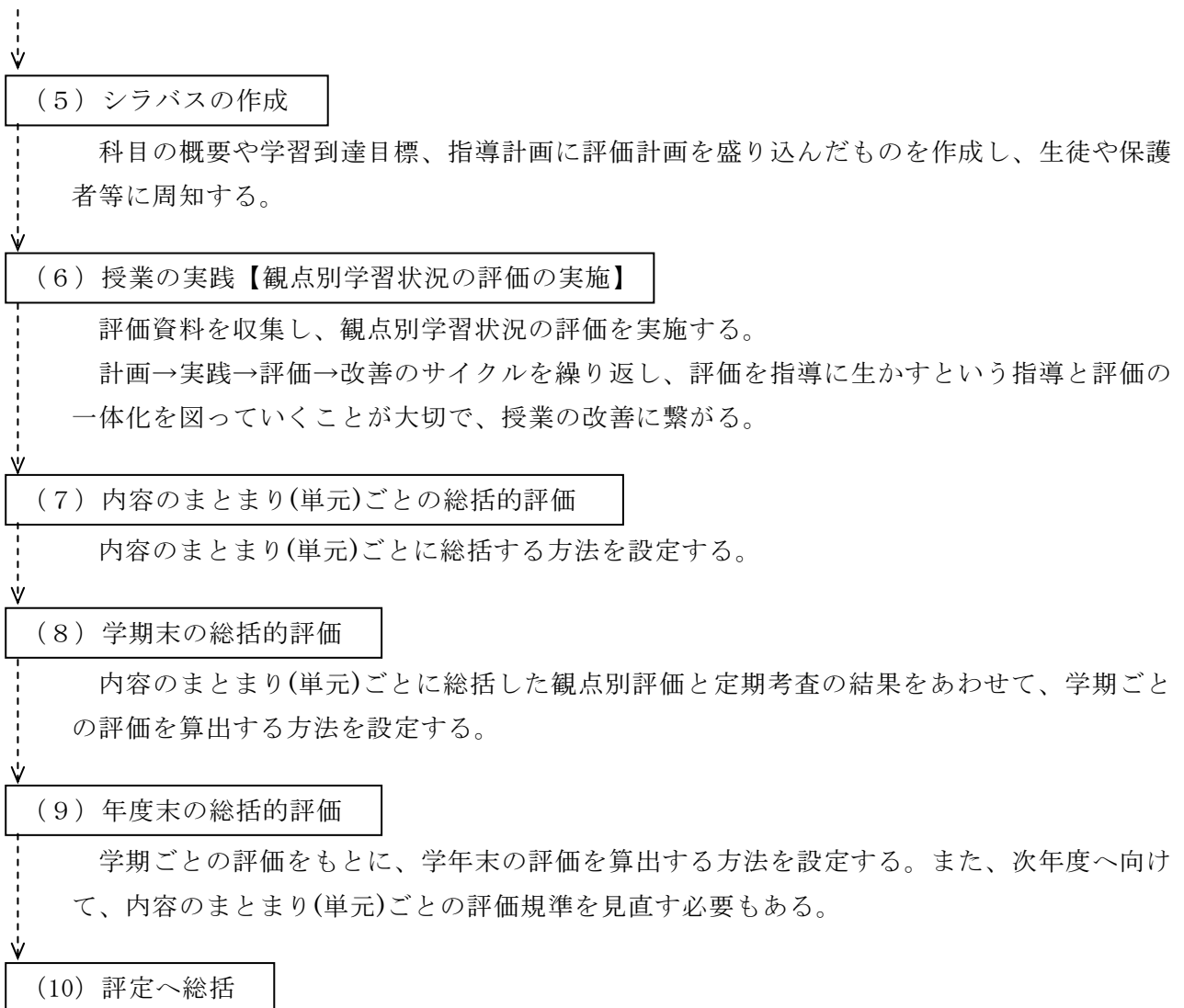
観点別学習状況の評価に当たっては、教科・科目の目標を教員間でしっかり確認することが大切である。その後、その目標の実現状況を分析的に捉えるために、評価の観点及びその趣旨について検討を加える。

(3) 内容のまとめり(または単元)ごとの目標と観点別評価規準の設定

学習指導要領解説と生徒の実態を考慮して目標を設定するとともに、国立教育政策研究所が作成した「評価規準の作成、評価方法の工夫改善のための参考資料(高等学校)」を参考にし、観点別評価規準を設定する。評価規準は目標の実現状況を捉えていくためにも重要である。

(4) 指導計画・評価計画の作成、評価場面・方法の具体化

学校の教育目標や生徒の実態に応じた学習活動やその目標を設定し、学習活動ごとの目標の実現状況を見取るための「具体の評価規準」を目標に応じて作成する。このとき、評価計画は指導計画と同時に作成されることが、指導と評価の一体化の視点からも大切である。

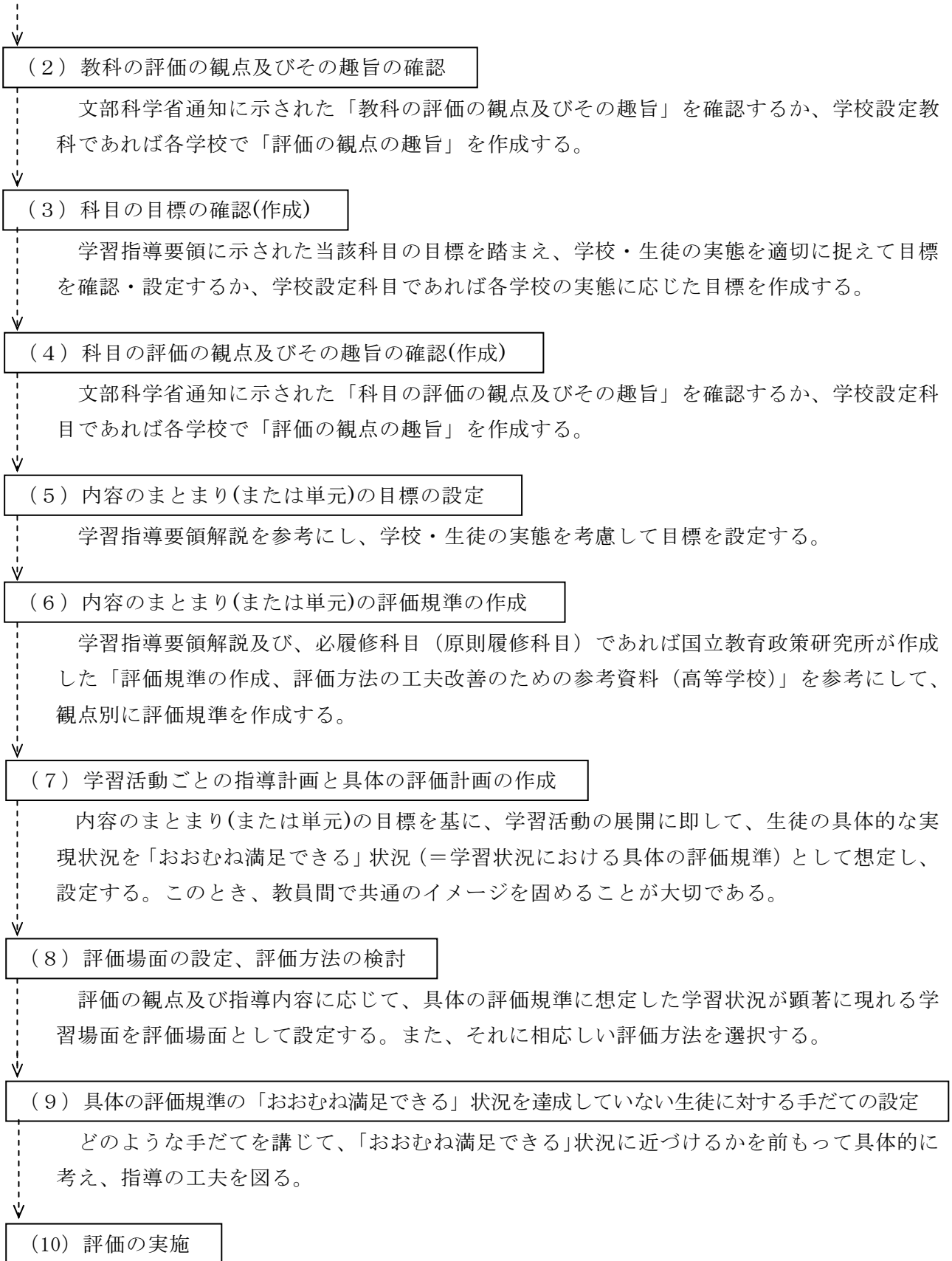


2 評価規準の作成の手順

評価規準とは、高等学校では、学習指導要領の目標に基づき生徒の実態に照らして、生徒の学習の実現状況を適切に把握するための「ものさし」である。目標に準拠した評価を重視していく上では、生徒の学習の到達度を客観的に評価するために参考となる評価規準や評価方法等を研究開発し、各学校における評価が客観的で、信頼できるものであることが重要である。以下に、評価規準の作成手順を示す。

(1) 教科の目標の確認

学習指導要領に示された当該教科の目標を確認するか、学校設定教科であれば各学校で目標を作成する。



Ⅲ 実践事例の構成

以下、国語・地理歴史・公民・数学・理科・外国語(英語)の6教科のそれぞれにおいて、教科目標、評価の観点及びその趣旨、教科における評価の留意点を記述し、各教科3本ずつの実践事例を掲載している。

実践事例は、当センターの調査研究協力員に委嘱した県立高等学校教諭（各教科3名、総勢18名）が、担当科目の一単元（外国語については、1レッスンに置き換えている）について、観点別学習状況の評価を取り入れて授業実践を行ったものである。なお、評価計画の作成に当たっては、国立教育政策研究所の「高等学校における評価規準、評価方法等の研究開発について（中間整理）」を参考にしている。また、一単元の中から、1単位時間を抽出し、「本時の展開」としてその学習指導案を掲載するとともに、各教科の特性を生かしながら、指導と評価の一体化を目指し評価活動を伴う授業を展開した結果を、「単元全体の学習の経過」「観点別評価の総括（高等学校では、観点別に実現状況をA・B・Cで評価することは求められていないが、各実践において、できる範囲でA・B・Cの累計を算出している）」「今後の課題」等の項を設けて、考察を加えている。

各実践事例の構成は次のようになっている。

1	実践期間	7	単元全体の学習の経過
2	単元名（学年）	8	本時の様子
3	単元の目標	9	単元の観点別評価の総括
4	単元の指導計画	(1)	関心・意欲・態度
5	単元の評価計画	(2)	思考・判断
(1)	評価規準	(3)	技能・表現
(2)	評価計画	(4)	知識・理解
(3)	観点別評価について	10	今後の課題
6	本時の展開		
(1)	本時の目標		
(2)	本時の指導過程		

参考資料

- 教育課程審議会 2000 『児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価の在り方について（答申）』
文部科学省 2001 『小学校児童指導要録、中学校生徒指導要録、高等学校生徒指導要録、中等教育学校生徒指導要録並びに盲学校、聾学校及び養護学校の小学部児童指導要録、中学部生徒指導要録及び高等部生徒指導要録の改善等について（通知）』
国立教育政策研究所 2003 『高等学校における評価規準、評価方法等の研究開発について（中間整理）』
高浦勝義 2004 『絶対評価とルーブリックの理論と実際』 黎明書房
神奈川県教育委員会 2003 『平成14年度高等学校教育課程研究集録』
神奈川県立体育センター 2003 「県立体育センター調査研究報告書 中学校保健体育の学習評価に係る調査研究」

国 語

1 教科目標

国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力を伸ばし心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。

2 評価の観点及びその趣旨

関心・意欲・態度	話す・聞く能力	書く能力	読む能力	知識・理解
国語や言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図り、進んで表現したり理解したりするとともに、伝え合おうとする。	自分の考えをまとめたり深めたりして、目的や場面に応じ、筋道を立てて話したり的確に聞き取ったりする。	自分の考えをまとめたり深めたりして、相手や目的に応じ、筋道を立てて適切に文章に書く。	自分の考えを深めたり発展させたりしながら、目的に応じて様々な文章を的確に読み取ったり読書に親しんだりする。	表現と理解に役立つための音声、文法、表記、語句、語彙、漢字等を理解し、知識を身に付けている。

* 観点別学習状況の評価の観点である「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」の4観点について、国語科では、新学習指導要領における目標、内容の改訂などを考慮し、「関心・意欲・態度」「話す・聞く能力」「書く能力」「読む能力」「知識・理解」の上記5観点として設定した。

3 国語科における評価の留意点

(1) 国語科における「確かな学力」

新学習指導要領の基本的なねらいは、「生きる力」の育成であるが、その「生きる力」を知の側面から捉えたものが「確かな学力」である。

「確かな学力」については、中央教育審議会答申(平成15年10月)の中で、「知識や技能はもちろんのこと、これに加えて、学ぶ意欲や、自分で課題を見付け、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力等までを含めたもの」と述べられているが、国語科の教科指導においてもこうした学力が求められている。

今回の学習指導要領の改訂では、高等学校国語は、言語の教育としての立場に立ち、互いの立場や考えを尊重して、言葉で伝え合う能力の育成に重点を置いている。国際化や情報化、深刻化する環境問題など、変化の激しい社会の中にあっては、一人ひとりがよりよい人間関係づくり、健全な社会づくりにかかわろうとする意欲を持つことが必要で、国語科としては「伝え合う力」を高めることで、こうした意欲や態度を育てていくことが目的になる。

(2) 国語科の評価観点

学力のあり方として、知識・理解のみならず、意欲、思考力、判断力も重要であることを考慮すれば、学習評価においても生徒の学力を分析的・構造的に捉える必要が生じる。とくに生徒が「確かな学力」をはぐくむためには、教員の側も生徒の学習状況を逐次把握しながら、指導の充実・改善を図ることが重要で、現行の学習指導要領の下で目標に準拠した評価（いわゆる絶対評価）が重視されるのもそのためである。

目標に準拠した評価とは、生徒がそれぞれの学習内容ごとに示された目標をどの程度実現しているかを評価するものだが、この評価の仕組みは、原則的には「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」という4つの観点によってなされるものである。評価規準も観点別に示される。ただし国語の観点は、「関心・意欲・態度」「話す・聞く能力」「書く能力」「読む能力」「知識・理解」の5つの観点になっている。これは、現行の学習指導要領の目標に「伝え合う力を高める」ことが加わったことによって、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」と、内容の領域構成が変更されたことに由来する。

(3) 国語科の評価のポイント

目標に準拠した評価を行う上でのポイントは、学習に先立って生徒に対し、それぞれの学習内容に対応した具体的な目標を明示し、その目標ごとに評価方法を準備しておくことである。評価の方法としては、ペーパーテストのほか、観察、面接、質問紙、作品、ノート、レポートなどを用いることが考えられるが、評価に当たっては、その方法や仕組みを生徒や保護者に説明することも重要である。評価の資料が単純な数値のみによるものではないため、その信頼性を確保することが、学習評価を生徒の学力向上に役立てるためにも必要となってくるのである。

また、いわゆる指導と評価の一体化の視点も重要である。すなわち学校の教育活動は、計画、実践、評価という一連の活動を繰り返しながら、生徒のよりよい成長を目指すもので、評価の結果によってその後の指導を改善し、改善された後の指導の成果をさらに評価するといったような、指導と評価とを結びつけた教育活動を行う計画の作成が求められている。

(4) これからの評価方法の改善に向けて

これからの評価方法の改善を考えるに当たって、そもそも評価とは何のために行うものなのかという、原点を振り返ることも重要であると思われる。

では、評価の目的とは何だろうか。評価を行う第一の目的は、生徒の学力——確かな学力——を伸ばすことである。第二の目的は、教員の指導を改善・充実させることであり、その評価を今後の指導に生かすことである。

つまり、学習評価において重要なことは、生徒を評価すること自体よりも、評価に基づいて個々の生徒を指導していくことなのである。もちろん評価することによって、生徒の、国語への「関心・意欲・態度」を喚起するような配慮も必要だが、評価によって、生徒に自己の学習状況を確認させ、その改善につなげながら、教員も学習指導を見直し、よりよい授業を創っていく努力を重ねることが、最も大切なことであろう。

引用・参考文献

中央教育審議会 2003 『初等中等教育における当面の教育課程及び指導の充実・改善方策について（答申）』

実践事例 1 国語総合 「話すこと・聞くこと」を中心として

1 実践期間 平成15年11月7日～12月19日

2 単元名(学年) 21世紀を予言する(1年)

3 単元の見込み

- (1) これまで身に付けてきた国語の力を総合的に活用し、話す能力を高める。
- (2) 他の生徒のスピーチ内容を踏まえて、スピーチ原稿を作成することにより、話す力を身に付ける。
- (3) アドバイスシートに記入しながら、他の生徒のスピーチを聞くことを通して、聞く能力を高める。

4 単元の指導計画(8時間扱い)

第1次(1時間) ① 単元の内容・目標・評価についてのガイダンスを行う。

② スピーチのジャンルを選択させ、具体的なテーマを決定させる。

③ 各自、テーマに関する資料を集めておくよう指示する。

第2次(1時間) ① スピーチや聞き書きに関する技術について知らせる。

② スピーチに活用する資料を持ち寄せ、内容を検討させる。

③ 集めた資料と活用資料をマップ法でまとめさせ、スピーチ原稿の構成を練らせる。

第3次(1時間) ① マップを参考にスピーチ原稿を書かせる。(次時まで完成させるよう指示する。)

第4次(1時間) ① 三人一組で各自スピーチをさせる。

【本時】 ② 聞き手にはスピーチアドバイスシートを見ながら聞かせる。

③ スピーチアドバイスシートを交換させ、アドバイスから自分の改善点を明らかにさせる。

第5次(4時間) ① 前時に明らかにした改善点を踏まえ、スピーチ原稿を手直しさせる。

② 意見文『21世紀を生きる私たち』を書くためのマップを作成させる。

③ 意見文『21世紀を生きる私たち』を書かせる。

④ 作文の合間に、完成したスピーチ原稿を読み上げさせ、スピーチの評価をする。

5 単元の評価計画

(1) 評価規準

関心・意欲・態度	話す・聞く能力	書く能力	読む能力	知識・理解
<ul style="list-style-type: none"> ・スピーチに関心を持つようとしている。 ・スピーチのアイディアに役立つ資料を積極的に集めようとしている。 ・積極的に人や言 	<ul style="list-style-type: none"> ・相手の話す能力の向上を促すようなアドバイスをするために、的確に聞き取ることができている。 ・速度や音量などに注意して話す 	<ul style="list-style-type: none"> ・テーマに沿った資料を盛り込んで、説得力のある原稿を書いている。 ・読み上げやすい原稿を書いている。 ・人の意見を総合して自分の意見を再構築し、論理的に 	<ul style="list-style-type: none"> ・資料を正確に読み取っている。 ・自己の改善点に気づくよう、アドバイスシートを的確に読み取っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・スピーチについての技術を理解している。 ・多くの資料を整理する方法を理解している。 ・音声言語と文字言語の違い

葉の未来について考えを表現しようとしている。	ことができている。	書いている。		を理解している。
------------------------	-----------	--------	--	----------

(2) 評価計画 ※太枠内が本時 【 】は評価方法

次	学習内容	評価項目				
		関心・意欲・態度	話す・聞く能力	書く能力	読む能力	知識・理解
1	①単元の内容、目標、評価について理解する。 ②スピーチのジャンルを選ぶ。 ③スピーチのテーマを決定する。	スピーチに関心を持つようとしている。 【観察】				
2	①スピーチ用資料を整理する。 ②資料をマップ法でまとめ、原稿の構成を決定する。				資料を正確に読み取っている。 【作成資料】	スピーチや聞き書きについての技術を理解している。 マップ法という資料の整理方法を理解している。 【発表・ワークシート】
3	①スピーチ原稿を書く。	各自選んだテーマについて積極的に考えを表現しようとしている。 【観察】		テーマに沿った資料を盛り込んで、説得力のある文章を書いている。 【原稿】		聞き取りやすい言葉づかいを意識的に選んでいる。 【発表】
4	①互いにスピーチをする。 ②アドバイスシートを書き、交換する。 ③アドバイスシートを参考に改善点に気づく。	意欲的にスピーチをし、集中して聞いている。 【観察】	アドバイスのできるように的確に聞き取っている。 速さや音量などに注意して話すことができている。 【アドバイスシート・発表】		自己の改善点に気づくよう、的確にアドバイスシートを読み取っている。 【アドバイスシート】	
5	①スピーチ原稿を手直しする。 ②意見文のためのマップを作成する。 ③意見文を書く。	未来について深めた考えを意欲的に表現しようとしている。	これまでの学習を生かしたスピーチをしている。	人の意見を総合して自分の意見を再構築し、論理的に書		マップ法を効果的に活用している。

④スピーチの評価を受ける。	【観察】	【発表】	【原稿】	【ワークシート】
---------------	------	------	------	----------

(3) 観点別評価について

【関心・意欲・態度】

学習活動における具体的評価規準	<ul style="list-style-type: none"> ・スピーチに関心を持っている。 ・スピーチに役立つ資料を積極的に集めようとしている。 ・積極的に人や言葉の未来について考えを表現しようとしている。
「十分満足できる」状況 (A) と判断する具体的状況例	<ul style="list-style-type: none"> ・意見をまとめ、表現することに喜びを感じている。 ・スピーチテーマに関心を持ち、関連する資料を多様な方法で意欲的にたくさん集めている。 ・集めた資料をもとに自ら考えて、積極的に話したり聞いたりし、自分の考えを深めている。
「努力を要する」状況 (C) と評価した生徒への手だて	<ul style="list-style-type: none"> ・人に考えを伝える意味について話し合ってみる。 ・新聞やインターネット検索など、資料集めに役立つ方法をいくつか助言し、できるものを選ばせる。 ・人や言葉の未来は、我々一人ひとりの人生と関連する事柄であることを説明し、他者の意見にも耳を傾けて、未来への関心を持つよう助言する。

【話す・聞く能力】

学習活動における具体的評価規準	<ul style="list-style-type: none"> ・相手の話す能力の向上を促すようなアドバイスをするために、的確に聞き取ることができている。 ・速度や音量などに注意して話すことができている。
「十分満足できる」状況 (A) と判断する具体的状況例	<ul style="list-style-type: none"> ・他者のスピーチの要点と流れを的確につかみ、良い点と改善を要する点を的確にとらえ、向上意欲を喚起するような言葉で伝えている。 ・聞き手に正確に伝わるような効果的な話し方を工夫して話している。
「努力を要する」状況 (C) と評価した生徒への手だて	<ul style="list-style-type: none"> ・話し手が力を入れたり、繰り返したりしている点を比較して、それぞれの特徴をとらえてみるように助言する。 ・自分の考え、またそう考えるに至った理由の中で、大切だと思う言葉に力を入れて、ゆっくり話すよう助言する。

【書く能力】

学習活動における具体的評価規準	<ul style="list-style-type: none"> ・テーマに沿った資料を盛り込んで、説得力のある文章を書いている。 ・人の意見を総合して自分の意見を再構築し、論理的に書いている。 ・読み上げやすい原稿を書いている。
「十分満足できる」状況 (A) と判断する具体的状況例	<ul style="list-style-type: none"> ・根拠となる資料を盛り込んで、個性的な意見を筋道立てて説明する文を書いている。 ・他者の意見を生かし、未来について多面的に考えた主張が正確に伝わるように工夫をして書いている。 ・音声言語にふさわしい言葉で書いている。
「努力を要する」状況 (C) と評価した生徒への手だて	<ul style="list-style-type: none"> ・資料を一つ選び、内容を一緒に確認し、具体的に構成を助言する。 ・他者の意見を踏まえると、未来はどのようなイメージかを考えて書いてみるよう助言する。 ・聞き取りにくい言葉や話し方を具体的にあげ、わかりやすく言い換え

	る方法について助言する。
--	--------------

【読む能力】

学習活動における具体的評価規準	<ul style="list-style-type: none"> 資料を正確に読み取っている。 自己の改善点に気づくよう、アドバイスシートを的確に読み取っている。
「十分満足できる」状況（A）と判断する具体的状況例	<ul style="list-style-type: none"> 集めた資料の主旨を的確に読み取ることができている。 メンバーから受け取ったアドバイスシートの中に書かれた意見を参考に、自己の改善点に気づき、スピーチ原稿の手直しに生かすことができている。
「努力を要する」状況（C）と評価した生徒への手だて	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の状況に応じて、実際の資料をもとに、どのような誤解があって正確に読みとれなかったのか、一緒に検証する。 生徒の状況に応じて、実際にアドバイスシートを見ながら、どのような改善点があるのか、一緒に検証する。

【知識・理解】

学習活動における具体的評価規準	<ul style="list-style-type: none"> スピーチについての技術を理解している。 多くの資料を整理する方法を理解している。 音声言語と文字言語の違いを理解している。
「十分満足できる」状況（A）と判断する具体的状況例	<ul style="list-style-type: none"> 日常会話とスピーチの話し方が違うことを理解している。 多くの資料同士の関連性をわかりやすく表現するためのマップ法を理解している。 音声言語の記載には記述言語とは違う注意が必要なことを十分に理解し、聞き取りやすい言葉を選んでいる。
「努力を要する」状況（C）と評価した生徒への手だて	<ul style="list-style-type: none"> 聞き取りにくい話し方を具体的にあげ、わかりやすく話す方法について助言する。 二つの資料の内容を簡潔に表現し、それがテーマとどのような関係にあるのかを矢印などを使って表してみるよう指導する。 資料に書いてある言葉をそのまま使うのではなく、一度聞いただけで理解できる言い方に変える工夫が必要なことを指導する。

6 本時の展開

(1) 本時の目標

- ① 聞き手を十分に意識したスピーチを行う。
- ② 話し手のスピーチを的確に聞き取り、話す能力の向上を促すようなアドバイスをする。
- ③ 聞き手のアドバイスから自分のスピーチの改善点に気づく。

(2) 本時の指導過程

過程	学 習 活 動	指 導 内 容	指 導 上 の 留 意 点	評 価 観 点 (方 法)
導入 (5分)	<ul style="list-style-type: none"> 本時の学習活動について理解する。 グループに分かれ、机を移動する。 	<ul style="list-style-type: none"> 本時の学習活動について説明する。 アドバイスシートを配布する。 		
展開 (40分)	<ul style="list-style-type: none"> グループごとにスピーチの順番を決 	<ul style="list-style-type: none"> スピーチは席にいたまま、グルー 	<ul style="list-style-type: none"> 教室内で同時に何人かが声を出すの 	【関心・意欲・態度】 意欲的に話し、集中

	<p>め、3分ずつ発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 聞き手はスピーチをよく聞き、アドバイスシートを書く。 全員のスピーチが終わったら、アドバイスシートを話し手に渡す。 アドバイスシートを読み、自分のスピーチの改善点を整理する。 	<p>プのメンバーに向かって話すように指示する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 聞き手はアドバイスシートの内容を踏まえつつ、メモをとらず、聞くことに専念するように指導する。 アドバイスシートの下段に気づいたことをメモするよう指導する。 	<p>で、騒がしくならないように注意する。</p> <ul style="list-style-type: none"> アドバイスは話し手の向上を助けるもので、誹謗中傷ではないことを再度確認させる。また、アドバイスシートに記名することで、自分の発言に責任を持つことを伝える。 アドバイスの内容が理解できない場合には、その場で話し合いをさせる。 	<p>して聞いている。 (観察)</p> <p>【話す・聞く能力】 話し手の向上を促すようにアドバイスをしている。 速さや音量などに注意して話すことができています。 (アドバイスシート・発表)</p> <p>【読む能力】 自己の改善点に気づくよう、的確にアドバイスシートを読み取っている。 (アドバイスシート)</p>
<p>まとめ (5分)</p>		<ul style="list-style-type: none"> 本時の学習を振り返りをさせる。 次時の学習内容を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> 次時はアドバイスをもとに原稿の手直しをすることを伝える。 	

7 単元全体の学習の経過

導入で、この単元での活動内容と、何がどのように評価されるのかを明らかにした。そのため目標が明確になり、どの生徒も意欲的にこの単元に取り組むことができた。学習後のアンケートでも、「最初は何をしたら、良い成績につながるのかわからなくて不安だった」「テストと違って、評価の基準が曖昧で理解できなかった」などの気持ちが、「自分のよいところや努力を評価してもらえてよかった」「毎時間の活動が成績に反映されてやりがいがあった」など、前向きな意見に変わっていく様子が見取れた。

また、あらかじめ評価計画をたて、かつそれが観点別であったために、指導の内容そのものが変わった。具体的には、「やらせてみる」というスタンスから「積極的にすべきことを教える」という姿勢に変化した。その結果、「どうやればいいかわからない」という生徒(観点別評価でCにあたる生徒)に対して、直ちに助言でき、わからないままに終わらせない指導ができたと感じる。

8 本時の様子

座席順に三人グループを作り、スピーチをし合った。3分間スピーチであるが、聞いたあとでアドバイスシートを記入する時間も必要なため、三人のグループで適切だった。特にアドバイスの方法について、「〇〇ができていません」と伝えるのではなく「〇〇してみてください」と、何をしたらよいか明確にするように指導した。生徒は大変積極的に活動していた。あるグループが夢中になりすぎて、他のグループのスピーチが続いているのに、大きな声で自グループの反省の話し合いを始めてしまい、他のグループの迷惑になったので、全体に注意を促したが、改善しきれな

かった。授業終了後、「グループ以外の人スピーチは聞けないのか」という質問が多数寄せられ、この単元に対する関心の高さがうかがわれた。

9 単元の観点別評価の総括

(1) 関心・意欲・態度

意欲的に資料を集め、喜んで表現し、自らの考えを深めていることで「十分満足できる」との評価規準を設定していたが、クラスのほとんどの生徒がこの規準に到達した。このような場合、生徒の状況に対して目標が低すぎたととらえ、さらに発展的な目標を設定し、指導すべきだったのかもしれないが、そのような目標を思いつくことができなかった。逆に、単元終了後、生徒から「2年生になったら、今回の学習を生かし、別のジャンルで同じような活動がしたい」と言われ、そのような発展の方法もあると気づかされた。

評価項目の中には、たくさんの資料を集めるという項目があったが、資料は少なくても、優れたスピーチ原稿を書き上げた生徒も少なくないので、この項目の設定自体に問題があったとも思われる。

○評価累計 A…37人 B…2人 C…0人

(2) 話す・聞く能力

相手の話す能力の向上を促すようなアドバイスをするために的確に聞き取っていることと、聞き手に理解されやすい速度や音量などに注意して話すことを評価規準としたが、実際の発表の様子やアドバイスシートの記述内容から、ほぼすべての生徒が「おおむね満足できる」と評価された。

「話す」の方では、第5次の「スピーチの評価を受ける」の時に、恥ずかしがって大きな声が出せなかったり、速すぎて時間が余ってしまったりした生徒に対してその旨を指導したが、再度評価を受けるチャンスを与える時間的余裕がなかったので、次の活動に生かされるような指導だったかは疑問が残る。

「聞く」では、生徒同士のアドバイスのやりとりが非常に効果的に行われ、言う側、言われる側ともに納得のいく活動となっていた。この部分だけで評価するなら、多くの生徒がAであったと思われる。

○評価累計 A…10人 B…29人 C…0人

(3) 書く能力

音声言語に適した文章、論理的な文章、多くの意見を総合して自分の意見を再構築する思考方法ができていることを評価規準としたが、おおむね満足できる状況だった。

スピーチ原稿では、最初から完成度の高い文章を書くことよりも、手直しをしながらよりよい原稿にしていくことを重視して指導した。「努力を要する」Cの状態である生徒には、具体的に盛り込む内容を助言した。例えば「テーマを選んだきっかけを最初に入れたらどうでしょう」とか、「最後にこの予言に対するあなたの感想を入れてみたら、まとまりがよくなるでしょう」「この言葉はわかりにくいので、すぐ後で言い換えてごらん」といったような助言である。これによって、Cの状態のままとどまる生徒はいなかった。

『21世紀を生きる私たち』の意見文では、スピーチ原稿とは逆に、マップを作る指導以降はほとんど助言をしなかった。しかし、マップの活用法に慣れたためか、個性的で意欲のある作文に仕上げた生徒が多かった。

○評価累計 A…8人 B…31人 C…0人

(4) 読む能力

資料を的確に読み取っている、アドバイスシートから改善点を的確に読み取っているの2点を評

価規準とした。

資料については、実際に話されているような資料だったのか、検証することはできなかった。インターネットの情報などは印刷して提出してもらったが、それをすべて確認することは、莫大な時間と労力を要する。さらに、中には何冊もの本を読み、映画やニュースをたくさん見て書いたという生徒もおり、教員が検証しやすいものだけ検証するという姿勢は不平等に思われた。そこで、実際には、スピーチの中で明らかにそのような資料ではなかったはずだとわかったものを指摘し、確認させるにとどまり、評価の対象にはできなかった。

アドバイスシートは、アドバイスの仕方を指導した結果、改善点に気づきやすい内容となったことも手伝って、多くの生徒が的確に読み取れていた。

○評価累計 A…35人 B…4人 C…0人

(5) 知識・理解

スピーチについての理解、マップ法の理解、音声言語と文字言語に対する認識などを評価規準とした。

スピーチについての知識は、今回の指導以前に、ほぼすべての生徒が中学校で弁論を経験しており、学年や学校の代表だった生徒もいて、あらかじめよく理解されていた。

マップ法については、最初はまったく手が付けられない生徒がほとんどだったので、その時間に評価していたら、30人ほどがCになったと思われる。しかし、時間をかけて理解を深め、意見文のために二度目のマップ法に挑戦した時には、多くの生徒がおおむね満足できるマップを書くことができた。このような知識は、指導した時間の様子だけで評価をするのではなく、段階を追って見ることも必要だと思われる。また、授業では深く触れなかったのにマップ法の活用法をいろいろと思いついた生徒も何人かいて、知識を深めている様子も見られた。

○評価累計 A…13人 B…26人 C…0人

10 今後の課題

目標がはっきりすると意欲が増すという本校の生徒の特徴が、今回の単元と合致して、予想を上回る取組を見せた。そのため常に発展的な目標の提示に迫られたが、多くの場面でそれができなかった。それは、この単元に同時に取り組んだ生徒が160名いることが大きな理由である。一人ひとりの活動状況を把握し、理解が進まない生徒に助言し、また個別に助言を受けに来る生徒の対応をすることで手一杯となり、ともすればその時間単独の評価などはできないと感じることも多かった。その対策として「評価のてびき」という用紙を作成し、その場で評価するものと後で評価するものを明確に区別することにした。それでも、単元終了後の評価作業量は膨大で困難を感じた。しかしながら、一方で、この単元を楽しみ、やり遂げた充実感・達成感を覚えた生徒が非常に多いことも事実である。

このような表現活動を行う時には、TTを導入するとか、少人数クラスを編成するとか、物理的な指導体制の工夫も必要なのではないだろうか。

また、評価規準をあらかじめ公表することで、生徒がいかに意欲的になるのかを目の当たりにし、指導と評価の一体化という観点が重要であるとの認識に至った。指導者の視点から見ても、「このような状況に陥っている生徒にはこのように指導しよう」と心づもりをしておくことは、授業中の心のゆとりにつながることを実感した。ただし、今回の単元はペーパーテストによらない評価だったので、このような効果が生まれたのだと思われ、ペーパーテストによる場合どのような配慮や工夫が必要なのかは、また別の研究が必要だと思われる。

21世紀を予言する～3分間スピーチと予言文～

1 何をするの？

教科書の178ページを開いてみてください。そこに書かれていることをよく読んで参考にしながら、「21世紀はどのように過ぎていくか」について、テーマを決めて考えてみましょう。

でも、ただ考えただけでは終わらせたくないですね。考えた内容を3分間でスピーチします。また、メンバーがどのような意見を持ったのか、よく聞きます。つぎに、「予言文」として、まとめの説明文を書きます。

2 何を理解すればいいの？

スピーチをしたり、スピーチを聞いたり、説明文を書いたりするには、教科書の内容を習うのとは違う知識と技術が必要ですね。それを理解しましょう。

意欲・関心	①21世紀がどうなっていくのかなんて、インターネットを調べても答えが書いてあるわけではありません。意欲的にこの難しい問題に取り組むには、どんな気持ちや姿勢が大切でしょう？
資料を読むために	①スピーチテーマに関する文章を読んで、予備知識をつける必要がありますね。書いてあることを正しく読み取るにはどうしたらいいでしょう？
スピーチをするために	①根拠のない思い付きでは説得力がありません。根拠になる資料を探し出し、それを整理して話すにはどうしたらいいでしょう？ ②いきなり話すのでは誰でも緊張してしまいます。読みやすい原稿を作っておくにはどうしたらいいでしょう？ ③「書き言葉」と「話し言葉」は別のもので、聞いただけで分かりやすい言葉を選んで話すには、どうしたらいいでしょう？
スピーチを聞くために	①3分間のスピーチには、さまざまな内容が入っていると思われます。大切なことを聞き逃さないためには、どうしたらいいでしょう？ ②なれないスピーチにいきなり成功する人ばかりではないかもしれませんがね。もっと聞きやすいスピーチにする方法を上手に助言するにはどうしたらいいでしょう？
予言文を書くために	①ここまでの間に、みなさんは未来についていろいろな情報を見聞きしました。それらの情報をふまえて、改めて未来を予測するにはどうしたらいいでしょう？ ②「話し言葉」と「書き言葉」は別のもので、読みやすい原稿作りをするためには、どうしたらいいでしょう？

単元『21世紀を予言する』評価のてびき

No.	項目	提出 チェック	評価				
			A 十分でき ている	B できて いる	C 努力を 要する	D 評価不能	
1	マップ	○	10	8	5	0	
2	スピーチに使う資料	(3)	10	8	5	0	
3	他の人へあげた資料	(0)	5				
4	スピーチ原稿	○	10	6	5	0	
5	スピーチ アドバイスシート	○	10	8	5	0	
6	私たち マップ	○	10	8	5	0	
小計						48	

7 スピーチ

短く、
身が好人！
一番最初に
発表しました！！

- ①タイトル 21世紀、人口どう変化するか？
②予言の要約 人口は急増するが、また増え続ける。
③スピーチで使った点 全員順序や、クイズが大人気だった。
④スピーチで使った点 最後、全員原稿を大きく読んだこと。

評価	評価			
	A とても いいです	B おおむね いいです	C まあまあ いいです	D 満足 ありません
話し方は はっきりと聞かす。	10	8	5	
内容は 資料がなくていいです。 論理的に構成ができています。	10	8	5	
スピーチ時間は 2分45秒	10	8	5	
小計				
30				
総合				
20-25 A 26-21 B 18-15 C 10-5 D				

8 『21世紀を生きる私たち』

- ①あなたが属する21世紀像(便利になり、食生活がさらに豊かになる)を想像して、
②それをどう生きたいか(文化や伝統と進化の技術が共存する)を想像して、
③この作文で書きたかった点(自分らしい)を、作文に打ち込みたい点(大げな)を、
④この作文で工夫した点(文章の面白さを)を、作文に書き込みたい。

評価	評価			
	A とても いいです	B おおむね いいです	C まあまあ いいです	D 満足 ありません
構成は 資料がなくていいです。 論理的に構成ができています。	10	8	5	
話し方は はっきりと聞かす。	10	8	5	
内容は 資料がなくていいです。 論理的に構成ができています。	10	8	5	
スピーチ時間は 2分45秒	10	8	5	
小計				
23				
総合				
20-25 A 26-21 B 18-15 C 10-5 D				

101

1年 組

スピーチアドバイスシート

話し手	さん	
テーマ	21世紀人口はどうなるか	
☆チェックリスト		
話す速さは	ゆっくりする	速すぎる
声の大きさは	小さすぎる	よく聞こえる
話し方は	メリハリがなく聞きにくい	メリハリがあり聞きやすい
話の内容は	分かりにくい	よくわかる
		とてもよく分かる

1 今のスピーチで、テーマに対し、予言された未来はどのようなものだと理解しましたか？
今後、人口は増加していく

2 今のスピーチで、よかったのはどのような点でしたか？
話しの内容が、丁寧で、聞きやすい。内容も、わかりやすく、聞きやすい。

3 今のスピーチを更によくするために、どのような工夫をすればよいと思いますか？
例をもう少し詳しく話し、読んでほしいものもふまけてほしい。

アドバイザー氏名

話し手のメモ欄

☆このアドバイスシートから、自分のスピーチのどのような点を、どのように改善したらよいと考えられますか？

例をもう少し詳しく話す、わかりやすく、自分の未来をしっかりと話す。

実践事例2 国語総合 「書くこと」を中心として

1 実践期間 平成15年10月29日～11月7日

2 単元名(学年) 新聞の投稿に返信しよう(1年)

3 単元の目標

- (1) 相手の心情を推し量りつつ、自分の考えを文章にまとめることで、書く能力を高める。
- (2) 公の場での意見表明を念頭に置いたコミュニケーション能力を高める。

4 単元の指導計画(5時間扱い)

第1次(1時間) 指導者が用意した悪文を訂正する作業を通して、わかりやすい文について理解させる。

第2次(1時間) 新聞紙上でやりとりされた文を読ませ、投稿文に必要な条件を考えさせる。

第3次(1時間) 課題の投稿文を読ませ、それに対して返信を書かせる。

第4次(1時間) 生徒同士で返信の相互評価を行わせ、評価した返信への返事を書かせる。

【本時】

第5次(1時間) 他の生徒の優れた返信を読ませたり、相互評価を確認させたりしたうえで、もう一度自分の文章を推敲させる。

5 単元の評価計画

(1) 評価規準 (ここでは「話す・聞く能力」は扱わないこととした。)

関心・意欲・態度	書く能力	読む能力	知識・理解
<ul style="list-style-type: none"> ・わかりやすい文とはどのようなものかということを理解しようとしている。 ・条件にあわせて自分の考えをわかりやすく文章化しようとしている。 ・他者の文章を評価することで、自己の文章表現能力を高めようとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・条件に応じた題材や語句を選び、客観的に表現している。 ・自分の考えを整理し相手に伝わりやすく筋道立てて文章化している。 ・自分の考えを相手に納得させるために論理的な文章を書いている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・文体や表現技法の特徴に注意しながら読んでいる。 ・書き手の考えを整理して読むことで、自分の思考を深めている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・語彙が豊かで語句の意味や用法を理解している。 ・日本語の構造を理解し、効果的な表現方法を身に付けている。

(2) 評価計画 ※太枠内が本時 【 】は評価方法

次	学習内容	評価項目			
		関心・意欲・態度	書く能力	読む能力	知識・理解
	①悪文を適切な表現に訂正する作業を行う。	悪文となった原因を発見し、わかりやすい文に直そうと努力している。			語句の意味、用法の誤りをすぐに見つけることができ
	②わかりやすい文と				

1	<p>はどのようなものか整理、理解する。</p>	<p>わかりやすい文を書くためのポイントを理解しようとしている。</p> <p>【観察】</p>			<p>る。</p> <p>日本語の特徴を理解して、適切な表現に直すことができる。</p> <p>【観察】</p>
2	<p>①新聞紙上で実際にやりとりされた文を読み、投稿する際に必要な条件を考える。</p>	<p>他者の心へ届く文章とはどのようなものか理解しようとしている。</p> <p>具体例のよい点を自らの文章に生かそうとしている。</p> <p>【観察】</p>		<p>具体例の文体や表現方法にどのような工夫があるか読み取っている。</p> <p>具体例のどのような点が自己の文章に生かせるか考えている。</p> <p>【観察】</p>	
3	<p>①課題になっている実際の投稿文を読む。</p> <p>②課題文に対する返信を書く。</p> <p>③自分の書いた文章を推敲する。</p>	<p>投稿文にそって、自らの考えをわかりやすく文章化しようとしている。</p> <p>自分の返信をよりよいものにしようとして推敲を重ねている。</p> <p>【観察・ワークシート】</p>	<p>投稿文への返信として適切な語句や表現を使っている。</p> <p>自分の考えを整理して、過不足なく文章化している。</p> <p>読み手が納得できるように、理路整然と文章を展開している。</p> <p>【観察・ワークシート】</p>	<p>投稿文に表れた投稿者の心情をしっかりと汲み取っている。</p> <p>【観察・ワークシート】</p>	
4	<p>①他の生徒が書いた文章を読み、推敲と相互評価を行う。</p> <p>②評価を行った文章に対して、投稿者になり代わって返事を書く。</p>	<p>他者の文章から積極的に学び、自己の文章力を高めようとしている。</p> <p>他者の文章を客観的に評価しようとしている。</p>	<p>返信への謝辞であることをおさえた語句、表現を使っている。</p> <p>返信を真摯に受けとめ、感謝の気持ちが十分伝わるように文章化している。</p>	<p>他者の文章の長所と短所を正確につかんで読んでいる。</p>	

		【観察・ワークシート】	【観察・ワークシート】	【観察・ワークシート】	
5	①他の生徒が書いた優れた返信をいくつか読み、自分の文章に欠けている点を理解する。 ②相互評価を受けて、自分の返信を再度推敲する。	他者の文章から新たな発想法や表現法を採り入れようとしている。 他者による評価を真摯に受けとめて、推敲を重ねている。 【観察・ワークシート】			適切な語句、表現を用いることができる。 【観察・ワークシート】

(3) 観点別評価について

【関心・意欲・態度】

学習活動における具体の評価規準	<ul style="list-style-type: none"> 悪文訂正を通して、わかりやすい文の書き方を身に付けようとしている。 自分の考えをいかに正確に相手へ伝えるかということに配慮しながら文章を書いている。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	悪文訂正の作業を積極的に行い、文章を書く際にも、読み手に自分の考えが伝わりやすいような工夫を凝らそうと推敲を重ねている。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	<ul style="list-style-type: none"> 悪文訂正においては、どこにポイントがあるのかを助言することで、作業を進めやすいようにする。 文章を書く場合においては、実際に新聞に掲載された返信を読ませることでヒントとし、推敲すべき箇所について助言する。

【書く能力】

学習活動における具体の評価規準	<ul style="list-style-type: none"> 投稿への返信、返信への返事という条件に適合した語句や表現方法を使っている。 自分の考えが相手に伝わるように、文章を組み立てている。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	読み手を瞠目させる視点を持ち、それを正確に伝えるために文の組み立て方や表現方法に工夫を凝らしている。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	<ul style="list-style-type: none"> 他の生徒の文を読み、それを評価することでわかりやすい文の書き方を学ばせる。(第4次) 他の生徒による評価を確認させ、自分の文章に欠けている点を理解させる。(第5次) その後、もう一度書き直しをさせる。

【読む能力】

学習活動における具体の評価規準	<ul style="list-style-type: none"> 文体や表現技法の工夫に気づいて、自己の文章に採り入れようとしながら読んでいる。 文章に表れた筆者の考えを的確に読み取っている。
-----------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	・文体や表現技法に注意しながら、文脈に沿って書き手の考えを理解しその心情やものの見方にまで踏み込んで読み取っていることが、作文の内容からうかがえる。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	・書き手になったつもりで、その人の考え方や心情について推測させる。 ・文章を書く際に、相手が求めているであろうものを盛り込むように指導する。

【知識・理解】

学習活動における具体的評価規準	・場に応じた語句や表現を身に付けている。 ・日本語の特徴をとらえた文が書ける。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	・日本語の特徴をよく理解し、適切で効果的な語句や表現方法を用いている。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	・より適切な語句や表現方法が必要な箇所については、指摘をして書き直しをさせる。

6 本時の展開

(1) 本時の目標

- ① 他の生徒の文章を相互評価することで、自分の文章の長所、短所に気づく。
- ② 投稿者になり代わり、返信に対する自分の気持ちが相手に十分伝わるように、感謝の意を文章化する。

(2) 本時の指導過程

過程	学 習 活 動	指 導 内 容	指 導 上 の 留 意 点	評 価 観 点 (方 法)
導入 (5分)	・本時の学習活動についての説明を聞く。	・本時の学習活動について説明をする。	・生徒が記入しやすい相互評価表(ワークシート)を作成しておく。	
展開 (40分)	・他の生徒の返信を読み、推敲をする。 ・推敲を行った返信を生徒間で相互評価する。	・前時に書かれた他の生徒の返信を任意に配布し、必要だと思われる箇所について推敲をさせ、良い点、悪い点等のアドバイスも記入させる。 ・推敲後、以下のポイントについて相互評価をさせる。 ①語句・表現の適	・推敲のポイントについては第1時に行った学習を参考にしよう、指導する。 ・相互評価については、誠意を持ってなるべく客観的に	【関心・意欲・態度】 他者の文章から積極的に学び、自己の文章力を高めようとしている。 他者の文章を客観的に評価しようとしている。(観察・ワークシート) 【書く能力】 返信への謝辞であることをおさえた語

	<ul style="list-style-type: none"> 相互評価を行った返信に対して、投稿者になり代わって感謝の返事を書く。 	切さ ②文章のわかりやすさ ③視点の新しさ ④誠実さ <ul style="list-style-type: none"> 感謝の意が相手によく伝わるように文章化させる。 	行うように伝える。 <ul style="list-style-type: none"> 形式的な内容にならないように指導する。 	句、表現を使っている。 返信を真摯に受けとめ、感謝の気持ちが十分伝わるように文章化している。(観察・ワークシート) 【読む能力】 他者の文章の長所と短所を正確につかんで読んでいる。(観察・ワークシート)
まとめ (5分)	<ul style="list-style-type: none"> 再度、返信と返事を読み、相手の心に届く文章になっているかどうか確認をする。 	<ul style="list-style-type: none"> 必要な箇所について、推敲をさせる。 		

7 単元全体の学習の過程

生徒たちは文章を書くことに苦手意識を持っていたようである。〈書く領域〉の学習に入ることを告げた時に見せた生徒たちの不安げな表情がそのことを物語っていた。しかし、今回書き上げた生徒たちの文章を読んだ第一の感想は、「テーマの与え方や学習の進め方で苦手意識は克服できる」というものであった。単元の最後に書かせた感想にも、「ただ題を与えられて書くより書きやすかった」「作文を書く前に書き方の練習があったのでよかった」というものがあった。

単元目標の〈自分の考えが読み手に伝わりやすいように筋道を立てて文を書く〉という項目に関しては、おおむね満足できる結果となった。また、「今度、人の相談に乗る時に役立つ」という感想もあり、〈相手の心情を推し量り、自分の考えを文章にまとめる〉ことへ一歩近づけたのではないだろうか。ただ、逆に「人の心の中にまで入って文章を書くのは難しかった」という言葉も見られ、一朝一夕にはいかないことも改めて感じられた。そして、〈公の場での意見表明を念頭に置いたコミュニケーション能力を高める〉ことに寄与できることをも企図したわけだが、生徒同士が相互評価を行いやすくするため、ワークシートに氏名ではなく記号を記入させて学習活動を進めたので、目標に対してどの程度の学習効果をあげられたかについては不安もあった。しかし生徒の感想の中には、「氏名を書かずに作文したのでやりやすかった」と書かれたものもあった。

評価活動と学習指導の関係で言えば、評価を確認しながら学習活動を進められるように計画したことが、生徒に良い影響を与えることになったのではないだろうか。「先生の評価には納得できたので、今後役に立てたい」「先生の評価には異議があるが、それはちゃんと伝えきれなかった自分が悪いので、もっと学習したい」という感想も得られた。

さらに、指導者にとっては、前時の活動に対する評価を基にすることで、後の指導と評価が容易となった面は大きい。例えば、他の生徒の返信を相互評価する場面において、指導者による事前の評価と生徒による評価とに大きなずれがあったところで、「なぜそういう評価になったのか、もう一度じっくり読んでみなさい」という助言を与えることができた。また、当然のことながら、それ

が「読む能力」における評価づけの要素ともなった。

8 本時の様子

他者の返信が生徒それぞれに渡ったところで、教室には大きなよめき起きた。氏名の代わりに記号が記されているので、まずはその文章が誰の手によるものなのかを気にする生徒たちであったが、次はその文章の内容に驚く者が多かった。自らも同じ課題で書いているので、視点や論の展開の違いに新鮮な驚きを持ったようである。

推敲作業では、返信の完成度や生徒の感性の違いもあり、かなり苦労があったようであるが、自分の文章を見直す一助となったのではないだろうか。感想には、「どこをどう直してよいのかわからず、単純なところしか手をつけられなかった」「自分の文章を自分で見直ただけでは気づかないようなところに対してアドバイスしてくれたので良かった」というものがあった。

推敲を基に生徒は相互評価を行ったが、指導者による事前の評価と生徒による評価とで大きなずれは少なかった。生徒は、「人の文章を評価するなんてできないと思ったが、ポイントにそってやっていると結構できた」という反応の反面、「他人には他人の考えがあるので、あんまり不真面目なもの以外はCとかDとか評価したくない」という意見も示した。

次の活動は返信への返事を書くことであったが、同じ問題について自分でも答えを出していることもあり、スムーズに行っていたようである。「いろんな人の立場に立って文章を書くのはいいことだと思う」と述べた生徒もいた。

全体的には、初めての学習活動であったということで、戸惑いながらも良い経験となった生徒が多かったようである。

9 単元の観点別評価の総括

(1) 関心・意欲・態度

第1次の「悪文訂正」の学習活動においては、観察による評価方法をとった。観察による評価ではどんな活動においても言えることであろうが、一度に全員の行動を観察することは不可能であり、生徒の作業進度の違いで評価がしにくくなる。プリントに書き込んでいく形で指導を行ったので、まずテスト形式で進め、＜回収→評価→返却→解説→再回収→評価＞という手順を使うのも一つの方法であったかもしれない。そうすれば評価規準もより具体化でき、評価もしやすかったかもしれない。

第3次以降の場面では、観察とワークシートを基にした評価を行った。観察にはクラスの座席表を用意し、机間指導を頻繁に繰り返したうえで、迅速に記録を残せるようにした(観察に関しては、他の観点においても同様)。ワークシートを使った評価では、特に推敲の作業結果を重視した。正誤に関わらず、どれくらい丁寧に推敲を行ったか、どれくらいアドバイスを書いたかを確認することで評価した。この結果、観察による評価では生徒間にはほとんど差が出なかったが、ワークシートの評価ではだいぶ差が出た。

○評価累計 A…2人 B…31人 C…6人

(2) 書く能力

評価表のポイントによる指導者の評価では、＜誠実さ＞は38人がAとなり、＜視点の新しさ＞にDが少なかった。逆に＜語句・表現の適切さ＞＜文章のわかりやすさ＞では辛い点がついた。つまり、「自分なりの考えを相手に丁寧に伝えようとしていたが、用語法や文章の展開に難があった」と言えるわけで、＜自分の考えが相手の心へ届くように文章を組み立てている＞という規準に関し

ては学習到達度における要求を高くしても良かった。

評価はおもにワークシートを素材として行ったので、目に見える記録が残っているという点においては評価しやすかった。しかし、返信に対する評価(次の授業までに完了しておかなければならない)、返信への返事に対する評価(そのためには返信も読み返さなければならない)と、生徒の人数分の文章を読むことは、自明のことながら、やはり手間がかかった。

○評価累計 A…8人 B…31人 C…0人

(3) 読む能力

テスト以外で生徒全員の<読む能力>を同時に評価することは非常に困難なことだと思われるが、ここでは比較的簡便に行えたと思う。他者の文章を推敲・評価する活動でその能力が測れたからである。「推敲・相互評価」の施されたワークシートによって指導者が評価したわけだが、そのワークシートをまず「推敲・相互評価」した生徒に戻すことで、指導者側の評価を確認させた。これにより、生徒——特にCと評価された生徒——は自分の読みの足りなかつた点を認識して、そのうえで次の「返信への返事を書く」活動へと進めたのではないかと思う。しかし、「推敲・相互評価」の活動は生徒にとって難度が高く、この活動で<読む能力>を評価されるのは厳しかったかもしれない。

○評価累計 A…1人 B…32人 C…6人

(4) 知識・理解

この観点についてもワークシートにより評価を行った。具体的には、ワークシートの<相互評価ポイント>における<語句・表現の適切さ>の項目での評価をもって行った。したがって、<書く能力>と評価の重複する部分があったということになる。表現という分野においては截然と区別することは難しいのではないだろうか。区別するには「原稿用紙の使い方を理解している」「常用漢字が書けている」等の規準を設ければよいのだろうが、原稿用紙の使い方や漢字の書き取りを学ぶことが本単元の主題ではないので、この点はやはり検討を要するところであろう。

○評価累計 A…4人 B…31人 C…4人

10 今後の課題

単元の学習到達度を予測することは難しいが、大変重要なことである。評価規準の設定や評価の活用は、到達度の予測に基づいて行われるからである。本単元でいえば、作文を苦手とする生徒が多いという観念を持っていたが、生徒の感想にもあったように、取り組みやすい活動であったことがうかがえ、文章もかなりのレベルに達していた。よって、評価規準ならびに基準をより高いところに設定しても良かったとも思う。表現分野ばかりでなく、全ての学習分野に関して長期的・継続的な指導と評価が求められるだろう。また、単元途中での新たな学習目標の設定もあり得るはずである。

今後の課題として考えられるのは、評価方法である。文字による表現活動を展開した今回の単元では、ワークシートという「作品」が残っているために、評価は比較的スムーズに行えたと考える。それでも、一クラス分の作文を読み、添削し、評価するにはかなりの仕事量であった。前述したとおり、ここでの評価が次の指導に直接関わっていたために時間も短く限られたものであった。また、<観察>による評価は苦勞した。クラス全員を同じ条件のもとに評価することは、ビデオカメラ等を使用する以外不可能に近く、生徒一人ひとりの進歩を把握することも容易ではない。今後の研究課題である。

国語総合ワークシート 「新聞の投書に返信しよう」

年 組 氏名

< 投書 >

文章の弱い 自分を褒めたい

わたしの文は結構強いです。何かを褒める時は、本音の言葉を書かなくてはなりません。高校受験も、友達と同じ学校ということでも志望校を選びました。大先輩を学ぶつもりですが、今はまだ大先輩に勝てることもありません。こういう性格で、周りに負けてはダメです。

文章はよと評判が良かった
内容もわかりやすい

< 投書への返信 >

方法は、いくつかあります。でも、どれも実行あるから
なにかはねた記事です。まず、初めに、間違ってもいい
と思うこと。間違っているのは、だいたい、間違っている
い思いをきくから、疑問点、疑問点を、絶対に問
題をたて、人がわからず、誤解して、いい人より得るものが
多いはず。次に、自分の好きな物、嫌いな物を、レ
ッカリ理解すること。例えば、好き、嫌い、をば
かりとだけ、いえる人は、自分が、^高と、^低
が、よく時と場合を考慮すれば、自分が、^高と、^低
現れ、自己判断と、^高と、^低の、^高と、^低を、^高と、^低に、^高と、^低
うに、人が、^高と、^低の、^高と、^低を、^高と、^低に、^高と、^低

< 相互評価表 >

①	語句・表現の適切さ	A	B	C	D
②	文章のわかりやすさ	A	B	C	D
③	視pointの新しさ	A	B	C	D
④	誠実さ	A	B	C	D

A = とてもよい B = よい C = あと少し D = もっと改善できる

評価者 4649

< 返信への返事 >

返信ありがとうございます。私も、間違いないです。
ただ、相談した私が、このは、あつ、間、違、う、こ
とによつて、何かを得ると、いうのは、よくあるか、ま、し、有、ま、せ
ん、け、れ、ど、も、そ、れ、で、何、か、を、得、て、自、信、を、持、つ、の、は、と、し、て、ま
難、しい、こ、と、で、す。な、の、で、こ、の、方、法、を、実、行、で、ま、す、よ、う、に
ば、り、ま、す。ま、た、少し、時、間、が、か、か、り、そ、う、で、す、け、れ、ど、い、人、が、
て、み、ま、す。ま、た、好き、嫌い、を、ば、り、ま、す、と、い、う、こ、と
が、自己判断であるという、か、^{何に？説明不足かな}
それぞれ、この2つの方法を頭に入れた、自分の判断に
自信を持ち、この嫌わしい性格を直せるように、^{一人は、}
います。何れも、^{本当に良いと思いますか？}
ありません。

実践事例3 現代文 「読むこと」を中心として

1 実践期間 平成15年12月3日～12月17日

2 単元名(学年) 作中人物の心理を比較して読む(3年)
(芥川龍之介『藪の中』)

3 単元の目標

- (1) 優れた文学作品を読むことによって読書への興味を深めるとともに、様々な登場人物の心理や行動を読み比べることで、ものの見方、考え方を広げる。
- (2) 作品の主題を考えながら本文を読むことにより、巧みに構築された文章の構成を読みとる力を身に付ける。

4 単元の指導計画(6時間扱い)

第1次(1時間) 作品の時代背景等を理解させ、前半四章を読んで作中の事件について重要な部分を抜き出させる。(教材として、行間を広くとって印刷した本文プリントを用意しておく。)

第2次(1時間) 前半四章で語られる作中事件についての証言から、客観的事実といえる部分を指摘させ合って整理させる。また、その作業について自己評価させる。

第3次(3時間) 第五章～第七章(1時間につき一章)を読ませ、「語り手」の主張する部分
【本時はその第2時】や事件についての重要な告白と思われる部分を抜き出させ、内容を整理させる。

発表し合って確認させたあと、自ら行った作業について自己評価させる。

第4次(1時間) 前時までの作業で整理した、前半四人の証言や後半の当事者三人それぞれの主張を比較する作業を通して、主題をまとめさせる。

5 単元の評価計画

(1) 評価規準(ここでは「話す・聞く能力」については扱わないこととした。)

関心・意欲・態度	書く能力	読む能力	知識・理解
<ul style="list-style-type: none"> 内容を的確に読み取り、表現の特色に注意しながら読み味わっている。 文章に関心をもち、読み込むことで、様々なものの見方、人間の考え方などを追究しようとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> 文中から抜き出した内容を簡潔にまとめられる。 各章の内容を比較検討して導いた特徴を簡潔に表現できる。 	<ul style="list-style-type: none"> 各章の「語り手」の立場を踏まえて読んでいる。 客観的事実と「語り手」にとっての主観的な部分とを整理して読んでいる。 各主人公の心情が強く現れている部分を指摘できる。 各人物の心情を読み取り、味わっている。 全体の構成を理解して主題が読み取れる。 	<ul style="list-style-type: none"> 作品の内容を理解するうえで、時代背景や設定を理解している。 語句の意味や用法を理解している。

(2) 評価計画 ※太枠内が本時 【 】は評価方法

次	学習内容	評価項目			
		関心・意欲・態度	書く能力	読む能力	知識・理解
1	①作品の背景(作者、設定、おおまかな構成など)を理解する。 ②前半四章を読み、それぞれの章段から作中の事件について、客観的事実にあたる部分に傍線を引く。	時代背景や特殊な構成など作品に興味を持つ。 自らすすんで作品を読み進める。 【観察】		構成を理解したうえで、各章の主観的な叙述部分や、作中事件の客観的事実を述べた部分を整理して読める。 【本文プリント・ワークシート】	作品の背景について理解している。 注を参考にしながら、語句の意味や様々な表現を理解している。 【観察・本文プリント・ワークシート】
2	①前時に線を引いた部分を発表し合う。 ②抜き出した部分を整理して、簡潔にまとめる。 ③的確に線が引けたか、抜き出した部分を簡潔にまとめられたかを自己評価する。	自分を取り上げた部分と人のそれとを積極的に比べようとする。 抜き出した内容をすすんでまとめようとする。 【観察・本文プリント・ワークシート】	抜き出した内容を簡潔にまとめることができる。	重要な部分を根拠をもって指摘できる。 自分の考えと人の考えとを、作品の内容に即して比較できる。 共通理解された内容と自分の意見とを的確に比較検討できる。 【発言・本文プリント・ワークシート】	注を参考にしながら、語句の意味や様々な表現を理解している。 【観察・本文プリント・ワークシート】
3 【 本 時 は そ の 第 2 時 】	①第五～七章を、「語り手」の立場をふまえて読み、主観的に真実として語っている部分、主張したい部分に傍線を引く。 ②線を引いた部分を発表し合う。 ③抜き出した部分を整理してまとめる。 ④的確に傍線が引けたか、抜き出した部分を簡潔にまとめられたかを自己評価する。(前時の自己評価での反省を踏まえる。)	興味をもって積極的に読み進めようとする。 作品中の、「語り手」の立場を理解しようとする。 前時の自己評価を生かそうとしている。 【観察・本文プリント・ワークシート】	抜き出した内容を簡潔にまとめることができる。	「語り手」の立場を理解して読むことができる。 語り手の主張したい部分を抜き出すことができる。 重要な部分を根拠をもって指摘できる。 自分の考えと人の考えとを、作品の内容に即して比較できる。 共通理解された内容と自分の意見とを的確に比較検討できる。 【発言・本文プリント・ワークシート】	注を参考にしながら、語句の意味や様々な表現を理解している。 【観察・本文プリント・ワークシート】
	①前半四章で整理し	前半の四章や後	各章の内容	章段ごとに整理された	作品の構成を改

4	た内容も踏まえながら、後半三章の「語り手」それぞれの主張を比較して、三人の心情等で共通する点などを整理し、作品の主題につなげる。	半の各章の内容を積極的に比較しようとしている。作品の主題を考え、まとめようとしている。 【観察・本文プリント・ワークシート】	を比較検討して導いた特徴を簡潔に表現できる。 【ワークシート】	内容を比較して、三人の告白から共通点、相違点が読み取れる。また、それによって作品の主題が理解できる。 【発言・本文プリント・ワークシート】	めて理解している。 【観察・本文プリント・ワークシート】
---	------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------	------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------

(3) 観点別評価について

【関心・意欲・態度】

学習活動における具体の評価規準	・ 作品に興味を持ち、すすんで読み取ろうとしている。また、自分の読み取った内容を、人のものと積極的に比較検討しようとしている。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	・ 作品を読み返しながら、傍線やメモを能動的に記入している。また、意見の交換の場で積極的に発言している。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	・ 傍線をつけやすくするために適切な助言を与える。 ・ 意見交換の場では、正解を発表し合うのではなく、それぞれの印象でもよいとし、答えるよう指導する。

【書く能力】

学習活動における具体の評価規準	・ 読み取った内容が簡潔にまとめられている。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	・ 文中から抜き出した内容が短い文で整理して書かれている。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	・ 抜き出した部分から、大切な語句をつなぎあわせることから始めさせる。 ・ 授業で最後に確認されるのを待って、書き写すだけにならないように指導する。

【読む能力】

学習活動における具体の評価規準	・ 文章の構成を理解して、内容を適切に読み取っている。 ・ 文章中の人物やその心情などを読み味わっている。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	・ 章段ごとの「語り手」の立場を踏まえて読み取っている。 ・ 作中の事件について、客観的事実が描かれている部分や「語り手」の主観的な主張が描かれている部分を整理して指摘できる。 ・ 自己評価が適切にできている。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	・ 作品のおおまかな構成や作中人物の関係を確認させる。 ・ 作中人物が具体的な事実を語る場面や心情を語っている場面を例示する。

	・授業で整理確認された内容と自分でまとめた内容を客観的に比較するように指導する。
--	------------------------------------------

【知識・理解】

学習活動における具体の評価規準	・文章の構成を理解している。 ・語句の意味、用法などを理解している。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	・注などを利用しながら語句の意味を確認し、文章の内容を的確に読み取り、様々な表現を理解している。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	・注をよく見ながら読むように助言する。 ・注のついた語句以外のわからない語句や表現を抜き出させ、辞書等で調べさせる。

6 本時の展開

(1) 本時の目標

- ① 章段ごとの「語り手」の立場を理解して、作中事件についての重要部分を整理する。
- ② 自分で進めた作業内容と整理確認されたものとを比較して、自己評価する。

(2) 本時の指導過程

過程	学 習 活 動	指 導 内 容	指 導 上 の 留 意 点	評 価 観 点 (方 法)
導入 (5分)	・前時に行った活動、学習を確認する。	・第五章での作業手順を思い出させる。	・前時の自己評価を参考にするよう、指示する。	
展開 (40分)	・第五章での作業と同様に第六章の内容を整理する。 ・全体の構成を確認し、章段の「語り手」が誰であるかを理解したうえで、「語り手」それぞれが主張する内容を読み取る。	・第六章を読み、作中事件について重要な告白だと思われる部分に傍線を引かせる。 ・傍線を引いた箇所から、次の①、②、③の観点にしたがって、重要な告白だと思われる部分にその①②③の記号を記入させる。 ①男を殺したのは誰かがわかる部分 ②男を殺した動機がわかる部分 ③「語り手」が強	・傍線をつける際には解答を作るつもりではなく、読みながら重要と思われた部分にどんどん線を引くように指示する。また、前半四章で整理した内容を参照させる。 ・観点別に重要と思われる部分を抜き出す際には、選ぶべき根拠を意識するように指示する。 ・線種を変えたり、線や番号の色を変えたりして、自分	【関心・意欲・態度】 興味をもって積極的に読み進めようとする。 作品中の、「語り手」の立場を理解しようとする。 前時の自己評価を生かそうとしている。 (観察・本文プリント・ワークシート) 【書く能力】 抜き出した内容を簡潔にまとめることができる。(ワークシート) 【読む能力】 「語り手」の立場を

	<ul style="list-style-type: none"> ・「語り手」の視点から、作中事件のあらましを整理する。 ・「語り手」の心情を読み取り、まとめる。 ・本時の学習活動を自分で振り返る。 	<p>く主張したい部分</p> <ul style="list-style-type: none"> ・観点別に抜き出した部分を発表しあう。 ・意見を整理して、共通理解できた箇所を抜き出し、簡潔にまとめさせる。 ・板書した内容をワークシートに追記入させる。 ・自分で線を引いたり書いたりした作業を振り返り、本時の学習活動を自己評価させる。 	<p>なりに見やすくなるような工夫もすすめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分で書いたものを消してしまわないように指示する。 ・客観的な視野に立つように注意させる。 	<p>理解して読むことができる。</p> <p>語り手の主張したい部分を適切に抜き出している。</p> <p>重要な部分を根拠をもって指摘できる。</p> <p>自分の考えと人の考えとを、作品の内容に即して比較できる。</p> <p>共通理解された内容と自分の意見とを的確に比較検討できる。</p> <p>(観察・本文プリント・ワークシート)</p> <p>【知識・理解】</p> <p>注を参考にしながら、語句の意味やさまざまな表現を理解している。</p> <p>(観察・本文プリント・ワークシート)</p>
まとめ (5分)		<ul style="list-style-type: none"> ・本時の学習内容の確認および次時の説明をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本文のプリントおよびワークシートを回収する。 	

7 単元全体の学習の経過

生徒は、「羅生門」や「鼻」を以前学習したことがあるため、芥川龍之介の古典世界にもさほど抵抗なく入れたようである。また、教材用の本文にはふりがなや注を詳しくつけたため、漢字や難解な語句についてあまり立ち止まることなく、内容理解に集中できたものと思われる。

最初に、作品全体のおおまかな構成をごく簡単に説明し、その後本文を読んだ。作中事件の当事者三人の告白になっている後半三章は、1時間に一章のペースで読んで、内容を整理する作業を重ねていったのだが、章が進むにつれサスペンスや推理の感覚も重なったようで、本文に線を引く作業——ワークシートで指示された観点別に分類して傍線を重ねていく作業——にも熱心に取り組む姿が見られた。ここでは読解問題のように解答を確認していくのではなく、傍線をつけた部分を自由に出し合い、共通理解が得られた点を整理していったため、生徒たちも誤答を発言してしまうことに対する恐れや羞恥心はあまり感じなかったようである。また、それは「関心・意欲・態度」の観点での評価にもなるため、文字通り意欲につながったようで、積極的な「読むこと」の学習になったように思われる。

今回の教材では、本文に傍線をつけることで「関心・意欲」や「読む能力」など、また、ワークシートで「書く能力」「読む能力」などの評価を行ったことで、生徒にとっては自らの学習活動と評価を結びつけやすく、目に見える形で評価を実感できたようである。第3次では、同じ作業を繰

り返したこともあって、Aと評価された者も、Cと評価された者も、前回の反省を次の学習に生かしやすいように思われる。

作品自体の魅力に因るところが大きいが、生徒の多くはおもしろく作品を読み終えたようである。

8 本時の様子

本時は、前時と作業手順が同じであったため、スムーズに学習活動に入れたようであった。その際、返却された前時の評価とその説明によって、ABCのいずれの評価がついた場合でも、生徒たちには積極的に本文を読み取る姿勢が見られた。しかしながらCのついた生徒の中には、作品や授業に対するもともとの関心が薄かった者もあり、そのような生徒たちの意欲を高めるような手だてが必要であった。

本時に読んだ章段は物語が大きく展開し、作中事件の犯人がわからなくなる内容であったため、意見の出しあいも活発になったが、内容を外れて単なる謎解きのような意見も出始めてしまった。しかし、それは文章中に根拠を求める作業にもつなげられ、読みを深めることにもなったと思われる。

また、意見交換が活発になった分、ワークシートに自分でまとめさせる時間があまり取れなくて、「書くこと」については細かく見られなくなったが、今回は「読むこと」に主眼を置いた単元であることから、出しあった意見は順次板書することによって整理することにした。

9 単元の観点別評価の総括

(1) 関心・意欲・態度

小説の読み方としては一般的ではないが、登場人物の告白を比較し、作中事件の犯人を断定してみようということから入ったため、ほとんどの生徒たちは興味深く読み、活発に意見を交わしていた。またそれは本文に自由に線を引くという簡単な作業を通して評価されるため、前回の評価を参考にして次のプリントでの作業につなげていたようである。したがってほとんどの生徒にAの評価をつけることになった。

○評価累計 A…20人、B…6人、C…5人

(2) 書く能力

当初は、出しあった意見をワークシートに整理する作業に時間をとる計画であったが、意見交換の場面を大切にできなかったため、その整理は順次板書によって行うことにした。そのため「書く能力」については、特に工夫をして書いていたもの以外、ほとんどの者をBと評価することになった。

○評価累計 A…0人、B…30人、C…1人

(3) 読む能力

読む能力は、おもに本文プリントへの傍線の引き方 — 特にワークシートの二番めの作業で指示した、一度傍線をつけた部分を三つの観点から絞り込む作業 — で見たが、生徒たちにとっては、各章の「語り手」が強く言いたがっている部分を、心情を考えて抜き出すことが難しかったようである。毎回の評価は、提出された本文とワークシート、あるいは意見交換の場での発言等によって判定した。まったく線が引けない場合や、線を引いた箇所が極端に多かった場合はCとしたが、Cと評価した生徒に対しては、発表し合う場で気づいた部分を付け足したり削ったりして、抜き出した箇所を変更してよいと助言したところ、次の章を読む際には新たな意欲や関心を沸き立たせていたようである。しかし、読解力という点を考えると、一つの教材の中ではめざましい進展が見られ

なかったので、次の教材での指導へとつなげていきたい。

○評価累計 A…5人、B…11人、C…15人

(4) 知識・理解

今回の教材では、内容理解に集中できるように、本文にふりがなや注を詳しくつけたため、漢字や難解な語についての理解は文章の内容を誤読せず読み進めていけばよしとした。

○評価累計 A…0人、B…31人、C…0人

10 今後の課題

数十人の生徒が、本文の内容を、それぞれどの程度読みとっているかを測ることは、感想文やテスト以外の方法では難しい。今回は、生徒が本文に傍線を引きながら読み込むことで重要部分を絞り込んでいくという方法をとった。生徒が記入したワークシートを毎回提出させることで、学習の経過をみることができたが、教科書だけを使った場合は、提出させることは困難なので工夫が必要と思われる。また、今回の教材では、生徒の「関心・意欲」を引き出す目的で導入部分を工夫し、作中人物の告白の聞き手となって事件の真相を解明しようという読み方から入り、最終的に作品の巧みな構成に気づいて主題を導くという計画であった。しかしながら、生徒の中には推理小説の感覚で読んでしまい、結末がすっきりしない点で後味の悪い感想を持ってしまった者もいたので、作品の取り扱いや助言の大切さを強く感じさせられることとなった。毎回の作業の最後には、それぞれの生徒が簡単な自己評価を記載することとし、この反省を次時への意欲につなげようとしたのだが、あまり生かすことができなかった。今後の課題である。

参考資料

『藪の中』No.3		組	番	氏名
「清水寺に来れる女の懺悔」				
○作業1 No.1のプリントで整理した内容を参照しながら、「事件の真相が明らかになる重要な告白だと思われる部分」に傍線を引きなさい。				
○作業2 作業1で線を引いた部分から、次の観点にしたがって重要だと思われる箇所にも、それぞれ①②③の記号をつけなさい。(線の種類や色を変えたりしてもよいので、見やすいように工夫しましょう。)				
③②① 男を殺したのが誰かわかる。男を殺した動機がわかる。				
○作業3 次の①②③について、女(真砂)の告白の内容から簡潔に整理しなさい。				
①男(武弘)を殺したのは誰?				
②男(武弘)を殺した動機は?				
③女(真砂)が強く言いたいことは? そのように言う心情は?				
○作業4 多襄丸の供述内容と食い違う点を整理しなさい。				
☆今回の作業を振り返って、自分でどのように感じましたか。(A・B・Cの中で近いものに○)				
・作業1 3について				
A さほど迷うことなく線が引け、内容の整理もほほほできた。				
B 線を引いたり、内容を整理するのに多少とまどったが、授業で確認する中で理解できた。				
C 線を引く作業や、内容の整理があまりはかどらず、授業で確認した内容を書き直すだけになってしまった。				

地理歴史

1 教科目標

我が国及び世界の形成の歴史的過程と生活・文化の地域的特色についての理解と認識を深め、国際社会に主体的に生きる民主的、平和的な国家・社会の一員として必要な自覚と資質を養う。

2 評価の観点及びその趣旨

関心・意欲・態度	思考・判断	資料活用の技能・表現	知識・理解
歴史的・地理的事象に対する関心と課題意識を高め、意欲的に追究するとともに、国際社会に主体的に生きる国家・社会の一員としての責任を果たそうとする。	歴史的・地理的事象から課題を見だし、我が国及び世界の形成の歴史的過程と生活・文化の地域的特色を世界的視野に立って多面的・多角的に考察するとともに、国際社会の変化を踏まえ公正に判断する。	諸資料を収集し、有用な情報を選択して活用することを通して歴史的・地理的事象を追究する方法を身に付けるとともに、追究し考察した過程や結果を適切に表現する。	我が国及び世界の形成の歴史的過程と生活・文化の地域的特色についての基本的な事柄を理解し、その知識を身に付けている。

3 地理歴史科における評価の留意点

教科の目標及び科目編成、履修ともに従前と同様である。しかし、その内容は厳選されるとともに、各科目での主題学習による内容の工夫や、科目内で内容を選択して学習する仕組みがより拡充され重点をおいた学習の工夫が可能になっている。各科目の目標にも、「関連付けながら理解」させたり、「多面的に」または「広い視野から」「考察」させたりすることが求められ、世界史や日本史では「歴史的思考力を培」うこと、地理では「地理的な見方や考え方を培」うことを通して「国際社会に主体的に生きる日本人としての自覚と資質を養う」ことを目指している。知識を網羅的・羅列的に扱うのではなく、目標に照らして内容の扱いを工夫する必要がある。これまで知識の教え込みが主の講義中心の授業形態やペーパーテストに重点を置く評価は、「知識・理解」の観点に偏った学習指導と評価になりがちであった。主題学習や内容を選択して学習する仕組みが拡充された意図は、歴史的・地理的認識を深めることを重視したことである。各科目に設けられたこれらの主体的な追究を通して認識を深める学習の機会を活用し、「関心・意欲・態度」「思考・判断」「資料活用の技能・表現」の各観点からも、いかに積極的に生徒の学習活動を見取るかが課題である。学習内容に即して、情報・資料の収集と活用、調査、報告、討論などの活動を通して、多面的な評価ができるような工夫をしたい。

評価に当たっては、生徒の実態に応じて、教科・科目の特質が生かせるように、学習内容のまとめ(単元)を設定し、その目標やねらいが実現された状況の評価規準として明確化し、さらに実現された状況の指標としての評価基準を定める必要があることは地理歴史科においても同様である。

また、指導と評価は表裏一体のものであり、評定に結びつける評価だけでなく、その後の指導の工夫・改善を考える材料としても評価を行い、より有意義な学習指導に結びつけたい。地理歴史科においては、定期考査等のペーパーテストに評価の比重を置きがちであったが、ワークシートの取組状況やレポート等の提出物の内容などによって、きめ細かく学習状況を把握することが重要であ

る。

(1) 「関心・意欲・態度」

前掲の「各教科の評価の観点及びその趣旨」に示された地理歴史科各科目の「関心・意欲・態度」には、共通して「関心と課題意識を高め、意欲的に追究するとともに、国際社会に主体的に生きる国家・社会の一員としての責任を果たそうとする」とある。もっとも「見えにくい学力」といわれ、その評価にも工夫が必要である。「関心」「意欲」「態度」はそれぞれ一般的なものをいっているのではなく、例えば世界史Bでは、キリスト教を共通の基盤とするヨーロッパ世界が、東西の地域性を保ちながら形成されていった過程に関心をもって学習に取り組み、なぜそのような過程をたどったのかを意欲的に追究し、ここで形成されたヨーロッパ世界がどのようなものであったのかを考えようとする態度を評価するものである。この観点は「思考・判断」「資料活用の技能・表現」「知識・理解」を見取る場面でもあわせて評価できる場面もありうるので、その機会を逃さないように工夫しなければならない。

(2) 「思考・判断」

各科目共通して「多面的・多角的（地理Bは系統地理的、地誌的）に考察する」こと、「国際社会の変化を踏まえ公正に判断する」ことをあげている。多面的・多角的というのは、例えば日本史Bでは、各時代における政治・文化・人間生活を関連付けて考察することである。多面的に考察したり、公正に判断したりするためには、基本的な事柄に関する知識や適切な資料の活用の技能が求められることもある。ワークシートやレポートなどの提出物に必要な項目を設け考えさせることや、ペーパーテストの設問の工夫などが考えられるが、主題学習などでは、与えられた課題の考察にとどまることなく、自ら課題を見いだし適切に設定するような指導も「思考・判断」の観点からは重要である。

(3) 「資料活用の技能・表現」

各科目共通して「諸資料を収集し、有用な情報を選択して活用すること」をあげている。歴史的思考力や地理的な見方や考え方を培うには、資料を適切に扱う技能が必要である。日常の学習活動でも資料の取り扱いについての指導は「歴史的事象を追究する方法を身に付ける」ために重要であり、主題学習などでは「追究した過程や結果を適切に表現する」ことが求められよう。ワークシートや提出物などにおいて評価する場面を設定することが可能だが、ペーパーテストにおいても、「資料活用の技能・表現」の観点から学習者の状況を測る工夫が必要であろう。また、主題学習においては、その考察における資料の扱いは、考察そのものの質を左右するものであることから、地理歴史科では、様々な場面で指導・評価し、改善を図っていきたい。

(4) 「知識・理解」

歴史では「関連付けて（総合的に）理解し」ていること、地理では「基本的な事柄や追究の方法を理解し」て、「その知識を身に付け」ることが求められている。例えば世界史Aにおいては、科目の目標である「近現代史を中心とする世界の歴史が我が国の歴史と関連付けながら」理解されなければならない、網羅的・羅列的に扱った知識量を評価しようとしているのではない。定期考査ばかりでなく、こうした目標を十分に達成しているかどうか單元ごとに確認しながら学習指導を工夫することが必要である。

参考文献

文部省 平成11年 『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』

実践事例 1 世界史 B 「ヨーロッパ世界の形成と変動」

1 実践期間 平成15年11月19日～11月28日

2 単元名 (学年) キリスト教の成立と発展 (2年)

3 単元の目標

ローマ社会の混乱と不安を背景にキリスト教が広まり、迫害から公認へと政策が変化し、キリスト教教義の統一と教会の結束を図りながら、ギリシア精神とともにヨーロッパ文明の二大思想とされるキリスト教が確立していく過程を考察するとともに、後のヨーロッパ世界とのつながりを展望しながらキリスト教の展開について理解する。

4 単元の指導計画 (3時間扱い)

キリスト教の成立…………… 1時間 (本時)

ローマ帝国とキリスト教…………… 1時間

教会の組織化と正統教義の確立…………… 1時間

5 単元の評価計画

(1) 評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断	資料活用の技能・表現	知識・理解
ユダヤ教を母体に生まれたキリスト教がローマ帝国の政治と深いかわりをもっていたことに関心を高め、意欲的に追究しようとしている。	キリスト教がローマ帝国とのかかわりの中で発展し、教会の組織化を進め、世界宗教になっていく経過を多面的・多角的に考察し、判断することができる。	キリスト教に関する資料を、学習内容をよりよく理解するために活用するとともに、考察した過程や結果を適切に表現することができる。	キリスト教の成立と発展をローマ帝国の発展と関連させて理解し、その知識を身に付けている。

(2) 評価計画 ※太枠内が本時 【 】は評価方法

時	学習内容	評価項目			
		関心・意欲・態度	思考・判断	資料活用の技能・表現	知識・理解
1	ユダヤ教の教義とイエスの教えに触れ、継承したものと否定したものを考察し、関係地域を把握する。	ユダヤ教の特色とキリスト教のもつ普遍的な思想に関心を高め、ローマの支配との関連を意欲的に追究している。 【観察・ワークシート】	民族的宗教であるユダヤ教とキリスト教の違いに気づき、キリスト教のもつ普遍性を適切に考察することができる。 【定期考査】	地図でパレスティナやローマの位置関係を正しく把握したり、新約聖書の一節からキリスト教の思想を適切に表現することができる。 【ワークシート】	一神教等の基本的用語や歴史的な地名に関する事柄を理解し、ローマ帝国と関連させてその知識を身に付けている。 【確認テスト】

2	キリスト教の使徒の活躍や迫害をローマ帝国との関係で理解するとともに、日本史の学習とも関連付けを図る。	なぜキリスト教が迫害されたりしたのか、意欲的に追究し、日本史におけるキリシタンまで関心をめぐらせている。 【観察・ワークシート】	キリスト教が広まっていく社会階層やその過程から、社会組織の	歴史的な遺跡の写真・図版とその名称や役割を正しく関連付けることができる。 【ワークシート】	ローマ帝国とキリスト教の関係やその特色を理解し、基本的知識を身に付けている。 【ワークシート・定期考査】
3	ローマ帝国の行政組織に沿って教会組織が発展し、教父哲学や公会議の役割を把握させ、今後の教会や教皇権の役割を考える。	教父哲学や公会議が果たす役割を意欲的に追究し、後に教皇権が皇帝権とともに大きな潮流を作っていくことに関心をもっている。 【観察・ワークシート】	形成について考察することができる。 【ワークシート】	キリスト教が広まっていく様子や、東西教会の区分を地図を活用して、適切に表現できる。 【ワークシート】	教会の五大本山と、その地域のキリスト教発展の関係について、基本的知識を身に付けている。 【定期考査】

(3) 観点別評価について

【関心・意欲・態度】

学習活動における具体的評価規準	・ローマ帝国の支配下で生まれたキリスト教が迫害を受けながらも広がりを見せたことに関心をもち、意欲的に追究している。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	・キリスト教の普遍的な思想や、弾圧にもかかわらずローマ帝国内部に広がっていったことについて、資料を通して意欲的に追究することができる。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	・キリスト教のもつ思想が民族的なユダヤ教や、従来の多神教とどのような点で違うのかをわかりやすく説明し、基本的な事柄を理解させる。

【思考・判断】

学習活動における具体的評価規準	・キリスト教がローマ領内の人々に受け入れられていく過程を、その教えの特徴から考察している。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	・迫害の理由を、選民思想の排除や神の前の平等という教えの特徴と関連付けて考察している。 ・教会の組織化がローマの行政組織に沿って発展したことを歴史的視点から考察している。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	・一神教と多神教とは基本的に何が違うのか、また、多くの人々がどのような状況で生活していたのかを、具体的な資料を例示することで考えさせる。

【資料活用の技能・表現】

学習活動における具体的評価規準	<ul style="list-style-type: none"> 授業の中で扱った歴史的地名などを図表から読み取り、示すことができる。 新約聖書の一節からキリスト教の教えのいくつかに気づくことができる。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	<ul style="list-style-type: none"> キリスト教の広がりをローマの歴史的展開と関連付けて地図上でほぼ正確に表現することができる。 キリスト教の思想に照らして、マタイによる福音書の英訳中の単語に該当する日本語を適切に入れることができる。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	<ul style="list-style-type: none"> キリスト教の広がりを時間の経過とともに図示できるよう、机間指導を通して具体的に指導し、表現できるようにする。

【知識・理解】

学習活動における具体的評価規準	<ul style="list-style-type: none"> キリスト教の発展にかかわった人物や関連する地名に関して、その知識を身に付けている。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	<ul style="list-style-type: none"> キリスト教の広がりをローマの行政や当時の外的情勢との関連で理解している。 公認後の教義の統一と、教会組織の確立を関連付けて理解している。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	<ul style="list-style-type: none"> 基本的な事項や内容を理解できていない生徒に対しては、個別にどのようなところが理解できないかを、机間指導を通して把握し、キリスト教の発展に関して適切な指導を行い、理解できるようにする。

6 本時の展開

(1) 本時の目標

ローマの属州で生まれてきたイエスの教えがユダヤ教とどのような関係にあるのかを理解し、その教えがローマ領内で広がりをもつ可能性を理解するとともに、キリスト教の教えや関係のある地名を資料やシートを使って把握する。

(2) 本時の指導過程

過程	学 習 活 動	指 導 内 容	指 導 上 の 留 意 点	評価観点(方法)
導入 (10分)	<ul style="list-style-type: none"> 現在の世界の宗教を列挙させ、以前学習したヘブライ人の思想とは何だったのかを考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ユダヤ教のコーシェルとトレイフを参考に、ユダヤ教の戒律主義や選民思想をイメージさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 発問に対する生徒の積極的発言を板書し、キリスト教とユダヤ教の関係について触れる。 	
展開 (30分)	<ul style="list-style-type: none"> イエスの教えがどのようなものであって、それがなぜ、民衆の関心を呼び起こしたのかを新約聖書の一節を参考に考える。 	<ul style="list-style-type: none"> 新約聖書の一節を生徒に訳させ、従来の考えやユダヤ教との違いに気づかせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ワークシートの作業が遅れている生徒には机間指導を行いながら、アドバイスを与える。 	<p>【関心・意欲・態度】</p> <p>ユダヤ教の特色とキリスト教のもつ普遍的な思想に関心を高め、意欲的に追究している。</p> <p>(観察・ワークシート)</p>

	<ul style="list-style-type: none"> また、キリストが何故十字架刑に処せられたり、使徒が殉教したのかを考え、キリスト教関係地域をワークシートの地図の中で確認し、ローマ領内の位置関係を学習する。 	<ul style="list-style-type: none"> ワークシートにパレスティナ、エルサレムの場所やローマの領域を記入して地理的な空間を把握させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ヒントを与えながら、キリスト教の思想と関連するような平易な英単語の訳を連想させる。 十字架や皇帝にまつわる話をすることによって生徒の関心を高める。 	<p>【技能・表現】 地図でパレスティナやローマの位置関係を正しく把握したり、新約聖書の一節からキリスト教の思想を適切に表現している。 (ワークシート)</p>
まとめ (10分)	<ul style="list-style-type: none"> キリスト教とローマの伝統的宗教やユダヤ教との違いを確認する。また今後、ローマの支配との関連でどのような出来事が起きていくのかを考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ワークシートに記入した地名や地域が今後どのような意味をもつ場所になるのか、次回の授業展開を踏まえて考察させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 歴史的に重要な意味をもつことになる、エルサレムやローマなどのような出来事が起きたのかを記入した地図で再確認させ、ワークシートに書き込ませる。 	<p>【知識・理解】 一神教等の基本的用語や歴史的な地名に関する事柄を理解し、ローマ帝国と関連付けてその知識を身に付けている。 (確認テスト)</p>

7 単元全体の学習の経過

本単元に入る前の生徒のキリスト教に関する理解は、おおむね中学校社会科で学んだ知識の範囲内で捉えている状況にある。そこで、まず本時の「キリスト教の成立」に関する指導は、導入段階に当たることを踏まえ、基礎となる歴史的・地理的な理解に向けての学習指導の重要性を考慮し、ユダヤ教に対する関心を高めた上で、キリスト教の成立過程を学習していく計画を立てた。しかしながら、ワークシートの中で、ユダヤ教の特色に注目し過ぎたせいか、キリスト教の有する普遍的な広がりへの関心が薄らぐ展開となってしまった。2時間目の「ローマ帝国とキリスト教」では使徒の活躍や迫害を平易でわかりやすく説明し、素朴な質問に丁寧に答えることで、生徒の学習意欲を高め、関心を失わないように努めた。学習指導案の作成に当たっては、生徒が授業に関心を抱き意欲的に取り組むよう指導上の工夫を図らないと、「思考・判断」や「知識・理解」を育む指導につながらない。そこで、日頃から生徒の実態を考慮して、関心・意欲・学習態度を重視した観点で授業づくりを行い、実践している。積極的な授業への参加意欲等の態度が見取れた場合（A評価）には誉めたり、授業後に補足的解説を加える指導を行うなど、生徒の学ぶ意欲の維持に努めた。また、授業に対する関心が高まらず、ワークシートの未提出者等の状況が見られる生徒（C評価）に対しても、必ず声をかけて再提出を促す指導を行うなど、特段の配慮を心がけた（再提出後はB評価）。学習の経過において、授業に興味・関心を抱いた生徒の中には、単元に関係のある映画やテレビ番組のことについて積極的に話しかけてくるなど、学習意欲の喚起に重点を置いた授業改善が、効果を上げてきていることを実感することができた。

なるべく多面的な観点から生徒を指導・評価していこうとすると、積極的に発言はしないが、学習に対して興味・関心の高い生徒を見いだすには、ワークシート等の他の評価方法について創意工夫を重ねることの大切さを実感することができた。そのため、従前の講義・板書中心の授業展開は、4観点に基づく評価を指導に生かす視点や、生徒の主体的な学びを育成する視点などから、指導方法に対する工夫と改善が迫られているといえる。

8 本時の様子

本時では、ユダヤ教の教義とイエスの教えに触れ、継承したものと否定したものを考察し、関係地域を捉えていくことが学習目標であった。学習のねらいとしては、ユダヤ教に対する関心を高めるとともに、キリスト教のもつ普遍性について強調する授業の展開を考えていた。

授業で活用するワークシートに関しては、生徒にとって容易に理解でき、主体的に取り組めるような作成を心がけたが、その一方で生徒の考える力を引き出すような工夫が足りなかったように感じた。

生徒の関心や意欲を高めるための授業に努めながらも、観点別の評価方法に終始した取組になった感が強い。授業への参加意欲を持続させることが学校としての課題であるのに、本時の授業内容は幾分豊富過ぎ、逆に理解を難しくし、意欲の減退を生じさせてしまったのではないかと反省している。このことは、授業の前半は積極的に取り組んでいた生徒に対し、後半は授業展開や指導方法を多少変更して取り組んだものの、意欲を持続させる難しさを痛感した点にある。観点別評価に基づく授業研究を通して、改めて生徒の実態に即した授業計画や教材工夫の必要性を感じることができた。

9 単元の観点別評価の総括

(1) 関心・意欲・態度

評価規準に基づく発言内容や課題提出の状況等を含む授業への取組に基づいて評価を行った。

ワークシートを活用して、図やマークをヒントに世界の宗教について解答する設問を工夫したところ、意欲的に取り組んだ生徒は、「三つ書けた」とか「五つ書けた」などと関心を高めている様子を見取れたが、あまり答えられなかった生徒は、友人の解答を聞いてそのまま書き込む様子が見られ、問題に取り組む態度を形成する指導のあり方を工夫する必要があると感じた。

また、ワークシート上の確認テストでも、事前に本人が書いたものと、答え合わせをした後に記載したものとを区別できるように、ペンの色を変えて記述させる工夫をすれば、机間指導以降のプリント回収後も学習状況を把握することができたと反省した。結局ワークシートの内容では、関心・意欲の判断がつかず、その提出の有無によってのみ判断することになった。

本単元での「関心・意欲・態度」を総括した結果は、生徒30名に対して、A段階が4人、B段階が14人、そしてC段階が12人という状況であった。

(2) 思考・判断

本単元の前半部分については、定期考査において、ワークシートを活用して授業を行った内容を踏まえ、ユダヤ人の食事制限を例にだして、自分の考え方を問いかけた問題（後掲参照）で評価した。他の宗教と混同せずに解答している状況を評価判断のB基準とし、明らかに異なる知識や理解に基づいて記述した場合はCの評価を行った。

ユダヤ教の食事制限については、生徒が最も関心をもって授業に臨んでいた部分であった。

「特色ある宗教」については適切な理解が図れるよう、定期考査の結果を踏まえて、試験後の答え合わせの際に補足解説を行い、基礎的な知識に基づいて公正に判断できるよう指導した。

後半は、ワークシートで教会組織と行政組織の対比ができていくかどうかで判断した。

本単元での「思考・判断」を総括した結果は、生徒30名に対して、A段階が12人、B段階が13人そしてC段階が5人という状況であった。

(3) 資料活用の技能・表現

本科目の指導に当たっては、授業の中で生徒に配布した学習プリント等を、必ずファイルに綴じさせ、定期的に提出させることで、評価方法の一つに位置づけた。

本単元でも、定期的にファイルの提出を求め、授業で行った地図作業等が適切に行われていれ

ばBを基準とする評価を行った。板書事項以外の加筆や考察した記述内容が認められる者を誉めたり、逆に取組が不十分な者にはコメントを付記して学習意欲を喚起した。

本単元での「資料活用の技能・表現」を総括した結果は、生徒30名に対して、A段階が15人、B段階が4人、そしてC段階が11人という状況であった。

(4) 知識・理解

「知識・理解」については、定期考査によるこの単元で学習した内容についての到達状況を主に、ワークシートでの確認テストなどを参考にして評価した。到達状況の不十分な生徒には、テスト返却の際、定期考査の内容の基本的な部分にしぼって学習する復習プリントを配布し、後日の提出を求めた。

本単元での「知識・理解」を総括した結果は、生徒30名に対し、A段階が8人、B段階が15人、そしてC段階が7人という状況であった。

10 今後の課題

実際に指導案中の評価規準を例に指導・評価を進めていったが、やはり評価対象となるものに修正を加えていかないと現実的には無理があった。多忙を極める日常の中でも様々な観点から生徒の学習指導を進めていくことは必要であるが、評価規準もなるべく単純化し、単元が変わっても応用の効くような継続的に指導しやすい方法を模索していく必要があると感じた。まず評価ありきではなく、観点別評価の工夫を模索していくことが、授業や教材の改善や工夫につながり、生徒の理解が高まっていくであろうことを実感した。

また、いかに生徒との接点を多くするかであろう。学習意欲の高い生徒もそうでない者もやはり、声をかけられたりすれば嬉しいものである。その触れあいと信頼関係の上に初めて学習指導も成り立つのであろう。

参考資料

資料1 定期試験（抜粋）

(3)

a ユダヤ教に関する以下の設問に答えよ。【 】内には語群より記号で選べ。

ユダヤ教徒は食べ物に制限を付けて守れることこそ、人間が動物でないゆえんだと考える。しかもその制限理由が、神が命じたからこそ、それを守れるのだというとき、それ自体が【ア】行為となる。自分たちは神によって選ばれた民族という思想（【イ】）や、厳しく約束事を守る（【ウ】主義）事によって、ともすれば排他的な特色を強めていったと見ることもできる。

b 授業中に学んだユダヤ教徒の食事制限等の例を一つあげて、厳しい戒律を守りながら日常生活を送る事に関して、あなた自身がどのような見方・考え方をもっているかを述べなさい。

(思考・判断)

(以下知識・理解)

(4) このような思想を何と呼ぶか、語群より記号で選べ。

(5) 律法を重んじたユダヤ人の一派とは以下のどれか。選んで言葉で書け。

アルビジオ派 パリサイ派 アサン派 シア派 スナ派

(6) 第一の使徒と呼ばれ、初代ローマ教皇とは誰か、語群より記号で選べ。

(7) 禁圧されたキリスト教徒の地下集会所は何と呼ばれたか。

(8) But I say to you, Love your enemy and pray for your persecutors.

訳 (しかし、私はあなた方に言う。【a】を愛し、【b】する者のために祈れ)

a、bに適語を入れよ。

(9) この経典とは何か。以下より選んで言葉で書け。

コーラン マヌ法典 大蔵経 旧約聖書 新約聖書

(10)

a キリスト教が国教となったのは西暦何年のことか。

b キリスト教の拡大に大きな役割を果たした五本山の中でキリスト受難の地はどこか。

下記地図中より記号で選べ。 (省略)

資料2【定期テストの生徒の解答例】

試験問題(3)～b. 授業中に学んだユダヤ教徒の食事制限等の例を一つあげて、厳しい戒律を守りながら日常生活を送ることに関して、あなた自身がどのような見方・考え方をもっているかを述べなさい。 (思考・判断)

解答例

生徒A：「乳製品と肉を食べてはいけない。これでは他の民族との交流ができなくなってしまおうと思った。」

生徒B：「自分は食事制限がなく、何でも食べられるし、制限なんて考えられない。だけど、限られたものしか食べられなくても平気ということは、それだけユダヤ教徒の人が宗教を大切にしているってことだと思う。」

生徒C：「自分もユダヤ教徒でまわりもユダヤ教徒なら食べ物を買うに行くときも楽かもしれないけど、周りがユダヤ教徒でないときは、食事や買い物が大変だと思う。他の教徒の人と友達になっても、一緒になかなか食事もできないと思うので毎日、毎日が大変そう。」

生徒D：「厳しい戒律を守り続けることは今、自分たちが法律を守っているのと同じ事であって、ユダヤ教徒には自然なものだと思う。」

少なからず外国籍の生徒もいる本校の現状もあるので、他の宗教や文化を理解し、価値観の相違を自然に受け入れられるような指導を今後も進めていきたい。

実践事例 2 日本史 B 「織豊政権と幕藩体制の形成」

1 実践期間 平成15年11月19日～11月21日

2 単元名 (学年) ヨーロッパ人の来航と織豊政権の展開 (3年)

3 単元の目標

- (1) ヨーロッパ人の来航と鉄砲・キリスト教などの外来文化の受容が、それ以後の日本の歴史に果たした役割や意義を考える。
- (2) 織田信長・豊臣秀吉の統一過程を捉えるとともに、全国的な支配体制の確立と秀吉の対外政策について理解する。
- (3) 武将や豪商を担い手とする桃山文化の特色ある文化的諸相を捉えることにより、近世的な文化として創出されたことに気づく。

4 単元の指導計画 (5時間扱い)

ヨーロッパ人の来航と鉄砲伝来……………	1時間 (本時)
南蛮貿易とキリスト教……………	1時間
織田信長の統一事業……………	1時間
豊臣秀吉の統一事業……………	1時間
豊臣秀吉の対外政策と桃山文化……………	1時間

5 単元の評価計画

(1) 評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断	資料活用の技能・表現	知識・理解
ヨーロッパ人の来航及び織豊政権の特質に対する関心と課題意識を高め、意欲的に追究しようとしている。	ヨーロッパ人の来航及び織豊政権の特質について、外来文化との接触や桃山文化の特色と関連付けて考察することができる。	ヨーロッパ人の来航及び織豊政権の特質に関する諸資料を的確に選択して活用することや、文化遺産の活用などを通して、歴史的事象を追及する方法を身に付けるとともに、追及した過程や結果を適切に表現することができる。	ヨーロッパ人の来航及び織豊政権の特質についての基本的な事項を、外来文化との接触や桃山文化の特色と関連付けて理解し、その知識を身に付けている。

(2) 評価計画 ※太枠内が本時 【 】は評価方法

時	学習内容	評価項目			
		関心・意欲・態度	思考・判断	資料活用の技能・表現	知識・理解
1	ヨーロッパ人の来航と鉄砲が伝来し普及する過程、またこれらが社会	ヨーロッパ人の来航と鉄砲の伝来と普及の過程に対して関心を抱き、当時の社会に与えた	ヨーロッパ人の来航と鉄砲伝来について、地域での諸事象と関連付けて、具体的に考察	ヨーロッパ人の来航と鉄砲伝来に関する様々な資料を活用し、その影響などを具体的にま	ヨーロッパ人の来航と鉄砲の伝来について、地域での諸事象と関連付けて理解し、その知

	に与えた影響を具体的に考察する。	影響を具体的な資料から意欲的に追究しようとしている。 【観察・ワークシート】	することができる。	とめることができる。 【ワークシート・定期考査】	識を身に付けている。 【定期考査】
2	南蛮貿易と一体化してキリスト教が布教した過程と貿易の実態について考察し、理解を深める。	南蛮貿易とキリスト教の布教に関心をもち、両者の関連を意欲的に追究している。 【観察・ワークシート】		南蛮貿易とキリスト教の布教に関する地図や絵画資料等を活用して、布教経路やキリシタン大名の領国経営等について適切に表現することができる。 【ワークシート】	南蛮貿易の実態とキリスト教の伝来や布教の過程について、キリシタン大名の保護政策の動向と関連付けて理解し、その知識を身に付けている。 【定期考査】
3	織田信長による統一事業の過程と新しい政策を理解する。	織田信長による統一事業の過程に関心をもち、様々な資料から意欲的に追究しようとしている。 【観察・ワークシート】	織田信長の統一事業の過程を、鉄砲やキリスト教の伝来と関連付けて考察することができる。 【ワークシート】	織田信長・豊臣秀吉の統一事業に関する文献資料・絵画資料などについて、理解を深めるために必要な内容を読み取ることができる。 【ワークシート・定期考査】	織田信長の統一事業の過程を、鉄砲やキリスト教の伝来と関連付けて理解し、その知識を身に付けている。 【定期考査】
4	豊臣秀吉の統一事業の過程と全国的な支配体制について考察し、理解する。	豊臣秀吉の統一事業の過程と全国的な支配体制について関心を抱き、様々な資料から意欲的に追究しようとしている。 【観察・ワークシート】	豊臣秀吉の諸政策と桃山文化について、国際関係や外来文化との接触を踏まえて、関連付けて考察することができる。 【ワークシート・定期考査】		豊臣秀吉の統一事業の過程と全国的な支配体制について、国際関係と関連付けて理解し、その知識を身に付けている。 【定期考査】
5	豊臣秀吉の対外政策と桃山文化の諸相について考察し、理解する。	豊臣秀吉の対外政策と桃山文化の諸相について関心をもち、様々な資料から意欲的に追究しようとしている。 【観察・ワークシート】			豊臣秀吉の対外政策と桃山文化の諸相について、国際関係や外来文化と関連付けて理解し、その知識を身に付けている。 【定期考査】

(3) 観点別評価について

【関心・意欲・態度】

学習活動における具体の評価規準	・ ヨーロッパ人の来航及び織豊政権の特質に対する関心と課題意識を高め、意欲的に追究しようとしている。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	・ 諸資料を有効に活用して理解を深めようとし、課題意識を明確にして自ら意欲的に追究している。

「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	・教科書の文献史料や絵画資料等から、ヨーロッパ人の来航、織豊政権、桃山文化の特色や関連性を示す資料を具体的に指摘して、前時代との比較をさせながら諸事象に関心をもたせる。
---------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------

【思考・判断】

学習活動における具体の評価規準	・ヨーロッパ人の来航及び織豊政権の特質について、外来文化との接触や桃山文化の特色と関連付けて考察している。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	・諸資料を適切に評価し、これを活用して時代や事象の特質や、事象の社会への影響を考察している。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	・教科書等から関連する資料を見いだし、必要な情報を整理させる。

【資料活用の技能・表現】

学習活動における具体の評価規準	・ヨーロッパ人の来航及び織豊政権の特質に関する学習課題を追究するための諸資料から必要な事柄を読み取ることができ、気づいたことや理解できたことなどを、ノートやワークシート等に適切に表現している。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	・諸資料を正確に読み取り、その内容を他の資料と関連付けて表現している。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	・活用できる資料を具体的に指摘し提示するとともに、資料の見方、情報の選択や内容整理の仕方等を指導し、身に付けさせる。

【知識・理解】

学習活動における具体の評価規準	・ヨーロッパ人の来航及び織豊政権の特質に関する基本的な事項や用語を理解するとともに、外来文化との接触や桃山文化の特色と相互に関連付けて理解し、その知識を身に付けている。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	・基本的な事項や用語にとどまらず、諸資料の考察や関連付けから得られた事項を理解し、その知識を身に付けている。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	・ヨーロッパ人の来航及び織豊政権の特質に関する基本的な事項や用語をノートに整理させるとともに、ワークシート等を活用して事項や用語の理解を確認し、個別に指導を行う。

6 本時の展開

(1) 本時の目標

ヨーロッパ人の来航を世界史的な視野から捉えるとともに、伝来した鉄砲が日本国内に普及する過程とその影響を、身近な郷土史料である相模国の後北条氏の事例を通して、「鉄砲伝来」という歴史的事象を調べ考察する。

(2) 本時の指導過程 (コンピュータ室を活用しての学習)

過程	学 習 活 動	指 導 内 容	指 導 上 の 留 意 点	評 価 観 点 (方 法)
導入 (10分)	<ul style="list-style-type: none"> 大航海時代を背景とするヨーロッパ人の来航を年表や地図で確認する。 鉄砲伝来の基本的事項と当時の日本が戦国時代であったことに注目する。 	<ul style="list-style-type: none"> 大航海時代を背景に、1543年にポルトガル人が種子島に鉄砲を伝えたことと、当時の日本が戦国時代であることを年表や地図などから調べさせて関心を高め、本時の目標をつかませる。 	<ul style="list-style-type: none"> 机間指導をしながらアドバイス等を行って意欲を喚起するとともに、確認事項に対する発言の機会を多くの生徒に与える。 本時の目標がつかめるように工夫する。 	<p>【関心・意欲・態度】</p> <p>ヨーロッパ人の来航と鉄砲の伝来と普及の過程に対して関心を抱き、当時の社会に与えた影響を具体的な資料から意欲的に追究している。 (観察)</p>
展開 (30分)	<ul style="list-style-type: none"> 鉄砲が国内に普及した過程とそれを可能にした背景を考える。 史料を読み、相模国への鉄砲の伝播についてまとめる。 表やグラフを読み取り、後北条氏の鉄砲の使用状況について考える。 鉄砲伝来が及ぼした影響について考えたことをまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> 鉄砲の生産場所を地図で確認させ、鉄砲製造に必要な技術について考えさせる。 史料から相模国への鉄砲伝来とその経路について読み取らせる。 軍役に関する表やグラフから後北条氏の鉄砲の使用が立ち遅れていた状況を考えさせる。 鉄砲伝来が及ぼした影響について考えたことをワークシートにまとめさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 鉄砲製造と刀鍛冶との関係、江戸時代以降の花火の流行など具体的な事例から連想させる。 史料を批判的に読む必要性についても説明し、信憑性について考えさせる。 武田氏の事例と比較させ、長篠の戦いにも注目させながら、後北条氏の状況を捉えさせる。 本時で学習したことを踏まえて考え、まとめるよう促す。 	<p>【思考・判断】</p> <p>ヨーロッパ人の来航と鉄砲伝来から課題を見だし、地域での諸事象と関連付けて、具体的に考察している。 (ワークシート)</p> <p>【技能・表現】</p> <p>ヨーロッパ人の来航と鉄砲伝来に関する様々な資料を活用しながら、鉄砲の伝来の影響などを考察し、具体的にまとめている。 (ワークシート)</p>
まとめ (10分)	<ul style="list-style-type: none"> 調べたいテーマをインターネットを活用するなどして調べる。 本時の学習を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> インターネット等を活用して、多様な方法でテーマを探ることを体験させる。 多角的な考察の必要性を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> インターネットの活用の仕方や情報の信頼性等に留意させる。 次の時間へのつながりを勘案する。 	

7 単元全体の学習の経過

本単元では、ヨーロッパ人の来航にともなう鉄砲とキリスト教の伝来が、織豊政権をはじめとする近世以降の日本にどのような役割を果たし、影響を与えたかを、様々な資料に基づいて具体的に考察し、理解することを学習のねらいとした。すでに生徒は2年次に世界史Bでの学習を通して、本単元の導入に位置する世界史的視野からの捉えに関する基礎的な学力や、関係する史・資料の取り扱いや解読についても十分な学力を有していると判断できる。そのため、地域資料や

地図、図版類を豊富に盛り込んだワークシートを用いて、生徒自らが関心を高め、積極的に学習活動を展開するよう授業計画を立てた。

単元全体を5時間で設定した中で、検証授業を行った本時については、コンピュータを活用した学習活動を展開し、生徒自らが主体的に調べ、考えることを通して、学習に対する関心・意欲を引き出して学習状況観察によって見取るとともに、ワークシートを工夫することで、「思考・判断」や「資料活用の技能・表現」の観点別評価を見取ることができた。

2時間目以降の授業については、普通教室での授業であったが、学習の目標を明確にし、一方的な講義形式の授業に偏しないよう、関心を高めたり、基本的な事柄について考えながら、理解していくように発問を工夫し、その機会を多くした。また、関係資料の考察や学習内容の整理等ができるようにワークシートの作成を工夫するなど、諸事象を関連付けながら系統的に学べるよう指導した。

また、「指導と評価の一体化」に向けた取組に関しては、授業に入る前に、生徒に対して学習方法とともに評価規準や評価方法を示し、単元を通してその必要性を再認識することができた。その場合、例えば、生徒一人ひとりの既習の学力実態に応じて、発問や課題を与えていくことを想定した授業づくりが理想的であるが、現実には難しいので、その手だてとして、導入段階で事前の学習知識等を測る診断的な評価を工夫したかった。

単元全体を通して、評価が指導に結びつくように考え、例えば、Cと評価した生徒には個別にその理由を説明し、再度ワークシートに取り組みさせるなど基本的な事項の理解に向けて学習をサポートした。また、Aと評価した生徒に対しては、学習目標の標準的な到達状況を確認した上で、学習の一層の深まりや広がりをサポートできるよう、関連する文献やホームページなどの紹介や探究上のアドバイスを適切に行うことを心がけた。

8 本時の様子

本時では、前掲の指導過程の通り、コンピュータを活用しながら、作成したワークシートに沿って授業を進めた。指導上の説明場面や課題・作業の提示に際しては、コンピュータ画面にスライドを掲げ、時間の短縮を図りながら効率よく指導展開する工夫を行った。

○ワークシートの(1)

- ・生徒個々に教科書や図説等で調べさせた後、発問をして確認した。
- ・調べるのに時間を要した生徒への対応が、時間の都合等で十分ではなく、指導担当の説明を聞くだけに終わった生徒もいた。

○ワークシートの(2)

- ・作業の主旨と手順を説明した後、作業に取り組みさせ、質問についてはその都度個々に対応した。
- ・必要に応じて、全体にヒントとなる作業上のポイントを説明した。
- ・生徒は全体的に意欲的に取り組んでいたが、深く考察し過ぎて、時間内に終わらない生徒も認められた。

○ワークシートの(3)

- ・可能な限り多くの関係するホームページにあたらせ、閲覧させた後に、「鉄砲が日本に与えた影響について」という条件を示して、調べてみたいテーマを考えさせた。
- ・結果的に、作業の主旨を十分に理解できていなかった生徒もいたので、この点は指導上改善が必要である。

本時全体を通して、おおむね当初計画した授業が展開できたと考えるが、次の二点が今後の課題である。

- ①ワークシートを活用した授業では、調べ、考察するのに標準的な時間を確保できていなかった点が課題であり、より効果的な調べ学習を展開するには単元の構成や授業展開を再検討し

て、2時間続きとするなど改善を要する。

- ②生徒22名による授業であったが、生徒個々に対応した調べ学習の充実、コンピュータの操作やトラブルへの対応を考えると、授業をサポートする教員の配置が必要であり、同様な授業を展開する際の教科内での協力体制の検討・構築が望まれる。

9 単元の観点別評価の総括

(1) 関心・意欲・態度

授業中での学習状況観察は予想以上に行うことができず、見取りにくい「関心・意欲・態度」については様々な場面での評価を考えておく必要があることを痛感した。特に、生徒全体の学習状況をつかみ指導を進める上では、学習状況観察は効果的であるが、生徒個々の状況を見取るには、評価記録を容易に残せる場面を学習過程から想定しておきたい。

そこで本単元では、ワークシートへの取組状況を中心に評価した。

本単元での「関心・意欲・態度」を総括した結果は、生徒22名に対して、A段階が5人、B段階が16人、そしてC段階が1人という状況であった。

(2) 思考・判断

本単元では、授業を通しての基礎的な理解を踏まえて、諸資料から考察したり、課題を見いだして追究する学習の展開を目指した。学習のねらいや主旨を理解していない生徒も見受けられ、指導担当の期待と異なった学習活動を展開した際に、どのように評価すべきか迷うこともあった。ここでは諸資料そのものや、そこに記されている事象の信憑性を考察する学習場面を設定した。史料批判という歴史的思考力の基礎をなす部分である。そこで、考察結果に至る根拠が示されているか、その根拠に基づいた判断が適切であるかどうかを重要であり、評価すべき点である。本単元のワークシートもこのような観点から評価した。

本単元での「思考・判断」を総括した結果は、生徒22名に対して、A段階が2人、B段階が15人、そしてC段階が5人という状況であった。

(3) 資料活用の技能・表現

本単元では、多様な資料を活用して、諸事象を調べ考察し、基本的な事柄を理解していくことを重視した学習活動を展開した。そのため、学習内容は「思考・判断」と密接な関係にあり、「思考・判断」のもとになる情報を資料から読み取れているかどうかの評価すべき点である。本単元では、文献史料（後掲参照）ばかりでなく、絵画資料などからも必要な情報を読み取らせた。

調べ学習や探究学習では、資料の読み取り等の活用スキルやコンピュータ操作のスキル等に関して、個人差が現れるので、授業の進度に遅れがちな生徒への補足的な指導が課題となる。

本単元での「資料活用の技能・表現」を総括した結果は、生徒22名に対して、A段階が2人、B段階が19人、そしてC段階が1人という状況であった。

(4) 知識・理解

本単元では主に定期考査での解答状況から、「知識・理解」の観点について評価を行った。出題した問題は、基本的な事項や用語を問うものを中心に、考察や資料活用の学習活動から導かれる知識や理解についても含めた。これは独立した知識として身に付いているのではなく、考えるための知識として、または考えた結果、得られた理解として評価したい点だからである。

歴史の学習では、生徒の興味・関心のあり方で、既習知識が相当多い場合がある。既習の知識と本単元での学習状況を比較することで、どのような知識が身に付いたかを明らかにし、次の学習に向けて関心・意欲を高める上でも、事前アンケートや診断的な評価等を行い、参考にとりこまれる。

本単元での「知識・理解」を総括した結果は、生徒22名に対して、A段階が7人、B段階が13人、そしてC段階が2人という状況であった。

10 今後の課題

学習過程において計画的に観点別評価を実施し、指導に生かすことを心がけ、決して評価のための授業にならないように取り組んでみた。指導と評価の一体化を目指すには、共通の認識のもとに指導体制を構築することや指導担当者の評価に関する知識やスキルの習得などを行うことが課題であると感じた。また、観点別評価を生かすためには、講義型の授業から生徒主体の作業・体験重視の授業スタイルへの転換が必要であると考えた。指導担当者は、生徒に「教える」という従前の教授型から、課題解決的な学習や作業的・体験的な学習において生徒の学習を「サポートする」という意識の改革も必要である。その一方で、教わることを通して生徒が知識やスキルを身に付けていくという学習の場面も軽視することができない。観点別評価を重ねることで、生徒が確実に学力を身に付けることのできる授業のあり方を研究していくことが、今後の大きな課題と考える。

参考資料

【定期考査の問題事例】

問 次の史料は1641年に出版された『北条五代記』の一部である、次の設問に答えなさい。

「見しは昔、相州小田原に玉瀧坊と云て年よりたる山伏有。愚老若き頃、其山臥物語せられしは、我関東より毎年大峯へのぼる。享禄はじまる年（1528年）、和泉の堺へ下りしに、あらくなく鳴物の声する、是は何事ぞやととへば、鉄砲と云物、唐国より永正七年（1510年）に初て渡りたると云て、目当てとうつ。我是を見、扱も不思議奇特成物かなとおもひ、此鉄砲を一挺買て、関東へ持て下り、屋形氏綱公へ進上す」

(1)この史料の鉄砲の伝来について、定説と異なる点を一つ史料中から抜きだしなさい。

（【資料活用の技能・表現】を問う設問）

(2)『北条五代記』の鉄砲の伝来についての記述が、定説と異なっている理由を記しなさい。

（【思考・判断】を問う設問）

※解答例：『北条五代記』が作られた時期がおそいから。

史料中の「鉄砲」がポルトガルから伝わったものとは限らない。

問 次の地名のうち、異質なものを一つ記号で選び、異質と判断した理由を記しなさい。

（【思考・判断】、【知識・理解】を問う設問）

A 国友 B 堺 C 根来 D 博多

※解答例：D、Dだけが鉄砲の生産地ではない

問 安土城のような近世城郭をその特色が分かるように絵で示しなさい。

（【資料活用の技能・判断】を問う設問）

【ワークシート例】

単元名 「ヨーロッパ人の来航と織豊政権の展開」

1 鉄砲伝来

(1) 鉄砲の伝来と普及

① 鉄砲の伝来

- ・1543年 1. _____ 人（中国船）が 2. _____ に漂着

背景：ヨーロッパの海外進出＝3. _____

ポルトガル…インド・ゴア拠点に東洋貿易

→ 島主種子島時堯、鉄砲2挺を購入、家臣に使用法と製造法を学ばせる。

→ 1545年、複製に成功

② 鉄砲の大量生産と普及

- ・国内での大量生産

和泉（大阪府）の4. _____、紀伊（和歌山県）の5. _____

近江（滋賀県）の6. _____ など

- ・大量生産の背景…当時の7. _____、鍛造・鑄造技術の水準の高さ

- ・十数年後には、全国的に鉄砲が普及 →各地の8. _____ が利用

(2) 後北条氏と鉄砲

① 相模国への伝来経路

- ・史料 『北条五代記』（北条家旧家臣の三浦浄心が1641年に出版）の記述

「十四 関八州に鉄砲はじまる事

見しは昔、相州小田原に玉瀧坊と云て年よりたる山伏有。愚老若き頃、其山臥物 語せられしは、我関東より毎年大峯へのぼる。享禄はじまる年（1528年）、和泉の堺へ下りしに、あられなく鳴物の声する、是は何事ぞやととへば、鉄砲と云物、唐国より永正七年（1510年）に初て渡りたると云て、目当てとうつ。我是を見、扱も不思議奇特成物かなとおもひ、此鉄砲を一挺買て、関東へ持て下り、屋形氏綱公へ進上す。…（以下略）…」 （『北条史料集』より）

作業1 鉄砲伝来の定説と異なる事項をまとめましょう。

作業2 相模国の鉄砲伝来の経緯について説明した次の文の（ ）に史料から適する語句を抜き出しましょう。

小田原の玉瀧坊という（1. _____） → 和泉の（2. _____）で鉄砲一挺を買う

→（3. _____）へ持て下り、屋形（4. _____）公へ進上。

② 軍役における鉄砲

*参考 1575年の長篠の戦いで、武田勝頼の騎馬隊は織田信長の鉄砲隊に破れる。

作業3 軍役資料を見て気づいたことをまとめましょう。

(3) 鉄砲の影響

- ・戦術の変化…1. _____の組織、2. _____の変化

作業4 鉄砲に関するHPを閲覧し、「鉄砲が日本に与えた影響」について、調べたいテーマを考えましょう。（例：「鉄砲と〇〇」など）

- ① 閲覧したHPで興味・関心を持った事項をメモしよう。

② 調べたいテーマ 「 _____ 」

③ テーマを設定した理由 _____

実践事例3 地理A 「諸地域の生活・文化と環境」

1 実践期間 平成15年11月13日～11月26日

2 単元名（学年） 生活の舞台としての地形（1年）

3 単元の目標

世界の人々の生活・文化の基盤となっている自然環境のうち地形環境と生活・文化とのかかわりについての理解を深めるとともに、地形環境把握のための地形図利用法を習得する。

4 単元の指導計画（4時間扱い）

- プレートと変動帯（生活の舞台としての大地形）・・・・・・1時間
- 平野の地形と生活（侵食平野と生活）・・・・・・1時間
- 地形図から見た地形Ⅰ（扇状地・三角州と生活）・・・・・・1時間
- 地形図から見た地形Ⅱ 学校の周辺（洪積台地と生活）・・1時間（本時）

5 単元の評価計画

（1）評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断	資料活用の技能・表現	知識・理解
地形環境と生活文化（生業形態、居住）とのかかわりに関心をもって追究しようとするとともに、地形図を重要な分析ツールとして認識し、その利用法を積極的に習得しようとしている。	地形環境と生活文化（生業形態、居住）との関係を社会的、歴史的要因を踏まえて判断することができる。	分布図・景観写真・地形図の読み取り、新旧地形図の比較を正確に行うことができる。	プレートと大地形の形成の関係、世界の大地形の特色および分布、侵食平野、堆積平野（沖積平野、洪積台地）の特色と生活・文化との関連を理解し、その知識を身に付けている。

（2）評価計画 ※太枠内が本時 【 】は評価方法

時	学習内容	評価項目			
		関心・意欲・態度	思考・判断	資料活用の技能・表現	知識・理解
1	プレートの分布によって世界の地形の骨格が形成され、おおまかに三つの生活舞台が存在することを把握する。	日本に地震が多いことに関心を持ち、地震の震源図、プレートの境界の分布などの学習に意欲的に取り組んでいる。 【基本プリント】		プレート境界の分布図、プレート断面図、海底地形図などを的確に判読することができる。 【基本プリント】	プレートの分布により世界の大地形が形成されていること、境界では褶曲山脈や島弧を形成し、大地震等災害も多いことを理解している。 【定期考査】
2	安定陸塊上の侵食平野の生	世界の広大な平原の形成に関心をも		アルプスやオーストラリア大陸など	大平原の構造上の特色と、そこでの

	活環境を日本の堆積平野と比較することにより理解する。	ち、日本の平野との違いを意欲的に追究しようとしている。 【基本プリント】		の景観写真から世界の大地形の差異、特色を読み取ることができる。 【基本プリント】	生活について関連付けて理解している。 【定期考査】
3	扇状地、三角州の生活環境を地形図の読図を通して理解する。	人間の居住には水の利用と制御が重要な条件であることに興味をもち、意欲的に追究しようとしている。 【ワークシート】	扇状地の水利と生活の関係、自然堤防と水害との関係を地図から考察することができる。 【ワークシート】		扇状地、三角州・自然堤防の自然環境の概略と生活とのかかわりを理解している。 【定期考査】
4	学校周辺の地形環境を新旧地形図の比較により、土地利用の変遷も含めて理解する。	土地利用やその変化と地形環境との関係に関心を持ち、意欲的に探究しようとしている。 【ワークシート】	地図からわかる土地利用の変化と地形環境との関係を資料を参考に考察することができる。 【ワークシート・定期考査】	地形環境と土地利用の変遷について新旧地形図を比較して分析することができる。 【ワークシート・定期考査】	洪積台地と谷戸で構成される地形環境と土地利用の変遷とを関連付けて理解している。 【定期考査】

(3) 観点別評価について

【関心・意欲・態度】

学習活動における具体的評価規準	・ 地形環境と生活文化（生業形態、居住）とのかかわりに関心をもって追究しようとするとともに、地形図を重要な分析ツールとして認識し、その利用法を積極的に習得しようとしている。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	・ 地形環境と生活文化の関連について、発展的な課題を自ら見つけ出そうとしている。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	・ ワークシートの新旧地形図の対照に使用した図の中のポイントとなる地点と景観写真を対照して示し、現実の景観と地図の表現を関連付けできるようにさせ、興味関心を深めさせる。

【思考・判断】

学習活動における具体的評価規準	・ 地形環境と生活文化（生業形態、居住）との関係を社会的、歴史的要因を踏まえて判断している。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	・ 地形環境と生活文化（生業形態、居住）との関係を、既習の学習内容や文献資料をもとに、社会的、歴史的要因を踏まえて考察している。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	・ ワークシートの返却の際、考察のポイントを例示し、社会的、歴史的要因を踏まえた考察方法を理解させる。

【資料活用の技能・表現】

学習活動における具体的評価規準	・ 分布図・景観写真・地形図の読み取り、新旧地形図の比較を正確に行っている。
-----------------	----------------------------------------

「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	・ 分布図・景観写真・地形図の読み取り、新旧地形図の比較において、生活文化に関連付けて詳細に分析している。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	・ ワークシートの返却の際、読図のポイントを例示し理解を深めさせる。地形図の読み取り方法については授業で整理し、活用する方法を理解させる。

【知識・理解】

学習活動における具体的評価規準	・ プレートと大地形の形成の関係、世界の大地形の特色および分布、侵食平野、堆積平野（沖積平野、洪積台地）の特色と生活文化のかかわりを理解し、その知識を身に付けている。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	・ 地形的特色と生活のかかわりを関連付けて理解しているとともに、社会的・歴史的要因も踏まえて理解している。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	・ 地形的特色と生活のかかわりについて基本的な用語を再整理させる。

6 本時の展開

(1) 本時の目標

洪積台地（丘陵）と沖積低地で構成される学校周辺の地形環境と土地利用の変遷について理解する。その際、土地利用やその変化と地形環境との関係を踏まえて理解するとともに新旧地形図の比較による考察の方法を習得する。

(2) 本時の指導過程 (ワークシート『地形作業プリント③』を活用)

過程	学 習 活 動	指 導 内 容	指 導 上 の 留 意 点	評 価 観 点 (方 法)
導入 (5分)	・ 学校周辺の地形の特色をこれまでに学習した三角州、扇状地と比較させて考える。	・ 前時までの三角州、扇状地の地形の特色との違いを想起させる。	・ 自転車で通学すると坂を登ったり、下ったりするなど具体的な例を想起させ、地形の特色を把握させる。	
展開 (30分)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 洪積台地の形成および地形の特色について理解する。 ・ 学校周辺の地形環境が洪積台地と沖積低地である事を理解する。 ・ 《ワークシート課題1》旧図で水田は沖積低地、森林は洪積台地に、集 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 図の地形断面図を書き、学校周辺の地形が洪積台地（丘陵）と谷間の沖積低地であることを理解させる。 ・ 旧図における土地利用と地形との関係を理解させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 地形環境を立体的に把握させるため、資料集の景観写真を提示する。 ・ 河川の分布や等高線の間隔から高低差のある二つの地形環境と 	<p>【知識・理解】 洪積台地、沖積低地、谷戸などの地形の特色を把握している。 (ワークシート・定期考査)</p> <p>【技能・表現】 地形図から地形環境を立体的に把握している。</p>

	<p>落立地が洪積台地との境界の崖下に分布することを理解する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 《ワークシート課題2》新図で集落が増加したのはどの地形部分かを把握する。町名の変化や道路網の変化についても把握する。 	<ul style="list-style-type: none"> 新図において、主に変化が大きかったのは、どの部分なのかを把握させる。 	<p>土地利用の相関を把握させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> 旧図において、洪積台地上の土地利用度（価値）が低いことに留意させる。 	<p>新旧の地形図の比較から地域変貌を読み取ることができる。</p> <p>(ワークシート・定期考査)</p>
<p>まとめ (15分)</p>	<ul style="list-style-type: none"> 《ワークシート課題3》旧図における集落立地が洪積台地と沖積低地の境界の崖下にある要因を考える。 新図における集落立地を地形環境との関係および社会経済的な要因から考察する。 自己評価をする。 	<ul style="list-style-type: none"> 旧図での集落立地の要因を前時での水利との関係（扇状地）を思い出させて考えさせる。 新旧両図での地域の産業構造の変化（農村社会から都市社会へ）を考えさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 資料の読み取り方のポイントを指摘して考察の手助けをする。 過去に学習した集落の立地要因を想起させ、それとの関連で思考させるようにする。 	<p>【思考・判断】 地形環境と集落の立地やその変遷を資料をもとに考察している。 (ワークシート)</p> <p>【関心・意欲・態度】 身近な地域の自然環境と居住の関係に関心をもって意欲的に取り組んでいる。 (ワークシート)</p>

7 単元全体の学習の経過

世界の地形環境を概観し、世界の人々の生活・文化の基本条件の一つを理解させるとともに、地形図利用法の習得により、地形環境のみならず歴史的社会的環境を含めた地域の地理的環境を多面的に把握する地理的技能を高めさせたい。生徒は地形を単なる自然と理解している傾向が強いので、具体例を通して地形が人々の生活・文化の重要な基盤であり、環境となっていることを理解させるため本単元を設定した。

単元の前半の2時間は、大地形のでき方や生活の舞台としての地形を概観し、後半2時間につながる基本的な知識を習得し、理解を深める部分として位置づけた。本単元では、ワークシートを完成させ提出するという明確な学習行動目標を設定したため、日頃授業に集中度を欠く生徒も、目的意識をもって授業に取り組めたと思われる。

8 本時の様子

導入部で「前時までの三角州、扇状地の地形の特色」を想起させ、学校周辺の地形がこれと異なるものであるという認識は発問によって達せられた。

ワークシートの旧図のX-Yの断面図を図示する際、その場所を特定するのに若干時間がかかり、洪積台地そのものの地形の特色の説明がやや不十分になってしまった。

学校周辺の地形が洪積台地と沖積低地が組み合わさったものであることを理解させ、旧図では台

地上が森林、沖積低地は水田、境界の崖下に集落が分布していたことを把握させた。生徒によっては、この土地利用の把握が地形図と対応させることができない者もいたようであったが、十分な机間指導ができなかった。したがって、台地上は水が乏しく居住や農業には不適切で、利用価値が低かった点、台地崖下が湧水に恵まれ居住地として適していたこと、扇状地の集落立地と共通点があることなどの理解については、不十分な状況になったように思われた。

ワークシートの課題3の「(1) A図での集落立地がなぜその場所に多かったのかを説明しなさい。」の問の答えとして「洪積台地の扇端部は湧水に恵まれ……」といった記述が見られ、扇状地での土地利用との共通性までは理解しているのだが、細かいところでの両地形の峻別までは理解が深まっていなかったことが、それを証明していた。限られた時間にいくつかの事項を理解させるための手順や、同質な物と異質な物、異質な中にある共通点などの峻別をきちんとしておかななくてはならないと痛感した。

9 単元別評価の総括

(1) 関心・意欲・態度

「関心・意欲・態度」の観点は日常の授業にどの程度参加しているかという「基本的な部分」と、授業を通して発展的な課題を見つけ出そうとしているかといった「発展的な部分」の二つに分けられるのではないかと考え、評価方法を考えてみた。「基本的な部分」は、基本プリントと各ワークシートへの取組状況を数値化した。「発展的な部分」はワークシートの自己評価欄に自ら発展的な課題を見つけ出そうとしているかで評価した。ワークシート3に「【自己評価欄】として②この授業で興味関心をもった点についてあげてください。③さらに調べてみたい事があったらあげてください。」を設定したところ、②では「川がまっすぐになっていたから、どうやったのかなと思った。」③では「年代ごとに町並みを見てみたい。他の場所でも今と昔の差を調べてみたいです。」など、「自ら発展的な課題を見つけ出そうとしている」生徒も少なからず見られ、関心・意欲の高まりがみられた。

A=12名、B=28名、C=0名であった。

(2) 思考・判断

「思考・判断」はワークシートや定期考査で、地図ばかりでなく文献資料も含めて集落の立地について考えさせることを通じて評価した。集落立地の条件を実際の地図にあてはめて考えることができているかどうかという点や、二つ以上の資料を関連付けて考察し、判断しているかどうかという点を評価した。ワークシート2でも、「思考・判断」の観点からの学習活動を展開したが、その場で解説したので、評価からは除外した。

「思考・判断」では9名をC段階と評価することになった。これについてはワークシート3の内容を単元終了後に定期考査で評価したが、「複数の資料や前時までの知識を相互関連させて文章表現して解答する」問題であり、このような結果になったのは次のような要因があると考えられる。

ア、何をどのように答えていいかわからない。→ ①問題設定の仕方が不適切であった。

②このような問題の解答に慣れていない。

イ、複数の資料を理解する知識や前時までの知識などの個別の知識が不足している。

ア、②についてはこれまでの授業が、「知識・理解」に偏っていたことが最大の原因と考えられるが、イ、について「思考・判断」の部分のみを取り上げた問題は社会科では存在しにくく、どうしても、難易度の高い問題になってしまうのではないかと考えられる。「思考・判断」を問う問題作成に当たって、問題の意図を生徒が把握できるような文章作成あるいは問題構成もきわめて重要であると痛感した。

ワークシートや定期考査の解答の返却の答え合わせの中で、Cと評価した生徒を中心に発問し、考える材料としての集落立地に関する知識や地図上で実際の立地を確認した。

A=6名、B=25名、C=9名であった。

(3) 資料活用の技能・表現

基本プリントで各種の地図・図や景観写真から地形的特色を読み取れているかどうかで評価しようとしたが、内容が基本的なものであったため、ほぼ全員がおおむね満足できる結果となった。ワークシート1・2・3の中でも「資料活用の技能・表現」の観点にもとづく学習活動を行ったが、その場で解説し方法を確認したので、評価からは除外し、定期考査で地図上での扇状地の読み取り、土地利用の読み取りなど、同様の技能を見取る問題を出題した。大地形の地図は全員おおむね読み取れたが、詳細な地図はより高度な読み取りの技能が必要とされる。7名をC段階とすることになったが、詳細な読み取りができない生徒に対する指導時間不足であった。次の単元で地図を読み取る機会を作り、特にCと判断した生徒には机間指導などで補った。

A = 9名、B = 24名、C = 7名であった。

(4) 知識・理解

定期考査で基本的な知識について出題した。B段階を満点の50%程度の到達度、A段階を満点のほぼ75%の到達度とした。C段階が1名であり「思考・判断」と正反対の結果となった。

A = 25名、B = 14名、C = 1名であった。

単元の観点別評価

	評価 ブ ロ ッ ク	内容	設問等	関 心 ・ 意 欲 ・ 態 度	思 考 ・ 判 断	資 料 活 用 の 技 能 ・ 表 現	知 識 ・ 理 解	備 考
基本 プ リ ン ト	I			○		○		
ワ ー ク シ ー ト 1	II			○				授業中に解説しているため
ワ ー ク シ ー ト 2	III			○				授業中に解説しているため
ワ ー ク シ ー ト 3	IV	作業	1	○				土地分類色分け作業のため
			2	○				授業中に解説しているため
		課題	1	○		(○)		授業中に解説しているため
			2	○		(○)		授業中に解説しているため
	V		3 (1)		○			以下は解説せず
			3 (2)		○			
VI	自己 評価		○					
定 期 考 査	VII		1				○	
			2			○		(6)を除く
			3		○			2(6)を含む
			4				○	

10 今後の課題

前提である「関心・意欲・態度」「思考・判断」「資料活用の技能・表現」「知識・理解」の4観点のそれぞれの内容自体の検討が不足していたと感じた。高等学校の場合、「知識・理解」を習得する部分は相対的に大きく、また同時に地理歴史科や公民科の場合、「思考・判断」「資料活用の技能・表現」「知識・理解」は相互に関連している面が大きく、それぞれの観点で見取る範囲と他の観点との関連部分を整理する必要があるのではないかと感じた。

4観点による評価をどのような形で生徒に伝達するかということを考えると、観点の内容を整理することは重要であると考え。また、各授業時間に4観点を全て踏まえることには無理があり、その時間の学習内容に応じて一つないし二つの観点を重点化して見取り、単元を通しておおまかなバランスが取れるように計画を工夫するのが現実的であると考え。

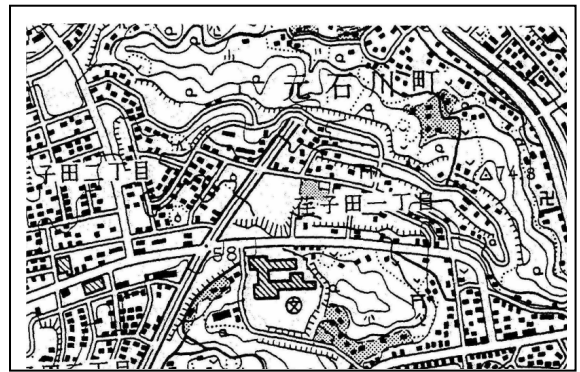
参考資料

《ワークシート1》

下記のA, B図は本校付近のほぼ同じ範囲の図である。

A図(昭和30年;1955) 1:20000×2.5

B図(平成6年;1993) 1:25000×2



《ワークシート2》

1、 A, B図について以下の作業をなさい。

関・意・態 技・表

①水系を水色、樹林(A図: \wedge ○ B図: $\text{--}\bigcirc$)を緑、
水田(A図: || B図: ||)を黄色、集落(家屋 \blacksquare)をオレンジ
に着色しなさい。図中の $\text{---}\cdot\cdot\cdot\text{---}$ は土地利用の境界を示す。

②本校、満願寺の位置を赤で示しなさい。

2、 B図の50mの等高線を赤で着色しなさい。(25,000分の1の等高線は10m間隔)

《課題》

1、 A図において次の事象が立地する場所はどのような地形であるか答えなさい。

技・表

- ① 集落は _____ ② 樹林は _____
② 水田は _____

2、 A図からB図への変化について

思・判

- ① 集落が増加したのはどのような地形の部分か答えなさい。
② 町名の変化の例をあげ、新しい地名からどのようなことが考えられるか答えなさい。
③ 道路網の計画性についての差異について、どのようなことが考えられるか答えなさい。

3、いままでの作業や次の資料を参考にA図からB図への集落立地の変化に関する以下の問に答えなさい。

資料1

扇状地の扇端は湧水に恵まれ、早くから集落が発達した。扇央は水はけがよく、開発が遅れて雑木林などに使われていたが、扇端の集落の人口が増加するにつれ、扇央の開発が始まり、畑地、果樹園、桑畑などが開かれた。その後水道施設が引かれることにより住宅も建設されるようになったと考えられる。

- (1) A図での集落立地がなぜその場所に多かったのかを説明しなさい。
- (2) B図での集落立地がA図で集落立地が見られなかった場所に多数見られるようになった理由を説明しなさい。

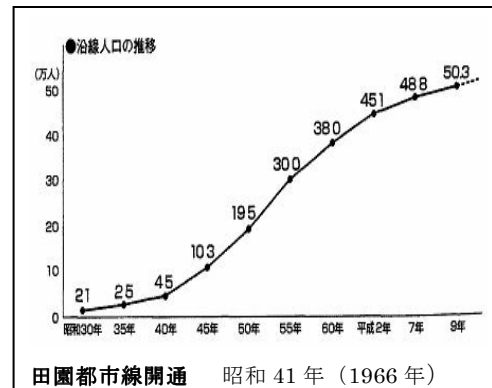
資料2

水道

水道の普及は、戦後になってからである。当時、この地域の人々の暮らしを支えていた水は、井戸水、または、山間(やまあい)の清水等、自然水が普通でしたが、それでは都市生活を支えることは出来ず、昭和38年度より、配水幹線の工事が始まり、43年1月末に完成した。

(<http://home.catv.ne.jp/dd/minorusu/index.htm>より)

資料3



【自己評価欄】

関・意・態

- ①この授業に
- a、意欲的に取り組めた
 - b、大体取り組めた
 - c、あまりよく取り組めなかった
- ②この授業で興味関心をもった点についてあげてください。
- ③さらに調べてみたい事があったらあげてください。

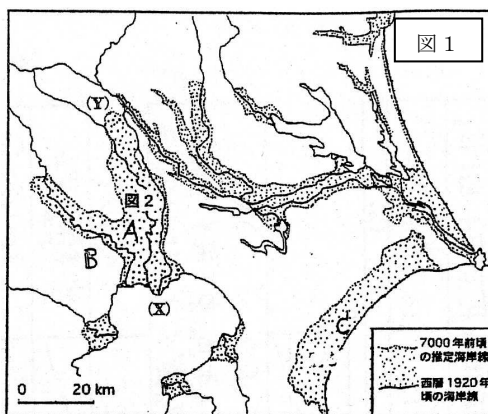
定期考査問題 (抜粋)

2 解答用紙に印刷された地形図に関する問題に答えなさい。

- (1) 右の概略図のように解答用紙の地形図の南西には断層山地が平野に接し、複数の扇状地が発達している。解答用紙の地形図に扇状地と考えられる部分を4箇所赤で示しなさい。
- (2) 地形図中のA付近の土地利用は何か答えなさい。
- (3) A付近のこの土地利用が見られる地形は、X川の堆積作用による沖積平野であるが、自然の状態では水はけが悪く低湿な土地となっている。このような地形を何と呼ぶか答えなさい。
- (4) 地形図中のB付近の土地利用のうち、針葉樹林以外のものを二つあげなさい。
- (5) 地形図中のCで示した部分の-----は河川を表しているが、この部分の河川の流れ方を答えなさい。
- (6) 地形図中の桜井・上方付近に集落が多く立地する理由を次の語句のうち一つを使って答えなさい。
- (7) 高田・三神町付近は家屋の密集地として斜線でまとめて表現されている。このような地形図の表現方法を何と呼ぶか答えなさい。



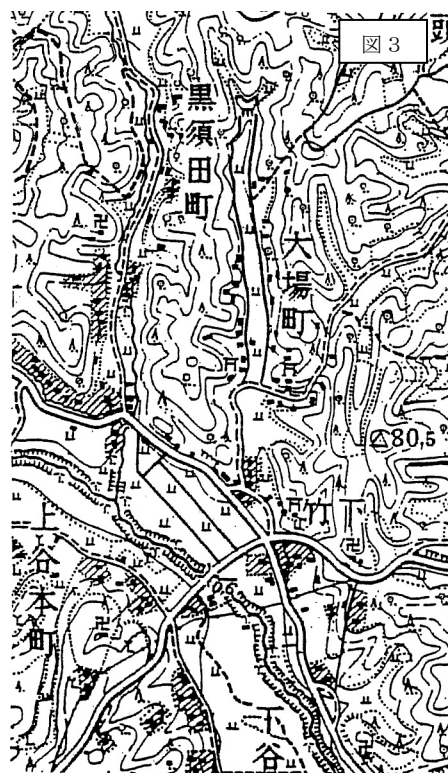
3 右の図は、約7000年前の海岸線と西暦1920年頃の海岸線の復元図である。1920年頃の海岸線を示したのは、1920年代以降海岸地形の人工改変が大幅に進ん



でいるため、改変が進んでいない自然状態に近い海岸線

を示すためである。図2と図3(2万5千分の1地形図)は、図1の一部地域を示した地形図である。これらの地図に関連する以下の問題に答えなさい。

- (1) 図1において、(X)で示した河口付近に発達する地形の名称を答えなさい。
- (2) 図2において、河川PQ(大藩古利根川)沿いには、Mのような比較的古い集落が発達する。こうした集落が立地している地形の名称を答えなさい。
- (3) 図2において、大藩古利根川から離れたNのような場所における土地利用の変化について考えられることを、土木技術との関係を変えて説明しなさい。《2の(3)の問題文を参考に考えなさい》
- (4) 図3において、樹林の多い土地の地形の名称を答えなさい。
- (5) 図3と同様な地形は図1のA~Cのうち、どの部分に形成されていると考えられるか選りなさい。



公 民

1 教科目標

広い視野に立って、現代の社会について主体的に考察させ、理解を深めさせるとともに、人間としての在り方生き方についての自覚を育て、民主的、平和的な国家・社会の有為な形成者として必要な公民としての資質を養う。

2 評価の観点及びその趣旨

関心・意欲・態度	思考・判断	資料活用の技能・表現	知識・理解
現代の社会と人間にかかわる事柄に対する関心を高め、意欲的に課題を追究するとともに、民主的・平和的なよりよい社会の実現に向けて参加、協力する態度を身に付け人間としての在り方生き方についての自覚を深めようとする。	現代の社会と人間にかかわる事柄から課題を見だし、社会的事象の本質や人間の存在及び価値などについて広い視野に立って多面的・多角的に考察するとともに、社会の変化や様々な考え方を踏まえ公正に判断する。	諸資料を収集し、有用な情報を主体的に選択して活用するとともに、追究し考察した過程や結果を適切に表現する。	現代の社会的事象と人間としての在り方生き方にかかわる基本的な事柄を理解し、その知識を身に付けている。

3 公民科における評価の留意点

上記の目標は、平成元年の公民科創設時の目標を概ね踏襲したものであるが、平成11年に改訂された現行の学習指導要領の趣旨を踏まえ、新たに「主体的に考察させ」という文言が加筆された。すなわち、これは、公民科を構成する「現代社会」（2単位）、「倫理」（2単位）、「政治・経済」（2単位）の3科目に共通して、学習者である生徒自身が現代社会に対する関心を高め、科目の特質を生かし、主体的に課題を設け追究・考察する学習や作業的・体験的な学習を行う創意工夫と充実を意図したものである。

現行の学習指導要領では、公民科の全科目のうち、いずれかを選択して履修することになっている。またこれまでと同様に、各高等学校では「現代社会」または「倫理」「政治・経済」をすべての生徒に履修させる科目として位置づけることになっている。今回の改訂では、「現代社会」が従前の4単位から2単位になったのをはじめ、3科目の特質を一層明確にした内容の重点化と基礎的・基本的な内容の厳選化が図られるとともに、学び方・調べ方の学習や課題追究的な学習といった学習活動の特質を重視したところに注目できる。各科目の特質と内容の取り扱いを整理すると以下ようになる。

「現代社会」の特質は、現代社会の諸課題について自己とかわらせながら主体的に学習させること、そして現代社会の在り方を構造的・機能的に捉えさせ、概念的な理解に向けて学習させることである。それらを踏まえた学習活動を展開するには、現代社会に対する生徒の学習意欲を喚起する指導上の工夫を図るとともに、現代社会に生きる人間としての在り方生き方を追究・考察させる授業づくりが求められる。

「倫理」の特質は、科目の目標にある「生きる主体としての自己の確立」に向けて、生徒自身

の生き方の根本となる人生観・世界観・価値観の育成を目指すことから、人間としての行為が学習の対象であり、それに関連する価値的な視点から考察したり、自己とのかかわりから思索・探究することが中心である。そこで、青年期の倫理的な自覚を考慮して、先哲の基本的な考え方を手がかりに、倫理的な見方や考え方を身に付けさせ、現代に生きる人間としての在り方生き方を自己の課題として捉え、考察させる学習活動の展開が一層重視されている。

「政治・経済」の特質は、政治や経済の基本的な理論や概念の理解を前提に、現代における政治、経済、国際関係等について構造的・機能的・関係的に捉え、客観的に理解させるとともに、それらに関する諸課題について主体的に考察させ、公正な判断力を養い、良識ある公民として必要な能力や態度を育むことにある。そのため、客観的な資料と関連させて政治や経済の諸課題について関心を高め、多面的・多角的に考察させることで、政治や経済について公正かつ客観的な見方や考え方を深め、また理論と現実との相互関連を理解させる指導上の工夫が必要である。

これまで公民科における評価は、講義形態の授業やペーパーテストに重点を置いた評価の在り方等により、やはり4観点の中でも「知識・理解」に偏した評価が行われてきたといえる。公民科教育では、今回の改訂で「見方や考え方」を身に付ける学習や課題追究的な学習を重視することにより、現代という時代と社会、そこに生きる人間について、政治や経済、社会、青年、倫理などの視点から捉えさせ、教科・科目の目標とする資質や能力を育成することにある。公民科の学習活動を通して、生徒が身に付けた資質や能力を適切に評価していく上では、特に課題を設定(あるいは選択)して追究させる学習を生かして、「関心・意欲・態度」「思考・判断」「資料活用 of 技能・表現」の各観点をどのように評価していくかが指導者にとっての課題といえる。公民科の各科目において、課題を設定(あるいは選択)して追究させる学習に該当する項目を整理すると次のようである。

「現代社会」・・・「(1) 現代に生きる私たちの課題」で、現代社会の諸問題について生徒の実態等に応じて二つ程度選択し、自己とのかかわりに着目して課題を設定し、追究させる。

「倫理」……………「(2) 現代と倫理」の「ウ 現代の諸課題と倫理」で、現代の倫理的諸課題を選択し、自己の課題と結びつけて追究させる。

「政治・経済」・「(3) 現代社会の諸課題」で、現代の政治や経済の諸課題を選択し追究させる。

各高等学校では、中学校社会科や関連ある他教科での学習に配慮し、学校・生徒の実態を十分踏まえた科目の配置や指導計画の作成に努め、指導と評価を一体化させたまめ細かな授業を実践していくことが大切である。

公民科の評価に当たっては、次のような準備を通して評価の実際にあたることが重要である。

- ①生徒の学力実態を捉え、それに即して学習指導のねらいを明確にし、教科・科目の特性を生かし、指導と評価の一体化が図れるような内容のまとまり(単元)を設定するとともに、適切な指導計画を立案してシラバス等に反映すること
- ②明確化した教科・科目の目標や学習指導のねらいを踏まえ、それが実現された状況の評価規準として設定すること(設定に当たっては、「評価規準の作成、評価方法の工夫改善のための参考資料(高等学校)」を参考にすること)
- ③学習指導のねらいが実現されたかどうかを、いつ、どのような場面で、何を、どのような方法で評価するか、事前に評価する方法・手段の準備をすること
- ④評価規準に基づき、学習状況の程度に応じて指標となる評価基準を作成すること

⑤学習過程での評価を評定に換算する方法や指導要録に記載する手順を整備すること

(1) 「関心・意欲・態度」の評価

公民科の「関心・意欲・態度」に関する評価観点では、その趣旨に新たに「現代の」という文言が加筆されたことで、現代の社会について学習を行う教科としての位置づけがより明確にされるなど、教科の特質が反映されたものになっている。例えば、「関心」では、「現代社会」での高度情報化による現代社会の特質と社会生活の変化に対する関心が学習指導を通して高まっているかを評価するものである。また「意欲」に関しては、「熱心に取り組んでいる」というような一般的な学習意欲を評価するのではなく、例えば「地球環境問題」について自己の課題と結びつけて意欲的に追究している状況について評価することになる。そして「態度」については、例えば、「政治・経済」において、現代日本の諸課題の望ましい解決の在り方を客観的に考えようとしているという態度を評価するものである。

「関心・意欲・態度」の評価では、「見えにくい学力」を見取ろうとする工夫から、評価のためだけに新規の提出物や作業を過度に課することがないように、予め学習内容や学習活動に応じて想定した評価方法に基づいて行うよう留意する必要がある。また、「思考・判断」「資料活用の技能・表現」「知識・理解」の各観点を評価する場面において、「関心・意欲・態度」が現れることもあるので、評価機会を見逃さないようにすることも必要である。

(2) 「思考・判断」の評価

「思考・判断」は、「学び方」(学習の仕方)に包括されるものであり、「資料活用の技能・表現」「知識・理解」と関連し、既習学力や学習過程で身に付けた基礎的・基本的な知識・技能に基づいて課題を見だし、計画的に見通しをもって追究し、課題を解決するなどの課題解決的な学習活動の中で、学習者がどのように考え、判断したかを評価する観点である。

公民科の「思考・判断」に関する評価観点では、課題を設定(あるいは選択)して追究させる学習を重視していることから、その趣旨に「現代の社会と人間にかかわる事柄から課題を見だし」、「社会的事象の本質や人間の存在及び価値など」について、「多面的・多角的に考察する」ことを明示している。ここでいう「多面的・多角的に考察する」とは、社会的事象が様々な側面をもっているため、それを学習者が多様な角度から考察することが大切であり、一方的な見方による一面的な理解に終わらない力を身に付けさせる指導の工夫が必要であるということである。また、「判断」についても、「社会の変化や様々な考え方を踏まえ公正に判断する」ことができているかを評価するものであり、適切な評価方法を用いて生徒の判断の根拠を見極めたものとなるようにする必要がある。例えば、「思考」では、「現代社会」の場合、「現代社会の諸問題について自己とのかかわりに着目して課題を見だし」ているかという点では、学習者が設定した課題とその設定の理由が論理的に説明されているか、また課題の追究に際して多面的・多角的に考察しているかを評価するものである。そして「判断」に関しては、「倫理」において現代に生きる人間としての在り方生き方について、自己の生き方と結びつけて課題を追究させ、広い視野に立って主体的かつ公正に判断しているかを評価するものである。「思考・判断」の評価では、学習プリントの項目やペーパーテストの設問の工夫によってその状況を見取るとともに、ノートやレポートの記述内容や発言の内容などを分析することで「判断」の状況がどのようなものであるかを見極めることも可能で、具体的な評価規準や評価基準を設定してあたる必要がある。

(3) 「資料活用」の技能・表現の評価

「技能・表現」は、「思考・判断」と同様に、「学び方」(学習の仕方)に包括されるものであり、「関心・意欲・態度」に支えられ、「思考・判断」を生かした結果である学習の一成果として身に付けられた能力である。

公民科の「資料活用」の技能・表現に関する評価観点では、「今日の情報化社会の進展や課題を設定(あるいは選択)して追究させる学習の重視に対応して、その趣旨に技能として「諸資料を収集し、有用な情報を主体的に選択して活用する」と、「追究し考察した過程や結果を適切に表現する」ことを明示している。例えば、「現代社会」では、現代社会の諸課題についての追究・考察として、関係する「諸資料を様々なメディアを通して収集し、学習に役立つ情報を主体的に選択して活用」しているかどうか、そして「学び方の技能」を身に付けているかどうか、さらに「追究し考察した過程や結果を様々な方法で適切に表現している」かを評価するものである。公民科では、新聞や書籍をはじめ、コンピュータを活用して収集した資料や、見学や聞き取り調査などによって獲得したデータを、統計・グラフに整理して表現したり、地図や図表を作成してわかりやすく表現し、説明するなど、課題レポートや学習発表会等により、課題追究の目的が明確になっているか、適切な追究方法であるか、資料の収集と選択がどのような基準で行われているか、調べたことや考えたことなどを適切にまとめ、表現しているかを、学習内容・学習方法に照らして具体的な評価基準を設定して評価を行うなどの工夫が必要である。また、ペーパーテストにおいても、資料活用の方法や適切な情報の選び方等を測定できるように出題の工夫を図ることが考えられる。

(4) 「知識・理解」の評価

「知識・理解」は、「関心・意欲・態度」に支えられ、「思考・判断」を生かして、学習する社会的事象・事物の相互関係の認識結果における発達的特質から捉えようとする観点である。すなわち、学習の成果として身に付けるのが、「技能・表現」であり、そして「知識・理解」である。これらについては、これまでも「見える学力」として評価しやすい反面、知識重視に偏した指導や評価が行われてきた。

公民科の「知識・理解」に関する評価観点では、従前に比して知識の内容が明確にされ、その趣旨に「現代の社会的事象と人間としての在り方生き方とにかかわる基本的な事柄」を、知識として身に付けることを明示している。例えば、「倫理」における「世界の様々な文化の理解」という課題を取り上げ、追究していくことを通して、「異なる文化の尊重」、「共に生きること」といった内容を自己の課題と結びつけて理解し、人格の形成に生かす知識として身に付けているかどうかを評価するものである。学習を通して理解したことが確実な知識として身に付いているか、他で学習した知識や理解と関連付けて、広がりや深まりが認められるよう、内容のまとめ(単元)の終わりに行う確認テストや定期考査等のペーパーテストを工夫することで、「知識・理解」の観点から基礎的・基本的な学力の確かな定着などを見取っていくことが必要である。

参考文献

- 工藤文三編 2001 『高校改訂指導要録の解説と記入例』 明治図書
全国公民科・社会科教育研究会編 2003 『高等学校公民科指導と評価』 清水書院
高浦勝義 2004 『絶対評価とルーブリックの理論と実際』 黎明書房

実践事例 1 現代社会 「現代の社会生活と青年」

1 実践期間 平成15年11月18日～11月21日

2 単元名 (学年) 高度情報化社会 (1年)
(小単元)

3 単元の目標

- (1) 情報化社会への関心を高め、その特徴を理解するとともに、社会生活を送る中で生じる諸課題を多角的・多面的に捉え考察する。
- (2) 様々な情報に対して適切に対処しようとする態度を培うとともに、情報モラル等の情報化社会に参画する上で必要な知識を身に付ける。

4 単元の指導計画 (2時間扱い)

- あふれる情報と情報化社会の課題・・・・・・・・第1時 (本時)
- 高度情報化社会を生きる・・・・・・・・第2時

5 単元の評価計画

(1) 評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断	資料活用の技能・表現	知識・理解
情報化社会への関心をもってその特徴を理解しようとするとともに、情報化社会の諸課題を意欲的に考察しようとしている。	情報化社会における諸課題を多面的に考察するとともに、情報化社会の進展による社会生活の変化や様々な立場、考え方を踏まえ公正に判断することができる。	様々なメディア(情報源)を利用して現代社会の諸資料を収集し、必要な情報を主体的に判断して活用することができる。	現代社会は高度情報化に支えられていることを理解し、個人情報や知的所有権などに関する情報モラルの確立が必要であることに気づき、その知識を身に付けている。

(2) 評価計画 ※太枠内が本時 【 】は評価方法

時	学習内容	評価項目			
		関心・意欲・態度	思考・判断	資料活用の技能・表現	知識・理解
1	様々なメディア(情報源)についてその特徴を整理し、情報の信頼性などを考察することにより、現代の社会が高度情報化に支えられていることを理解する。	様々なメディア(情報源)に関心をもち、メディアの変遷と社会生活の変化を関連付けて考えようとしている。 【ワークシート】	様々なメディア(情報源)の特徴を考察するとともに、情報の信頼性について、考察に基づいて適切に判断することができる。 【ワークシート】	資料の中から必要な情報を取り出し、利用しやすいように整理することができる。 【ワークシート】	現在の社会は、高度情報化によって支えられていることを理解している。 【定期考査】
2	情報の送り手や受け手の立場になって情報について考えることにより、情	情報化社会の進展により発生した社会生活上の諸課題に関心を	情報をその送り手側と受け手側の両方の立場で考察することが		情報の取り扱いについて、モラルやルールが必要であることに気

報モラルの必要性について理解し、日常の行動に生かせるようにする。	もち、意欲的に考察しようとしている。 【ワークシート】	できる。 【ワークシート】	づき、必要な知識を身に付け行動にいかすことができる。 【定期考査】
----------------------------------	--------------------------------	------------------	--------------------------------------

(3) 観点別評価について

【関心・意欲・態度】

学習活動における具体の評価規準	・ 情報化社会への関心をもってその特徴を理解しようとするとともに、情報化社会の諸課題を意欲的に考察しようとしている。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	・ 自分の身の回りのメディアを複数把握しており、社会生活でのメディアの役割を考察しようとしている。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	・ 生活している中で、様々な情報を得ていることを具体的な例から考えさせる。

【思考・判断】

学習活動における具体の評価規準	・ 情報化社会における諸課題を多面的に考察するとともに、情報化社会の進展による社会生活の変化や様々な立場、考え方を踏まえ公正に判断している。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	・ 情報の信頼性の考察に基づいて、活用場面によるメリット・デメリットを適切に判断している。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	・ 人間の行動が様々な情報から判断されることを気づかせ、考察を深めるよう指導する。

【資料活用の技能・表現】

学習活動における具体の評価規準	・ 様々なメディア(情報源)を利用して現代社会の諸資料を収集し、必要な情報を主体的に判断して活用している。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	・ 資料の中から課題を見だし、新たな資料収集を行いその過程を含めて適切に表現している。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	・ 資料収集の方法を提示し、自己と置き換えて判断するよう指導する。

【知識・理解】

学習活動における具体の評価規準	・ 現代社会は高度情報化に支えられていることを理解し、個人情報や知的所有権などに関する情報モラルの確立が必要であることに気づき、その知識を身に付けている。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	・ 現代社会の成り立ちを情報化の面から理解している。 ・ 情報化の功罪を的確に捉え、モラルやルールが必要な具体的理由を理解している。

「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	<ul style="list-style-type: none"> ・ 具体的にいくつかの状況を想定させ、情報化社会にどのようにかかわっているかを考えさせ、その功罪に気づかせる。
---------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------

6 本時の展開

(1) 本時の目標

現在の社会生活が様々な情報の中で営まれていることに気づかせるとともに、その功罪について考える。

(2) 本時の指導過程

過程	学 習 活 動	指 導 内 容	指導上の留意点	評価観点(方法)
導入 (10分)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 昨日、テレビをどのくらい見たか、またその内容はどのようなものかを考え、ノートに整理する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 昨日の朝起きてから寝るまでの一日、時間を追ってテレビの視聴時間、内容について考えさせ、何人かに発表させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 昨日のニュースなど内容に深入りせず列挙させる。 	
展開 (35分)	<ul style="list-style-type: none"> ・ ワークシートに、どのようなメディアを日常的に利用しているかを考え、記入する。 ・ ワークシートに記入した代表的なものについて、その特徴等を資料を見ながらまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「情報」「メディア」など情報化社会に関する用語に対して説明し、考察のヒントを与える。 ・ 気づいたメディアについて何人かに発表させ板書する。 ・ 様々なメディア(情報源)と日常的に接し、かつ利用していることに気づかせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 説明は簡潔にし、生徒の考察に時間をとるようにする。 ・ 教科書だけでは足りないものは資料を用意する。 	<p>【関心・意欲】 様々なメディア(情報源)に関心をもち、メディアの変遷と社会生活の変化を関連付けて考えようとしている。 (ワークシート)</p> <p>【思考・判断】 様々なメディア(情報源)の特徴を考察するとともに、情報の信頼性について、考察に基づいて適切に判断している。(ワークシート)</p> <p>【資料活用の技能・表現】 資料の中から必要な情報を取り出し、利用しやすいように整理することができる。 (ワークシート)</p>
まとめ (10分)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 現代社会と高度情報化は密接なつながりがあることを理解する。その結果、様々な問題が発生していることを考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ワークシートの内容から功罪を考えさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 次の時間につながるように問題提起する。 	<p>【知識・理解】 現在の社会は、高度情報化によって支えられていることを理解している。 (定期考査)</p>

7 単元全体の学習の経過

「現代社会」の特徴や課題を考える導入部分として、大衆化、少子高齢化、高度情報化、国際化を学習することになっている。高度情報化は、生徒の身近な問題であり、また変化が激しく問題の本質に気づきにくい。もう一度、身の回りのメディアを見つめ直すことで、社会生活の中であふれる情報に適切に対処することを、情報モラルを含めて学習するため本単元を設定した。

本単元では、1時間目に情報化社会について身近な問題であるメディア(情報源)を取り上げることで、その現実気づき、高度情報化と日常生活の結びつきを考察させた。2時間目には、高度情報化社会に生きる誰もが考えなければならない問題として、情報モラルを中心に扱った。

本単元の学習を通じて生徒は、日常生活の中で様々な情報が単なるコミュニケーションではないことを実感し、情報の受け手として適切な判断が必要なことや、情報の送り手として個人情報の保護だけにとどまらず著作権保護などの情報モラルの重要性に気づき始めた。一方的に知識を教え込むのではなく、自分の身近な問題として考えさせたことが、理解を深めたと考えられる。

8 本時の様子

生徒は、日常生活の中であふれる情報をそのまま受け入れているのか、メディアに対して特に意識することはなかったようだが、今回の考察を通してその重要性に気づき始めた。日常生活が多様化する中で、様々なメディアに触れていることになるが、生徒間に情報源の偏りがみられた。実際に自分自身が情報を発信している自覚のなかった生徒がほとんどで、高度情報化との関係を全く思い浮かばない生徒もいたが、身近な問題点を提示することにより考察の手助けになったばかりでなく、自分の問題として考えることができたように思われる。また、広い範囲の「情報」を扱ったため、生徒の情報に関する環境の差が、学習の進度に大きくあらわれた。

9 単元の観点別評価の総括

一時間の授業で取り扱う内容が広範囲にわたるため、表面的な理解になってしまうことが予想されたので、全ての評価観点を均等に盛り込むことは困難と考え、考察を中心に「思考・判断」に力点を置いた。

(1) 関心・意欲・態度

学習内容が生徒の身近な話題であったので、最初は学習の意図がつかめなかった生徒も、しだいに関心を示し、最終的にはほぼ全員が意欲的に取り組むことができた。取組の姿勢に多少差がでたのは、生徒の情報に関する環境の差を反映したものと思われる。特に、平素からコンピュータを活用している生徒は、情報の適切な扱いの重要性を実感として経験しており、自分の生活と関連付けて取り組むことができたのではないかと思われる。

ワークシートの記入状況とその提出の有無によって評価した。ワークシートに日常的に利用しているメディアを一つまたは二つについて考察しているものをB、あまり日常的に利用していない発展的な分野に考察をすすめ、社会生活との関連によって捉えようとしているものをAとした。

35名中A = 6名、B = 29名、C = 0名

(2) 思考・判断

本単元では、考えさせることを中心に指導した。ワークシートも考察を中心に構成し、解説の時間をなるべく簡潔に短くし、時間配分にも配慮した。しかし、それでも時間内では記入できない生徒もおり時間を延長し記入させたが、最初から十分な時間があれば、急ぐことなくしっかり考えた内容のものを提出可能であったと思われる。

評価は【ワークシート】の2及び3(後掲)の考察がメディアの特徴と社会生活が関連付けられているかどうかで、ワークシート3については複数の立場から考えているかどうかで判断した。

35名中A = 8名、B = 25名、C = 2名

(3) 資料活用の技能・表現

【ワークシート】の1においてメディアの特徴をまとめる作業を行った。今回の課題では、Webページによる情報収集は適さないと判断し、教科書と副教材の二つだけを使って調べさせた。ここで必要な情報が収集され、適切にまとめられているかどうかで評価した。

35名中 A = 3名、B = 30名、C = 2名

(4) 知識・理解

本単元は考える学習を中心に構成したので、講義によって知識を教え込む場面は少なかった。それにもかかわらず、定期考査において「知識・理解」に関する問題への正答率が低くなかったのは、考察の過程において、基本的な知識が身に付き理解が進んだのではないかと考えられる。また、生徒の身近な問題を扱ったことによる関心の高さにも支えられたものと考えられる。

35名中 A = 7名、B = 26名、C = 2名

10 今後の課題

高度情報化が進み、様々なメディアが利用されるようになった。その結果、生徒がメディアに触れる環境の偏りや、限られたメディアだけしか利用していないことが考えられる。資料の利用にしても将来的にはデジタルデバイスが問題となってくることは簡単に想像がつく。このような現状においては、情報モラルや知的所有権の扱いが重要である。高度情報化に関する単元はいろいろな場面で展開することが可能で、いろいろな切り口が可能であろうと思う。しかし、メディアリテラシーに関する系統的な展開はなかなか時間をとりにくい。「資料活用の技能・表現」の観点の基本的な能力を培うことにつながる重要な課題であるので、時間を割いてでも取り組むべきだと考える。

今回、4観点を踏まえた評価を意識して指導案を作成し実践した。公民科では、地理歴史科とともに「知識・理解」に偏した指導と評価が行われがちであると指摘を受けることもあった。そこで本単元では、考察を学習活動の中心にすえた。考察するには、その「材料」として基本的な知識を身に付けたり、基本的な事柄を理解していることが必要な場合もある。このとき授業時間が限られていることを考えると、講義によりその「材料」を与えるにしても、内容を精選することが必要であろう。今回は「資料活用の技能・表現」をみるために、考察に必要な基本的な事柄については、調べ学習で生徒自身が把握する形をとった。調べる内容が比較的明確であり、教科書と日常的に活用している副教材しか使用しなかったのが混乱はなかったが、扱う内容によっては考察する「材料」に迷うことなくたどりつけるような指導が必要であろう。

また、講義によらず考察させることによって、生徒は身近な問題として捉えることができ、関心・意欲も高まる中で、考察に関連する知識も身に付いたように思われる。観点別評価では、それぞれ別の観点であるが、関心・意欲を喚起する(「関心・意欲・態度」)中で、考察させる(「思考・判断」)ことは、基本的な「知識・理解」の習得にも結びつくのではないか。もちろん、考察にかかわる一連の学習活動だけで、単元目標を達することはできないし、4観点をバランスよく単元の中に配置することも難しい。しかし、4観点を意識し、授業の進め方を考えたことによって、頭の中で理解してはいても、これまで授業を進める上であまり意識していなかったことが、はっきり見えてきた。今後の授業改善の参考にしたい。

参考資料

【ワークシート】

- 1 利用したことがあるメディア（情報源）についてまとめてみましょう。 **【技能・表現】**
 （特徴は教科書や資料集を参考にまとめてみましょう）

メディアの種類	どのような情報を得ているか	メディアの特徴
例) テレビ	今日の出来事・天気予報	即時性がある。 同じことを伝えるニュースでも、評論などは放送局によって違う。

- 2 上に記したメディアが発達したために、可能になったり便利になったりしたことにはどのようなことがありますか。また、上に記したメディアが利用できなかったら、どのような問題（困ったこと）が起きると思いますか。 **【思考・判断】**

メディアの種類	考察

- 3 上に記したメディアを利用する上で気をつけなければならないことをあげてください。 **【思考・判断】**

メディアの種類	問題点

【定期考査問題の例】

- 1 情報の送り手又は受け手として、注意すべき点をそれぞれ2点ずつあげなさい。 **【知識・理解】**

受け手		送り手	

- 2 次のメディア（情報源）から二つえらんで、その特徴をそれぞれ説明しなさい。 **【知識・理解】**
 ア テレビ イ 新聞 ウ Webサイト エ 電子メール オ 電話による問い合わせ

メディアの記号	特徴

- 3 上の2で選んだメディアについて、利用上の注意点をあげなさい。 **【知識・理解】**

メディアの記号	特徴

実践事例 2 倫理 「国際社会に生きる日本人としての自覚」

1 実践期間 平成15年11月 7 日～11月28日

2 単元名 (学年) グローバル化する現代社会の中の人間 (3年)

3 単元の目標

グローバル化する現代社会の中で、世界の様々な文化の理解における倫理的課題について、広い視野に立って、先哲の考え方等を参考に、自己の課題と関連させて追究し、現代に生きる人間としての在り方生き方について自覚を深める。

4 単元の指導計画 (7時間扱い)

- 国際社会と文化の関連性…………… 2時間
- 国際社会と文化の多様性…………… 2時間
- 異文化理解…………… 1時間 (本時)
- 日本文化の特徴…………… 2時間

5 単元の評価計画

(1) 評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断	資料活用の技能・表現	知識・理解
世界の様々な文化の理解における倫理的課題に対する関心を高め、それを自己の課題と関連させて意欲的に追究し、現代に生きる人間としての在り方生き方について積極的に考えようとしている。	世界の様々な文化の理解における倫理的課題を自己の課題と関連させて考察し、現代に生きる人間としての自己の在り方生き方について広い視野に立って主体的かつ公正に判断することができる。	世界の様々な文化の理解における倫理的課題に関する諸資料を収集し、自己の課題と関連させて追究する学習に役立つ情報を主体的かつ適切に選択して活用するとともに、課題を追究し考察した過程や結果を適切に表現することができる。	世界の様々な文化の理解における倫理的課題を、自己の課題と関連させて理解し、人格の形成に生かす知識として身に付けている。

(2) 評価計画 ※太枠内が本時 【 】は評価方法

時	学習内容	評 価 項 目			
		関心・意欲・態度	思考・判断	資料活用の技能・表現	知識・理解
1 2	グローバル化する国際社会の現状を捉えながら、社会と文化の関連性について考える。	国際社会の動きから、社会と文化の関連性に対する関心を高め、意欲的に追究しようとしている。 【観察・ワークシート】	国際社会の動きから、社会と文化の関連性について課題を見だし、国際社会と自己とのかかわりから考察することができる。 【ワークシート】		国際社会の動きから、社会と文化の関連性について、国際社会と自己とのかかわりを関係付けて理解し、知識を身に付けている。 【ワークシート・定期考査】

3 4	平和な社会を構築するため、文化の多様性を尊重する態度を育むとともに、広い視野をもって様々な文化を理解する。	文化の多様性に対する関心を高め、自己の課題と関連させて意欲的に追究しようとしている。 【観察・ワークシート】		文化の多様性や異文化理解に関する資料を様々なメディアを通して収集し、適切に選択して活用することができる。 【ワークシート】	文化の多様性について、自己の課題と関連付けて理解し、人格の形成に生かす知識として身に付けている。 【定期考査】
5	文化の多様性を理解(異文化理解)する態度を育みながら、異質な文化を有する者どうしが相互の差異を認め合い、接していく方法について、課題の考察を通して文化が社会を動かす要因になっている面から理解する。	異文化理解に対する関心を高め、異質な文化を有する者どうしが相互の差異を認め合い、接していく方法と関連させて意欲的に追究しようとしている。 【観察・ワークシート】	異文化理解について課題を見だし、異質な文化を有する者どうしが相互の差異を認め合い、接していく方法と関連付けて考察し、主体的かつ公正に判断することができる。 【ワークシート・発言】		異文化理解について、異質な文化を有する者どうしが相互の差異を認め合い、接していく方法と関連付けて理解し、人格の形成に生かす知識として身に付けている。 【ワークシート】
6 7	日本文化の特徴について、異文化理解を踏まえながら、諸文献を通して考え、広い視野から可能な限り多面的に理解する。	日本文化の特徴に対して関心を高め、広い視野から意欲的に追究しようとしている。 【ワークシート】		日本文化の特徴に関する資料を様々なメディアを通して収集し、適切に選択して活用することができる。 【ワークシート】	日本文化の特徴について、異文化理解の視点や自己とのかかわりと関連付けて理解し、人格の形成に生かす知識として身に付けている。 【ワークシート・定期考査】

(3) 単元の観点別評価について

【関心・意欲・態度】

学習活動における具体的評価規準	・ 世界の様々な文化の理解における倫理的課題に対して関心をもち、学習課題を見いだして意欲的に追究している。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	・ 学習課題について、自己の課題と関連させて考察を行い、新たな学習課題を見いだしている。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	・ 世界の様々な文化について、身近で理解しやすい例示を紹介して説明し、異文化理解の必要性について関心を高める指導を行う。

【思考・判断】

学習活動における具体的評価規準	・世界の様々な文化の理解における倫理的学習課題について、公正な立場で捉えて考察している。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	・学習課題について、国際社会と自己とのかかわりに関連付けて、公正な判断に基づいて考察し、自らの在り方生き方をも踏まえて追究している。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	・世界の様々な文化について、具体的な諸課題を提示し、追究の方法や関係資料について説明し、課題に取り組めるよう指導する。

【資料活用の技能・表現】

学習活動における具体的評価規準	・世界の様々な文化の理解における倫理的学習課題について、その追究に必要な資料を収集し、適切にまとめている。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	・学習課題の考察に関する資料を多様なメディアを活用して収集し、適切に選択・活用し、わかりやすい方法を工夫してまとめている。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	・学習課題の考察に有用な資料を具体的に指摘し、適切な情報を読み取らせ、内容を整理していく指導を行う。

【知識・理解】

学習活動における具体的評価規準	・世界の様々な文化の理解における倫理的課題について、自己の課題と関連付けて理解している。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	・学習課題の考察から得た知識に基づき、自己の在り方生き方と関連付けて、人格の形成に生かす知識として身に付けている。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	・世界の様々な文化の理解における倫理的課題に関する基本的な事柄を教科書やワークシートを用いて、ノートに整理させ、理解するよう指導を行う。

6 本時の展開

(1) 本時の目標

文化の多様性を理解(異文化理解)する態度を育みながら、異質な文化を有する者どうしが相互の差異を認め合い、接していく方法について考察するとともに、文化相対主義の視点を理解する。

(2) 本時の指導過程

過程	学習活動	指導内容	指導上の留意点	評価観点(方法)
導入 (5分)	<ul style="list-style-type: none"> 文化がグローバル化している様子を復習する。 グローバル化を様々な文化的様相から考える。 	<ul style="list-style-type: none"> 国際社会を動かす要因の一つに文化があることを、言語、ファッション、音楽、漫画、ゲームなど身近な例を 	<ul style="list-style-type: none"> 発問を通して、人の移動が文化の移動であることに気づかせる。 文化のもつ力(経済面や政治面)に 	【関心・意欲・態度】 異文化理解に対する関心を高め、異質な文化を有する者どうしが相互の差異を認め合い、接していく方法

		あげて考えさせ、発問して関心を高める。	気づかせる。	と関連させて意欲的に追究している。 (学習状況観察)
展開 (40分)	<ul style="list-style-type: none"> 異文化理解について、「捕鯨をめぐる課題を提示し、その捉え方や考え方の異なりから、文化と国際社会の関係を学習する。 食文化の視点、そして食文化以外の視点から話し合いをする。 異文化理解にとって何が重要かを、身近な生活との関係から学習する。 	<ul style="list-style-type: none"> 「捕鯨」をめぐる議論を例示として紹介し、生活文化の相違等から、相互の差異を認め合う必要性を理解させる。 「捕鯨」をめぐる議論について食文化の視点のみならず、それ以外の視点からも考えさせるとともに、自分たちの文化に偏した考え方をしているかを確認する。 先入観や偏見を排除して理解することの必要性をベーコン「四つのイドラ」オールポート「偏見の行動」から理解させる。 上記以外の方法をも考えさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 文化の異質性を認め、受け入れる態度の育成について指導を工夫する。 「捕鯨」賛成反対の議論ではなく、食文化との関係で捉えることに留意する。 「捕鯨」は資源問題、動物保護、更に生物の生存権をめぐる論議に関係することに気づかせる。 知識だけに終わらないように身近な生活との関係において検証させる。 	<p>【思考・判断】</p> <p>異文化理解について課題を見だし、異質な文化を有する者どうしが相互の差異を認め合い、接していく方法と関連付けて考察し、主体的かつ公正に判断している。 (ワークシート・話し合いの状況観察)</p>
まとめ (5分)	<ul style="list-style-type: none"> 異文化理解を通して、自分たちの文化に対する見方・考え方についてまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> 真に異文化理解を深めていく上での有効な視点として、文化相対主義について理解させ、本授業のまとめとして整理させる。 	<ul style="list-style-type: none"> より豊かな社会にとって、異文化理解を適切に行うことで、相互の差異を認め合うことのできる社会形成の必要性を確認させる。 	<p>【知識・理解】</p> <p>異文化理解について、異質な文化を有する者どうしが相互の差異を認め合い、接していく方法と関連付けて理解し、人格の形成に生かす知識として身に付けている。 (ワークシート)</p>

7 単元全体の学習の経過

現代社会は、グローバル化が進み、あらゆる面で類似性や共通性を強めている傾向がある一方で、地域の独自性がグローバル化の中に吸収され、消滅する傾向ももうかがえる。国際社会では、グローバル化が進む中で、独自性を強調した地域主義の考え方が政治面や経済面で台頭している。そうした現状を踏まえ、文化面に注目して国際社会と文化の関連性を考察すると同時に、平和な社会を構築するために必要な文化の多様性を尊重する態度を養い、国際社会の一員である自覚と

役割を個々に考えさせることをねらいとして、本単元を設定した。

この単元全体を学習する上で、次の二点について指導計画の上で留意した。

①単元全体の時間を7時間と設定し、最初の「国際社会と文化の関連性」2時間が単元全体の導入部と位置づけた。

②この単元を学習する上で、先哲が残した原典に触れて考察することを心がけた。

※1・2時間目ではサミュエル・ハンチントン著『文明の衝突と21世紀の日本』（集英社新書）を教材にし、関係箇所を読み進めながら授業を展開し、著書にある文化圏の相違について認識させた。また、6・7時間目では新渡戸稲造著『武士道』（講談社文庫）、土居健郎著『「甘え」の構造』（弘文堂）を用いて、授業のねらいとする日本文化の特徴に関して理解を深めさせた。

本単元の指導を通して、「グローバル化」「文化」「エスノセントリズム（自民族中心主義）」「文化相対主義」等の基本的用語について、生徒が理解に苦慮している状況がうかがえ、この点については授業の進展に応じて復習を図る手だて等の指導上の工夫を行ったが、「知識・理解」の状況を勘案し、今後改善を図っていきたい。先哲が残した原典にあたり、読むことを通して、そこから考察したことなどを著者の言葉を引用しながらも自分の意見や感想として書き、まとめることができるようになった。これらの活動を通して、単元に応じた先哲の残した原典を選択し、活用箇所を精選することが如何に重要か、改めて認識した。本時の授業で取り上げた「捕鯨」についても、生徒の関心を高める課題設定の工夫に努めるとともに、異文化理解に向けて相互の差異を認め合い、接していく方法を追究できる課題として提示した。

8 本時の様子

本時では、前掲の指導過程の通り、作成したワークシートを用いて授業を展開した。導入時では、文化がグローバル化している例をあげるよう発問を行ったが、質問の内容がはっきりわからない生徒もいた。次いで、ワークシートを活用して、国際社会を動かす文化的要因を具体的に記述させた（回答例：ワークシート1）。展開では次の点に留意して授業を進めた。

①「捕鯨」をどのように捉えているかを発問するとともに、その捉え方からどのような主張が出てくるかを記述させた（回答例：ワークシート2）。

②「捕鯨」を人間とのかかわりの歴史から説明した（資料①）。

③「捕鯨」に関してグループで話し合った。

※「捕鯨」の捉え方から、どのような主張が出てくるかをテーマに、話し合い活動をさせた。

④生活の中で自分たちの文化中心の考え方になっているものを記述させた（回答例：ワークシート3）。

⑤異文化理解にとって重要なものとして先入観・偏見の排除をベーコンやオールポートを例に説明した（資料②）。

まとめでは、ワークシートへの記述を確認しながら、真に異文化理解を深めていく上での有効な視点として、文化相対主義について理解させることに努めた。

9 単元の観点別評価の総括

（1）関心・意欲・態度

本単元では、学習状況観察をはじめ、ワークシートへの取組状況に基づいて「関心・意欲・態度」について評価を行った。学習状況観察では、極端な取組の違いを見取ることしかできなかったため、ワークシートへの取組状況に重点を置く結果となった。

本単元での「関心・意欲・態度」を総括した結果は、生徒26名に対して、A段階が5人、B段階が20人、そしてC段階が1人という状況であった。

(2) 思考・判断

本單元では、資料を活用して考察している状況を、話し合いでの発言やワークシートの記述等の内容から、公正な判断に基づいているかどうか、自らの在り方生き方を踏まえているかどうかについて評価を行った。

本單元での「思考・判断」を総括した結果は、生徒26名に対して、A段階が4人、B段階が19人、そしてC段階が3人という状況であった。

(3) 資料活用の技能・表現

本單元で提示した先哲が残した原典に基づく考察や関係する資料等から、課題追究に向けて適切な箇所を見つけだし、情報を精選して、調べたことや考えたことを適切に表現しているかを、ワークシートの記述等から評価を行った。

本單元での「資料活用の技能・表現」を総括した結果は、生徒26名に対して、A段階が5人、B段階が18人、そしてC段階が3人という状況であった。

(4) 知識・理解

本單元では、評価規準に基づき、「知識・理解」の状況をワークシートの記述や定期考査から評価した。

本單元での「知識・理解」を総括した結果は、生徒26名に対して、A段階が4人、B段階が19人、そしてC段階が3人という状況であった。

10 今後の課題

本單元の実践を振り返り、次の三点について今後の授業改善に生かしていきたいと考える。

①教材の選択

現在の日本をどのような教材を用い理解させるかが課題である。日本を著した『武士道』『菊と刀』(ルース・ベネディクト著)は戦前の書物である。ミクロ的に見れば、生徒が生まれ育った期間の中で、「今の日本」を適切に表現できる教材を適切に見いだしていくことである。(「古い日本」と「今の日本」との比較から「日本」を捉えてみる立場もあるが)日頃から、生徒の興味・関心を把握し、教材化に取り組むことが肝要であると改めて痛感した。

②先哲の残した原典に触れること・読むこと

授業展開の中で原典講読を位置づけ、原典に触れること、読むことにより、学習課題を追究させる授業づくりを行いたい。原典をはじめ多様な資料にあたる習慣を身に付ける指導上の工夫を心がけ、4観点による評価を生かした指導が行える一つの手だてとしたい。

③評価について(「知識・理解」と「思考・判断」の関係性)

本單元を通して、「思考・判断」をどのように見取り、評価していくかが課題として明らかになった。筋道をたてて論理的に考察しているかどうかのポイントにおいて見取る上では、ワークシートの作成を工夫する必要がある。また、「思考・判断」を評価する上で、ベースとなる「知識・理解」が目標や評価規準に照らして到達しているかが重要であることも、本單元を通して改めて考えることができ、その意味でも観点別評価の必要性を痛感できた。

参考資料

ワークシート1 【技能・表現】

●国際社会を動かす要因

ア 政治的要因

イ 経済的要因

○文化的要因 ⇒

生徒回答例： 食べ物、言葉、音楽、芸術、技術力

ワークシート2 【思考・判断】

●「捕鯨」について、

○あなたはどのように「捕鯨」（あるいは「鯨」）を捉えて（理解して）いますか。

生徒回答例：・昔、給食で食べていたと聞いた

・あまり生息していなくて、珍しいもの

・一番大きな哺乳類

・昔、食べられていたもので数が少なくなっている

○捉え方（理解のし方）からどのような主張がでてきますか。

生徒回答例：・あまり生息していなくて、珍しいもの

⇒人間の好き勝手にとってはいけない

（捕鯨禁止）

・数が少なくなっている。⇒保護すべき

・昔、食べられていたもので数が少なくなっている

⇒日本の鯨を食べる習慣が各国から反発を受けている

ワークシート3 【思考・判断】

●生活の中で、自分たちの文化中心の考え方になっているとしたらどのような点があるか。

生徒回答例：・日本の文化はあまり影響していない気がする。

・外国から来ている外国人に対し、日本に来ているなら日本語を使って欲しいと思ったが、それは日本人の私の自己中心的な考えだと思った。（自分の国の言葉を優先している）

資料① 「捕鯨」

1. 「鯨」の利用

「欧米」 昔：（街灯用油、機械油、マーガリンの材料〔食用にしていない〕）
今：（石油、植物油の使用、IWCの規制で利用価値少）

※食用にも利用した国

（ノルウェー、アイスランド、デンマーク、日本等）

「日本」 昔：（街灯用油、機械油の他大切な栄養源として食用）

2. 「捕鯨」についての動向

日本 （漁民や一部の貴族が食用としていた）

17世紀 捕鯨が村単位の産業となる。

（「鯨組」の結成）

※「鯨一頭」獲れば七つの郷（村）が潤う。

19世紀（庶民階級で食用）

※鯨は魚として理解されていた

※栄養の供給源として食用に利用していた

1948年 IWC(国際捕鯨委員会)設立

1951年 日本、IWC加盟

（南氷洋で捕鯨）

1960年代後半：国際的に鯨愛護運動が高まる

資料② 「異文化理解に必要なもの」

1. ベーコン「四つのイドラ」

①イドラとは・・・

②四つのイドラ

種族のイドラ・・・

() のイドラ・・・

() のイドラ・・・

劇場のイドラ・・・

2. オールポート「偏見の行動」

=資料省略=

実践事例3 政治・経済 「経済社会の変容と現代経済の仕組み」

1 実践期間 平成15年11月21日～12月1日

2 単元名(学年) 市場機構とのはたらき(3年)

3 単元の目標

市場機構(価格機構)の仕組みを理解するとともに、市場機構だけでは解決できない問題について考察する。また、寡占・独占の問題点やインフレーション・デフレーションについて理解し、その現象が社会全体にどのような影響を及ぼすかについて考える。

4 単元の指導計画(3時間扱い)

市場機構……………1時間(本時)

市場の失敗及び寡占・独占……………1時間

現代の市場……………1時間

5 単元の評価計画

(1) 評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断	資料活用の技能・表現	知識・理解
現代の資本主義経済体制の基本である市場機構の仕組みと市場の失敗に関心をもち、理論的に理解しようとしている。	現代の資本主義経済体制の基本である市場機構の仕組みと市場の失敗を理解することで、資源の最適配分が行われている場合と、そうでない場合があることを適切に考察することができる。	現代の資本主義経済体制の基本である市場機構の仕組みと市場の失敗に関する資料を適切に選択して活用するとともに、その理論を説明することができる。	現代の資本主義経済体制の基本である市場機構の仕組みと市場の失敗を理解することで、資源の最適配分が行われている場合と、そうでない場合があるという知識を身に付けている。

(2) 評価計画 ※太枠内が本時 【 】は評価方法

時	学習内容	評価項目			
		関心・意欲・態度	思考・判断	資料活用の技能・表現	知識・理解
1	市場機構がどのようなものかを理解する。	市場機構を理論的に考えようとしている。 【ワークシート】	需要曲線・供給曲線のグラフの意味を適切な方法で考察することができる。 【ワークシート・定期考査】	需要曲線・供給曲線のグラフを、適切に説明することができる。 【ワークシート・定期考査】	市場機構について理解し、価格変動の仕組みを知識として身に付けている。 【定期考査】
2	市場の失敗と寡占・独占の意味を理解する。	市場機構だけでは解決しない問題があることを論理的に考えようとしている。 【ワークシート】		市場の失敗について、例をあげて適切に説明することができる。 【ワークシート・定期考査】	市場機構の限界とその問題点について理解し、そ

3	現代の市場における問題点を理解する。	現代の市場にはどのような問題があるかを考えようとしている。 【ワークシート】	現代の市場の問題点を、どのように解決するべきか適切な方法で考察することができる。 【ワークシート】	の知識を身に付けている。 【定期考査】
---	--------------------	-----------------------------------------------	----------------------------------------------------------	----------------------------

(3) 観点別評価について

【関心・意欲・態度】

学習活動における具体的評価規準	・市場機構の働きに関心をもち、市場機構の仕組みや、市場機構だけでは解決できない問題があることを意欲的に考えようとしている。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	・市場機構の仕組みをしっかりと理解し、価格に対する需要者・供給者の対応を想像している。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	・自分自身を需要者・供給者の立場に立たせ、価格に対する需要者・供給者の対応を考察させる。

【思考・判断】

学習活動における具体的評価規準	・需要曲線・供給曲線のグラフの意味を適切に考察している。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	・需要超過・供給超過により、価格は均衡価格へ収束することを適切に説明することができる。 ・市場機構の問題点を把握し、その解決策を考察している。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	・需要超過・供給超過とは何か、それらが生じることで、価格がどう変化するかを、自分自身を需要者・供給者の立場に立たせ考察させる。

【資料活用の技能・表現】

学習活動における具体的評価規準	・需要曲線・供給曲線のグラフの意味を適切に説明することができる。 ・市場の失敗について、適切に説明することができる。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	・需要曲線・供給曲線のグラフを任意の数字で操作することができる。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	・ワークシートの内容に対して、グラフの見方・理解の仕方を考えさせる。

【知識・理解】

学習活動における具体的評価規準	・市場機構に関する基本的事項を理解し、知識として身に付けている。 ・市場機構の理論的考察から、市場機構だけでは解決できない問題(市場の失敗)があるということを理解している。
-----------------	-------------------------------------------------------------------------------------------

「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	・市場の失敗の分類を通して、市場機構だけでは解決できない問題についての具体的な知識を身に付けている。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	・市場の失敗を再び考察させることで、市場機構が万能ではないことを理解させ、市場機構の大切さを知識として身に付けさせる。

6 本時の展開

(1) 本時の目標

需要者・供給者の立場となり、価格が決定される仕組みを考察し、価格に対する各々の立場における行動を理解する。その上で、需要曲線・供給曲線のグラフの仕組みを理解して、市場機構（価格機構＝価格変動）の原理を把握する。

(2) 本時の指導過程

過程	学 習 活 動	指 導 内 容	指 導 上 の 留 意 点	評 価 観 点 (方 法)
導入 (5分)	・財やサービスの価格はどのように決まるのかを考える。	・教室内や生徒の身の回りの物の価格が、なぜその価格なのかを問う。 ・同じ種類の物でも価格が異なる場合があることを認識させる。	・価格がなぜ変動するのかという点に興味をもたせる。	【関心・意欲・態度】 市場機構を理論的に考えようとしている。 (ワークシート)
展開 (35分)	・需要曲線・供給曲線の意味を理解する。 ・需要曲線・供給曲線が移動（シフト）する場合があることを理解する。	・ワークシートで、需要者・供給者の立場の違いを理解させる。 ・ワークシートで、需要曲線・供給曲線が移動（シフト）する意味とその原因に気づかせる。	・グラフを単に説明するのではなく、生徒一人ひとりが需要者・供給者の立場になって考えるようにさせる。 ・グラフは需要者・供給者の価格に対する行動であり、その結果価格が決定することを理解させる。	【思考・判断】 需要曲線・供給曲線の意味を適切な方法で考察することができる。 (ワークシート・定期考査) 【資料活用の技能・表現】 需要曲線・供給曲線の意味を適切に説明することができる。 (ワークシート・定期考査)
まとめ (10分)	・価格変動は需要者と供給者の行動により生じることを理解する。	・ワークシート内の問題に実際の数字を記入させることで、グラフの意味を理解させる。	・数字が入らない生徒に対しては、需要者・供給者各々の立場になって考えさせる。	【知識・理解】 価格変動の仕組みを知識として身に付けている。 (定期考査)

7 単元全体の学習の経過

本単元では、市場機構の仕組みを理解することで、現代の資本主義経済の基本的な構造を考察していく。また、経済の動きによって社会全体に様々な影響があることを実感することをねらいとして本単元を設定した。

本単元は「市場機構」の理解を土台に、「寡占・独占」や「インフレ・デフレ」などの経済用語の意味を身に付けさせたい単元であり、そのためには「需要曲線・供給曲線のグラフ」を理解することが重要となる。

この時に本校生徒を指導する上で、気を付けなければならないのが「これは単なる数学のグラフではない」ということに気づかせることである。本校生徒は数学を苦手とする者が多い上に、この授業自体がいわゆる「文科系進学希望者」を中心とした選択授業なので、数学を得意とする生徒はあまり多くない。そこで、身近な購買・販売の現象から、このグラフは「人間の心理をグラフに置き換えたものである」という点に理解の中心を転化し、まずは数学アレルギー・グラフアレルギーを排除しつつ授業を進めていった。この点が解決できれば、グラフの理解が進むようになる。

なお、グラフの理解が進まない生徒(C段階の生徒)に対しては、ワークシートの作業の時間を多めにとることで理解を深めさせ、理解の進んでいる生徒(A段階の生徒)に対しては、板書による「応用問題」等に取り組ませた。グラフの理解が進めば、他の経済用語はグラフ内で説明可能なので、単元全体としては進みやすくなる。

以上のことから、指導する側としては基本的なワークシートの作成(全体向け)と応用問題の作成(A段階用)に十分配慮した。

8 本時の様子

本時では「需要曲線・供給曲線のシフト」までを範囲としたが、時間的に無理があった。やはり、本校の生徒に対しては、「需要曲線・供給曲線の意味の理解」に絞って時間をかけて授業を行うべきであった。需給曲線のグラフがこの単元全体の土台となる部分なので、シフトの部分は次回の内容とすれば両方の内容を理解する生徒の率が上がったと思われる。

9 単元の観点別評価の総括

(1) 関心・意欲・態度

①市場機構全体の理解の土台となるのは、「需要曲線供給曲線のグラフ」に対する理解である。

このとき重要なのは、グラフに対するアレルギーをなくすことである。このアレルギーをなくすことが関心・意欲の向上につながるので、この部分の導入に気を配ることが大切である。

②そのためには、ノートまたはワークシートの作成に注意し、グラフを分解して段階的に理解させるようにし、関心・意欲を向上させる。

③一見難しく見える単元なので、この観点による導入が非常に大切となる。

ワークシートの記入・提出状況によって評価した結果、生徒11名に対して、A段階が3名、B段階が8名、そしてC段階が0名という状況であった。

(2) 思考・判断

①グラフの意味が理解できるか否かを見るため、ノートまたはワークシートで基本的設問を設定し、それに取り組ませることで生徒の思考・判断の度合いを確認する。

②この基本的設問で時間がかかる生徒に対しては、こちら側から積極的に声をかけ、ヒントを与え、理解を進ませる。

ワークシート2の需要曲線・供給曲線の考察と3時間目に行った市場の失敗に関する考察及び定期考査で評価した結果、生徒11名に対して、A段階が1名、B段階が8名、そしてC段階が2

名という状況であった。

(3) 資料活用の技能・表現

ノートまたはワークシートにおける基本的部分(ワークシート1)の記入ができていないか、応用問題(ワークシート2)に対応できているどうかで評価した。

生徒11名に対して、A段階が1名、B段階が7名、そしてC段階が3名という状況であった。

(4) 知識・理解

①まず小テストを行い、その結果を見た上で判断したかったが、今回は実際には小テストを行っていない。本来はその作業が必要であると思う。

②理解の深まらない生徒に対しては、基本的なワークシート等を「課題」として別に取り組みさせることで理解を深めさせ、その上で定期考査を行うことで知識・理解が身に付くと考える。

本単元での「知識・理解」を総括した結果は、生徒11名に対して、A段階が2名、B段階が8名、そしてC段階が1名という状況であった。

10 今後の課題

「生徒一人ひとりの取組をよく見る」ことを考えると、各学校の実情に応じた評価規準を定めることが大切であると感じた。またこの規準をどのように解釈し、学習指導を進めるのかということについて、担当者間の共通理解が不可欠だと思う。各校生徒の実態をいかに把握するかが重要となり、その具体的な把握は各教科担当ごとに行うのではなく、学校全体で行うべきである。

実際に本時の「ワークシート」における感想によると、「ワークシートの方が理解しやすいタイプ」と「ノートの方が理解しやすいタイプ」が混在している。今回「ワークシート」を作成したのは観点別評価のための工夫の一つなのだが、本校の生徒の感想から考えると「ノートの方が理解しやすいタイプ」が多いため、本校では「ノート」中心の方がよいことになる。しかし、生徒自身が書いているように「ノートだと時間がかかる」わけであり、そうなればこちらも授業全体のスピードを落とさざるを得ない。授業の進度と生徒の理解のバランスが悪いのは問題であり、生徒達にとっては非常に苦痛となると思われる。

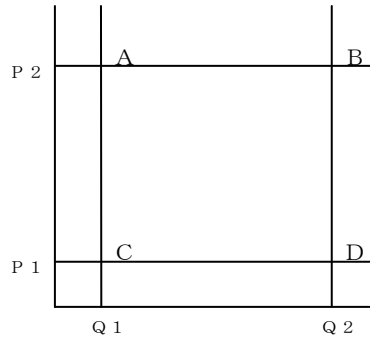
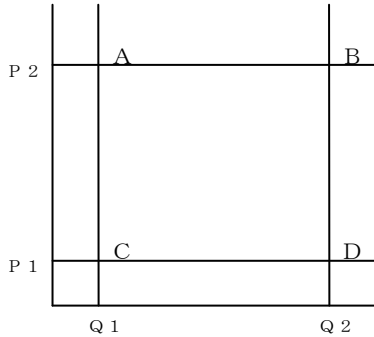
このことから、今後の課題は以下ようになる。

- ①各校における、生徒の実態把握の具体的作業
- ②これを反映した評価規準の作成
- ③評価規準を実現するための学習指導法の工夫

今回この研究を行うことで、授業そのものや生徒へのアプローチ等を今までとは違う面から考える機会を得たことは、大変よい勉強になった。今後もこの経験を授業等に十分反映したいと思う。

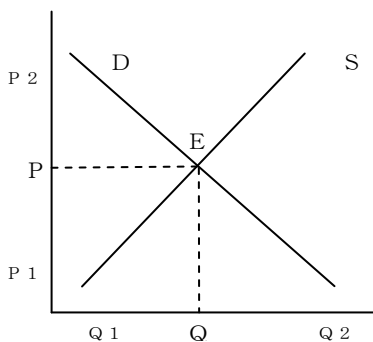
【ワークシート1】

* 価格機構その1 (線を引いてみましょう)



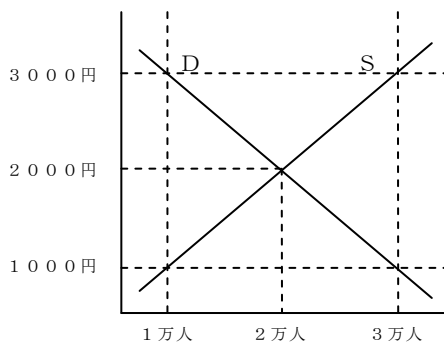
- * D 曲線の動き = 消費者の動向
- ① P 1 (低価格) の場合、消費者の数は _____ (多数) となる → 点 _____
 - ② P 2 (高価格) の場合、消費者の数は _____ (少数) となる → 点 _____
 - ③ この点 _____ と点 _____ を結んだ線が「D 曲線」つまり「消費者の動向」となる

- * S 曲線の動き = 生産者の動向
- ① P 1 (低価格) の場合、生産者の数は _____ (少数) となる → 点 _____
 - ② P 2 (高価格) の場合、生産者の数は _____ (多数) となる → 点 _____
 - ③ この点 _____ と点 _____ を結んだ線が「S 曲線」つまり「生産者の動向」となる



- * D S 曲線の動き (合体)
- ① 分解して理解した D 曲線と S 曲線を合体するとこのような図になる
 - ② 交点 E に対応する P が「均衡価格」交点 E に対応する Q が「均衡需給量」
 - ③ このように、需要と供給の関係により価格と需給量は「自然に」決定する
 - ④ 神の見えざる手 → _____

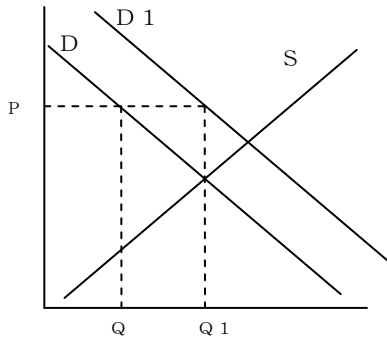
【ワークシート2】



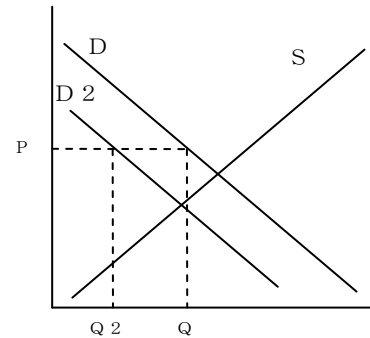
- 1 : 価格が 3 0 0 0 円の時
- ① 需要者の数 = _____
 - ② 供給者の数 = _____
 - ③ 超過 _____ → _____ - _____ = _____
- 2 : 価格が 1 0 0 0 円の時
- ① 需要者の数 = _____
 - ② 供給者の数 = _____
 - ③ 超過 _____ → _____ - _____ = _____
- 3 : 価格が 2 0 0 0 円の時
- ① 需要者の数 = 2 万人
 - ② 供給者の数 = 2 万人
 - ③ 均衡点 → 2 万人 - 2 万人 = 0

【ワークシート3】 DS曲線のシフトについて

* 需要 (D) 曲線のシフト (移動)



* D 曲線の「右上方」へのシフト



* D 曲線の「左下方」へのシフト

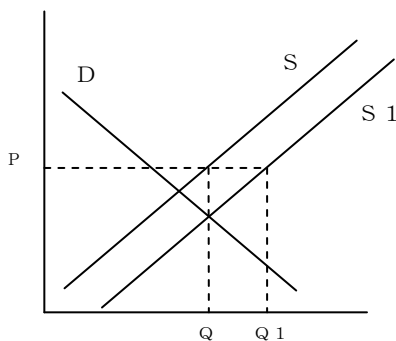
* D 曲線の右上方 (D 1) へのシフト

- ① 価格 P の時、D 曲線よりも D 1 曲線の方が需要量が () 分、多くなっている
- ② つまり、右上方 (D 1) へシフトするということは「需要量が _____ すること」を意味する
- ③ よって「需要量が _____」した原因を考える
 - a) 所得水準の上昇、b) 可処分所得の増加 (減税)、c) 嗜好・選好の増大 (人気商品)
 - d) 代替財の価格上昇、e) 補完財の価格低下

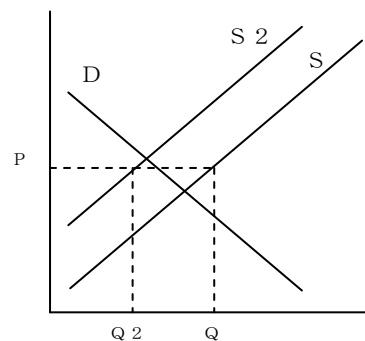
* D 曲線の左下方 (D 2) へのシフト

- ① 価格 P の時、D 曲線よりも D 2 曲線の方が需要量が () 分、少なくなっている
- ② つまり、左下方 (D 2) へシフトするということは「需要量が _____ すること」を意味する
- ③ よって「需要量が _____」した原因を考える
 - a) 所得水準の低下、b) 可処分所得の現象 (増税)、c) 嗜好・選好の低下 (不人気商品)
 - d) 代替財の価格低下、e) 補完財の価格上昇

* 供給 (S) 曲線のシフト (移動)



* S 曲線の「右下方」へのシフト



* S 曲線の「左上方」へのシフト

* S 曲線の右下方 (S 1) へのシフト

- ① 価格 P の時、S 曲線よりも S 1 曲線の方が供給量が () 分、多くなっている
- ② つまり、右下方 (S 1) へシフトするということは「供給量が _____ すること」を意味する
- ③ よって「供給量が _____」した原因を考える
 - a) 技術革新の増大、b) 原材料価格の (労賃) の低下、c) 農作物の豊作 (天候良好)
 - d) 間接税の減税 (廃止)、e) 補助金の交付 (増加)

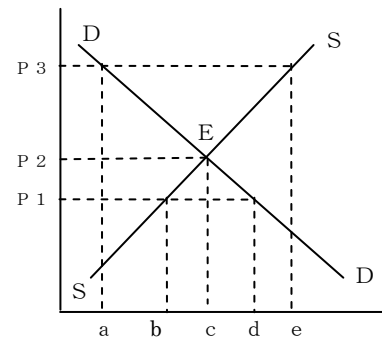
* S 曲線の左上方 (S 2) へのシフト

- ① 価格 P の時、S 曲線よりも S 2 曲線の方が供給量が () 分、少なくなっている
 ② つまり、左上方 (S 2) へシフトするということは「供給量が _____ すること」を意味する
 ③ よって「供給量が _____」した原因を考える
 a) 生産性の低下、b) 原材料価格の(労賃)の上昇、c) 農作物の不作(天候不順)
 d) 間接税の増税(導入)、e) 補助金の廃止(減少)

【定期考査】

* 次の文章を読んで各問に答えなさい。

右の図は、生産物市場における取引量と取引価格の関係を表したものである。ここでは、競争原理が十分に働いている(1)市場を想定している。さて図中の DD 曲線は(2)の傾向を、SS 曲線は(3)の傾向を表している。例えば、価格が(4)の時は市場への商品の供給は不足し、(5)の分だけ(6)が発生する。この場合は、価格は次第に押し上げられることになる。一方、価格が(7)の時は市場への商品の供給は過剰となり(8)の分だけ(9)が発生するため、価格は押し下げられことになる。このように④価格は市場での需給関係を反映しながら上下に変動するが、最終的には需要量と供給量が一致するところに落ち着くことになる。この時の価格を(10)価格といい、図中の(11)がそれに当たる。



問1 文中の空欄(1)～(11)に適する語句を記号で答えなさい。

- あ：a b い：a c う：a d え：a e お：b c か：b d き：b e く：c d
 け：c e こ：d e さ：P 1 し：P 2 す：P 3 せ：超過損益 そ：卸売
 た：均衡 ち：完全競争 つ：買い手 て：超過需要 と：不完全競争 な：超過供給
 に：仲買 ん：不均衡 ね：超過利潤 の：売り手

問2 下線部④：このことを何というか答えなさい。

問3 需要・供給曲線は、様々な原因でシフト(移動)する事がある。では、下記の選択肢「あ～し」が原因となる場合、需要・供給曲線はどのようにシフトするのかを、1～4の中から選び、番号で答えなさい。

* 原因となる選択肢

- あ：不人気商品、い：技術革新の増大、う：原材料価格の低下、え：減税、
 お：農作物の不作 か：所得水準の上昇 き：農作物の豊作 く：増税 け：生産性の低下
 こ：原材料価格の上昇 さ：人気商品 し：所得水準の低下

※シフトする状態

- 1：S 曲線が右下方へシフトする 2：S 曲線が左上方へシフトする
 3：D 曲線が右上方へシフトする 4：D 曲線が左下方へシフトする

数 学

1 教科目標

数学における基本的な概念や原理・法則の理解を深め、事象を数学的に考察し処理する能力を高め、数学的活動を通して創造性の基礎を培うとともに、数学的な見方や考え方のよさを認識し、それらを積極的に活用する態度を育てる。

2 評価の観点及びその趣旨

関心・意欲・態度	数学的な見方や考え方	表現・処理	知識・理解
数学的活動を通して、数学の論理や体系に関心をもつとともに、数学的な見方や考え方のよさを認識し、それらを事象の考察に積極的に活用しようとする。	数学的活動を通して、数学的な見方や考え方を身に付け、事象を数学にとらえ、論理的に考えるとともに思考の過程を振り返り多面的・発展的に考える。	事象を数学的に考察し、表現し処理する仕方や推論の方法を身に付け、よりよく問題を解決する。	数学における基本的な概念、原理・法則、用語・記号などを理解し、知識を身に付けている。

3 数学科における評価の留意点

(1) 評価の観点と教科目標の関連

数学科の教科目標は5つの部分に分けることができ、これを評価の観点から捉えてみると、以下のようになっている。

数学における基本的な概念や原理・法則や理解を深め	↔	知識・理解
事象を数学的に考察し処理する能力を高め	↔	数学的な見方や考え方 表現・処理
数学的活動を通して創造性の基礎を培う	↔	数学的な見方や考え方
数学的な見方や考え方のよさを認識し	↔	関心・意欲・態度
それらを積極的に活用する態度を育てる	↔	関心・意欲・態度

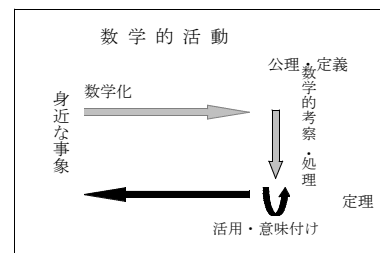
このように、教科目標と評価の観点は、ほぼ対になって構成されている。したがって、教科目標と評価の観点は、互いに関連しあって数学の学習活動を支えるものであるから、4つの観点は、それぞれ独立したものとして捉えるのではなく、相互に補完的な働きをしながら総合的に学力を形成するものとして捉えることが大切である。また、教科目標を達成していくために、それぞれの評価結果を次の学習指導の改善に生かせるよう、指導に生かす評価を充実させることが重要である。

(2) 数学的活動の充実

基本的には従前の目標を踏襲しているが、今回の改善では、「数学的活動を通して創造性の基礎を培う」という文言が新たに加えられた。小・中学校の教科目標では、この部分に当たるものとして、それぞれ「(算数的な)活動の楽しさ(に気づき)」、「数学的な活動の楽しさ(を知り)」と示されていて、各学校段階における児童・生徒の発達段階を考慮したものになっている。

数学的活動については、観察、操作、実験などの外的活動と直観、類推、帰納、演繹などの内的

活動に分けられることが多い。さらに、高等学校では、右図のような思考活動も数学的活動と捉え、「楽しさ」とどまることなく、数学的活動を通して、数学への興味・関心を一層喚起するとともに、論理的思考力、想像力及び直観力などの創造性の基礎を培うことを目指している。無論、2つの評価の観点「関心・意欲・態度」「数学的な見方や考え方」の趣旨の冒頭にも「数学的活動を通して」という文言が加えられていることからわかるように、教員主体の一方向的に知識を教え込みがちな授業スタイルばかりでなく、得た知識を数学的に活用できるようにすることを重視した、「数学的活動」を取り入れた生徒主体の授業づくりも求められているのである。一般に、高等学校の数学では、内容に較べ時間的に余裕がないことから、生徒に効率よく教えなければいけない事情もあるので、当初は、意識的に指導計画の中に数学的活動の場を設定することも必要であると考えられる。



高等学校学習指導要領解説数学編より

一般に、高等学校の数学では、内容に較べ時間的に余裕がないことから、生徒に効率よく教えなければいけない事情もあるので、当初は、意識的に指導計画の中に数学的活動の場を設定することも必要であると考えられる。

(3) テスト問題の工夫・改善

従前はテスト問題の作成に当たって、4観点を意識することなく作問されていたと思われるが、これからは設問のねらいを明確にし、「目標に準拠した問題になっているか」「各問題がどの観点到に相当するのか」等を意識して作問を行うことが大切である。その際、問題に観点を記して生徒に示す配慮も望まれる。しかし、現実問題として、「数学的な見方や考え方」「表現・処理」「知識・理解」の3観点が密接に関連しあって棲み分けが難しいこともある。そのときは、各観点において設定した評価規準に照らし、自らの指導過程を振り返るとともに、指導の重点の置き方を鑑みて1観点到に絞ってもよいだろうし、あるいは小問に分けて出題するなどの工夫をしたい。

また、数学という教科の特性から、「表現・処理」「知識・理解」の観点是、比較的ペーパーテストを通して評価しやすい面があるが、作問を工夫することで、形として表れにくい要素を持ち合わせている「数学的な見方や考え方」「関心・意欲・態度」も出題していく必要があると考える。特に、「関心・意欲・態度」という情意的側面に関わる問題も工夫して出題していきたい。

実施時期としては、定期考査の他に内容のまとまりあるいは単元ごとにテストを実施することが考えられる。目標に照らして、生徒にどんな力がどの程度身に付いているかを適切に評価できる作問を心がけ、その後の指導に生かすとともに、生徒の学習改善にも役立たせることが大切である。今回の事例でも、単元末テストを実施して、観点到別の総括に活用するとともに、生徒の学習改善・教員の指導改善に役立てている。視点的の置き方としては、単元末テストでは、「これだけはわかってほしい」という基本的な内容を中心とした出題をし、定期考査では、生徒の実態を考慮して、応用発展的な問題を出題するなどの工夫も必要であると思われる。

(4) これからの評価の改善に向けて

高等学校においては、従前より目標に準拠した評価（いわゆる絶対評価）であったが、実態は相対評価に近いものがあり、本来の目標に準拠した評価にはなっていないと思われる。目標に準拠した評価を適切に行うためには、先ず第一に、予め生徒に評価規準などを提示する必要がある。今回の実践では、提示していないが、事前に生徒に示すことで、その単元の到達目標を明らかにし、生徒にはっきりとした目標をもたせることが、信頼性・客観性の面からも大切であり、生徒の学習意欲の向上にも繋がると考える。また、一度作成した評価規準は不変的なものではなく、信頼性を高めるためにも絶えず見直すことを心がけ、継続的に修正・改善をしていくことが必要である。

参考文献

文部省 平成11年 『高等学校学習指導要領解説 数学編 理数編』

実践事例 1 数学 I 「2次関数」

1 実践期間 平成15年11月 1日～11月20日

2 単元名 (学年) 2次関数とグラフ (1年)

3 単元の目標

- (1) 2つの数量の変化や対応の様子を通して、関数の定義、定義域、値域について理解する。
- (2) 関数の値の変化は、グラフを用いるとわかりやすいことを理解する。
- (3) $y=ax^2$ のグラフをもとに、平行移動を利用して、 $y=ax^2+bx+c$ のグラフをかくことができる。
- (4) グラフに関する条件から、その2次関数を決定することができる。

4 単元の指導計画 (11時間扱い)

第1次 関数 (1時間)

- ①関数のグラフ、関数の定義域・値域

第2次 2次関数とそのグラフ (6時間)

- ②③④ $y=ax^2$, $y=ax^2+q$, $y=a(x-p)^2$, $y=a(x-p)^2+q$ のグラフ

- ⑤⑥⑦ $y=ax^2+bx+c$ のグラフ、グラフの平行移動

第3次 2次関数の決定 (3時間)

- ⑧連立3元1次方程式

- ⑨⑩グラフに関する条件からの2次関数の決定

第4次 単元末テスト (1時間)

- ⑪定着度の状況の確認

5 単元の評価計画

(1) 評価規準

関心・意欲・態度	数学的な見方や考え方	表現・処理	知識・理解
<ul style="list-style-type: none"> ・関数とそのグラフに関心をもち、実生活の中に関数を見いだそうとする。 ・2次関数のグラフに関心をもち、関数を用いて数量の変化を表現することの有用性を認識し、それを活用しようとする。 ・与えられたグラフに関する条件から2次関数を決定しようとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・関数の概念を理解し、グラフをかくことの意義がわかる。 ・一般の関数 $y=f(x)$ における平行移動の仕組みを考察することができる。 ・2次関数を決定するのに必要なグラフに関する条件を考察することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・1次関数のグラフをかき、定義域から値域を求めることができる。 ・2次関数の式を標準形に変形し、そのグラフをかくことができる。 ・与えられたグラフに関する条件から2次関数を決定することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・関数の定義、$y=f(x)$ の記号の意味を理解している。 ・定義域・値域の意味を理解している。 ・$y=ax^2+bx+c$ のグラフは、$y=ax^2$ のグラフを平行移動したものであることを理解している。 ・a の値によって、放物線の概形が変化することを理解している。 ・2次関数を決定するための条件について理解している。

(2) 評価計画 ※太枠内が本時 【 】は評価方法

時	学習内容	評 価 項 目			
		関心・意欲・態度	見方や考え方	表現・処理	知識・理解
1	関数、定義域、 値域の意味を理解する。	実生活の中にある関数を見いだそうとする。 【観察・ワークシート】	2つの数量関係の変化や対応の様子を考察することができる。 【ワークシート】	1次関数のグラフをかき、定義域から値域を求めることができる。 【小テスト①】	$y=f(x)$ の記号の意味、定義域と値域の意味を理解している。 【小テスト①】
2 3 4	2次関数の定義を理解する。 ・平行移動について理解する。 ・ $y=ax^2$, ・ $y=ax^2+q$, ・ $y=a(x-p)^2$, ・ $y=a(x-p)^2+q$ のグラフをかく。	2つの数量の変化を関数を用いて表すことの有用性を認識しようとする。 【観察・ワークシート】	数量の変化をグラフを用いて考察することができる。 平行移動の仕組みを考察することができる。 【ワークシート】	$y=a(x-p)^2+q$ で表された2次関数をもとに、頂点、軸を求めることができる。 【小テスト②】	$y=ax^2+bx+c$ のグラフは、 $y=ax^2$ のグラフを平行移動したものであることを理解している。 【小テスト②】
5 6 7	$y=ax^2+bx+c$ を $y=a(x-p)^2+q$ の形に変形し、頂点、軸を求め、 ・グラフをかく。 ・ある2次関数のグラフは、他の2次関数のグラフをどのように平行移動したものかを考える。	ある2次関数のグラフは、他の2次関数のグラフをどのように平行移動したものかを考えようとする。 【観察・ワークシート】	$y=f(x)$ において、 x を $x-p$ 、 y を $y-q$ と置き換えると、どのような平行移動になるかを考察することができる。 【レポート】	$y=ax^2+bx+c$ を $y=a(x-p)^2+q$ の形に変形し、そのグラフをかくことができる。 【小テスト③】	2つの2次関数のグラフの頂点を比較することにより、どのように平行移動したかを理解している。 【観察】
8	連立3元1次方程式を解く。	連立3元1次方程式を解こうとする。 【観察】		連立3元1次方程式を解くことができる。 【小テスト④】	
9 10	与えられた条件を満たす放物線をグラフとする ・2次関数を決定する。	与えられたグラフに関する条件から2次関数を決定しようとする。 【観察・ワークシート】	2次関数を決定するのに必要なグラフに関する条件を考察することができる。 【観察・ワークシート】	与えられたグラフに関する条件から2次関数を決定することができる。 【ワークシート】	2次関数を決定するための条件を理解している。 【ワークシート・小テスト⑤】
11	単元末テスト	単元内容の定着度を調べる。			

(3) 観点別評価について

【関心・意欲・態度】

学習活動における具体的評価規準	<ul style="list-style-type: none"> ・実生活の中にある関数を見いだそうとする。 ・与えられたグラフに関する条件から2次関数を決定しようとする。
-----------------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	<ul style="list-style-type: none"> ・実生活の中にある関数を探し、積極的に発言・発表したりする。 ・与えられたグラフに関する条件をもとに、主体的に2次関数を決定しようとしている。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	<ul style="list-style-type: none"> ・身近な話題を提供し、考えるように促す。 ・与えられたグラフの条件から、グラフの概形をかかせる。

【数学的な見方や考え方】

学習活動における具体的評価規準	<ul style="list-style-type: none"> ・平行移動の仕組みを考察することができる。 ・2次関数を決定するのに必要なグラフに関する条件を考察することができる。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	<ul style="list-style-type: none"> ・$y=f(x)$のグラフをx軸方向にp、y軸方向にqだけ平行移動すると、$y-q=f(x-p)$のグラフになることがわかる。 ・2次関数を決定できる条件をきちんと説明することができる。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	<ul style="list-style-type: none"> ・グラフ上の1点がどのような平行移動をしたかを考えさせる。 ・実際に、グラフの概形をかかせて、グラフが1通りになるかどうかを考えさせる。

【表現・処理】

学習活動における具体的評価規準	<ul style="list-style-type: none"> ・1次関数のグラフをかき、定義域から値域を求めることができる。 ・$y=ax^2+bx+c$を$y=a(x-p)^2+q$の形に変形し、そのグラフをかくことができる。 ・与えられたグラフに関する条件から2次関数を決定することができる。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	<ul style="list-style-type: none"> ・関数の定義域が開区間であっても、その値域を求めることができる。 ・aがどんな値であっても、$y=ax^2+bx+c$を$y=a(x-p)^2+q$の形に速やかに手際よく変形することができ、そのグラフをかくことができる。 ・条件から求める2次関数を$y=ax^2+bx+c$や$y=a(x-p)^2+q$などと適切に設定し、2次関数を決定することができる。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	<ul style="list-style-type: none"> ・1次関数のグラフをかき、それを利用して値域を示す。 ・式変形の進め方をわかり易く説明する。 ・条件は頂点等の有無により場合分けができ、最終的に連立方程式となることを理解させる。

【知識・理解】

学習活動における具体的評価規準	<ul style="list-style-type: none"> ・関数の定義域と値域の意味を理解している。 ・$y=ax^2+bx+c$のグラフは、$y=ax^2$のグラフを平行移動したものであることを理解している。 ・2次関数を決定するためのグラフに関する条件を理解している。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	<ul style="list-style-type: none"> ・$y=ax+b$や$y=ax^2$のグラフがかけ、定義域とそれに対応する値域について理解している。 ・$y=a(x-p)^2+q$のグラフは、$y=ax^2$のグラフをx軸方向にp、y軸方向にqだけ平行移動したものであるということを理解している。 ・3点、頂点と他の1点、軸と2点、x軸との共有点と他の1点など2次関数を決定できるグラフに関する条件をすべて理解している。

「努力を要する」状況 (C)と評価した生徒へ の手だて	<ul style="list-style-type: none"> ・グラフを用いて定義域と値域を説明する。 ・頂点に注目させ、頂点の平行移動を考えさせる。 ・具体的にグラフをかき、2次関数が1つ決まることを理解させる。
-----------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

6 本時の展開

(1) 本時の目標

2次関数のグラフに関するいくつかの条件によって、2次関数が決定できることを理解する。

(2) 本時の指導過程

過程	学 習 活 動	指 導 内 容	指 導 上 の 留 意 点	評 価 観 点 (方 法)
導入 (20分)	ワークシート4で、[1]の2次関数の具体例を考える。 [2]の2次関数を決定するための必要な条件を考える。 [3]を考える。	生徒が挙げる例を受けて、パラボラアンテナなどの身近な話をする。 2次関数を表す2つの式の形を示す。	頂点に関する条件の有無で、2次関数の式の置き方が分かれることを気づかせる。	【見方や考え方】 2次関数を決定するのに必要なグラフに関する条件を考察することができる。 (観察・ワークシート)
展開 (75分)	ワークシート5 [1]を考える。 [2]を解く。 頂点が点(1,-3)で点(-1,5)を通る放物線をグラフとする2次関数を求めよ。 ワークシート6 [1]を考える。 [2]を解く。 軸が $x=-2$ で2点(-3,2), (0,-1)を通る放物線をグラフとする2次関数を求めよ。 ワークシート7 [1]を考える。 [2]を解く。 3点(1,6), (-2,-9), (4,3)を通る放物線をグラフとする2次関数を求めよ。 演習問題を行う。	2次関数を決定できる条件を考えさせる。 求める関数を $y=a(x-p)^2+q$ とおくことを理解させる。 2次関数を決定できる条件を考えさせる。 求める関数を $y=a(x-p)^2+q$ とおくことを理解させる。 2次関数を決定できる条件を考えさせる。 求める関数を $y=ax^2+bx+c$ とおくことを理解させる。	連立3元1次方程式の解法では、先ず c を消去するように促す。 机間指導をしながら、	【関心・意欲・態度】 与えられたグラフに関する条件から2次関数を決定しようとする。 (観察・ワークシート) 【表現・処理】 与えられたグラフに関する条件から2次関数を決定することができる。 (観察・ワークシート) 【知識・理解】 2次関数を決定する

	小テスト⑤を行う。		適切に2次関数を表す式の形を選択できているか注意を払う。	ための条件を理解している。 (ワークシート・小テスト)
まとめ (5分)	本時の学習内容を確認する。	2次関数の決定条件について確認する。		

7 単元全体の学習の経過

今までの授業を振り返ってみても、小テストや単元末テストを通して生徒の理解度を確認するということは行っていたが、その中味については、「表現・処理」や「知識・理解」の観点の評価に偏っていたと思われる。そこで、今回は、旧来の授業に加えて、関心・意欲を高めて、数学的な見方や考え方を育成するという視点を強く意識して授業を実施してみた。

具体的には単元を通してワークシートで授業を進めた。ワークシートの冒頭では、関心・意欲を高めるために、身近な話題や具体的なことを扱うようにした。例えば、関数の具体例を考えさせる場面では、いろいろな例が取りあげられ興味深かった。「車の速度と走行距離」や「一つの薬品と他の薬品を反応させてできる化学物質の量」などはある程度予想できたが、「年齢と体力の関係」や「時間帯とアルバイトの賃金の関係」の実生活に即した例などは全く予想外であった。一方、2次関数の具体例を考えさせる場面では、ほとんどの生徒がボールを投げたときの軌跡をあげ、他の例があまりあがらなかった。これは、かつて授業の中で生徒に平行四辺形をかかせたときに、全員が横長の平行四辺形をかき、縦長の平行四辺形をかいた生徒は一人もいなかったケースを思い出させた。小・中学校段階で、意識無意識にかかわらず、一つのケースのみを強調して教えすぎると、他の正解のケースを受け入れにくくなる典型的な例と思われた。数学的な見方や考え方を育成するためにも、授業において、生徒の様々な考え方を発表する場面が必要だと強く感じた。

さて、薬品と薬品の反応の関係の例があがったときに、「ある一定量の薬品Aのはいったビーカーに薬品Bを入れ続けた時、薬品Bと反応によってできる薬品Cの量の関係をグラフにせよ」という質問をした。ほとんどの生徒が1次関数の右肩上がりの直線をかいたが、3名の生徒が右肩上がりの直線からx軸に平行な直線へ繋がるグラフをかいていた。これが正解なのだが、正解であれ不正解であれ、自分で考えてグラフにかくということは関数の理解に役立つことが、その後に行った小テストの定義域や値域の問題の正解率の高さからも窺われた。やはり興味・関心を高めるような授業展開の大切さを今更ながら再認識させられた。

ワークシートについては、授業終了後に回収し、点検、採点、評価を行った。そのため生徒の学習状況の把握が適切にでき、次時の授業で、特につまずきの見られる生徒には指導を試みたが、個々の理解度が違うのでうまくいかず、結局放課後に補習を行った。

また、小テストを5回ほど実施し、最後に単元末テストを行い生徒の理解度を確認した。今回は観点別ということで1問1観点で出題したが、教科の特性から1問1観点という出題形式には無理があるように感じた。むしろ、1つの問題を2、3の小問に分け、その中で観点別の評価をした方がよかったと思う。

8 本時の様子（2時間予定の内の1時間目）

ワークシート4 [1] [2] を利用しながら、パラボラアンテナ、車のヘッドライト、虫眼鏡など放物線の焦点を利用した身近な題材から2次関数の導入を行った。物理の授業を思わせたが生徒は関心をもって聞いていた。続いて [3] で、2次関数を決定するときに必要なものと考えさせたとき、下に凸か上に凸かを挙げる生徒が数名おり、2次関数を絞り込むことはできるが決定条件としては不十分であるという説明をした。

続いてワークシート5・6の2次関数の決定条件について、考えさせたところで授業が終了した。ワークシート5の頂点の座標が与えられたときの2次関数の決定については、生徒は比較的容易に進めていた。しかし、ワークシート6の軸の方程式が与えられたときには、ワークシート5とは対照的につまずく生徒が多かったため、後日の授業で軸と頂点についてもう一度説明を行った。それまでの授業で軸についてはあまり触れてこなかったことが原因と思われるが、ワークシートを回収し、点検したところ、立式の段階でつまずいていることが分析できた。ワークシートの利点を上手に活用できたように思う。

9 単元の観点別評価の総括

(1) 関心・意欲・態度

この観点の主な評価方法は、ワークシートの記述内容とし、それに行動観察及び単元末テストの結果を加味した。ワークシートでは、生徒の興味・関心を高めるために冒頭の設問に工夫を凝らし、それにより評価した。中には抽象的な設問もあったが、導入にかなりの時間を割いて生徒に取り組みさせたので、ほとんど全員がよく記述していた。このことが、小テストや単元末テストの他の観点の問題のでき具合に影響を与えたかどうかはわからないが、学習意欲の向上には繋がったと判断できる。また、単元末テストでは、この観点を評価するために授業で扱ったものを1題出題した。行動観察では、机間指導をしながら、取組状況や発言など特に目立った生徒を記録に残すように努めた。評価結果は以下の通りである。

A・・・34名 B・・・6名 C・・・0名

(2) 数学的な見方や考え方

この観点の評価方法は、ワークシートと単元末テストを併用した。当初の評価計画では、レポートを課して、評価資料に加えるつもりであったが、取りやめにした。ワークシートの点検の結果、生徒にとって、具体的な点の平行移動は苦にならないようだが、一般的な点の平行移動は難しいことがわかり、後日の授業で丁寧に説明を仕直した。単元末テストでこの部分を出題したところ正答率は8割であった。また、生徒は正答が1つだけという先入観があるようで、その後の思考を停止させてしまう傾向もみられ、質問の仕方として正答を複数用意した出題も検討する必要があると思った。評価結果は以下の通りである。

A・・・15名 B・・・20名 C・・・5名

(3) 表現・処理

評価方法は、ワークシートと小テスト・単元末テストを併用して行った。この観点の評価方法として、ペーパーテストは、生徒の表現や処理の習熟を適切に見取ることができるため有効であるといえる。小テストの結果、連立3元1次方程式や2次関数の決定においては立式ができて解けない生徒が2割程度おり、その後の演習のときに机間指導で対応したがその程度では間に合わず、問題演習を行う時間の確保の必要性を感じた。評価結果は以下の通りである。

A・・・16名 B・・・21名 C・・・3名

(4) 知識・理解

評価方法は、ワークシートと小テスト・単元末テストを併用して行った。この観点も表現・処理と同様に、評価方法として、ペーパーテストが有効であるといえる。先にも述べたが、軸の方程式が与えられたときの2次関数の決定については、理解がやや低かったため、軸と頂点について次の授業でもう一度説明をした。その後の小テストでは、ほぼ全員ができていた。また、連立3元1次方程式では一文字消去を定数項で表された文字以外で行う生徒が数名見られたため、その後の演習のところで机間指導で対応した。この部分は、個人の理解度の差が大きいので、机間指導での個別

対応に加えて放課後等を利用した個別の補習が効果的であった。評価結果は以下の通りである。

A・・・14名 B・・・23名 C・・・3名

10 今後の課題

今日、理数離れや数学嫌いの子どもが多くなっている状況の中で、いかにして生徒にやる気をもたせるかということは重要なことである。数学に対する関心・意欲を高めるためには、学習のまよりの導入に関わるところが大切であると考え、旧来の授業では比較的軽く扱っていた部分に力を入れて指導した。こういう取組をすることで、数学嫌いの子どもたちを少しでも減らすことは可能になると実感した。導入の方法にはいろいろあると思うので、それらを比較研究していくことも大切であるとする。また、数学的な見方や考え方を育成することもより意識して授業に臨んだため、発問などにも気を配った。見方・考え方はその差が比較的是っきりであるケースが多いように思う。その差が誤答ではなく白紙という形ででてくるケースもあった。この部分は積み重ねによる影響が一番はっきりであるところのようである。なかなかこれといった解決方法がなく、やはり地道に基本的なことをじっくり考える中で育ってくるものと思われるが、ワークシートや小テストの中でよい見方や考え方を発見した場合にはそれを評価し、誉めたり励ましたりすることが重要ではないかと思う。

今回の実践では、予め評価規準等を生徒に公表しなかったため、依然として定期テストさえできればよいと考えている者が多く見受けられた。今後、この観点別評価を本格実施するときは、生徒に学習過程でも評価することを周知徹底する必要があると思われる。

<本時の授業で使用したワークシートの一部>

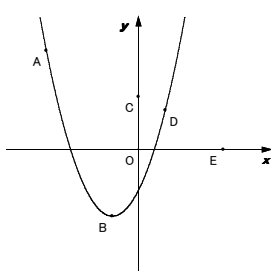
ワークシート 4

1年 組 番 名前

[1] 2次関数で表される現象の具体例を挙げなさい。

[2] [1] の軌跡を知るために必要なものを述べなさい。

[3] 下図の放物線を決定するとき、必要となりうる可能性のあるものを選びなさい。



- ① 点Aの座標
- ② 点Bの座標
- ③ 点Cの座標
- ④ 点Dの座標
- ⑤ 点Eの座標
- ⑥ 点Oの座標
- ⑦ 上に凸か下に凸か
- ⑧ 頂点が第3象限にある

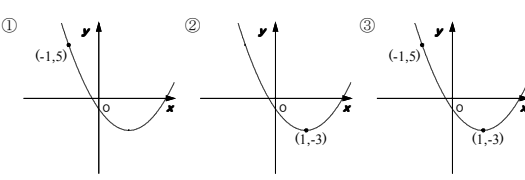
答え

正解

ワークシート 5

1年 組 番 名前

[1] 次のグラフと条件より、決定できる2次関数のグラフはどれか。



答え

正解

[2] [1] の答えである で具体的に考える。

求める2次関数を $y = \text{ }$ とする。

答え

正解

2次関数とグラフ 単元末テスト

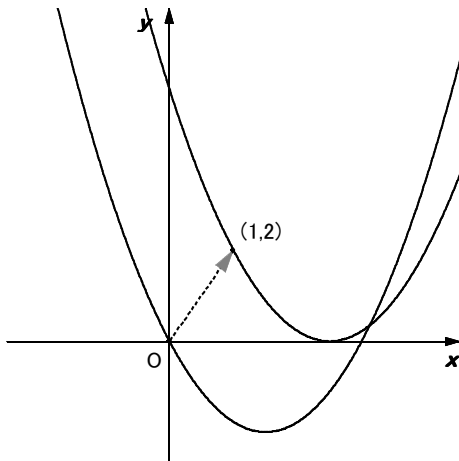
1年 組 番 名前

関心・意欲・態度 I 見方や考え方 II 表現・処理 III 知識・理解 IV

- ① 2次関数で表される現象の具体的な例を挙げなさい。 I
 ② $f(x)=3x+1$ のとき、 $f(3)$ の値を求めなさい。 IV
 ③ $-2 \leq x \leq 3$ のとき、 $y=-x+2$ の値域を求めなさい。 III
 ④ 次の対応表にもとづいてグラフの全体を想像してかきなさい。 II

x	1	2	3	4	5
y	-1	-4	-9	-16	-25

- ⑤ 放物線 $y=3(x-1)^2+3$ の頂点の座標と軸の方程式を求めなさい。 IV
 ⑥ $y=-(x+2)^2-2$ のグラフをかきなさい。 III
 ⑦ $y=x^2+4x-3$ を $y=a(x-p)^2+q$ の形に変形しなさい。 III
 ⑧ 下図は、ある2次関数のグラフの平行移動を示したものである。どのように平行移動したものか。 II



- ⑨ $y=-x^2+2$ のグラフを x 軸方向に4、 y 軸方向に-3だけ平行移動すると、どのような2次関数のグラフになるか求めなさい。 II
 ⑩ $y=2(x-1)^2-3$ のグラフを平行移動したところ $y=2(x+2)^2+1$ になった。どのように平行移動したものか。 IV
 ⑪ $y=ax^2+bx+c$ のグラフは点(1,3)を通る。定数 a, b, c の関係式を求めなさい。 II
 ⑫ 点(-1,2)を頂点とし、点(1,10)を通る放物線をグラフとする2次関数を求めなさい。 III
 ⑬ $y=ax^2+bx+c$ のグラフは点(1,6), (-1,2), (2,11)を通るといふ。定数 a, b, c の値を求めなさい。 III

実践事例2 数学Ⅱ 「図形と式」

1 実践期間 平成15年11月6日～11月14日

2 単元名(学年) 「円」(1年)

3 単元の目標

- (1) 円や直線を x, y の方程式で表す「解析幾何」の有用性を認識し、それを活用しようとする。
- (2) 円と直線の共有点の座標を求める計算処理から、円と直線の位置関係を調べる方法を数学的に考察し、適切に用いることができる。
- (3) 円の方程式を導く過程を理解し、円を決定する条件から円の方程式を求めることができる。また、円のグラフをかくことができる。
- (4) 円の方程式や円と直線の共有点を求める方法を理解する。

4 単元の指導計画(9時間扱い)

第1次 円の方程式(3時間)

①円の方程式 ②円の方程式の一般形 ③3点を通る円

第2次 円と直線(5時間)

④円と直線の共有点 ⑤円と直線の位置関係 ⑥円の接線の方程式
⑦2円の位置関係 ⑧2円の交点を通る円

第3次 単元末テスト(1時間)

⑨定着度の状況の確認

5 単元の評価計画

(1) 評価規準

関心・意欲・態度	数学的な見方や考え方	表現・処理	知識・理解
<ul style="list-style-type: none"> ・円の方程式を導く過程に関心をもつ。 ・円と直線の共有点を求める際に解析幾何の有用性を認識し、それを活用しようとする。 ・初等幾何の「方べきの定理」が解析幾何ではどのように表現できるか興味をもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・円の方程式を導く過程の数学的な考え方を考察することができる。 ・円と直線の位置関係を求める方法を論理的に考察することができる。 ・2曲線の交点を通る曲線(群)の方程式の意味を考察することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・円の決定条件より、円の方程式を求めることができる。 ・円と直線の共有点や位置関係を求めることができる。 ・円の接線の方程式を求めることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・円が中心の座標と半径から決定されることを理解している。 ・円と直線の共有点の座標は、連立方程式の解が実数である場合、求められることを理解している。 ・円の接線を求める公式の意味を理解している。

(2) 評価計画 ※太線枠が本時 【 】内は評価方法

時	学習内容	評価項目			
		関心・意欲・態度	見方や考え方	表現・処理	知識・理解
1	円の方程式を理解する。	円の方程式を導く過程に関心をもつ。			円が中心の座標と半径から決定できることを理解して

		【自己評価表・観察】			いる。 【自己評価表・単元末テスト】
2	円の方程式の一般形から、中心の座標と半径を求める。	円の方程式の一般形から中心の座標と半径を求めようとする。 【自己評価表・観察】		円の方程式の一般形から中心の座標と半径を求めることができる。 【単元末テスト・観察】	
3	3点を通る円の方程式を求めるとともに、外接円や外心の意味を知る。	同一直線上にない3点から円の方程式を求めようとする。 【自己評価表・観察】		同一直線上にない3点を通る円の方程式を求めることができる。 【単元末テスト・観察】	
4	円と直線の共有点の座標を求める。	初等幾何の「方べきの定理」が解析幾何ではどのように表現できるかを考えようとする。 【自己評価表・観察】	円と直線の共有点を求めることにより、数学Aで学んだ「方べきの定理」を確認することができる。 【レポート・観察】	円と直線の共有点の座標を連立方程式を解くことによって、求めることができる。 【単元末テスト・観察】	
5	円と直線の位置関係を考える。	円と直線の位置関係を考える際に、判別式や点と直線の距離が有効であることを認識し、それを活用しようとする。 【自己評価表・観察】	円と直線の位置関係を求める方法を、論理的に考察することができる。 【単元末テスト・観察】		円と直線の位置関係を調べる方法を理解している。 【自己評価表・単元末テスト】
6	円の接線の方程式を理解する。	円の接線を導く過程に関心をもつ。 【自己評価表・観察】	円の接線の公式を導く過程を考察することで、中心が原点以外の円の接線を求める方法が考察できる。【単元末テスト・レポート・観察】	円の接線の方程式の公式を適切に用いることができる。 【単元末テスト・観察】	
7	2円の位置関係を考える。	2円の位置関係を2円の半径と中心間の距離との関係から求められることに関心をもつ。 【自己評価表・観察】	2円の半径と中心間の距離との関係から2円の位置関係を考察することができる。 【単元末テスト・観察】		
8	2円の交点を通る円の方程式を考える。	2円の交点を通る円が、2円の交点を直接求めなくて		2円の交点を通る円や直線の方程式を求めることがで	2曲線の交点を通る曲線(群)の方程式の意味を理解し

		も求められること のよさに気づく。 【自己評価表・観察】	きる。 【単元末テスト・観察】	ている。 【自己評価表・単元末テスト】
9	単元末テスト			

(3) 観点別評価について

【関心・意欲・態度】

学習活動における具体 の評価規準	<ul style="list-style-type: none"> 円の方程式を導く過程に関心をもつ。 初等幾何の「方べきの定理」が、解析幾何ではどのように表現できるかを考えようとする。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	<ul style="list-style-type: none"> 円の中心の座標と半径より、円の方程式を見いだそうとしている。 図形を x、y の方程式で表すことの有用性を認識し、問題を解く際に活用しようとする。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	<ul style="list-style-type: none"> 円の方程式が今まで学習した直線や放物線の方程式とは異なり、陰関数表示することに注意し、そのことに関心をもつように指導する。 既習事項から、初等幾何と解析幾何の違いを考えさせる。

【数学的な見方や考え方】

学習活動における具体 の評価規準	<ul style="list-style-type: none"> 円と直線の共有点を求めることにより、数学Aで学んだ「方べきの定理」を確認することができる。 円と直線の位置関係を求める方法を論理的に考察することができる。 2円の半径と中心間の距離に着目して、2円の位置関係を考察することができる。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	<ul style="list-style-type: none"> 直線を一般化したとき、解と係数の関係を用いて、要領よく計算し、「方べきの定理」を確認することができる。 円と直線の位置関係を判別式を用いる方法と、点(円の中心)と直線との距離を用いる方法で論理的に考察できる。 2円の半径と中心間の距離との関係から、2円の位置関係は5通りあることを的確に考察することができる。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	<ul style="list-style-type: none"> 「方べきの定理」を復習し、円と直線の共有点を求めさせる。 円と直線の共有点の個数と連立方程式を解く際に出てくる(一変数の)2次方程式の実数解の個数との関係を考えさせる。 2円の位置関係は、2円の半径と中心間の距離の関係に着目して考えることを図を用いて再度説明する。

【表現・処理】

学習活動における具体 の評価規準	<ul style="list-style-type: none"> 円の決定条件より、円の方程式を求めることができる。 円と直線の共有点の座標を、求めることができる。 円の接線の方程式の公式を適切に用いることができる。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	<ul style="list-style-type: none"> 与えられた条件に応じて、円の方程式の形(標準形、一般形)を選択し、円の方程式を求めることができる。 円と直線の共有点の座標を、手際よく正確に連立方程式を解くことによって求めることができる。 円外の点から円に引いた接線の方程式を求めることができる。

「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	<ul style="list-style-type: none"> ・円の中心の座標と半径が与えられたとき、円の方程式が公式を用いて求められるようにする。 ・円と直線の共有点の座標を、連立方程式を解くことによって求められることを理解させ、演習を積ませる。 ・円の接線の方程式の公式をしっかりと確認させる。
---------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

【知識・理解】

学習活動における具体的評価規準	<ul style="list-style-type: none"> ・円が中心の座標と半径から決定されることを理解している。 ・円と直線の位置関係を調べる方法を理解している。 ・2曲線の交点を通る曲線(群)の方程式の意味を理解している。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的な状況例	<ul style="list-style-type: none"> ・円の方程式が決定されるあらゆる条件を理解している。 ・円と直線の位置関係を調べるには、判別式を用いる方法と、点(円の中心)と直線との距離を用いる方法があることを理解している。 ・2曲線$f(x)=0, g(x)=0$の交点は同時にこれらの等式を満たすので、方程式$hf(x)+kg(x)=0$の表す図形は2曲線の交点を通る曲線群であることを理解している。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	<ul style="list-style-type: none"> ・円の方程式の公式を理解できるようにする。 ・具体的な問題を例に、円と直線の位置関係は3通りあることを確認させる。 ・実際に2曲線の交点を求めさせてから、方程式の意味を考えさせる。

6 本時の展開

(1) 本時の目標

- ・円と直線の共有点について、図形を方程式で表す「解析幾何」の方法が有効であることを認識し、それを活用して共有点の座標を求める。
- ・円と直線の共有点が求められるのは、連立方程式の解が実数のときであることを理解する。(進んだ生徒は円と直線の共有点の個数を調べる方法について考察する→予習)
- ・「初等幾何」(数学A)で学んだ「方べきの定理」が解析幾何(数学II)ではどのように表現できるか興味を抱き、考察することで数学の深遠性(奥深さ)を感じる。

(2) 本時の指導過程

過程	学 習 活 動	指 導 内 容	指 導 上 の 留 意 点	評 価 観 点 (方 法)
導入 (10分)	共有点の求め方について(発問に対して)、思考し発表する。	2直線の交点や放物線と直線の共有点の求め方について、発問し確認する。 円と直線の共有点の求め方について、発問する。	交点や共有点は必ずしも求められない場合があることを確認する。	
展開 (35分)	問題提示(事前配布) 円 $x^2+y^2=5$ は、次の直線と共有点をもつか。もつ場合はその点の座標を求めよ。	(1)は解法の手順を説明する。 (2)(3)は自力解決させる。	連立方程式を解いた際、共有点の座標として意味をもつのは座標が実数で与えられている場合である	【表現・処理】 円と直線の共有点の座標を連立方程式を解くことによって、求めることができる。

	<p>(1) $y=x-1$ (2) $y=2x+5$ (3) $y=x+4$</p> <p>(1)は教員の説明を聞きながら、解答していく。(答案の形式による穴埋め) (2) (3)は自力解決する。</p>	<p>※進んだ生徒は円と直線の共有点の個数を調べる方法について考えるように指示する。</p>	<p>ことに気づかせる。</p>	<p>(観察・単元末テスト)</p>
	<p>直線 $y=kx$ と円 $(x-3)^2+y^2=8$ の交点 A, B について、$OA \cdot OB$ の値を k が次の値をとるとき求めよ。 (1) $k=0$ (2) $k=1$ (3) $k=2$</p> <p>自力解決する。</p>	<p>交点の座標を求めて2点間の距離の公式を用いる際に計算が簡略化する方法を生徒の状況を見ながら、必要に応じて与える。</p> <p>※ k の値を一般化して成り立つことをレポートに課す。</p>	<p>三角比を用いれば、交点の x 座標を求めその値に $\sqrt{k^2+1}$ を掛ければよいことに気づかせる。 k の値に制限が必要かどうか考えさせる。</p>	<p>【数学的な見方や考え方】 円と直線の共有点を求めることにより、数学Aで学んだ「方べきの定理」を確認することができる。 (レポート・観察)</p>
<p>まとめ (5分)</p>	<p>本時で学んだことや感想を自己評価表に記入する。</p>	<p>円と直線の共有点を求める意味の確認をする。</p>	<p>座標は実数の範囲で考えることを確認する。</p>	

7 単元全体の学習の経過

単元の指導計画にある時間（8時間）で授業を実施し、最後に単元末テストを行った。単元目標の4項目のうち、円のグラフをかく問題は時間との兼ね合いから単元末テストに入れなかったため、その部分の定着度は測れていないが、それ以外は全体で7割程度の定着率であった。円と直線の共有関係を調べる方法は、判別式を利用する方法と円の中心と直線との距離で判断する方法を授業で扱ったが、後者の方を用いる生徒が少なく、もっと強調して指導すべきであった。また、単元末テストで60%未満だった生徒7名については、昼休みを利用して追指導をし、さらにその中の3名については放課後に補習を行った。一斉授業の中で、すべての生徒に評価規準で示した内容を理解させるのは限界があると思う。

また、毎時間末に自己評価表を記入させたが、記入するのに5分以上かかる生徒がいて、必ずしも毎回授業終了時に回収できるわけではなかった。教員にとっては、自己評価表は個々の生徒の単元内での情意面や理解度の推移を確認でき、自己評価表の記述から理解が不十分だと判断された項目については、再度補って解説を行うなど授業改善に役立てたが、毎時間、個々の生徒に対応できたかという、生徒の人数からいってかなり難しい面があった。しかし、生徒にとって、自己評価を行うことは、自分の数学に対する取組や理解度を「メタ認知」する機会を与えられるという点で意義があったと思うし、実際に生徒自身からもそういう声が聞かれ、テスト前の復習にも活用したようであった。

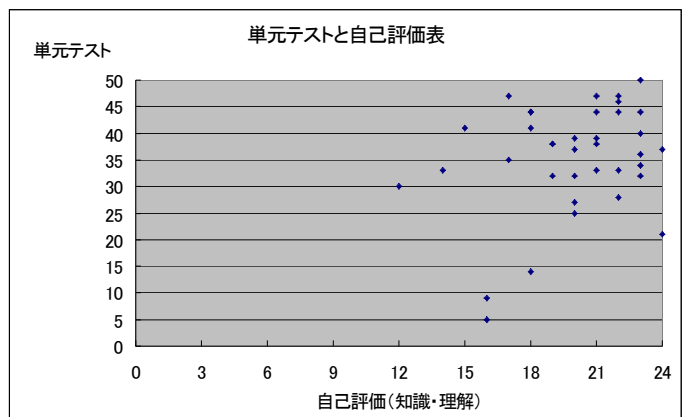
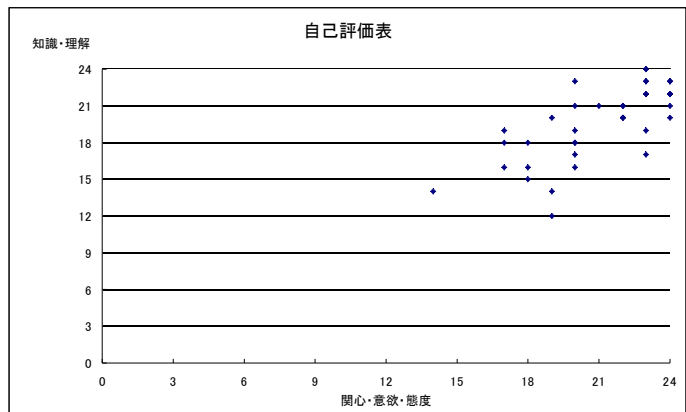
8 本時の様子

別のクラスで本時の内容の授業を行った際、生徒の発言から「円と直線の位置関係を見分ける方法」や「方べきの定理」を導き出そうと試みたが、予定の半分程度しか進まなかったため、本時では、ある程度教員主導で授業を行ってしまった。本時に限ったことではなく、授業中においても、数学的な見方や考え方の育成をすることを大事にしようとしているが、授業進度との兼ね合いでその時間を十分に捻出できないという大きな課題がある。結局本時でも、練習問題を1題残してしまっただ。机間指導時の観察から、ほとんどの生徒は、円と直線の共有点は連立方程式の実数解の組であることを理解し、その座標を求めることができるようになったが、「方べきの定理」までになると5割程度の理解に留まっていた。

9 単元の観点別評価の総括

(1) 関心・意欲・態度

この観点の評価は、行動観察からの見取りを中心に、自己評価表の記述内容で補う形の計画を立てた。結論から云うと、行動観察で40名の生徒全員をAまたはBと正しく見極めて評価することは不可能であったが、授業中に注意したにも関わらず授業態度が改善されなかったケースなどではなくCの該当者はいなかったと判断できる。また、補助資料として考えていた自己評価表の「関心・意欲・態度」と「知識・理解」の関係図（A評価・・・3点、B評価・・・2点、C評価・・・1点とした）は、右図のようになっている。「関心・意欲・態度」が高い生徒は、概ね「知識・理解」も高く評価しており、かなりの相関関係があることがわかる。しかしながら、自己評価の「知識・理解」と単元末テストの結果の相関は必ずしも高くない。このように自己評価では、自分に厳しい評価をする生徒もいれば、他者との評価を気にして自分に甘い評価を付ける生徒もいるので、常に教員の評価に照らして、生徒が適正に自己評価できるように指導する必要があると考えられる。



教員の授業に対する姿勢として一番大切なことは、生徒が学習内容に興味・関心をもち意欲的に取り組めるような指導計画を立て、授業中については授業内容を生徒にいかに関心させ、生徒に自己学習力を身につけさせるかということであるから、これからも一層、生徒の関心・意欲を高める授業の工夫をする中で、生徒の「関心・意欲・態度」を適切に評価する方法を追究していきたい。

(2) 数学的な見方や考え方

この観点の評価方法としては、3回のレポート提出と単元末テストから評価する計画を立てた。しかし、2回のレポート提出は、課題が難しかったため提出率がよくなく、これらは加味する形で用いることにした。本来は授業の中でも見取る方法を講じなければいけないと思われるが、授業進度との兼ね合いで十分にその時間を確保できず、レポート等で評価しなければならないことが課題

と思われる。評価結果は以下の通りである。

A・・・9名　　B・・・23名　　C・・・8名

(3) 表現・処理

この観点の評価方法としては、単元末テストと授業中の行動観察を考えていたが、行動観察からは特に取り上げるべきこともなかったため、単元末テストのみになってしまった。単元末テストでCと評価した生徒への指導は、単元末テストを実施後、返却した際に「単元末テスト分析表」を配布し、各自に設問別・配点別の成否を記入させて回収するとともに、追指導を行っている。評価結果は以下の通りである。

A・・・10名　　B・・・22名　　C・・・8名

(4) 知識・理解

先に述べたように、自己評価表と単元末テストの相関は必ずしも高くない結果が出ており、自己評価表の結果は、指導の参考資料にとどめ、総括への活用は難しいと思われた。そのため、評価資料としては、単元末テストのみを用いた。「表現・処理」の観点と同様に、単元末テストでCと評価した生徒への指導は、単元末テストを実施後、返却した際に「単元末テスト分析表」を配布し、各自に設問別・配点別の成否を記入させて回収するとともに追指導を行っている。評価結果は以下の通りである。

A・・・21名　　B・・・17名　　C・・・2名

10 今後の課題

観点別評価と指導の一体化というテーマで今回の検証を行ったが、教員及び生徒の負担が増大するということが懸念される。先ず、教員にとっては、今回は検証クラスを1クラスに絞って行ったが、現実には教員一人が担当する授業クラスは複数あり、また担当する科目についても複数になることも考えられ、そして担当する生徒も優に百名を超えることが想定される。そのため、単元終了後だけでも、評価のために費やす時間は膨大になり困難を極めると予想される。また、生徒にとって、自己評価することは自分の数学に対する取組や理解度を「メタ認知」する機会を与えられるという点では意義があると述べたが、もし全ての教科で実施することを考えたら、生徒は毎時間授業が終わるごと必ず自己評価をしなければならない。本校の生徒の実態からして、自己評価の質が落ちることは考えやすく、生徒にはかなり大きな負担になると思われる。しかしながら、このようなマイナス面ばかりではなく、観点別評価を行ったことで生徒の学習状況を的確に把握でき、授業の再構築に役立ったのは事実であるから、今後、評価方法などを含めて長期的・継続的に行えるように研究を続けていく必要があると考える。

実施した単元末テストの一部

[1] 次の円の方程式を求めよ。 【知識・理解】

(1) 1つの直径の両端が2点A(4,2),B(-2,-6)である円

(2) 点(2,1)を中心とし、直線 $x+2y+1=0$ に接する円

[3] (2) 点(1,-3)を通り、円 $x^2+y^2=2$ に接する直線の方程式を求めよ。【表現・処理】

[5] 2つの円 $x^2+y^2-4=0$ …① , $x^2+y^2-4x+2y-6=0$ …②について、次の問いに答えよ。

(1) ①, ②は異なる2つの交点をもつことを示せ。

【見方や考え方】

(2) 2円の交点を通る直線(共通弦)の方程式を求めよ。

【表現・処理】

(3) 2円の交点と点(1,2)を通る円の方程式を求めよ。

【知識・理解】

<生徒の自己評価表の記載例>

高1数学 自己評価表

A十分満足できる B概ね満足できる C不十分

	実施日	評価	関心・意欲・態度	評価	知識・理解
1 N081	11月 6日 (木) 1校時	A	円の方程式の公式の導出がおもしろかった。集中してできた。	B	円の方程式を求める問題で、半径を求めるのがよくわからなかった。
2 N081	11月 7日 (金) 1校時	A	一般形から平方完成して、円の中心や半径を求めるのがおもしろかった。	C	25.の別解がよくわからなかった。円を図示するのが難しかった。
3 N082	11月 7日 (金) 2校時	A	外心の座標や外接円の半径を求める問題がおもしろかった。	A	3点を通る円を連立3元1次方程式をたてて、求める問題がよく理解できた。
4 N083	11月10日 (月) 5校時	A	方べきの定理が、円と直線の共有点の求め方を使ってできるのがおもしろかった。	B	円と直線の共有点の求め方と、判別式を使って共有点の個数を求める方法がよくわかった。
5 N084	11月12日 (水) 6校時	B	判別式を使わないで解く方法がおもしろかった。	A	円と直線の位置関係(ex13)で、判別式を使った解き方がよくわかった。
6 N085	11月13日 (木) 1校時	A	円の接線に関する問題がおもしろかった。	B	円の接線の問題で、だいたい理解できたけど、授業のスピードが速かった。
7 N085	11月14日 (金) 1校時	A	答え合わせだけだったけど、集中してできた。	B	プリントの問題はよくできたけど、極とか双対の意味がよくわからなかった。
8 N086	11月14日 (金) 2校時	A	2円の位置関係でいろいろなパターンがあっておもしろかった。	B	2つの円の位置関係はよく理解できた。2円の交点を通る円、直線が難しかった。
9	月 日 () 校時				
10	月 日 () 校時				

この単元を学び終えての感想

§2 円

円の方程式を求める基本の問題はだいぶ解けるようになった。

方べきの定理のところはよくわからなかった。円の接線に関する問題や、円と直線の位置関係を判別式で解く問題がおもしろかった。

1年__組__番_____

実践事例3 数学Ⅲ 「微分法とその応用」

1 実践期間 平成15年10月30日～11月20日

2 単元名(学年) 関数の増減とグラフ(3年)

3 単元の目標

- (1) 導関数の符号を調べることで関数の増減がわかり、極値を求めることができる。
- (2) 平均値の定理の意味を直観的にとらえることができる。
- (3) 第2次導関数を利用して、関数のグラフの特徴をとらえようとするとともに、曲線の凹凸や漸近線を調べることで、関数のグラフをより正確にかくことができる。

4 単元の指導計画(9時間扱い)

第1次 平均値の定理(1時間)

- ①平均値の定理、平均値の定理から導かれる不等式

第2次 関数の増減と極大・極小(3時間)

- ②③④関数の増減、極大・極小、区間における最大・最小

第3次 曲線の凹凸と関数のグラフ(4時間)

- ⑤⑥⑦⑧第2次導関数、曲線の凹凸、いろいろな関数のグラフ

第4次 単元末テスト(1時間)

- ⑨定着度の状況の確認

5 単元の評価計画

(1) 評価規準

関心・意欲・態度	数学的な見方や考え方	表現・処理	知識・理解
・微分法に興味をもち、微分することにより関数の増減を調べようとする。	・平均値の定理を直観的にとらえることができるとともに、第2次導関数の意味を考察することができる。	・いろいろな関数を適切に微分することにより、関数の増減を調べグラフをかくことができる。	・平均値の定理の意味が直観的にわかる。 ・曲線の凹凸(変曲点)を調べることで、より正確にグラフがかけられることを理解している。

(2) 評価計画 ※太枠内が本時 【 】は評価方法

時	学習内容	評価項目			
		関心・意欲・態度	見方や考え方	表現・処理	知識・理解
1	平均値の定理を直観的にとらえ、その意味を考える。		平均値の定理を直観的にとらえ、その意味がわかる。 【観察・ワークシート】		平均値の定理を理解している。 【ワークシート】
					適切に微分することにより増減表を作ることができる。 【ワークシート・確認テスト】
2	関数の増減を調べる。				

3 4	関数の極値を求め、 ・ 区間における最大値・最小値を求める。	微分することにより極値などを求めようとする。 【観察・ワークシート】		整関数の極値や最大値・最小値を求めることができる。 【ワークシート・確認テスト】	
5 6	第2次導関数を求め、 ・ 曲線の凹凸や変曲点を調べる。		第2次導関数の意味を考察することができる。 【ワークシート】	第2次導関数の符号から、曲線の凹凸を調べ、変曲点を求めることができる。 【ワークシート・確認テスト】	第2次導関数の値により、曲線の凹凸がわかることを理解している。 【ワークシート】
7 8	いろいろな関数のグラフをか ・ く。	導関数・第2次導関数を求め、関数の増減・曲線の凹凸を調べ、グラフをかこうとする。 【観察・ワークシート】		導関数・第2次導関数を求め、関数の増減・曲線の凹凸を調べ、グラフをかこうとする。 【ワークシート・確認テスト】	
9	単元末テスト			適切にグラフをか くことができる。	導関数の符号と増減の関係を理解している。

(3) 観点別評価について

【関心・意欲・態度】

学習活動における具体の評価規準	<ul style="list-style-type: none"> ・ 微分することにより極値などを求めようとする。 ・ 導関数・第2次導関数を求め、関数の増減・曲線の凹凸を調べ、グラフをかこうとする。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	<ul style="list-style-type: none"> ・ 整関数以外の関数についても、積極的に微分を行い、極値を求めようとしている。 ・ 微分法の有用性を知り微分することにより関数の増減・曲線の凹凸を調べ、主体的にグラフをかこうとしている。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	<ul style="list-style-type: none"> ・ 個別に面接を行い原因を探り、個別支援を行う。 ・ グループ学習のよさを生かし、理解している生徒に補助してもらい取り組ませる。

【数学的な見方や考え方】

学習活動における具体の評価規準	<ul style="list-style-type: none"> ・ 平均値の定理を直観的にとらえ、その意味がわかる。 ・ 第2次導関数の意味を考察することができる。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	<ul style="list-style-type: none"> ・ 平均値の定理から導かれる不等式の重要性を認識できる。 ・ 第2次導関数の符号と関数の極値を関連づけて考えることができる。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2次関数を例に、平均値の定理の意味を理解させる。 ・ 先ず、微分係数 ⇒ 接線の傾き ⇒ 関数の増減 ⇒ グラフの概形 というグラフをかかまでの一連の流れを理解させる。

【表現・処理】

学習活動における具体の評価規準	<ul style="list-style-type: none"> ・整関数の極値や最大値・最小値を求めることができる。 ・導関数・第2次導関数を求め、関数の増減・曲線の凹凸を調べ、グラフをかくことができる。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな関数の極値や最大・最小値などを求めることができ、そのときのxの値もいえる。 ・いろいろな関数の増減、極値、グラフの凹凸を調べ、より正確にグラフをかくことができる。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	<ul style="list-style-type: none"> ・微分計算を反復して行わせるとともに方程式の解き方を復習させる。 ・理解している生徒に補助してもらい取り組ませる。

【知識・理解】

学習活動における具体の評価規準	<ul style="list-style-type: none"> ・平均値の定理を理解している。 ・第2次導関数を使って曲線の凹凸(変曲点)を求めることで、より正確にグラフがかけることを理解している。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	<ul style="list-style-type: none"> ・平均値の定理をきちんと説明することができる。 ・いろいろな関数の増減、極値、グラフの凹凸を調べ、より正確にグラフをかく手順を理解している。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	<ul style="list-style-type: none"> ・2次関数を例に、平均値の定理の説明をする。 ・3次関数を例にグラフの凹凸を含めて、グラフをより正確にかく手順を説明する。 ・理解している生徒に補助してもらい取り組ませる。

6 本時の展開

(1) 本時の目標

基本的な微分法のまとめとして、関数の第2次導関数まで求め、曲線の凹凸や漸近線まで考えて、いろいろな関数のグラフの概形をかくことができる。

(2) 本時の指導過程 (2時間連続 100分)

過程	学 習 活 動	指 導 内 容	指 導 上 の 留 意 点	評 価 観 点 (方 法)
導入 (10分)	<div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px; display: inline-block;"> 問1 関数 $y = x^4 - 6x^2 - 8x$ のグラフをかけ。 </div>			
	第2次導関数と曲線の凹凸の関係、増減表の作り方を確認しながら、グラフをかく。		第2導関数を求めることで、より正確なグラフがかけることを押さえる。	【関心・意欲・態度】 導関数を求め、関数の増減を調べ、グラフをかこうとする。 (観察)

展開 (70分)	<p>例14 区間 $0 \leq x \leq 2\pi$ において、関数 $y = x - 2\sin x$ のグラフをかけ。</p> <p>例15 関数 $y = e^{-x^2}$ のグラフをかけ。</p> <p>例16 関数 $y = \frac{x^2}{x-1}$ のグラフをかけ。</p>		
	<p>説明をしっかりと聞きながら、ノートをとる。</p>	<p>グラフをかくポイント（極値、変曲点の示し方、グラフの対称性など）を押さえながら、グラフをかく手順を理解させる。</p>	<p>例14のグラフは、$y=x$と$y=-2\sin x$を合成してかけることに触れる。 例15では、グラフの対称性を考えさせる。 例16では、漸近線を直観的に考えさせる。</p>
<p>問2 区間 $0 \leq x \leq 2\pi$ において、関数 $y = 4\cos x + \cos 2x$ のグラフをかけ。</p> <p>問3 関数 $y = xe^{-x}$ のグラフをかけ。</p> <p>問4 関数 $y = \frac{x^2 - x + 4}{x}$ のグラフをかけ。</p>			
	<p>例題に倣って、問2、問3、問4を解く。</p>	<p>机間指導しながら、個別に指導をする。 増減表の作り方を徹底し、いろいろなグラフの概形をかかせ習熟させる。</p>	<p>【関心・意欲・態度】 導関数を求め、関数の増減を調べ、グラフをかこうとする。 (観察)</p> <p>【表現・処理】 いろいろな関数を適切に微分し、その増減を調べ、より正確にグラフをかくことができる。 (ワークシート・確認テスト)</p>
まとめ (20分)	<p>確認テストに取り組む。自己評価票を記入する。</p>		<p>確認テストは、ノート・ワークシートを参照してもよい。</p>

7 単元全体の学習の経過

本校では2年次に数学Ⅱを2単位で行なっているので、終わらなかった微分積分の内容を3年次

の数学Ⅲの授業の初めで補っている。そのため、数学Ⅲの内容を扱う時間数が少なくなり、問題演習に重点を置いた授業形態とならざるを得ず、数学的な見方や考え方の育成といった視点での授業に時間を割けない現状がある。このような状況の下、夏休み明けから観点別評価を意識して授業を進めているが、「表現・処理」に関わる問題演習中心の授業形態で、何とか問題を繰り返し解くことで答えが出せる喜びをもたせることに重点を置いたものになっている。実践授業では、ワークシートを用いて、グループ学習を取り入れて授業を進めた。グループ学習を取り入れたことで、意欲がなくなっていた生徒も、理解している生徒に教えてもらいながら取り組むことができたので、一般的に生徒の関心・意欲は高められたと思う。しかし、中にはできる生徒の解答を写すだけの生徒も見られたので、ワークシートの記入状況から「表現・処理」「知識・理解」の観点別評価に繋げていくということについては、信頼性・客観性に欠ける部分があると感じた。

ワークシートの他に、確認テストを実施したり、確認テストの用紙に自己評価や質問などを記入させ、各生徒の理解度を確認することで授業改善を図った。確認テストについては、ワークシートやノートを参考にして解答させたが、一人になると微分の計算ミスなどが目立ち完全正答率は思ったほど伸びなかった。自己評価票については、今回はじめて取り入れたため理解度などの参考にした程度で特に点数化は行っていない。少人数授業なのでもともと個人の学習状況を把握しやすい面はあったが、疑問点の記載や授業の感想などは授業展開を考える上で大いに参考となった。ただ、生徒数が多くなると毎時間のワークシートのチェックや自己評価票へのコメント記入など、かなり時間を費やす仕事になると考えられるので工夫する必要があると考えられる。

「導関数の符号を調べることで関数の増減が分かり、グラフをかくことができる」という一つの単元の目標は、多くの生徒が達成できたと思う。ただ、微分計算や極値を求める方程式を解くことに苦労している生徒が多く、「表現・処理」の部分ではさらなる問題演習が必要であると感じた。観点別評価を実施し、いろいろな角度から総合的（4つの観点などを踏まえて）に指導・評価することで、自身の授業改善に繋がったし、生徒の学習意欲の向上も確認できた。

8 本時の様子

本時においても、グループ学習で授業を進めたが、基本的な微分計算などがまだしっかりと理解できていない生徒が、各グループに数名いるため微分計算に時間がかかっていた。また、三角方程式などを解いて、極値や変曲点を求める部分に苦労していた。予定内容の一部が終わらなかったが、集中してすべての生徒がワークシートに取り組む姿が見られたのでよかった。最後の確認テストも時間が5分程度しか取れず増減表作成あたりまでの解答で終わってしまった生徒が多かったが、時間があればグラフまでかけるであろうと判断できた。グループ学習としたことで、一人では途中で投げ出してしまっていた生徒もとりあえず最終的なグラフの概形をかくところまででき、微分することによっていろいろなグラフの概形がかけるおもしろさはわかってもらえたようである。本時の目標は、グラフの概形をかく内容であったため、生徒の取り組む姿勢もいつになく意欲的に感じた。

9 単元の観点別評価の総括

(1) 関心・意欲・態度

本校では、数学Ⅲレベルの内容になると、どうしてもテストの素点が低い生徒が出てくるので、評定を付ける上でも、ワークシートやノート提出等の課題点が占める割合を高く設定する必要がある。今回この検証では、この観点の評価方法として、3回のワークシートの記述内容を主に、行動観察を加味する形で行った。そのため以前は、可か不可の2段階で評価していたワークシートを、今回はA、B、Cの3段階で評価した。可を2段階に細分したことで、多少生徒の学習意欲の向上に繋がったと思うが、そのことよりグループ学習を実施したことで、生徒が発表・発言しやすい環境を作ることができ、グループ内でのコミュニケーションの取りやすさが学習意欲の向上に繋がったのか、ほとんどの生徒はしっかりとまとめることができていた。総括でもC評価がでなかったこ

とは授業への取り組む姿勢が向上したと云えるだろう。また、行動観察では、授業中にワークシートの取組状況などを見てまわり助言等を行なったが、その都度教務手帳などに記録を残すようなことはしなかった。今後は、自己評価票をどのように扱うかがポイントになるであろう。授業の振り返りとしては有効だが評価に加えることについてはまだ検討の余地があると感じた。評価結果は以下の通りである。

A・・・14名　　B・・・2名　　C・・・0名

(2) 数学的な見方や考え方

数学の授業では、ただ単に答えを求めるだけでなく、「思考の過程を振り返り考えを深める」ことを意識して指導することは大切だと思うが、数学Ⅲでは、問題を解くだけで精一杯の部分があり、見方・考え方の育成まで手が回らないのが実情である。そのため、計画段階ではワークシートや授業での見取りを中心に考えていたが、実際には問題演習中心の授業展開であったため、この観点の評価場面を適切に設定することができなかった。ワークシート及び机間指導時の観察から、すべての生徒を一応B評価以上であると判断したが、今回はこの部分の評価が授業を進めていく上で、客観的な資料収集ができずに難しさを感じた。レポートなどでの見取りも考えられたが、実施する状況ではなかった。

(3) 表現・処理

数学において、「問題が適切に解ける」ということは、いくつもの観点が複合的に絡み合っていると考えられ、それを個別に棲み分けることについては多少違和感を感じるが、今回は、「問題が適切に解ける」ということをすべて「表現・処理」の観点で評価をした。評価方法は、授業の終わりに行った4回の確認テストと単元末テストである。テストでの素点ということで客観的な資料としての信頼性は高いと思う。ただ、確認テストでは他の生徒との相談は認めなかったが、授業でまとめたワークシートを参考にしてもよいとしたため、確認テストと単元末テストの重み付けを1：2とした。結果的に従来のテストの素点重視といった評価と大差がなさそうだが、学習過程において、観点別評価を意識することでよりきめ細かな指導ができたと思っている。Cと評価した生徒には、確認テスト返却時にはコメントを付記してワークシートを繰り返すように指示し、また、単元末テストについては、間違えた個所をやり直して提出するように指示した。後期中間試験までに基本問題の反復練習をさせるなど学習のサポートをしていきたい。評価結果は以下の通りである。

A・・・5名　　B・・・9名　　C・・・2名

(4) 知識・理解

評価方法として、単元末テストの他にワークシートでもこの観点を評価する計画を立てていたが、今回はグループ学習としたため、机間指導時に他の生徒のワークシートをただ写しているだけといった場面が見られ、信頼性に疑問を感じたので、実際に記録に残すことはしなかった。したがって、この観点も結果的には単元末テストのみになってしまい、他の方法については今後の課題となった。評価結果は以下の通りである。

A・・・10名　　B・・・6名　　C・・・0名

10 今後の課題

今回対象としたクラスが個人を掌握しやすい少人数（16名）クラスであったため、この調査研究がどれくらい参考になるかわからないところもあるが、教える側がこのような意識をもつことは大切なことであると実感した。ただ、一人の教員が授業のクラス規模が30名を超え、何種類かの科目を教えている現状を考えると、すべてにおいて今回行なったような実践（毎授業時間終了後に、ワークシートを回収・チェックをし、確認テストの採点を行い、個別のコメントを書く）は、かなり

の時間と労力が必要になり、評価方法等を含めて工夫しないと現実的ではない部分もあると思われた。少人数での学習指導が個を把握しやすく最も個に応じた指導が可能であるとは思いますが、現状では限度があるため、より現実的な方法を模索していく必要がある。また、選択科目の拡大で、必修の数学が少なくなりつつある中、数学に対する興味・関心を一層高められるような、観点を踏まえた「指導と評価の一体化」を目指した授業づくりを考えていくことが今後の課題である。

確認テスト 2-13 《いろいろな関数のグラフ》

1. つぎの関数のグラフをかけ。

① $y = x + \sin x$ ($0 \leq x \leq 2\pi$)

② $y = \frac{x^2 + 2}{x + 1}$

組 番氏 名 得点

自己評価	高い	⇔	普通	⇔	低い
授業への取組	5	4	3	2	1
内容の理解	5	4	3	2	1
質問・感想					

数学Ⅲ 単元末テスト ～関数の増減とグラフ～

1. 次の下線部分に適する数式を書け。【知識・理解】

●関数の増減

関数 $f(x)$ に対し、区間 $a < x < b$ で

_____ならば、 $f(x)$ はその区間で増加

_____ならば、 $f(x)$ はその区間で減少

_____ならば、 $f(x)$ はその区間で定数関数

●曲線の凹凸

関数 $y=f(x)$ のグラフは、区間 $a < x < b$ において

_____ならば、下に凸

_____ならば、上に凸

2. 関数 $f(x)=x^4-8x^3+18x^2+1$ について 【表現・処理】

(1) 導関数 $f'(x)$ を求めよ。

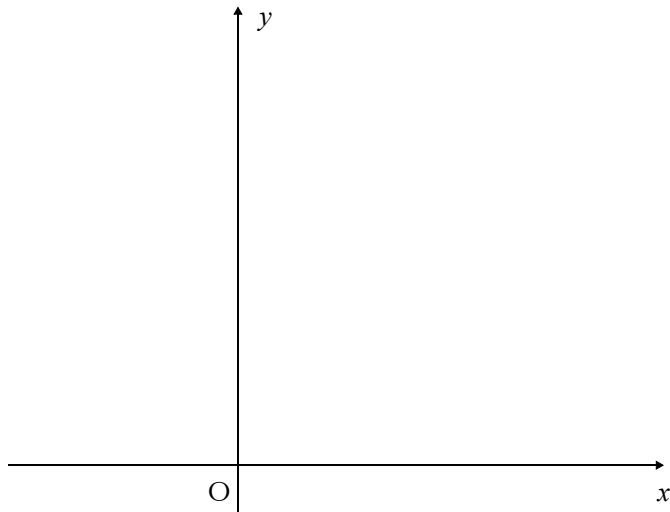
(2) 第2次導関数 $f''(x)$ を求めよ。

(3) 増減表をかけ。

(4) グラフをかけ。

$f'(x)=$

$f''(x)=$



3. 次の関数のグラフをかけ。【表現・処理】

(1) $y = x + \sin 2x$ ($0 \leq x \leq 2\pi$)

(2) $y = \frac{x^2 + 2}{x + 1}$

理科

1 教科の目標

自然に対する関心や探究心を高め、観察、実験などを行い、科学的に探究する能力と態度を育てるとともに自然の事物・現象についての理解を深め、科学的な自然観を育成する。

2 評価の観点及びその趣旨

関心・意欲・態度	思考・判断	観察・実験の技能・表現	知識・理解
自然の事物・現象に関心や探究心をもち、意欲的にそれらを探究するとともに、科学的態度を身に付けている。	自然の事物・現象の中に問題を見だし、観察、実験などを行うとともに、事象を実証的、論理的に考えたり、分析的・総合的に考察したりして問題を解決し、事実に基づいて科学的に判断する。	観察、実験の技能を習得するとともに、自然の事物・現象を科学的に探究する方法を身に付け、それらの過程や結果及びそこから導き出した自らの考えを的確に表現する。	観察、実験などを通して自然の事物・現象について、基本的な概念や原理・法則を理解し、知識を身に付けている。

3 理科における評価の留意点

平成15年度の第1学年から年次進行で実施されている新教育課程における評価は、目標に準拠した評価（いわゆる絶対評価）である。これは、一人ひとりの学習の到達状況を4観点について評価し、それを総括し評定していくものである。理科においては、多くの時間で「観察、実験」を行うが、この場面では通常の教室で行う授業より、生徒の学習状況を見取る機会が多く存在するものと考えられる。

今回は、単元での評価についての実践報告であるが、基本的にその単元内での「観察、実験」を含む授業での実践事例に焦点をあて検討した。

なお、実践事例は「化学ⅠB、生物ⅠB、物理Ⅱ」について行っているが、新教育課程においても観点別評価方法の工夫や評価の総括の方法等で参考になるものと考えられる。

(1) 全般的な留意点

- (ア) 4観点は別々に展開されるのではなく、常に関連しながら学習の中に存在している。学習の深まりの状況をあらわすデータ(評価資料)を集めるにあたり、4観点がお互いに関連していることを意識しながら集めることが必要となる。
- (イ) 日々の学習状況のデータ収集・評価では、行動観察(発言、態度)、振り返りシート、パフォーマンステスト、協議、発表、ノート、ワークシート、レポート、実験報告、スケッチ、グラフ、ポートフォリオ評価、自己評価・相互評価、小テスト、単元テスト、定期考査など多種多様な収集方法、評価方法の中から、それぞれの場面における生徒の学習状況を的確に見取る方法、そして評価する観点にふさわしい評価方法を選択することが重要である。
- (ウ) ペーパーテストの素点、提出物(レポート、ワークシート、ノート等)は記録として残るものであるが、授業での学習状況等の観察はその場での記録が必要となる場合がある。その場合、記録をとることが授業の負担にならないようにすることは当然のことであり、その記録が観点ごとの総括や評定への総括に十分対応できるように、評価場面、評価方法が計画されていることが必要となる。
- (エ) 毎時間すべての生徒について公平に見取り記録することは非常に困難である。よって、全て

の生徒に対して全ての項目を評価することを目指すのではなく、ある一定の期間で公平に学習状況を見取れるように配慮する必要がある。しかし、生徒一人ひとりの状況を見取ろうとする教師の姿勢そのものが、今まで見取れなかった部分を気づかせてくれることも重要なことである。

(オ)同一科目を複数の教師で担当してる場合、評価規準、学習状況データの収集方法等の協議・検討及び合意が重要である。

(2) 「観察、実験」における主な評価方法についての留意点

「観察、実験」の授業は前述したように、多くの評価データ(学習状況)の収集機会が存在する。ここでは「観察、実験」における留意点について考えてみたい。

(ア)行動観察による評価

「観察、実験」はグループ単位で行われることが多く、グループの活動状況が必ずしも個人の活動状況とは一致しない場合がでてくる。したがって、グループ内での各個人の活動状況等を記録、評価する工夫が必要である。また、「観察、実験」中には危険を伴う場合もある。そのため技術的な指導とともに安全指導にも重点を置く必要がある。TTを活用し、複数の教師により観察、実験指導を行うことで、よりきめ細かな「観察、実験」指導、安全指導、生徒の学習状況の把握が可能となる。ただし、到達目標や評価規準についての共通理解を図り、客観的に評価する必要がある。

(イ)ワークシートによる評価

ワークシートを活用して評価することにより、様々な観点の評価を行うことが可能となる。実際の評価に当たっては、単に「観察、実験」の結果報告だけでなく、「実験、観察」の目標やねらいの理解、「観察、実験」の組立てやデータの処理法、思考過程と科学的な知識・理解の定着などが十分評価できるようにワークシートの記入内容の検討が重要となる。また、観点別評価が明確になるような工夫が必要となるであろう。

(ウ)パフォーマンステスト

単に理科のある実験や観察が正しくできるかどうかを捉えるだけでなく、生徒自身の主体的な学習が成立しているか、また、科学的な態度が身に付いているか、そして、どのような科学観が形成されたかを見取ることが必要となる。

(エ)発表における技能・表現の評価

グループ単位での発表においても、それぞれの役割を果たしているか、発表へ向けての準備での状況など、その役割で見取れる観点を見取るようにする必要がある。

(オ)その他

「観察、実験」は通常の授業よりも評価される部分が多く、その時間を欠席した生徒が著しく不利になる場合がある。したがって、放課後等を利用した補習授業や課題レポート等を工夫することにより、生徒自身に不公平感が残ることがないように配慮する必要がある。

4 これからの評価方法の改善に向けて

評価方法の改善に向けて留意すべきことが多くあるが、その中で最も重要なことは、評価規準、評価方法そして授業改善方法など、それぞれの学校の特色、生徒の状況に合わせ作成するという点、そして、作成された規準、方法は完成型ではなく、常に改善されるべきものであるということである。今回の実践では、評価規準などを提示し、単元での4観点評価、観点別評価の総括方法についての実践事例を示しているが、これは一つの事例とし参考とされ、各校にあった評価方法等を工夫されることを期待する。

引用・参考文献(実践報告を含む)

文部省 平成11年 『高等学校学習指導要領』

文部省 平成11年 『高等学校学習指導要領解説 理科編 理数編』

北尾倫彦・金子守編 2003 『観点別評価ハンドブック 目標準拠評価の手順 中学校編』 図書文化

実践事例 1 化学 I B 「物質の変化」

1 実践期間 平成15年10月31日～11月20日

2 単元名 (学年) 「酸化還元反応」(2年)

3 単元の目標

- (1) 物質の変化では様々な化学変化を分析し、反応式を作り、さらに量的関係に結びつけ反応物と生成物の関係を理解する。
- (2) 酸化還元反応とエネルギーでは酸化・還元概念や電子の授受を理解し、イオン化傾向を確認し、電池と電気分解における変化を理解する。

4 単元の指導計画 (10時間扱い)

第1次	酸化と還元	2時間
第2次	酸化剤と還元剤	3時間 (本時はその第3時)
第3次	金属の酸化還元反応	2時間
第4次	電池と電気分解	3時間

5 単元の評価計画

(1) 評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断	観察・実験の技能・表現	知識・理解
酸化・還元とは何か、酸化還元反応は何故起こるか等に疑問をもちながら授業に臨むとともに、実験や授業に意欲的に取り組み、酸化還元反応の現象や仕組みを探求しようとする。	酸化還元反応において、原子の酸化状態の変化や電子の移動を考察するとともに、反応式を用いて量的関係を見いだすことができる。また、同様の反応の結果を推測することができる。	酸化還元反応の仕組みや実験操作の意味を考え、適切な操作をすることができる。また、実験で得られた結果の分析や考察を、適切にレポートにまとめ、表現することができる。	酸化還元反応における実験結果や関連する知識を身に付けている。また、酸化還元反応の仕組みや量的関係などを理解している。

(2) 評価計画 ※太枠内が本時 【 】は評価方法

時	学習内容	評価項目			
		関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
1	酸化と還元とはどのような反応かを理解する。	酸素の授受以外にも酸化還元の定義があることを意欲的に学習しようとする。 【観察】	水素の授受・電子の授受による酸化還元の定義を見いだすことができる。 【質問回答】		酸素の授受の他、酸化還元の拡張された解釈を理解している。 【定期考査】
2	酸化数の変化がわかり、酸化還元を区別できるようにする。	酸化数の求め方を意欲的に習得しようとする。 【観察】	酸化還元反応かどうかを判断することができる。 【質問回答】		酸化数を法則の理解に基づいて決定している。 【定期考査】
3	酸化剤と還元剤の働きと半反応式を理解する。	半反応式を意欲的に把握しようとする。	酸化剤と還元剤を反応式より判断することができる。		半反応式の取り扱い方法を理解している。

		【観察】	【質問回答】		【定期考査】
4	半反応式から酸化還元反応式を作る。	半反応式を組み合わせる方法を意欲的に習得しようとする。 【観察】	電子の授受と半反応式の関係を判断することができる。 【問題演習】		
5	様々な酸化剤と還元剤を実験で確認する。	色の変化や生成物を意欲的に観察しようとする。 【観察】	変化の原因を酸化剤と還元剤の反応として判断することができる。 【実験レポート】	薬品の微量な滴下などの実験操作及び記録の仕方を習得できている。 【観察】	実験結果と理論を関連付けて理解している。 【実験レポート】
6	金属のイオン化傾向を理解する。	何故金属の種類によりイオン化傾向が異なるのかを意欲的に探求しようとする。 【観察】	イオン化傾向の異なる金属どうしの電子の移動を考察することができる。 【定期考査】		イオン化傾向の知識を身に付けている。 【定期考査】
7	イオン化傾向による反応性を確認する。	金属の腐食などにはイオン化傾向の大きさが関係することを意欲的に学習しようとする。 【観察】	イオン化傾向の大きさと自然界での金属の状態を結びつけて考察することができる。 【質問回答】		金属の単体の生成法を、イオン化傾向を基に理解している。 【定期考査】
8	電池の原理を理解する。	電池が改良されてきた経緯を意欲的に学習しようとする。 【観察】	電極の違いで起電力の違いが生じることを捉えることができる。 【問題演習】	理論的に、電池を作ることができる。 【定期考査】	
9	電気分解による生成物を確認する。	電気分解による物質の生成を意欲的に探求しようとする。 【観察】	イオン化傾向などの条件を考え電解生成物を判断することができる。 【定期考査】		電極での電子の移動と物質の変化を理解している。 【定期考査】
10	ファラデーの法則を理解する。	電解における反応式とその量的関係を意欲的に探求しようとする。 【観察】	電気量と反応の物質質量との関係を見いだすことができる。 【質問回答】	ファラデーの法則を確認する実験装置を図示できる。 【定期考査】	ファラデーの法則を理解している。 【定期考査】

(3) 観点別評価について

【関心・意欲・態度】

学習活動における具体の評価規準	<ul style="list-style-type: none"> 酸化数や電子の授受の説明を意欲的に聞き、化学的に重要と思われる点は板書以外でもノートや実験ワークシートに書き込もうとする。 教員の設問に対して積極的に回答しようとする。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的な状況例	<ul style="list-style-type: none"> 酸化数や電子の授受の説明を集中して聞き、質問したり、化学的に重要な点をノートや実験のワークシートに書き込んだりしている。 質問に対してははっきりと回答している。

「努力を要する」状況 (C) と評価した生徒への手だて	<ul style="list-style-type: none"> 化学の授業に集中していない場合、身近な化学現象例なども加えて、興味・関心を喚起する。 単元内容を整理したノートを提出させ意識を高める。 回答に窮する場合は、適宜ヒントを与え回答に導く。
-----------------------------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

【思考・判断】

学習活動における具体の評価規準	<ul style="list-style-type: none"> 何故この酸化還元反応が起こるのか捉えられることができる。 色の変化などが生じる化学的原因をデータより判断することができる。 既習事項を化学的に関連付けて考察することができる。
「十分満足できる」状況 (A) と判断する具体的状況例	<ul style="list-style-type: none"> 酸化還元反応を電子の授受を基に系統的に理解している。 化学変化を観察・把握し、反応がどうして起こるのか理解でき、条件により反応が変わる場合も判断できている。 既習事項を化学的に関連付けてレポート等で十分考察できている。
「努力を要する」状況 (C) と評価した生徒への手だて	<ul style="list-style-type: none"> 化学変化での電子の移動に注目させる。また、どの点で反応に変化が起こるのか、注意すべき箇所を個別に説明する。 変化に対して何故と考えられるよう導く。

【技能・表現】

学習活動における具体の評価規準	<ul style="list-style-type: none"> 薬品の微量な滴下などの実験操作及び記録の仕方を習得できている。
「十分満足できる」状況 (A) と判断する具体的状況例	<ul style="list-style-type: none"> 実験時は薬品の滴下などを確実にやり、その都度変化を確認し、わずかな変化にも注意を払っている。 実験で得られた結果の分析や考察を十分に行い、適切にレポートにまとめ、わかりやすく表現している。
「努力を要する」状況 (C) と評価した生徒への手だて	<ul style="list-style-type: none"> 操作方法に難点がある場合、操作の一部を模範的に実演してみせ、方法を習得するように促す。

【知識・理解】

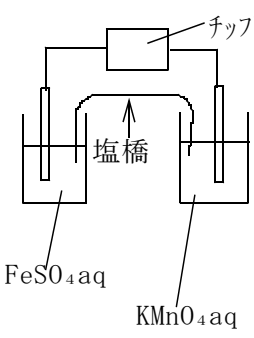
学習活動における具体の評価規準	<ul style="list-style-type: none"> 化学反応式を作り、量的関係を理解している。 色の変化等のデータより、どのような反応が起こっているか理解している。
「十分満足できる」状況 (A) と判断する具体的状況例	<ul style="list-style-type: none"> 化学反応式を作り、量的関係の化学計算ができている。 各種データからどのような反応が起こっているか理解できている。 応用問題に正しく解答できている。
「努力を要する」状況 (C) と評価した生徒への手だて	<ul style="list-style-type: none"> 反応式を作れない場合、図説や解説（後日配布）などを用いて、自分で確認できる手段を示す。 量的関係の基本法則を確認させる。 データにより、どのような判断ができるかを図説等で確認させる。

6 本時の展開

(1) 本時の目標

いろいろな酸化剤や還元剤の反応を通じて、酸化還元反応を調べ、酸化剤や還元剤の酸化数の変化を考察する。さらに酸化剤と還元剤の組み合わせで電池ができることを確認する。

(2) 本時の指導過程

過程	学 習 活 動	指 導 内 容	指 導 上 の 留 意 点	評 価 観 点 (方 法)
導入 (10分)	<ul style="list-style-type: none"> 本時の実験内容を理解する。 酸化剤と還元剤の反応を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> 実験方法の概要を説明する。 酸化還元の意味を確認させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 色の変化が主となるが、変化の意味に注意させる。 	<p>【関心・意欲・態度】 実験方法の説明を意欲的に聴き取ろうとする。 (観察)</p>
展開 (30分)	<ul style="list-style-type: none"> 様々な酸化剤と還元剤の組み合わせで実験する。 ①KMnO₄(硫酸酸性)+H₂O₂ ②FeCl₃+SnCl₂後に+K₃[Fe(CN)₆] ③FeSO₄(硫酸酸性)+H₂O₂ ④FeSO₄+KMnO₄(硫酸酸性) ⑤K₂CrO₄(硫酸酸性)+C₂H₅OH ⑥FeSO₄aqとKMnO₄aqの入った2つの容器に電極(シャープペンシルの芯)を差し、食塩水を染み込ませたろ紙(塩橋)でつなぎ、各電極にメロディーチップの線をつなぐ。つなぎ方で土の極を判断し、さらに電池としての働きを確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ①～⑤では各薬品の色の変化で酸化還元反応を理解させる。 ⑥では電子のやりとりが行われていることを低電圧で動作するメロディーチップを用いて判断させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 微妙な色の変化の場合は図説で確認する。K₃[Fe(CN)₆]の発色の確認も図説を用いる。 反応式は各自の学習で作れば良いので、本時中はデータの収集を第一にする。 酸化剤と還元剤の反応から電流を取り出すのは電子のやりとりの確認をするためだが、後日学習する電池に結びつけられるようにする。 	<p>【技能・表現】 実験装置の取り扱い方法に習熟している。 (観察)</p> <p>【思考・判断】 必要なデータをもれなく収集できる。 (実験ワークシート作成)</p>
まとめ (10分)	<ul style="list-style-type: none"> 結果をまとめ、反応式をたて、酸化剤と還元剤を区別する。 	<ul style="list-style-type: none"> 各自が実験結果をワークシートに記入するよう指導する。 	<ul style="list-style-type: none"> 実験の反応式は次回までに作成させる。 実験結果は各自が確実に得るようにする。 	<p>【知識・理解】 得られた結果から反応式を導ける。 (実験ワークシート作成、完成後提出)</p>

7 単元全体の学習の経過

(1) 授業の様子

酸化・還元の基本概念的な概念と酸化数の決定法を理解したら、酸化または還元された物質を見つけられるかどうかを、順に質問をして答えさせ、その様子を記録し評価の対象とした。

<設問例>

問 H₂SO₄のS原子の酸化数はいくつか？

解 +VI

酸素を含む化合物中の原子の酸化数を算出できるか否かをチェックした。少なくともクラス全

員に一問は質問した。正答でなくても、酸化数の概念を基に導き出そうとする努力をしたかどうかで判断した。評価は答えようとしたら○、しなかったら×とした。「関心・意欲・態度」及び「思考・判断」が主な評価の観点になった。

(2) 実験の様子

酸化還元反応の実験は色の変化で反応を知るため、図説等で色の変化の意味を確認しておいた。反応は等量点付近では1滴の滴下で終点に達してしまうので、試薬の取り扱いについて指導してまわった。普通に実験に取り組んでいる生徒はBの評価を与え、目立ってしっかり取り組んでいる生徒はAと評価し、取組の様子が不真面目な生徒にはCの評価をした。「関心・意欲・態度」及び「技能・表現」が主な評価の観点となった。

(3) 実験レポート

実験ワークシートの中に記入欄を設け、考察も含めて解答させた。

〈実験①の解答記入例〉

① KMnO_4 (硫酸酸性) + H_2O_2

変化の様子	KMnO ₄ 溶液の色		H ₂ O ₂ を加えたとき		
	赤紫	→	透明		
KMnO ₄ の変化	MnO ₄ ⁻	→	Mn ²⁺		KMnO ₄ の働き
Mnの酸化数の変化	+VII	→	+II		酸化剤
H ₂ O ₂ の変化	H ₂ O ₂	→	O ₂		H ₂ O ₂ の働き
Oの酸化数の変化	-II	→	0		還元剤



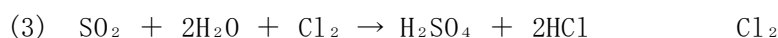
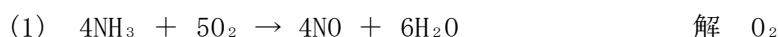
実験ワークシートの解答の状況に応じて点数化した。「知識・理解」が評価の観点になった。

(4) 定期考査

総合的に問題の配分を考え出題し、「知識・理解」及び「思考・判断」、「技能・表現」が主な評価の観点になった。

〈出題例〉

[4] 次の酸化還元反応で酸化剤はどれか化学式で答えなさい。【知識・理解】



8 本時の様子

授業が始まり約10分ほど実験方法と注意点を説明した。その際生徒はワークシートを読みつつ必要事項のメモを取っていた。その後、生徒は各種酸化剤と還元剤の組み合わせで反応させる実験を始めると、その時の水溶液の色の変化や気体の発生状況などを観察し、必要なデータを書き留めていた。試験管やピペットの取り扱いの様子や手際を観察し「技能・表現」の観点で評価した。積極的にかつ上手に行っている生徒4人にAと評価し、それ以外の生徒はBと評価し、Cと評価した生徒はいなかった。基本的に分担して実験に取り組んでいたが、その中でもリーダー性を発揮している生徒が高い評価になった。

実験が早く終了した生徒はワークシートの考察部分の完成に取り組んでいた。この時点で正答に対する説明を求める生徒が出たが、考え方を導くような回答にとどめ、後日の提出までに各自で調べさせた。ただし、実験のデータを読み取れているのか疑問を感じるような質問については、そのデータの読み方を指導した。具体的には「色の変化が何を意味しているのか」等である。

9 単元の観点別評価の総括

(1) 関心・意欲・態度

授業の様子では、ほとんどの生徒はノートをとりながら酸化還元の説明を聞き、集中して授業に取り組んでいた。実験中においては、意欲的に実験や実験ワークシートに取り組む様子が見取れた。また、集中力を欠きそうになる生徒には注意を与え、その後すぐに改善した場合はC評価とはしなかった。ここでは、「関心・意欲・態度」を判断したが、10時間を通した場合、全員B評価となった。

(2) 思考・判断

酸化数や物質変化に伴う量的関係などの問いかけに対して全員が、基本となる酸化・還元概念や量的関係を基に答えようと努力をしていた。設問はなるべく毎時間5人ほど指名できるように考え実施したが、内容は量的関係の計算であったり、物質変化に関する既習知識であったりしたため、難易度にはかなり差が出た。そのため正解かどうかを直接評価に結びつけにくいものであったので、設問に対しての正誤よりも、各生徒が化学変化や酸化還元概念に基づき、どの程度まで化学的に考える姿勢を示すかに重点をおいた。便宜的に○×で評価したところ、全員が○という結果であった。また、実験ワークシートへのデータ記入でも評価するつもりでいたが、その部分は班の代表生徒のデータを写す作業で行われているので、評価対象から外した。

したがって、この観点の評価は、「授業中の質問」と「定期考査」で行い、A段階は9人、B段階は30人、C段階は1人という結果であった。

(3) 技能・表現

実験に対する姿勢は各自の意欲も高く、生徒は班ごとに別れて皆真剣に取り組んでいた。特に積極的に化学操作の手順を理解し、他の生徒に指示する様子が見られたり、実験操作が目立って上手に行われていると判断した場合にはAと評価した。実験中に教員の指示に反する行動は見受けられず、皆興味を持って実験データの収集に努めている様子が観察できた。実験の手順がよくわからないとの質問を受けたが、質問することによる本人の積極性は評価できるが、質問をせず適切に進めているグループもあり、必ずしも質問をする生徒が高い評価を得るものではなく、評価としてはあまり差がつかないと判断した。

この観点の評価は、「実験中の観察」と「定期考査」で行い、評価結果は、A段階は4人、B段階は36人、C段階は0人という状況であった。

(4) 知識・理解

実験レポートには、データ記載欄と考察記載の欄を設けてあるワークシートを用いた。しかし、班としてデータを得ているので、ワークシートの作成においても協力する姿勢が見られ、レポートの完成度に差が出るが個人の力とは判断しにくい側面があるため、評価対象は実験の結果等に対する考察の部分だけにした。

この観点の評価は、「実験レポート」と「定期考査」で行い、評価結果は、A段階は12人、B段階は22人、C段階は6人という状況であった。

10 今後の課題

教員側の授業に向かう姿勢は、内容説明・「知識・理解」に終始した授業を行うのではなく、生徒を時間ごとによく観察し、設問を用意し、記録を取れるような工夫が必要であると考え。1時間でクラス全員に対して4観点すべての評価はできないが、ある一定の期間中に同様な評価の機会が全員に生じるような授業展開も考える必要がある。実際に評価を行うと、評価方法によっては忙しい授業展開になってしまう懸念もあるので、評価方法や授業方法を工夫する必要がある。また、中間で一度評価を出すことにより、レポートの点数が低い場合などは、学期末に向けて具体的な授業改善や指導が行いやすくなるであろう。

実践事例2 生物IB 「生命の連続性」

- 1 実践期間 平成15年9月5日～10月2日
- 2 単元名(学年) 生殖(2年)
- 3 単元の目標
様々な生物の生殖の方法と仕組みを理解し、生物の生活している環境と関連付けて考える。
- 4 単元の指導計画(9時間扱い)

第1次 無性生殖	1時間	
第2次 有性生殖と減数分裂	2時間	
第3次 植物の生殖と生活環	5時間	(本時はその5時間目)
第4次 動物の配偶子形成と受精	1時間	

5 単元の評価計画

(1) 評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断	観察・実験の技能・表現	知識・理解
<ul style="list-style-type: none"> ・ 様々な生物の生殖法の共通点・相違点に興味をもち、身近に見られる現象と関連付けて理解しようとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 有性生殖により遺伝的多様性がもたらされることを、減数分裂を含む配偶子形成の過程および受精と関連付けて考えることができる。 ・ 様々な生物の生殖法と生活様式の関連を考察することができる。 ・ 測定結果から花粉管伸張速度を求めることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 減数分裂による染色体構成の変化を図示することができる。 ・ 花粉管の長さを経過時間を追って測定し、表にまとめることができる。 ・ 花粉および花粉管を的確にスケッチすることができる。 ・ 陸上植物の配偶体・胞子体を図示することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 無性生殖と有性生殖の相違点について理解している。 ・ 減数分裂の過程と有性生殖における意義について理解している。 ・ 陸上植物の生活環・世代交代について理解している。 ・ 動物の配偶子形成の過程と受精について理解している。

(2) 評価計画 ※太枠内が本時 【 】は評価方法

時	学習内容	評 価 項 目			
		関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
1	生殖の意義を認識し、無性生殖の具体的方法について理解する。	様々な生物の生殖法に興味をもち、理解しようとする。	身近な生物が行っている無性生殖を、分裂・出芽胞子生殖・栄養生殖のいずれかに正しく分類することができる。		無性生殖によって得られた子孫が、遺伝的に親と同質であることを理解している。 4種の無性生殖の

			できる。		方法の共通点と相違点を正しく理解している。
		【観察】	【定期考査】		【定期考査】
2 ・ 3	配偶子の合体という過程をもつ有性生殖によって、多様な遺伝的性質をもつ子孫が作られることを認識し、減数分裂の意義と過程を理解する。	ヒトや身近な生物が行っている有性生殖の意義に興味をもち考えようとする。 【観察・ワークシート】	有性生殖により多様な遺伝的性質をもつ子孫が得られることを、減数分裂により配偶子が形成されることと関連させて考えることができる。 【ワークシート・定期考査】	減数分裂の結果、染色体の構成がどのように変化するかを図示することができる。 【ワークシート】	有性生殖が配偶子の合体(接合)によるものであることを理解している。減数分裂の過程と、減数分裂の結果、染色体数が半減することの意義を理解している。 【ワークシート・定期考査】
4	コケ植物とシダ植物の生活環について理解する。	通常目にするコケやシダの植物体がそれぞれ生活環のなかの一時期の姿であることに興味をもち、理解しようとする。 【観察】	世代交代と核相交代が受精と減数分裂によっておこることを考えることができる。 【定期考査】		コケ植物とシダ植物の生活環を配偶体と孢子体の世代交代、および単相世代と複相世代の核相交代としてとらえ、理解している。 【定期考査】
5 ・ 6	被子植物の配偶子形成と重複受精および種子の形成について理解する。	身近な被子植物の配偶子形成から種子の形成までの過程に興味をもち、理解しようとする。 【観察】	被子植物の花の構造と配偶子形成の過程および果実の構造や種子のつきかたを関連させてとらえることができる。 【定期考査】		胚のう形成、花粉形成および重複受精の過程を理解している。胚と種子の形成過程を理解している。 【定期考査】
7	花粉管の伸長する様子を観察し、被子植物の配偶子形成についての理解を深める。	目的を理解して観察し、レポートを作成することができる。 【観察・実験レポート】	測定結果から花粉管伸張速度を求めることができる。 【実験レポート】	花粉管の長さを経過時間を追って測定し、表にまとめることができる。花粉および花粉管を的確にスケッチできる。 【実験レポート】	
8	コケ植物、シダ植物、被子植物の生活環を比較	陸上植物の生活環・世代交代の相違点に興味をもち、	陸上植物の生活環・世代交代の相違点を陸上生活への	陸上植物の配偶体・孢子体を図示することができる。	コケ植物、シダ植物、被子植物の生活環・世代交代の

	し、陸上生活への適応との関係を考察する。	理解しようとする。 【観察・ワークシート】	適応という視点で考えることができる。 【ワークシート】	【ワークシート】	共通点と相違点を理解している。 【ワークシート・定期考査】
9	動物の精子形成・卵形成の過程および受精の方法と過程について理解する。	動物の配偶子形成の過程に興味をもち、理解しようとする。 いろいろな動物の受精の方法を生活様式と関連付けて考えようとする。 【観察】	精子形成と卵形成の相違点を精子と卵の役割の違いと関連付けて考えることができる。 動物の生活様式と受精の方法を関連付けて考えることができる。 【定期考査】	【ワークシート】	精子形成・卵形成の過程を理解している。 体外受精・体内受精および受精の過程について理解している。 【定期考査】

(3) 観点別評価について

【関心・意欲・態度】

学習活動における具体的評価規準	・様々な生物の生殖の方法と仕組みに興味をもち、身近な例をもとに考えようとする。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	・身近な生物の生殖法を図説などの参考資料をもとに、積極的に調べ整理しようとする。 ・生物による生殖法の相違点についても意欲的に考えようとする。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	・身近な生物に関する情報量が少ないことが原因と思われる生徒には、コケ植物・シダ植物の実物や図説などの参考資料の写真を例示し、関心に結びつける支援をする。

【思考・判断】

学習活動における具体的評価規準	・いろいろな生物の生殖の方法を生物の生活様式と関連付けて考察することができる。 ・測定結果から花粉管伸張速度を求めることができる。 ・減数分裂と有性生殖の意義について遺伝的多様性という側面から考察することができる。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	・陸上植物の生活環の相違点を、水に頼らない受精の方法を獲得してきた過程と関連付けて考察できる。 ・動物における精子形成と卵形成の相違点をそれぞれの配偶子の役割の違いと関連付けて考察できる。 ・動物の体外受精と体内受精を生育場所と関連付けて考察できる。 ・有性生殖により遺伝的多様性がもたらされること、配偶子形成の過程で減数分裂がもつ意義について考察できる。 ・定期考査において80%以上の確に解答している。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒へ	・いろいろな生殖の方法、減数分裂の過程についての知識が身に付いていないことが原因と思われる生徒には、まず最も身近であるヒトや被

の手だて	子植物の例で考えるよう助言する。
------	------------------

【技能・表現】

学習活動における具体的評価規準	<ul style="list-style-type: none"> 花粉管の長さを時間を追って測定し、伸長速度を求めることができる。 減数分裂による染色体の構成の変化を図示できる。 陸上植物の配偶体・孢子体を図示できる。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	<ul style="list-style-type: none"> 時間ごとの花粉管の長さのデータを表にまとめることができる。 的確なスケッチができる。 的確に図示できる。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	<ul style="list-style-type: none"> 不十分・不的確な部分について、レポート・ワークシートに朱書き返却する。

【知識・理解】

学習活動における具体的評価規準	<ul style="list-style-type: none"> 生殖の意義、無性生殖の方法、有性生殖と減数分裂、陸上植物の生活環、動物の配偶子形成と受精について理解し、知識として身に付けている。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	<ul style="list-style-type: none"> ワークシートで知識を問う部分において、90%以上正しく記入している。 定期考査で知識を問う部分において、80%以上正解している。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	<ul style="list-style-type: none"> 定期考査後にレポートを課し、基本的知識を確認させる。

6 本時の展開

(1) 本時の目標

コケ植物、シダ植物、被子植物の生活環がいずれも世代交代としてとらえられることを理解し、それぞれの生活環・生殖法の相違点を陸上生活への適応という視点で考える。

(2) 本時の指導過程

過程	学 習 活 動	指 導 内 容	指 導 上 の 留 意 点	評 価 観 点 (方 法)
導入 (5分)	<ul style="list-style-type: none"> 前時までの学習の復習をし、本時の目標を理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> 前時までの学習を振り返らせ、本時の目標を説明する。 		
展開 (40分)	<ul style="list-style-type: none"> 学習したコケ植物、シダ植物の生活環をもとに植物の世代交代についてまとめる。 被子植物の配偶子形成・重複受精・種子の形成の過程 	<ul style="list-style-type: none"> ワークシートを配布し、学習した内容を整理させ、陸上植物の生活環・世代交代について考察させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 今まで学習した内容の理解が不十分な生徒には、適時助言をする。 植物の世代交代についての理解が十分であるかどうか 	<p>【関心・意欲・態度】</p> <ul style="list-style-type: none"> 陸上植物の生活環・世代交代の相違点に興味をもち、理解しようとする。(観察・ワークシート) <p>【知識・理解】</p>

	<p>を世代交代としてとらえ、まとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コケ植物、シダ植物、被子植物の無性世代と有性世代を比較する。 ・生活環・生殖法の相違点を陸上生活への適応という視点で考察する。 		<p>を考慮して、被子植物の世代交代について考えさせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・参考として、裸子植物の配偶子形成、受精についても言及する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・コケ植物、シダ植物の各時期の名称、胞子体、配偶体の区別ができています。 ・コケ植物、シダ植物、被子植物の胞子体、配偶体の相対的大きさ、出現する期間の比較をすることができます。 (ワークシート) <p>【技能・表現】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・陸上植物の配偶体 <ul style="list-style-type: none"> ・胞子体を図示することができる。 (ワークシート) <p>【思考・判断】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・被子植物の配偶子形成、受精の過程の各時期が、植物の世代交代の何に相当するか考えることができる。 ・コケ植物、シダ植物、被子植物の生活環の相違点を陸上生活への適応という視点で考察できる。 (ワークシート)
<p>まとめ (5分)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートを完成させ提出する。 			

7 単元全体の学習の経過

全体を通して生徒は真面目に授業に取り組んでいたが、「知識・理解」のウエイトが高い内容の単元ということもあり、授業を受ける姿勢に受動的傾向があった。2回のワークシートを導入したことにより、多少なりとも自ら考える姿勢を誘導できたのではないかと考えている。

例えば、1回目のワークシートでは、すべての質問事項に未記入で提出した生徒がいた。授業態

度は、他の生徒同様真面目で特に目立つことのない生徒だったので意外だったが、その後の授業でよく観察してみると、自ら考えることよりも正解を知ることには重きを置く傾向の強い生徒であることがわかってきた。またこの生徒ほどではないにせよ、同様の傾向をもつ生徒が多数いることにも気づいた。個々の生徒に個別には指導しなかったが、次の授業でチェックしたワークシートを返却した折、ワークシートを提出させた主旨を再確認し、その後の授業ではなるべく考えさせる問いかけをするように努めた。その結果、提出された2回目のワークシートでは、未記入の生徒はおらず、全体的な取組状況も1回目よりも好転したと判断できる。

定期考査では、本単元に関する内容の問題の得点率は、平均で77%、最低点の生徒でも50%であった。目標の「生殖の方法と仕組みを理解する」という部分については、大部分の生徒がほぼ達成できたのではないかと考えている。

8 本時の様子

当初はワークシートに小テスト的な意味をもたせようかとも考えていたが、実際には、ワークシートに取り組むとき、教科書やノートを見たり周囲と話をしながら考えることも許可した。ワークシートの流れが、前時までの内容を整理した上で考察するようになっていたため、「知識・理解」そのものを問うよりも、自ら内容をまとめ、知識を身に付け、理解を深めることを評価した方が適切であると判断したからである。前時までの内容に関する疑問点を質問する生徒も何人もおり、「知識・理解」を深めるという意味では適切であったと考えている。最後の問いに答えさせる前に、「陸上生活への適応」という視点で考察することや、コケ植物・シダ植物と被子植物の受精法の違いについて再確認をしておいたので、的はずれな考察を行った生徒はほとんどいなかった。全体として本時の主旨をよく理解して取り組んでいた。

9 単元の観点別評価の総括

(1) 関心・意欲・態度

今回の評価方法で特に従来と異なるのは、毎時間の学習状況を評価し記録したこと、あらかじめ評価基準を定めた2種のワークシートを授業中に行い、評価対象としたことの二点であり（従来より実験レポートによる評価は行っていた）、この観点の評価は、毎時間の学習状況の観察と3回の提出物（ワークシート2回・実験レポート1回）の記入状況・提出状況で行った。

学習状況の観察では、結果として、すべての生徒が毎時間B評価となってしまった。基本的に真面目に取り組む生徒達であり、Cと評価する者は想定していなかったが、A（自ら積極的に質問するなど意欲的に取り組んでいる等）と評価できる者がいなかった、あるいはそのように見取れなかったことは指導者として反省すべきだと考えている。「受動的な意欲」は十分にある生徒達なので、「能動的な意欲」を引き出す工夫（興味・関心・疑問を誘発するような教科書的でないトピック的内容の提示等）をもっとすべきであったと思い、評価方法などを含め、今後の課題としたい。この観点の評価結果は、A段階が11名、B段階が24名、C段階が1名という状況であった。

(2) 思考・判断

この観点の評価方法は、定期考査とワークシート・実験レポートを用いた。2種のワークシートを用いたことは、特に「思考・判断」を評価する上で有効であったと考えている。単元の内容上、授業を進めながら、多数の生徒を相手に思考を求める発問をするのは困難である。また、定期考査の問題でも、基になる「知識・理解」が確かであれば確かな思考はできないので、「思考・判断」を単独で評価するのは難しい。ワークシートの配置を、基になる「知識・理解」の確認後に思考を

伴う設問としたこと、実際の授業では生徒の状況に応じて指導者が生徒の思考を誘導することができることなどにより、生徒に思考させることが少なくとも従前よりは改善できたと考えている。

「思考・判断」の評価結果は、A段階が4名、B段階が31名、C段階が1名であり、概ね妥当であると判断している。Cと評価した生徒は、欠席により2回提出物が未提出であった者である。以下にこの観点の評価資料を示す。

ア、2学期中間考査

2学期中間考査の内56%（56点相当）が「生殖」に関するものであった。56点の内14点が「思考・判断」に該当する内容であった。

イ、ワークシート・実験レポート

①「減数分裂・配偶子形成について」

- ・ $2n = 4$ の体細胞が減数分裂すると4種類の染色体構成をもつ配偶子が形成されることを考えることができる。→2点～0点
- ・ 4種の配偶子の組み合わせで子供の染色体構成が何種類になるか考えることができる。→2点～0点
- ・ $2n = 6$ の体細胞が減数分裂すると8種類の染色体構成をもつ配偶子が形成されることを考えることができる。→2点～0点

②「陸上植物の世代交代について」

- ・ 被子植物の各時期が世代交代のどの段階に相当するか考えることができる。→3点～0点
- ・ 陸上植物の配偶体・孢子体の比較ができる。→3点～0点
- ・ 陸上植物の受精の様式の違いを、水に頼らない受精の方法の獲得という視点で考察できる。→3～0点

③実験「花粉管の伸長の観察」レポート

- ・ 測定結果から伸長速度を求めることができる。→3点～0点

*計32点～0点、単元の観点別評価は、27点以上A、13点以上B、12点以下Cとした。

(3) 技能・表現

この観点の評価については、2種のワークシートと2種の実験レポートを採用したが、評価材料が少なく、この単元内だけでの評価は妥当であるかについては疑問をもっている。学期・学年の評価の一要素としては概ね妥当であろう。この観点の評価結果は、A段階が9名、B段階が24名、C段階が3名であり、Cと評価した生徒は欠席により2回提出物が未提出であった者である。以下にこの観点の評価資料を示す。

ア、ワークシート、実験レポート

①「減数分裂・配偶子形成について」

- ・ 染色体の構成を図示できる。→2点～0点

②「陸上植物の世代交代について」

- ・ ワークシートの図における陸上植物の配偶体を正確に塗りつぶすことができる。→3点～0点

③実験「花粉管の伸長の観察」レポート

- ・ 花粉管の長さを時間経過を追って測定することができる。→3点～0点
- ・ 花粉および花粉管のスケッチを的確にすることができる。→3点～0点

*計11点～0点、単元の観点別評価は10点以上A、4点以上B、3点以下Cとした。

(4) 知識・理解

この観点の評価方法は、定期考査とワークシートで行い、評価結果はA段階が17名、B段階が19名、C段階が0名であり、概ね妥当であると判断している。この単元の内容が比較的理解しやすく、定期考査の得点率も高かった。以下にこの観点の評価資料を示す。

ア、2学期中間考査

2学期中間考査の内56% (56点相当) が「生殖」に関するものであった。56点の内42点が「知識・理解」に該当する内容であった。

イ、ワークシート

①「減数分裂・配偶子形成について」

- ・減数分裂によって染色体数が半減する(相同染色体が分配される)ことを理解している。
→2点～0点

②「陸上植物の世代交代について」

- ・植物の世代交代について理解している。→6点～0点

*計50点～0点、単元の観点別評価は40点以上A、29点以上B、28点以下Cとした。

10 今後の課題

4観点を念頭に評価を行うには、従来よりも評価の機会を増やしそのデータを蓄積していくことが必要となる。限られた授業時数の中でいかに授業進度・内容を低下させることなく評価を行うかがもっとも大きな課題であろう。特に、生徒全員について毎時間授業内容に即した「関心・意欲・態度」の評価を行うのは非常に難しいと痛感している。効率的な評価方法を工夫していかなければならないだろう。

今回は「生殖」の単元での実践であったが、この単元は、内容的に「知識・理解」の評価のウエイトが高くなる傾向がある。一方、例えば「細胞」の単元では「技能・表現」のウエイトが高くなり、「遺伝の規則性」の単元では「思考・判断」のウエイトが高くなることが予想される。本単元の評価規準を設定するにあたって、特に「技能・表現」、「思考・判断」の観点の評価をどのような機会にどのような方法で見取ることができるかを考えさせられた。4観点のバランスという視点では本単元の評価規準は妥当であったと考えているが、ワークシートに図示したり図を塗りつぶしたりする作業を、「技能・表現」の評価対象として敢えて導入した面も否めない。

科目全体の目標に照らして妥当な4観点のウエイトと、各単元の4観点の評価を合計したものとの間の整合性をどのように考えるべきなのかについては、今後議論となるところではないだろうか。

実践の中で、4観点の視点を念頭においた規準に従って提出物や定期考査の答案を評価してきた。その過程で、今までは見逃してきた生徒の学びの状況を知る場面が多々あった。真面目に取り組んではいるが受身的な姿勢が強く主体的に理解し考えようとする意欲が低い生徒、あるいは逆に定期考査の素点にはあまり反映されていないが授業中主体的に考えようとしている生徒がいることを、データをもとに再認識した。これから取り組むべき課題はあるが、観点別評価を通して得られた新たな発見を今後の指導に生かし、いかにすれば生徒の興味・関心を喚起し主体的に考えさせることができるかということ、研究していきたいと考える。

実践事例 3 物理Ⅱ 「電気と磁気」

1 実践期間 平成15年10月17日～11月11日

2 単元名(学年) 電磁誘導(3年)

3 単元の目標

電流と磁場に関する諸現象を、観察、実験を通して探求し、その基本的な原理・法則と基本的な概念を系統的に理解する。

4 単元の指導計画(8時間扱い)

第1次 電磁誘導の法則

電磁誘導の法則	2時間
磁場中を横切る導線と誘導起電力	1時間
誘導起電力とローレンツ力	1時間
渦電流(実験)	1時間(本時)

第2次 インダクタンス

自己誘導	1時間
コイルに蓄えられるエネルギー	1時間
相互誘導	1時間

5 単元の評価計画

(1) 評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断	観察・実験の技能・表現	知識・理解
電磁誘導の観察・実験など、電流と磁場に関する現象に関心を持ち、観察・実験を進んで行う。	電流の変化が磁束を変化させること、そしてその磁束の変化がさらに電流を変化させることを論理的に考察することができる。	電磁誘導の観察・実験を行い、実験器具の取り扱い上の注意や基本操作を習得するとともに、記録の仕方を身に付け、考察を含めた創意ある実験報告書を作成できる。	観察・実験などを通して、電磁誘導に関する基本的な概念や原理・法則を理解し、知識を身に付けている。

(2) 評価計画 ※太枠内が本時 【 】は評価方法

時	学習内容	評価項目			
		関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
1	電磁誘導の現象について観察する。	積極的に演示実験を観察している。 【観察】	実験結果を考察し、誘導起電力の向き、大きさの法則性に気づくことができる。 【ワークシート】	磁石による磁束、コイルのつくる磁束や誘導電流を正確に図示できる。 【ワークシート・定期考査】	電磁誘導の法則について理解している。 【定期考査】
2	電磁誘導の法則について理解する。	実験結果より誘導起電力が何に関係するかを考えよう			電磁誘導の法則を理解している。

	[問題演習]	とする。 自力で問題に解答しようとする。 【観察】			【定期考査】
3	磁場中を運動する導体に生じる誘導起電力について理解する。	磁場中を運動する導体に生じる誘導起電力の大きさ・向きについて意欲的に理解しようとする。 【観察】			誘導起電力の大きさと向きを理解している。 【定期考査】
4	磁場中を運動する導体に生じる誘導起電力を電子にはたらくローレンツ力から求める。 [問題演習]	電子にはたらくローレンツ力から誘導起電力が説明できることを意欲的に理解しようとする。 自力で問題に解答しようとする。 【観察】	電子にはたらくローレンツ力からも説明できることに気づくことができる。 【観察】		電子にはたらくローレンツ力からも説明できることを理解している。 【定期考査】
5	渦電流の実験を行い、渦電流の発生について理解する。	渦電流によって運動する磁石に制動がかかることに興味をもち、積極的に協力し合って実験を行っている。 【観察】	渦電流が発生する原理を電磁誘導の法則より考えることができる。 【ワークシート】	回路を手際よく組み立て、実験結果をまとめることができる。 実験器具を注意して取り扱える。 磁石がつくる磁場、それが変化することにより発生する磁場や電流を正確に図示できる。 【観察 ・ワークシート・定期考査】	渦電流の発生する原理を理解している。 【ワークシート・定期考査】
6	自己誘導について理解する。	自己誘導が起こる原理について意欲的に理解しようとする。 【観察】		コイルを流れる電流と磁束の変化より、誘導電流の向きを図示できる。 【観察】	自己誘導の原理、自己インダクタンスについて理解している。 【定期考査】
7	コイルにたくわえられるエネルギーについて理解する。 [問題演習]	コイルがエネルギーを蓄える原理について意欲的に理解しようとする。 自力で問題に解答しようとする。 【観察】	L I - t グラフの面積がたくわえられるエネルギーになることに気づくことができる。 【観察】		コイルがエネルギーを蓄えることを理解している。 【定期考査】

8	相互誘導について理解する。 [問題演習]	相互誘導が起こる原理について意欲的に理解しようとする。 自力で問題に解答しようとする。 【観察】	電磁誘導の法則から相互誘導が起こる原理を考える。 【観察】	一次コイルの電流と磁束の変化より二次コイルの電流と磁束の変化を図示することができる。 【観察】	相互誘導の原理、相互インダクタンスを理解している。 【定期考査】
---	-----------------------------	---------------------------------------------------------------	---------------------------------------------	---------------------------------------------------------------	------------------------------------------------

(3) 観点別評価について

【関心・意欲・態度】

学習活動における具体的評価規準	<ul style="list-style-type: none"> ・実験について積極的・協力的に行動できる。 ・問題演習において自力で解答しようとする。 ・説明をよく聞き、ノートやワークシートに丁寧に記入している。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	<ul style="list-style-type: none"> ・実験において、金属の厚さによる磁石の運動が変化したことを考察している。 ・質問に対して、積極的に回答しようとする。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	<ul style="list-style-type: none"> ・実験の準備・片づけ、操作を行うように注意を促す。 ・正解が板書されるまで待つ生徒に対して、必要な式など、ヒントを与える。 ・ノート・ワークシートの記入を促す。

【思考・判断】

学習活動における具体的評価規準	<ul style="list-style-type: none"> ・磁場の変化により誘導起電力が生じ、回路が閉じている時には電流が流れる理由を考察できる。 ・実験結果を考察し、誘導起電力の向き、大きさの法則性を考えることができる。 ・渦電流が発生する原理を電磁誘導の法則より考えることができる。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	<ul style="list-style-type: none"> ・金属板の厚さを変えた時に起こる現象の変化を考察できている。 ・磁界の変化により発生する誘導起電力、誘導電流の向きを説明できる。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	<ul style="list-style-type: none"> ・一つ一つの手順を丁寧に行わせ、比較した結果から何がわかるかを問いつつ実験を進めさせる。 ・右ねじの法則やフレミングの左手の法則など実際に手を使わせて、方向を確認させる。

【技能・表現】

学習活動における具体的評価規準	<ul style="list-style-type: none"> ・外部からの磁場、それが変化することにより発生する磁場や電流を正確に図示できる。 ・回路を手際よく組み立て、実験結果をまとめることができる。 ・実験器具の取り扱いに十分注意を払っている。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	<ul style="list-style-type: none"> ・磁石の運動を妨げる力が発生する理由を、図を用いてレンツの法則から正確に説明できる。 ・実験の目的を考えながら、回路を組み立てることができる。 ・実験器具の取り扱い方のポイントや安全な使用法を十分に理解して扱っている。

「努力を要する」状況 (C)と評価した生徒への手だて	<ul style="list-style-type: none"> ・実態配線図を参考に、回路を組み立てるように指導する。 ・実験器具を丁寧に扱うように注意する。 ・不十分なレポートについては朱書きして返却する。
-------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

【知識・理解】

学習活動における具体の評価規準	<ul style="list-style-type: none"> ・電磁誘導に関する基本的な概念や原理・法則を理解し、知識を身に付けている。 ・問題演習において級友や教師に質問しながらも自力で解くことができる。 ・渦電流の発生する原理を理解している。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的な状況例	<ul style="list-style-type: none"> ・定期考査において約80%以上正解できる。 ・渦電流の発生について磁束の変化から説明でき、その利用方法なども理解している。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	<ul style="list-style-type: none"> ・定期考査後にレポートを課し、基本事項を再確認させる。

6 本時の展開

(1) 本時の目標

渦電流の実験を行い、渦電流が発生する原理について理解する。また、検流計の取り扱いについて学ぶ。

(2) 本時の指導過程

過程	学 習 活 動	指 導 内 容	指 導 上 の 留 意 点	評価観点(方法)
導入 (10分)		<ul style="list-style-type: none"> ・磁束の変化から電流を発生し、同時にその変化を妨げる向きに磁束ができることを確認させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ネオジウム磁石は強力なため時計などに近づけないよう注意する。 	
展開 (30分)	実験内容の確認 [実験1] 磁石の磁極の決定 [実験2] 磁石の振り子	<ul style="list-style-type: none"> ・レンツの法則を再度確認しながら、コイルの巻き方向、検流計に流れる電流の向きを確認させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・検流計の取り扱い(振動注意)と検流計の針の振れと電流の向きに注意させる。 ・各班の進行状況を見て次の実験に移る指示を出す。 ・磁石のバランスをしっかりとれるように指示する。 ・磁石と金属版の隙間が大きくなるように注意する。 	【関心・意欲・態度】 渦電流によって運動する磁石に制動がかかることに興味をもち、積極的に協力し合って実験を行っている。(観察) 【技能・表現】 回路を手際よく組み立て、実験結果をまとめることができる。また、実験器具を注意して取り扱える。(観察・ワークシート)

	[実験3] 金属管を落下する 磁石 実験終了 片づけ 実験レポート作成	・金属管の上から落下する磁石の運動を観察させる。	・磁石を落下させる際、下に緩衝材を置き、破損を防ぐよう注意する。 ・検流計をしまうときは端子を短絡しておくことを注意する。	【関心・意欲・態度】 金属管の種類など条件を変えて観察する。 (観察)
まとめ (10分)	実験結果の確認 実験レポートの提出		・考察をもとに評価することを伝える。	【思考・判断】 渦電流が発生する原理を電磁誘導の法則より考えることができる。 (ワークシート) 【知識・理解】 渦電流の発生する原理を理解している。 (ワークシート)

7 単元全体の学習の経過

今回、4つの観点での評価を行うに当たって今までと大きく異なる点は、データの収集が難しいということである。従来の評価方法ではテストの得点やレポート・ノートの提出、出欠席などのデータを用い、授業が終わり成績をつける段階でまとめて評価することが多かった。しかし、4つの観点で評価する場合には授業中の様子（発言、質問、態度等）をこまめに記録する必要がある。問題を黒板で解答したり、質問に対して答えたりする生徒を授業中に記録をすることは以前もあったが、全ての生徒に対して授業中の様子を記録することは、非常に難しかった。この単元での評価でも出欠席による差はでたが、取組の良くない一部の生徒以外のほとんどの生徒は出席している授業についてはBの評価であり、普段の授業で積極的に取り組んだ生徒を見取ることができなかったため、Aと評価した生徒はいなかった。この部分については教員側が生徒を観察し、授業中に効果的に記録する方法を工夫する必要があると思われる。

中間考査の素点を4つの観点で集計したが、問1の(1)は「思考・判断」、(2)は「知識・理解」というように、4つの観点をバラバラに配置してしまったため、集計作業には時間がかかった。集計時間を短縮するために観点別に問題を配置することも考えたが、生徒に混乱を与えることにもなると思われたので、今まで通りの出題形式をとった。今回は少数の生徒に対して検証のため行った作業であったが、多くの生徒を対象とする場合には試験の出題形式にも工夫が必要であろう。

物理に対する興味が薄れてしまっている生徒であっても、元はそうではなかったはずである。ある時、授業がわからなくなり、試験の点数が取れず、「知識・理解」を重視する形で評価されてしまえば、評価は悪くなってしまう。しだいに授業への取組、すなわち「関心・意欲」も薄れてきてしまう。結果として「態度」の部分でも良い評価がされなくなり、学期末の通知票をみて、学習することをあきらめてしまうケースも多かったのではないと思われる。

生徒の記録をする際、今までは授業の取組不足や授業妨害などマイナス的なものを記録するケースがほとんどであった。今回、授業中の生徒の様子を記録することにより、マイナス的な要素だけでなく、プラス的な要素を見つけようと心がけてきたが、それを次の授業に活かすことは難しかった。

8 本時の様子

3年理系の物理選択クラスなので、科学的興味や数学的な力をもっている生徒が多い。しかし、例年3年生のこの時期になると推薦で進路先が決まっていたり、他の科目で受験するなどの理由から授業に対する集中力がとぎれてしまう生徒が出てくる。このクラスも例外ではなく、そうした生徒が数名おり、普段の授業ではノートをとることなく他科目の学習をしていたり、集中していないという状態がみられた。本時に行った渦電流による制動の実験は教科書に記載されていない内容であるが、単調な測定がなく現象の変化がわかりやすいため、普段の授業で取組が不足がちな生徒も興味を示すのではないかと考えて取り入れてみた。その意味では本時の目的は達成できたと思う。しかし、50分の授業で3つの実験を入れたため、時間に追われてしまう状態になり、金属板の厚さに関して考察させることが不十分になってしまったのは残念である。また、机上の金属板の上を素早く磁石を動かし金属板の運動を観察したり、磁石の振り子を静止させ金属板を動かすなど、実験手順にはない実験をしている生徒が出てきており、そうした生徒の反応に対応できるような時間的な余裕をもつべきであった。

今回、実験の様子については座席表に記録する形で用意はしたが、いざ授業が始まってしまうと記録のために教卓に戻るわけにもいかず、授業が終わってからまとめて記録するような状態になってしまった。特に、今回はこの授業が研究授業となっていたため、研究協議が終了した後、記憶を頼りに、記録を残す状態になってしまった。研究授業ではなくても日常の校務を行う中で授業が終了後にゆっくりと記録する時間があるわけではないため、記憶に頼らず正確な記録を残す方法を考えていきたい。

9 単元の観点別評価の総括

(1) 関心・意欲・態度

行動観察と提出物、出席で評価をしたが、4つの観点の中で一番難しく感じた。授業中の様子では他の生徒と比べて特出したものがないとAを与え難かったため、ほとんどの生徒がBの評価となった。今回は出席数を評価の対象としたため結果的にAの評価の生徒が多くなっている。授業中に生徒の「関心・意欲・態度」を見取り、記録することは難しく感じた。

- ・実験・観察のレポート 5点
 - A (5点): 全ての項目に記入されている。
 - B (3点): 未記入の項目がみられる。
 - C (1点): 未記入の部分がほとんどである。
 - D (0点): レポート未提出
- ・教科書の問題演習 10点
 - A (10点): 自力で問題に取り組んでいる。
 - B (5点): 自力では解けなかったが、板書を写している。
 - C (0点): 問題に取り組まない。
- ・ノートの記載内容 20点
 - A (20点): 全てノートに記入されている。
 - B (10点): 記入されていない部分がみられる。
 - C (5点): ほとんど記入されていない。
 - D (0点): 未提出
- ・授業の様子 3点×7時間(実験を除く) = 21点
 - A (3点): 積極的に授業に取り組んでいる。
 - B (2点): まじめに授業に取り組んでいる。
 - C (1点): あまり取組がみられない。
 - D (0点): 欠課

- ・実験の様子 10点
 - A (10点): 積極的に実験に取り組んでいる。
 - B (6点): まじめに実験に取り組んでいる。
 - C (3点): あまり取組がみられない。
 - D (0点): 欠課
- ・計 66点
 - A (66～52点) 17名 B (51～13点) 5名 C (12～0点) 0名

(2) 思考・判断

電磁誘導の現象等を図を用いて文章で説明させることで評価をしたが、生徒はそうしたことが苦手なようであり、Aを与えられる生徒が少なかった。説明する方法についての指導が必要であったと思われる。

- ・定期考査 8点×2=16点
- ・実験・観察のレポート 5点 [実験1]の誘導電流の向きから、磁石の極性を決定する際
 - A (5点): 考察がしっかりと書かれている。
 - B (3点): 考察が不完全である。
 - C (1点): 考察が未記入で結果のみが記入されている。
 - D (0点): レポート未提出
- ・教科書の問題演習 10点
 - A (10点): 正確な結果を導いている。
 - B (5点): 自力では解けなかったが、板書を写している。
 - C (0点): 問題に取り組まない。
- ・計 31点
 - A (31～25点) 3名 B (24～6点) 18名 C (5～0点) 1名

(3) 観察・実験の技能・表現

Cと評価した生徒(2名)は実験を欠課した生徒である。レポートから見取る部分が大きいため不利になってしまった。

- ・定期考査 4点×2=8点
- ・実験・観察のレポート 15点 [実験2]・[実験3]の考察について
 - A (15点): 金属の厚さに関する考察がされている。
 - B (10点): 渦電流により磁石に発生する制動が説明できている。
 - C (5点): 考察が未記入で結果のみが記入されている。
 - D (0点): レポート未提出
- ・実験の様子 10点
 - A (10点): 実験器具の取り扱いに十分注意をし、安全に実験を行っている。
 - B (6点): 手際よく回路を組み実験を行っている。
 - C (3点): あまり取組がみられない。
 - D (0点): 欠課
- ・計 33点
 - A (33～26点) 4名 B (25～7点) 16名 C (6～0点) 2名

(4) 知識・理解

主として、定期考査の素点が大きな要因となるが、今年度から二学期制になったため、後期中間の試験範囲が非常に広がっていたため平均点が低くなり、Aの評価を得た生徒は1名であった。

定期考査とは別に単元ごとの確認試験等を実施することも考えたい。

- ・定期考査 30点×2=60点
- ・実験・観察のレポート 5点 実験1の考察に関して
 - A (5点): 磁石のつくる磁場、コイルのつくる磁場、誘導電流が図示できている。
 - B (3点): 電磁誘導の法則から電流の向きを決定できている。
 - C (1点): 考察が未記入で結果のみが記入されている。
 - D (0点): レポート未提出
- ・教科書の問題演習 10点
 - A (10点): 正確な結果を導いている。
 - B (5点): 自力では解けなかったが、板書を写している。
 - C (0点): 問題に取り組まない。
- ・計 75点
 - A (75~60点) 1名
 - B (59~15点) 18名
 - C (14~0点) 3名

	関心・意欲・ 態度	思考・判断	観察・実験の 技能・表現	知識・理解	計
①定期考査		16点	8点	60点	84点
②実験・観察のレポート	5点	5点	15点	5点	30点
③教科書の問題演習	10点	10点		10点	30点
④ノートに記載内容	20点				20点
⑤授業の様子	21点				21点
⑥実験の様子	10点		10点		20点
計	66点	31点	33点	75点	205点

10 今後の課題

この単元で評価規準を作成するに当たって、今までの「知識・理解」を重視したものから、「関心・意欲・態度」も同等の重みをつける形で作成した。しかし、実験の回数がそれほど多くとれないために実験を欠席してしまった生徒については、普通の授業を欠席した場合と比べて著しく不利になってしまった。今回は再実験等は行う時間的余裕がなかったが、そうした配慮も必要であろう。

今回は3年理系の生徒を対象とした実践事例だが、本校の生徒の場合、ほとんどの生徒は授業への取組もよく、テストや実験レポート以外ではほとんど差がつかない状態であった。

また、実験に関して、1時間あたりの評価点は普通の授業と比べて大きくなるため、同じ1時間の欠席でも実験を欠席した生徒は他の生徒と比較して大きな減点となってしまう。実験の回数が多ければ大きな差にはならないが、現実的には、それほど多くの実験・実習を行うことは難しい。従って、欠席した生徒に対して著しく不利にならないような配慮が必要である。観点別評価を実施するに当たり、戸惑ったのは、授業中に様々な生徒の情報を記録しなければならないことである。問題を解いたり、発言した生徒について教務手帳に記録することは特に珍しいことではない。しかし、生徒がいろいろな考えを発言し、教員がそれに対応、返答しながら教務手帳等に全てを記録することは不可能であろう。また、生徒の行動一つ一つに対して、教員が教務手帳に記録している姿はどのように映るのだろうか。記録することによって授業の進行に支障の出ないようなスムーズに記録ができる方法を考えなければいけないと考える。

外国語（英語）

1 教科目標

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や相手の意向などを理解したり自分の考えなどを表現したりする実践的コミュニケーション能力を養う。

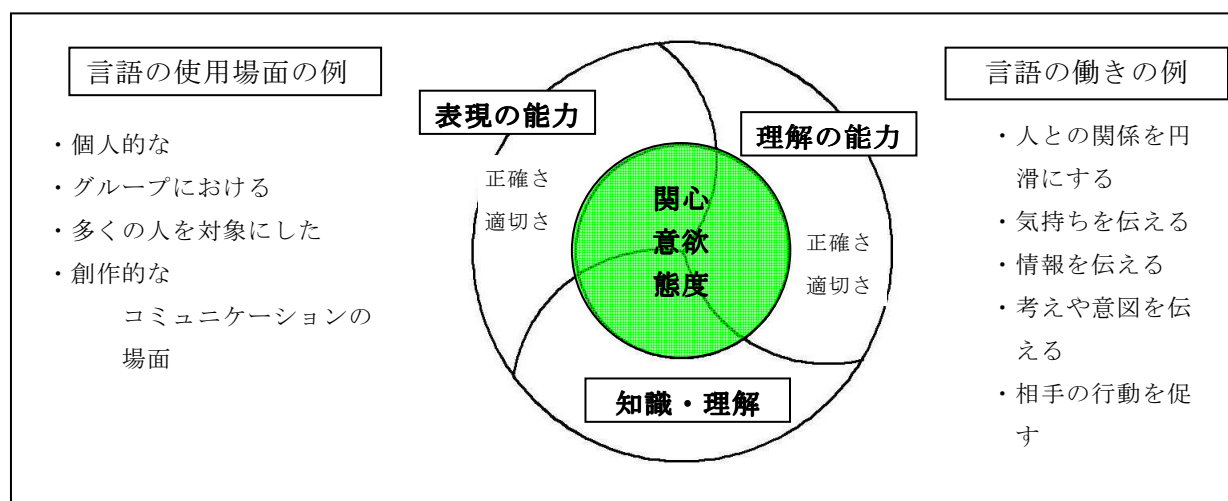
2 評価の観点及びその趣旨

関心・意欲・態度	表現の能力	理解の能力	知識・理解
コミュニケーションに関心を持ち、積極的に言語活動を行い、コミュニケーションを図ろうとする。	外国語を用いて、情報や考えなど伝えたいことを話したり、書いたりして表現する。	外国語を聞いたり、読んだりして、情報や話し手や書き手の意向など相手が伝えようとすることを理解する。	外国語の学習を通して、言語やその運用についての知識を身に付けるとともにその背景にある文化などを理解している。

3 外国語科における評価の留意点

(1) 学習指導要領と観点別評価

観点別評価における4つの評価観点は、学習指導要領に示された指導目標を、どのように評価していくか例示したものである。特に、今回の学習指導要領で新たに「言語の使用場面と働き」が明示されたことは、文法的な「正確さ」のみならず、場面や目的に応じて「適切に」コミュニケーションができる能力の育成とその評価が求められていることを表している（下図参照）。



(2) シラバスづくり

入学時の生徒のコミュニケーション能力を、1年間（あるいは3年間）でどこまで伸ばすかを視野に入れて、年間指導計画（シラバス）を作成する。細部にこだわりすぎず、まず学年・学期の具体的到達目標と評価規準を4観点ごとに設定し、年間の評価計画とともに生徒に知らせておけば、教員にとっても生徒にとっても明確な目的をもって授業展開を進められると考える。シラバスは、明確な目標設定で生徒の「やる気」を引き出すことにも活用できる。

授業を進めるにあたり、さまざまなルールを決めておくことがシラバス作成時の重要な要素である。以下に示す表は、シラバスの一部を構成する学年目標／評価規準の例である。

	学年目標 / 評価規準 (例: 英語 I)	評価方法
関心・意欲・態度	<ul style="list-style-type: none"> ○ 日頃から英語を使って、積極的にコミュニケーションをしようとする。(Classroom English, Pair Work, Group Work に取り組む) ○ 英語力の不足を補いながら、コミュニケーションを継続しようとする。(Communication Strategies を使っている) ○ 自ら工夫して英語を学習する態度や方法を身に付ける。 	日頃の授業の様子、 Pair Work ・ Group Work への取組状況の観察 Performance Test
表現の能力	<ul style="list-style-type: none"> ○ 既習の英語を活用して自分の伝えたいことを正確に話したり書いたりできる。(既習の語句・文法を使って1段落程度の文が書ける) ○ 場面や目的に応じた適切な表現を使ってコミュニケーションができる。(状況に応じて、適切な表現を話したり書いたりできる) 	Performance Test 課題作文・小テスト 定期考査・観察
理解の能力	<ul style="list-style-type: none"> ○ 比較的短い英文について正確なリスニングと内容理解ができる。 ○ さまざまなジャンルや文体の英文を聞いたり読んだりして、要点や意図が理解できる。(要点をメモしたり、英語での質問*に回答できる) * 特に意見や考えを求める質問。 	小テスト・定期考査 観察
知識・理解	<ul style="list-style-type: none"> ○ 授業で扱う項目について理解し、知識を身に付けている。 --- (例) 語および連語・文法・背景知識・段落の構造・文体の特徴・異文化コミュニケーションの知識, 英語の学習法など 	小テスト・定期考査 作文・英文日誌

(3) 目標を明確にした指導

観点別評価を意識することは、目標を明確にした指導を可能にする。例えば、「表現の能力」「理解の能力」を評価するには、普段からその能力を伸ばすことを意識して指導する必要がある。短期間での伸びは顕著に現れにくい、小テストや単元のまとまりごとのパフォーマンステストをシラバスに組み込むことで、生徒の伸びや指導の効果が確認できるだろう。「関心・意欲・態度」の評価は、生徒の授業中の活動への積極的態度を見ると同時に、教える側が生徒に興味ある授業・やる気を起こさせる授業をしているかという問いかけでもある。

評価観点	指導内容の例	教員に必要とされる知識・技能
関心・意欲・態度	楽しい雰囲気です日常的に英会話を行う Communication Strategies を使う指導など	やさしい英語で授業を進める能力・心理学の知識
表現の能力	発音クリニック・音読・スピーチ・状況別対話練習・英作文(課題作文)・英語面接など	タスク活動・口語表現・討論・プレゼンテーション・異文化コミュニケーションに関する知識や技能
理解の能力	音の聞き取り・リスニング演習・まとまった英文の理解の仕方指導・ディクテーションなど	リスニングや読解についての理論に関する知識と指導技術
知識・理解	語および連語・文法・背景知識・段落の構成・異文化コミュニケーションの知識・学習の方法など	コミュニケーション・異文化に関する知識・英語(学習法)の知識

(4) 観点別評価の実施方法とその頻度

4つの観点は、互いに関連し合っており、本来は生徒の能力を完全に4つに区別して評価するのは難しい。また、外国語の習得という特殊性もあり、実践的コミュニケーション能力の伸びが短期には現れにくい場合もある。個人差もある。しかし、コミュニケーションに必要なさまざまなスキルを段階的にきめ細かく、個に応じて指導するには、普段の生徒の学習状況を評価し、記録にとどめることも不可欠である。

クラスサイズや生徒の習熟度、生徒の多様な学習形態を考慮しながら、観点別のきめ細かな（授業ごと・単元ごと）評価と、一定期間ごとに行うパフォーマンステストによる評価、さらに、定期考査による評価を組み合わせ、適切に活用する必要がある。特に、日頃の評価で見取っていく生徒の能力が、中・長期目標（学期・年間目標）で設定された到達目標にどう結びつくかを意識することが大切である。基本的には、次のように考えるのが妥当であろう。

日頃の見取り ⇒ 複数回の見取りで、「規準に達した言語活動」が一度でも見られればB、それが常に見られればAとする。全く見られなければCとする。
パフォーマンステスト・定期考査 ⇒ 目標に照らしてより分析的な評価が可能なタスクを課し、A、B、Cの評価をする。

外国語科における4観点の評価の留意点は以下の通りである。各観点のより具体的評価規準や重点の置きかたについては、外国語科に属する各科目の評価の観点の趣旨を参考にする。

【関心・意欲・態度】

- 「言語活動への取組」と「コミュニケーションの継続」という観点から評価する。
- 「授業態度の評価」ではなく、コミュニケーション活動として生徒が見せる取組状況や継続への努力を主として評価する。

(例) 「つなぎ言葉を使って沈黙をつくらぬように努力している」かを、ペアワークの観察により評価する。

* 【関心・意欲・態度】は、指導上最も工夫が必要な観点である。妥当性と信頼性のある評価が最も難しいこともあり、現実的には、(例)のように目に見える部分で評価することが多いが、今後も研究が必要である。自己学習力や学習への積極性など、生徒の学びを文章で記述するなどして、指導に生かすことが大切である。

【表現の能力】

- 「正確さ」「適切さ」という観点から評価する。「正確さ」とは、話したり、音読したり、書いたり、対話をしたりする際の英語の音声・語彙・文法の正確さであり、「適切さ」とは、場面、目的、相手に応じて適切な表現を選択してコミュニケーションができる能力である。
- 普段の授業の観察から得られた情報も加味しながら、パフォーマンステスト等で評価する。

(例) 「1分間の自己紹介スピーチを、キーワードや発音に注意しながら相手にわかるよう行える」かどうかを、プレゼンテーションの場面で評価する。

【理解の能力】

- 「正確さ」「適切さ」という観点から評価する。「正確さ」とは、リスニングやリーディング、あるいは対話において、音声面・文法面・内容面が正確にとらえられているかであり、「適切さ」とは、場面や状況、テキストタイプ（手紙文・論文・物語・スピーチ・会話・ディベートなど）に応じて、相手の意向を理解したり、必要な情報を得ることができるかということである。
- 表現の能力同様、普段の授業の観察やパフォーマンステスト、リスニングテスト等で評価する。

(例) 「自然なスピードで読まれたスピーチを聞いて、その内容がわかる」かどうかを、リスニングテストで評価する。

【知識・理解】

- 「言語についての知識」「文化についての理解」という観点から評価する。「言語についての知識」とは、言語材料の理解と、その運用についての知識であり、「文化についての理解」とは、言語の背景にある文化やものの見方・考え方についての理解である。
- コミュニケーションに影響を及ぼす文化的知識のことであり、単なる社会常識としての文化理解ではない。
- 通常の授業における小テストやワークシート、定期考査等で確認することができる。

(例) 「動詞の過去形が、仮定の文に用いられることを理解している」かどうかを、小テストで評価する。

以上を、評価方法を中心に例示すると次のようになる。

評価場面	評価方法(例) / 観点	関	表	理	知	
通常の授業場面	a コミュニケーション活動の観察	◎	○	—	—	会話・1分間スピーチ, etc.
	b 課題・ワークシート・日記	◎	◎	○	—	随時提出
	c 小テスト	—	○	◎	◎	作文・文法・リスニング・単語・読解(速読), etc.
その他の授業時間	d 定期考査	—	◎	◎	◎	各学期2回(考査期間)
	e パフォーマンス [ITなど形態を工夫]	○	◎	◎	—	各学期1～2回 (授業時間を数回割り当てる)

[◎適している ○やや適している]

特に、定期考査については、

- 問題形式ごとに、どの観点について評価するかを明確にする
(大問ごとに観点を明示する)
- 内容理解を確認する問題では、教科書以外に用いた副教材の文を出題するなど、単なる教科書の暗記(これも大切であるが)を問う問題に偏らない工夫をする
- リスニングテストや表現力を問う問題(課題作文など)を含める

などの配慮が必要である。パフォーマンステスト(実技テスト)は、教員にとって過大な負担にならないよう、ALT(外国語指導助手)とのチーム・ティーチングや、英語担当教員同士の連携により、複数人数で対応することで、効率的に行うことができる。生徒に自己評価票を提出させ、教員の評価と比較することも重要である。

(5) 総括的評価

授業や単元での評価は、その結果を生徒にフィードバックし、生徒の学びを助けるための「形成的評価」として活用される。また、学期末・学年末には生徒や保護者に対して、生徒の学びの成果を示す「総括的評価」が重要になる。

授業・単元の評価および定期考査・パフォーマンステストで得られた観点別評価を総括するにあたっては、それぞれの学期や学年において、「最終的に目標を達成しているか」どうかを考慮して行う必要がある。

4 Authentic Assessment / Alternative Assessment

平成12年12月の教育課程審議会答申において、評価方法の工夫改善の方法として次の4つの提言がなされている。

- ① 総括的な評価のみではなく、分析的な評価、記述的な評価を工夫すること。
- ② 学習後のみならず、学習の前や学習の過程における評価を工夫すること。
- ③ 学期末や学年末だけでなく、目的に応じ、単元ごと、時間ごとなどにおける評価を工夫すること。
- ④ 具体的な評価の方法としては、ペーパーテストのほか、観察、面接、質問紙、作品、ノート、レポート等を用い、その選択・組合せを工夫すること。

こうした考え方は、伝統的な紙と鉛筆だけのペーパーテストや、多肢選択式の評価に代わる、「本物の」「代替的な」評価という意味で、アメリカ、カナダなどでは Authentic Assessment / Alternative Assessment と呼ばれている。

Authentic Assessment is a way to accurately evaluate what a person has learned by assessing their collective abilities. The following excerpts were taken from “*Authentic Assessment Overview*” (by Pearson Education Development Group, *Family Education Network*, Pearson Education Inc. All Rights reserved, www.teachervision.fen.com/lesson-plans/lesson-4911.html). They clearly explain important aspects of Authentic Assessment:

In the past, assessment relied on rote memorization or passive test-taking. Authentic Assessment, by contrast, focuses on analytical skills, ability to integrate what the student has learned, creativity, ability to work together, and written and oral skills. The idea behind Authentic Assessment is that the learning process is as important as the final product. There are five major types of authentic assessment:

1. **Performance Assessment:** This allows students to work together to solve problems. The students will write, revise and present an oral report to the class. Other suggestions include the preparation for a debate and the debate itself.
2. **Short Investigations:** This is used to ensure that students have mastered basic skills. The key is the ability to interpret, describe, calculate or explain either a diagram or a primary source. This may be utilized in conjunction with the “Period for Integrated Study.”
3. **Open Response Questions:** This is simply giving the students a problem and asking for a response. The responses can be either through diagrams, or written / oral answers. This will be made possible by introducing the “Socratic method” of teaching.
4. **Portfolio Assessment:** A Portfolio shows the history and growth of students’ ideas and products. In a portfolio, the student can include samples of the best work, revised versions of a product, a piece of work that did not work out with analysis of the difficulties, a piece that’s turned out differently than expected, peer reviews, art work, rough drafts, polished writings, etc. The idea is to assess a wide variety of students’ accomplishments.
5. **Self Assessment:** Students attempt to evaluate their own work. They must be able to answer such questions as: What was the most difficult aspect of the project? What did I learn from the project? What would I have done differently?

Based on my teaching experience in Canada, these five types of assessment may have potential for application in Japan. Authentic Assessment is an excellent method of evaluation. The benefits include a much more in-depth look at students’ work. It is also a way for teachers to expand their teaching base. By varying the teaching method and the evaluation techniques, the teacher will be able to keep students focused.

(Edited by Angus Mungal, who has taught History, English, Geography, and Physical Education at senior high schools in Toronto, Canada for 7 years and works for JET)

- (注) 1) Assessment : evaluate と assess は上記の英文のように同義で用いられることもあるが、教育評価においては、生徒の評価を assessment、カリキュラムの評価を evaluation、教師に対する評価を appraisal と区別することがある。
- 2) Performance Assessment : 広義では、択一式テストではなく、生徒の普段の performance (学習活動全般)を直接見取って評価することを意味する。狭義では、学習の達成度を測定するために用意されたタスク(課題)を用いて実施される実技テスト(面接テスト・発表テストなど)を指す。
- 3) the Socratic method : 問答法による教授法

実践事例について

今回の実践報告では、「英語 I」「リーディング」「ライティング」の単元指導（評価）実践 3 事例が紹介されているが、実践の中で授業者が最も感じたことは、「授業の目的をより明確にする必要がある」ということであった。

これまで工夫してきたさまざまな指導・評価方法を、もう一度整理し、目標をあらためて確認しながら実践をすることで、授業者がコミュニケーション能力について、より深い理解を得られ、より効果的な授業へと結びつくのではないだろうか。

尚、実践報告では便宜上、1 レッスンを一単元として扱っているが、英語においては、技能教科としての性格上、複数のレッスンを一つのスパンと考えると、指導目標・評価計画を立てるアプローチも必要だろう。今回の 3 事例の場合は、以下の状況を想定した実践になっている。

- 事例 1（英語 I） --- 1 単元（8 時間程度）内で 4 観点の評価を一通り行う。
- 事例 2（リーディング） --- 複数のレッスン（学期単位）をスパンとして 4 観点の評価を一通り行う。
- 事例 3（ライティング） --- 少人数クラスのメリット生かしながら、1 単元内で 3 観点（「理解の能力」を除く）の評価を行う。

学校により生徒の習熟度・動機付けの度合いなど、生徒の実態は大きく異なるだろうが、観点別評価で大切なことは、紙と鉛筆のテストのみの評価から脱却し、生徒の能力を多面的にとらえ、長所を伸ばしていくことではないだろうか。

本実践報告が、今後の各学校での取組の参考になれば幸いである。

参考文献・資料

梶田叡一 2001 『教育評価』[第 2 版補訂版] 有斐閣双書

金谷 憲（編）2003 『英語教育評価論』 河原社

キャロライン・V・ギップス 鈴木英幸(訳) 2001 『新しい評価を求めて---テスト教育の終焉』
BEYOND TESTING Towards a theory of educational assessment. 論創社

松沢伸二 2002 『英語教師のための新しい評価法』 大修館書店

文部省 平成 11 年 『高等学校学習指導要領解説 外国語編 英語編』

文部科学省 平成 15 年「英語が使える日本人」の育成のための英語教員研修ガイドブック

Brown, J.D. & Hudson, T. 2002. *Criterion-referenced Language Testing.* Cambridge University Press.

Celce-Murcia, M. and Larsen-Freeman, D. 1999 *The Grammar Book. An ESL / EFL Teacher's Course* (second edition). Boston, MA: Heinle & Heinle.

実践事例 1 英語 I 「Context を意識した辞書使用と英語による情報のやりとり」

- 1 実践期間 平成 15 年 11 月 12 日～11 月 26 日
- 2 単元名 (学年) 'Fine' Is Not Always Fine (1 年)
[使用教科書 桐原書店 WORLD TREK ENGLISH COURSE I Lesson 6]
- 3 単元の目標
 - (1) 辞書から得た情報を、英語で伝えることができる。
 - (2) 多義語について理解することができる。
 - (3) 本課で取り上げる文法事項 (seem to, 関係詞 what など) を理解し、それを適切に使った表現ができる。

〈単元設定の理由〉

英語によるコミュニケーションを阻害する要因の一つは語彙不足であると考えられる。これは情報の発信側にあっても受信側にあっても変わらない。辞書を自己の潜在的語彙力として活用するためには相応の訓練が必要である。そこで高校での英語学習の開始に当たって、英和辞典を用意するよう指示したが、最初は持参しない生徒や中学生用の辞書しか持たない生徒も多かった。

単語を見つけるのに時間がかかっていた辞書を引こうという意欲が高まらないので、授業の中で辞書を使用する場面を増やすことを心がけた。まず、授業時間を割いて新出語を調べさせた。その中で品詞や多義語に気を配ることの重要性を伝えた。また接頭語や、外来語の本来の意味に気づかせる機会も意識して設けた。さらに、文法項目の学習後それを利用した未知語を含む英文の小テストを課し、辞書 (電子辞書を除く) の使用を認めた。また、課題として当該文法項目を含んだ英文を自由に作らせることもした。

そうした活動を重ね、現在ほとんどの生徒が高校用の学習辞典を持参するようになった。次の段階として、多義語の学習を通して文脈の中での語義を意識することの重要性を理解させたい。コミュニケーションの場において単語は単独では存在せず、未知の単語の意味を文脈から推測することが可能であることにも気づかせたい。特に、辞書で調べた情報を英語でやりとりする習慣を身に付けることは、今後のコミュニケーション活動の礎になると考える。

言語材料については、特に what と seem to の用法の理解が関係詞・不定詞全体の理解につながるので丁寧に扱いたい。これらは表現としてもそれぞれ情報を簡潔に名詞化したり、考えや判断を述べるための重要な機能をもっていることを、自由英作文の中で学ばせたい。また許可を求める会話表現は、1年で同時履修しているオーラル・コミュニケーション I の学習の中でも不可欠な表現なので、ここで理解を深めておくことは意味がある。

4 単元の指導計画 (8 時間扱い)

- | | |
|-------------------|-----------|
| 〈本単元のコミュニケーション活動〉 | |
| 使用場面： | グループ討議／発表 |
| 言語の働き： | 調べた情報を伝える |
- 第 1 時 課の導入 (辞書の使い方)
 - 第 2 時 Part 1 本文の理解 (ことばと誤解)
 - 第 3 時 (本時) Part 1 前時の内容確認 語彙の確認 seem to-不定詞
 - 第 4 時 Part 2 本文の理解 (dressed chicken の意味)
 - 第 5 時 Part 2 前時の内容確認 語彙の確認 関係代名詞 what
 - 第 6 時 Part 3 本文の理解 (間違いから学ぼう)
 - 第 7 時 Part 3 前時の内容確認 語彙の確認 S+V+O+O (=that 節) 付帯状況の with
 - 第 8 時 章末問題による確認、許可を求める応用表現

5 単元の評価計画

(1) 評価規準

関心・意欲・態度	表現の能力	理解の能力	知識・理解
<ul style="list-style-type: none"> 辞書を使った課題に関心をもって取り組み、成果を発表しようとする。 Q&Aに積極的に答えようとする。 	<ul style="list-style-type: none"> seem to- 不定詞を適切に用いて文を作ることができる。 辞書を利用し語彙に関する発表ができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 本文の内容を読んで理解することができる。 本文のテープ録音を聞き概要を理解することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 新出語彙を理解している。 seem, what, SVOOを理解している。 多義語について理解している。

(2) 評価計画 ※太枠内が本時 【 】は評価方法

時	学習内容	評 価 項 目			
		関心・意欲・態度	表現の能力	理解の能力	知識・理解
1	辞書の使い方を確認する。	積極的に辞書を使っている。 【観察】		英文の課題を聞き概要が理解できる。 【観察】	
2	Part 1の内容を理解し、Q&A活動を行う。	Q&Aに積極的に答えている。 【観察】			辞書を使って英文(単文)和訳ができる。【小テスト】
3	多義語について発表する。 seem to-の使い方を学ぶ。	積極的に辞書を使っている。 【観察】	多義語についての発表ができる。 【発表①・提出物】 (⇒ 資料①)	Part 1の要約文を完成することができる。(⇒資料②) 【ワークシート】	
4	Part 2の内容を理解し、Q&A活動を行う。	Q&Aに積極的に答えている。 【観察】	seemを用いた英文が書ける。 【提出物】		辞書を使って英文(単文)和訳ができる。【小テスト】
5	関係詞 what 付帯状況 with の使い方を学ぶ。	積極的に辞書を使っている。 【観察】		Part 2の要約文を完成することができる。 【ワークシート】	
6	Part 3の内容を理解し、Q&A活動を行う。	Q&Aに積極的に答えている。 【観察】	whatを用いた自由英作文ができる。 【提出物】		辞書を使って英文(単文)和訳ができる。【小テスト】
7	S+V+O+O (=that節) の使い方を学ぶ。	積極的に辞書を使っている。 【観察】		ディクテーションができる。 【ワークシート】	
8	本課で学んだ文法・語法を確認する。	許可を求める表現を含んだ会話練習に積極的に取り組んでいる。 【観察】	多義語についての発表ができる。 【発表②・提出物】		本課の単語の意味を知っている。 【小テスト】

(3) 観点別評価について

【関心・意欲・態度】

学習活動における具体的評価規準	<ul style="list-style-type: none"> ・積極的に辞書を利用し、成果を発表しようとしている。 ・Q & Aに積極的に取り組んでいる。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	<ul style="list-style-type: none"> ・積極的に辞書を利用する姿勢が常に(単元で複数回)見られ、成果を発表する。 ・Q & Aへの取組の積極性が常に(単元で複数回)見られる。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	<ul style="list-style-type: none"> ・個別に対応し、辞書の引き方を指導する。 ・間違いを恐れずに答えられるような雰囲気づくりをする。

【表現の能力】

学習活動における具体的評価規準	<ul style="list-style-type: none"> ・指定の表現(seem, what)を用いた英文を大きな文法的誤りをせずに書くことができる。 ・英語を用いて多義語についての発表が行える。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	<ul style="list-style-type: none"> ・指定の表現を用いた英文を3つ、大きな文法的な誤りをせずに常に書くことができる。 ・聴衆とのeye contactを保ちながら、わかりやすい発音で多義語についての発表を行うことができる。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	<ul style="list-style-type: none"> ・seemを用いた簡単な文を提示し、単語の入れ換え練習をさせる。 ・発表原稿(多義語のワークシート)の音読の仕方を個別指導する。

【理解の能力】

学習活動における具体的評価規準	<ul style="list-style-type: none"> ・テキストの内容を読んだり聞いたりして、その概要を理解できる。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	<ul style="list-style-type: none"> ・ディクテーション、要約のワークシートでおおむね8割以上の正解が安定的に得られている。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	<ul style="list-style-type: none"> ・ノートを取り方の指導を個別に行う。 ・個々の単語の発音の仕方を確認する。(後日音読の個別指導をする)

【知識・理解】

学習活動における具体的評価規準	<ul style="list-style-type: none"> ・多義語について理解し、テキストの単語、what, seem, 付帯状況のwithの構文について理解している。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	<ul style="list-style-type: none"> ・単語テスト・例文プリントでおおむね8割以上正解する。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	<ul style="list-style-type: none"> ・単語の書き取り練習、基本例文の暗唱を個別指導する。

6 本時の展開

(1) 本時の目標

- ① 辞書の活用の仕方に習熟し、辞書で調べた情報について英語でやりとりをすることができる。
- ② 視覚を key にして(一コマ漫画を見て)、 seem to-不定詞を用いた文を作ることができる。
- ③ 本文 Part 1 の要点を理解することができる。

(2) 本時の指導過程

過程	学 習 活 動	指 導 内 容	指 導 上 の 留 意 点	評 価 観 点 (方 法)
課題 確認 (7分)	Greetings 多義語について調べた成果を発表する。 ⇒ 資料①	Presentation 指定課題を発表させるにあたり、プレゼンテーションの留意点に触れる。	いくつかの発表で取り上げられた単語について、全員に辞書で確認させる。	【表現の能力】 多義語についての発表ができる。 (発表の観察・提出課題)
展開 (40分)	Part 1の内容を確認する。 各自の作業－10分 解答の確認－5分	Worksheet ワークシートに時系列で整理し、穴埋め形式の要約をさせる。	前半5分は教科書のみ参照。後半5分でノートを使って確認させる。	【理解の能力】 Part 1の要約文を完成することができる。 (ワークシート) ⇒ 資料②
	seem to-不定詞を使ったドリルを行う。 各自の作業－25分	Grammar Points ・絵を key とする英文を作成させる。 ・辞書を使って例文プリントを理解させる。	・状況が明快な漫画の一コマを使って表現させる。 ・未知語を含む文を5つ読解させる。	【関心・意欲・態度】 積極的に辞書を使っている。 (観察)
まとめ (3分)	予習・課題の指示を理解する。 seem を使った自由英作文に取り組む。 ⇒ 資料③	Consolidation 本時の概要を再度確認し、次回の予告をする。	本時の授業について、生徒が達成感を得たかを生徒の様子から感じ取る。	

7 単元全体の学習経過

辞書をコミュニケーションの道具として活用する能力を育成する過程で、文脈を意識した辞書使用の指導を重視する単元と位置づけた。いろいろな場面で辞書を自発的に開く生徒が見られるようになってきたが、まだ辞書の最初に掲載されている語義で満足してしまうケースがほとんどであった。

この単元では、調べ学習の課題や例文読解テストを通して「多義語」に注意を向けさせるよう留意して授業を行った。その結果、2回目の例文テストでは明らかに文脈に沿った語義を見いだせた答案が多くなった。課題学習も含め、辞書を活用する学習とその評価を積み重ねたことにより、英語と日本語の word が語義として1対1対応をしていないことが生徒の間に認識されてきた。アンケートに、「辞書を引くのが楽しくなった」というコメントを書く生徒もいた。また、例文作成に辞書の記載を活用した生徒も多かった。

今後、辞書にあるさまざまな情報に触れる機会を増やししながら、言語学習のよりどころとしての辞書使用能力を高めていきたい。また、今回辞書で得た情報について英語で説明する活動を行ったが、英語でお互いに情報交換する習慣をつけることにより、コミュニケーション能力が高まることが期待できる。

8 本時の様子

まず「多義語」を調べるという作業を通じ、中学校で習ったような単語にも思いがけない語義があることに気づかせることができた。授業の中ですすんで発表しようという生徒は少数だったが、出席 37 名中 33 名の生徒が課題を提出した。(⇒資料①)

要約のワークシートは和文と英文の 2 つの部分に分かれている。和文は本文の構成に沿ってまとめてあり、英文は必要に応じ全体を構成し直してある。時間の後半はノートの使用を認めているので、ほとんどの生徒が和文部分は完成するが英文の部分は苦勞していた。(⇒資料②)

seem を使った自由英作文 (⇒資料③) では、ほとんどの生徒が単文を書くことができるようになっていた。辞書を引くのは学年当初と比べ速くなっているように見えるし、アンケートでも 7 割ほどの生徒がそう感じていた。

9 単元の観点別評価の総括

(1) 関心・意欲・態度

辞書使用は定着してきている。積極的な辞書使用という規準は、こちらの cue を待たずに辞書を使用するという意図していたが、課題によっては辞書を必要としない生徒もいるので、一律の評価はしにくかった。結果的には、多義語の発表(パフォーマンステスト)や Q & A への取組で、複数回積極性が見られた生徒に A 評価を与えた。全体的に、まだまだコミュニケーションへの積極性が足りないようなので、教室内インターアクションを活性化する手だてを工夫する必要があると感じた。評価結果は以下の通りであった。

A . . . 5 名

B . . . 32 名

C . . . 2 名

(2) 表現の能力

指定の表現を使った英作文 (資料③) については、2 回のうち、1 度でも、おおむね正しい英文 (3 文) が書けた生徒には B を、安定的に (2 回の評価機会のうち両方とも) 正しい文を作成できた生徒、指示した量を超える文を作ってきた生徒に A 評価を、課題を提出しなかった生徒に C 評価を与えた。英語を書く習慣づけという点では多少効果があったが、身近なことや自分の考えを自由に表現しようという意欲を育てるには不十分であると感じた。

多義語の発表は与えられたパターンを応用して文章を作成する形を取った(資料①)。ゼロから作るのに比べて取り組みやすいことと、声に出して発表する能力を中心に評価することを考え、このような「足場づくり」をした。単元を通して、毎時間数名ずつ見取り評価を行った。評価結果は以下の通りであった。

A . . . 4 名

B . . . 27 名

C . . . 8 名

(3) 理解の能力

日本語による内容理解と、英文の Cloze Test を用いて評価を行った(⇒資料②)。前者では教科書・ノートを参照させながら日本語の要約文を完成し、それをふまえた英文の読解ができることを評価した。また後者については、機能語も含めた空所補完で聞く能力を評価した。日本語の要約文完成でつまづく生徒はほとんどいなかったが、Cloze Test の正解率は 1/3 程度にとどまった。ワークシートの取組を見ていると、英文をじっくり読んで解答するのではなく、空所の前後の単語だけを見て解答しようとする姿が見られた。教員が内容理解力を測ろうとしているタスクを、生徒は試験問題

を解くストラテジーを活用して解こうとする傾向があることがわかった。教員が英文 **summary** を作る上で更に配慮が必要だと考える。総合して、評価規準は妥当であったと考える。評価結果は以下の通りであった。

A・・・12名

B・・・20名

C・・・7名

(4) 知識・理解

A評価基準の「8割」は、単語テストについては妥当であったが、例文読解テストについては厳しめの基準となってしまった。きつめの時間設定をしてあるため、全部の問題に取り組めた生徒すら1割程度であった。後日の評価（期末試験）の中で該当単元の「知識・理解」の評価に関わる部分を45点分抽出し、この観点の評価に用いた。評価結果は以下の通りであった。

A・・・10名

B・・・19名

C・・・10名

10 今後の課題

- ・ 評価の観点をあらかじめ提示しておくことは、指導の方向を明確化する上で有効であった。併せて規準も明示することで目標がはっきりしてくると考えるが、実際の評価の場面では評価を行いながら規準の妥当性について疑問を感じてしまう場面があった。
- ・ 授業内の観察で評価を行うことには限界がある。ペアの会話練習を観察評価するような場合は5組程度が限度だと感じた。また、取り組んでいる言語材料や活動形態が異なる場合、評価の客観性の保持が難しいと感じた。
- ・ 観察者（評価者）の立場であっても観察中に指導者として生徒に関わるべきだと判断する場面がある。そのとき指導された生徒の **performance** は改善される。指導の場面と評価の場面を明確化することが必要であると感じた。

Lesson 6 'Fine' Is Not Always Fine

(資料②)

Part1

【内容確認】

○ テーマ: 英単語にはいくつかの意味がある。
 このことが 誤解をまねくこともある。

○ エピソード

- ▶ 日本人が ちのち車場を探していた。
 そこには 掲示板 が "Fine for Parking."
- ▶ 戻ってみると 警官がいて、叫んだ。
- ▶ 誤解の原因

	fine の意味	Fine for Parking の意味
日本人	良い	車をとめても良い
本来の意味	罰金	車をとめたら罰金

- ▶ 結局…警官は エモア警官 な人物
 日本人を 注意した上で かみ放して くれた

完了

SUMMARY

My Japanese friend knew only one (meaning) of 'fine'. When he found a notice saying, "Fine for Parking, he thought he was allowed to park his car there. But the word 'fine' also means money for (penalty). A police (officer) explained this to him, and let him go with just a warning.

A familiar word may have another unexpected meaning.

(資料③)

I'm very happy to be with my friends.

Major League baseball is interesting to me.

Our friends are important.

Yuzu seems to be looking at their bankbook (s).

(注) この日の授業では生徒はあるマンガを見てそれを描写する課題を与えられている。

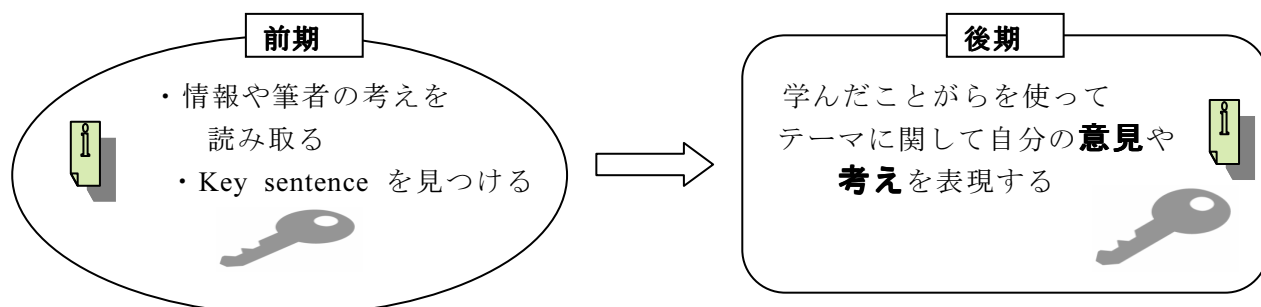
自由英作文提出用紙		組 番	〇 〇 〇 〇
番号	日付	作った文章	確認
1	11/5	It is fun for me to play baseball. 私にとって野球をすることは楽しい。	
2	"	It is important for us to study. 私たちにとって勉強することは大切である。	
3	"	It is very happy for me to be with my friends. 私にとって私のともだちといることがとても幸せだ。	
4	"	It is difficult for me to study world history. 私にとって世界史を勉強することは難しい。	
5	11/10	It is interesting for me to Major League. 私にとってメジャーリーグは興味深いことである。	
6	"	It is important for us to have a dream. 私たちにとって夢を持つことは大切である。	
7	"	It is hard for me to play soccer. 私にとってサッカーをすることは難しい。	
8	"	It is important for us to our friends. 私たちにとって友達は大切だ。	
9	11/19	Yuzu seems to be looking at savings. ゆずは、貯金を見ているように思われる。	
10	"	Takeshi seems to be very strong. タケシはとても強く見える。	
11	"	Nobita seems to be very weak. のびたはとても弱く見える。	
(生徒の提出プリント)			

実践事例2 リーディング 「自伝を読んで、自分が得意とすることについて話し合おう」

- 1 実践期間 平成15年11月 1日～11月20日
- 2 単元名（学年） “My Parents, Golf, and I” by Tiger Woods （3年）
[使用教科書 増進堂 MAINSTREAM READING COURSE Lesson 7]
- 3 単元の目標
 - (1) Tiger Woodsの成功に至るまでの道のり、Tiger Woodsからのmessageを読み取る。
 - (2) 新出単語や、If 節に代わるいろいろな表現、過去の習慣を表すwouldやS+V+O+原形不定詞の形を理解し、表現できるようになる。
 - (3) 自分の経験にもとづいて自分の得意とすることについて話ができるようになる。

〈単元設定の理由〉

英文を読む時の基本的な取り組み方として、暗号解読のように一語ずつ解明していくのではなく、例えば英語で書かれたメニューを見て自分の食べたいものを注文する時のような好奇心をもって、あるいは自分に興味のある趣味の雑誌を手に取り、そこに書かれている情報を得るような感覚で内容を理解しようとするのが大切であると考えます。また、論説文・物語・伝記などさまざまなテキストタイプの文章を読んでその内容を理解し、さらにそのテーマに関する自分の考えや意見を他の人に伝える事ができるようにすることが「実践的コミュニケーション能力」の重要な一部だと考える。これを念頭に、前期・後期で以下のような目標を設定した。



本単元（後期の授業）においては、世界的な有名人であり、生徒がその活躍ぶりを知る筆者の言葉やmessageを素直に受け止め、忍耐力の必要性を理解し、筆者の人生観を学ぶことができることを目指したい。そして、自分の経験と結びつけながら英文を理解し、自分のことについて話ができるようになることを目標とする。

できるだけ英語を用いて授業を行うことができるよう、そして、できるだけ日本語に訳すことなく内容を理解することができるようにするための一つの方法として、教科書本文の要約を、読みやすい英文で記した“simplified version”として提示する授業を継続的に行っている。（資料①参照）

4 単元の指導計画（6時間扱い）

- | | |
|---------|-----------------------------------|
| 第1時 | 導入 発音練習 WORD QUIZ |
| 第2時(本時) | 要約文の提示 reproduction |
| 第3時 | 本文の内容理解 必要に応じて文法説明 |
| 第4時 | 本文の内容理解 必要に応じて文法説明 |
| 第5時 | 本文に関するQ&A 筆者のmessageを読み取る 慣用表現の確認 |
| 第6時 | 章末の練習問題 自分の得意とすることに関して短いスピーチ |

〈本単元のコミュニケーション活動〉

使用場面： プレゼンテーション
言語の働き： 自分の得意なものを人前で説明する

5 単元の評価計画

(1) 評価規準

関心・意欲・態度	表現の能力	理解の能力	知識・理解
<ul style="list-style-type: none"> 音読・暗唱・Quizに積極的に取り組んでいる。 間違いを恐れずに積極的に話そうとしている。 	キーワードを使って要約文を作ることができる。 (資料①参照) 自分が得意とすることについて話することができる。	本文の要約文の内容を正確に理解することができる。	新出単語や過去の習慣を表すwouldやS+V+O+原形不定詞の形を理解している。

(2) 評価計画 ※太枠内が本時 【 】は評価方法

時	学習内容	評価項目			
		関心・意欲・態度	表現の能力	理解の能力	知識・理解
1	発音練習をする。 Model readingを聞きながら内容に関するキーワードをとらえる。WORD QUIZに答える。	音読に積極的に取り組んでいる。 【観察】			新出単語・熟語を理解している。 【小テスト】
2	Tiger Woods Quizに答える。 教科書の要約文を理解し、板書された単語を見てreproduceできるように暗記する。	Quizに積極的に答えようとしている。 要約文の理解・暗唱に積極的に取り組んでいる。 【観察】	板書されたキーワードをつなげて作った要約文を発表することができる。 【観察】	要約文を理解することができる。 【ワークシート】	
3 4	本文の内容を理解する。 内容把握に必要な文法事項を理解する。	Q&Aに積極的に取り組んでいる。 【観察】		本文の内容を理解することができる。 【観察】	
5	本文に関するQ&Aを行う。 筆者のmessageを読み取る。 慣用表現を使って文を作る練習をする	Q&Aに積極的に取り組んでいる。 【観察】		Q&Aの質問の意味を理解し、正しく答えることができる。 【観察】	過去の習慣を表すwouldやS+V+O+原形不定詞の形を理解している。 【小テスト】

6	教科書の練習問題に取り組む。 自分の得意とすることについて過去の習慣を表すwouldやS+V+O+原形不定詞の形を用いて話をする。	間違いを恐れずに積極的に話をしようとしている。 【観察】	自分の得意なことについて相手にわかる英語で説明できる。 【観察】		
---	----------------------------------------------------------------------	---------------------------------	-------------------------------------	--	--

(3) 観点別評価について

【関心・意欲・態度】

学習活動における具体の評価規準	<ul style="list-style-type: none"> 本文の音読、要約文の暗唱、Q&Aに積極的に取り組んでいる。 学習した表現や語彙を用いて話をしようとしている。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	<ul style="list-style-type: none"> 本文の音読、要約文の暗唱、Q&Aに常に積極的に取り組んでいる。 学習した表現や語彙を用いて話をしようとする態度が、常に見られる。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	<ul style="list-style-type: none"> ヒントを少し多く与える等、まず声を出して英文の暗唱に取り組むよう促す。 机間指導の際、個別に対応して声をかける。グループワークで助けてもらえる雰囲気をつくる。

【表現の能力】

学習活動における具体の評価規準	<ul style="list-style-type: none"> 板書された単語を用いて正しい文を作ることができる。 自分のことについて(この課では「自分の得意なこと」について)、聞き手が理解できる英語で発表することができる。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例(*)	<ul style="list-style-type: none"> 板書された単語を用いて正しい文を作ることが安定的にできる。 自分の意見や感想を、聞き手が理解できる英語で常に話すことができる。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	<ul style="list-style-type: none"> レベルに応じ、本文を見ながら音読あるいは Look-up 方式で読むなどのタスクを与える。

(*) 本活動は単元内では全員の生徒を評価できないので、後期を通して生徒一人について数回見取り評価を行い、毎回規準を満たした場合に学期の総括でAを与える。

【理解の能力】

学習活動における具体の評価規準	<ul style="list-style-type: none"> 本文の要約文の内容を正しく理解することができる。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	<ul style="list-style-type: none"> 本文の要約文のワークシートを安定的に90%以上正確に埋めることができる。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	<ul style="list-style-type: none"> 要約文の意味を理解することから始めて、わからない表現や単語について、辞書や単語プリントなどを活用するよう促す。 本文をよく読み、内容を復習し、空欄の数を絞った適語補充の作業で要約文の作成に取り組ませる。

【知識・理解】

学習活動における具体的評価規準	・ 新出単語や過去の習慣を表すwouldやS+V+O+原形不定詞の形を理解している。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	・ 新出単語や過去の習慣を表すwouldやS+V+O+原形不定詞の形を理解することができ、小テストの中で約90%以上の正解を示している。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	・ ワードクイズのシートを復習し、また教科書の例文を読み直して理解するよう取り組ませる。ワークシートを活用して繰り返し練習させる。

6 本時の展開

(1) 本時の目標

- ① 提示された要約文を理解し、暗唱することができる。
- ② 板書してある単語をつなぎながら文を作ることができる。
- ③ Tiger Woodsからのmessageを読み取ることができる。

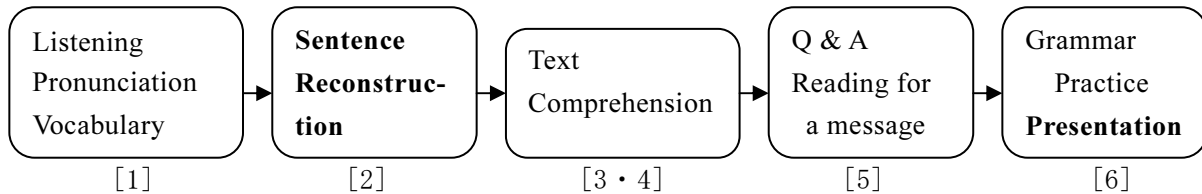
(2) 本時の指導過程

過程	学習活動	指導内容	指導上の留意点	評価観点(方法)
導入 (5分)	Greetings Tiger Woods Quiz	Tiger Woodsに関するさまざまな情報をクイズの形で印象づける。	推測でも良いので英語で応答できるよう促す。	【関心・意欲・態度】 Quizに積極的に答えようとしている。 (観察)
展開 (35分)	要約文を理解し、暗唱する。(⇒資料①) キーワードとなる単語をつなげて文を作りreproduceする。	まずListeningで文を理解させ、次にsummaryを配布して文を見ながら暗唱させる。 キーワードを板書して文を組み立てるように指示する。	教科書本文の単語を使うようにするが、わかりにくい場合は、より簡単な単語に換えて内容を説明する。 板書する単語は動詞をさけ、生徒が文を組み立てるようにする。また、最初は一文に数個の単語を示すが徐々に減らしていく。 個人で覚えたところでグループでも取り組み、代表者又は希望者に発表させる。	【関心・意欲・態度】 積極的に活動に取り組んでいる。 (観察) 【表現の能力】 与えられた単語を用いて意味の通る文を作ることができる。(観察)
まとめ (10分)	ワークシート(⇒資料②)に取り組む。最後に答え合わせをして提出する。	ワークシートを活用して要約文を完成させる。		【理解の能力】 文の意味を正確に理解している (ワークシート)

7 単元全体の学習の経過

後期の指導目標の核として、2つの活動を継続的に行っている。提示された要約文を暗記し、板書された単語をつなげて文を作るという活動 (**Sentence Reconstruction**) と、読んだ文章の内容について、自分の意見を述べたり、関連した発表を行う活動 (**Presentation**) である。これらの活動は複数レッスン (3～4レッスン) を1スパンとして評価計画を立て、生徒全員に対し複数回見取り評価をしている。安定的にこのタスクが行える生徒にはAを与えることとした。

本単元の大きな流れを図示すると以下のようなになる。



第1時の音読・発音練習・単語練習についてはほぼ全員が声を出して発音に取り組み、ハンドアウトのWORD QUIZにも真剣に取り組んだ。第2時では、要約文完成 (**Sentence Reconstruction**) タスクを、グループで行い、代表者が発表した。第3時・第4時では、本文の内容理解であるが、すでに要約文には取り組んでいたもので、大意は把握できていたが、ゴルフに関する知識をもたない生徒が多く、ゴルフに関する語彙が内容把握を困難にしていた。第5時の内容把握のQ&A活動は、生徒も慣れ、活発に行われおり、継続的指導の成果が現れている。“work ethic”のような抽象名詞の理解が苦手な生徒が多いと感じた。第6時では、テキストの章末問題を使って仮定法の基本的な文の形を復習し、本文の中でそれがどう使われているかを確認した後、10分間で自分の得意分野に関する短い文章3つ程度の文をつなげて作り、その後発表をした (6人発表)。

8 本時の様子

ウォームアップとして取り入れたTiger Woods QUIZは、予備知識がない生徒も参加できる内容なので、答えを予測しながら生徒たちは楽しんで参加していた。

要約文を暗唱する活動では、6～7人ずつのグループを6つ作り、全員で協力し合って取り組むように指示した。一人一文を音読したら、隣の人が次の文を音読するという形で行った。グループメンバーが協力し合って取り組んでいた。

板書の単語(名詞)を用いて要約文を作る活動は、各グループの代表が、1センテンスずつ順番に要約文を読み上げる形式で行った。グループのメンバーが助け船を出す場面もあり、クラス全員が参加する雰囲気であった。

ワークシート(資料②)を用いたまとめは、内容を思い出ししながら空所に英語を補充する活動であった。授業後に提出させたワークシートにより理解の能力を評価したが、綴りの間違った解答はカウントしなかったため、9割の正解率を上回らなかった生徒が38名中15名いた。

9 単元の観点別評価の総括 [本事例では、学期単位での総括を想定]

(1) 関心・意欲・態度

人数を限定すれば評価しやすくなるが、同じ活動で同じような評価を学期単位などで区切って均等化する必要がある。また、関心を示さない生徒については、マイナスの評価を続けてつけるのではなく、継続的に支援することが必要なのだと感じた。

音読やQuizに積極的に取り組んでいる様子が見られる生徒を補助簿に記録し、それが恒常的かつ頻繁に見られる場合にA評価を与えた。本単元終了時点では、以下の通りであった。

A・・・8名

B・・・29名

C・・・2名

(2) 表現の能力

発音を過度に重視するのではなく、正しい文を使って表現できるかということで評価をした。要約文の発表、テキストの内容に関する発表（本単元では「自分が得意とすること」について）は、年間を通して行う活動であるので、学期ごとに、各生徒に対する評価回数が均等になるようにし、安定的に「要約文再構成」「テキストの内容に関する発表」で、評価規準を達成できた生徒にAを与えることとした。本単元ではそれぞれ6名について観察評価を行い、全員が規準を達成した。

(3) 理解の能力

ワークシートを用いた評価は有効であると考えられるが、summary のクローズテストの出来ばえが、理解の結果なのか、単純な暗記にたよったものなのか曖昧なので、評価方法の工夫が必要である。タームテストなどで未知の英文を使用して評価する必要もあるだろう。表現の能力と同様、安定的にワークシートのほとんどが埋められる状況が見られた場合にAを与えることとした。本単元のワークシートでは、「努力を要する」と判断された生徒が39名中15名いた。結果を分析し、今後の指導に役立てる必要がある。

(4) 知識・理解

小テストを用いた評価は、生徒に学習の目標を提示する意味においても有効であるとする。従来から授業の中でも取り入れてきたので取り組みやすい。本単元での状況は次の通りであった。

A・・・10名 B・・・27名 C・・・2名

10 今後の課題

評価の頻度が多くなると、そのために費やされる時間も必要となり、生徒とのinteractiveな活動が大幅に削減されることになる。英語を使ったコミュニケーションを目指す授業としてはできるだけ短い時間で簡潔なものにしたい。また、あらかじめ生徒に評価の内容と規準をはっきりと示すためには、年間あるいは学期を通じた計画的な評価場面の提示が必要であると感じた。

Summary	資料①
<p><u>Many things</u> have been written about me and <u>sometimes</u> I can't tell which is <u>true</u> and which is <u>not true</u>. But it is <u>certain</u> that I could have enjoyed <u>my life because of</u> the <u>love</u>, support and <u>guidance</u> of my parents. I started to enjoy <u>golf</u> by watching <u>my father</u> hit balls in <u>the garage</u>. I respected him <u>the most</u>. He seemed to enjoy it <u>very much</u>.</p> <p>My father <u>never</u> forced me to practice, he always gave me <u>a chance</u> to take <u>initiative</u>. He <u>always</u> let me enjoy practicing, so golf has been <u>a labor of love</u> and pleasure to me. He taught me about <u>patience</u>, integrity, <u>honesty</u> and humility. You can't get <u>anything</u> in life unless you work <u>really hard</u>, and <u>even when</u> you try <u>hard</u> <u>sometimes</u> you might not succeed.</p> <p>*下線部はキーワードとして板書する。</p>	

Work sheet (Lesson 7, Tiger Woods)	資料②		
<p>Many things ①_____about me and sometimes I can't ②_____which is true and which is not true. But it is certain that I ③_____my life because of the ④_____, ⑤_____and ⑥_____of my parents. I ⑦_____enjoy golf by ⑧_____balls in the garage. I ⑨_____ him the most. He seemed to enjoy it very much.</p> <p>My father never ⑩_____to practice, he always ⑪_____ me a chance to ⑫_____ initiative. He always let me ⑬_____, so golf has been a labor of ⑭_____and _____ to me. He taught me about ⑮_____, ⑯_____, ⑰_____, and ⑱_____. You can't get anything in life ⑲_____ you work really hard, and even when you try hard sometimes you might not ⑳_____.</p>			
Class	Name	NO	/ 20

実践事例3 ライティング 「インターネットに載せる自己紹介の書き方を学ぶ」

1 実践期間 平成15年11月17日～12月8日

2 単元名 Lesson 1 Welcome to My Site!
[使用教科書 数研出版 Polestar Writing Course]

3 単元の目標

- (1) コミュニケーションのためのライティングに使う構文の特徴を理解し、表現することができる。
- (2) 目的を表す to-不定詞, in order to, so that~, 原因・理由を表す表現 because, because of / thanks to を学び、それらを使い、文を書けるようになる。
- (3) インターネットのウェブサイトなど、いろいろな場面で自己紹介を書けるようになる。

〈単元設定の理由〉

本単元では、インターネットのウェブサイトを初めとして、自分を紹介する英文を書くことを目標とする。読み手を想定して英文を書くことで、書くことの目的が明確になり、焦点もはっきりとしてくる。実際に書いた文は、生徒間、あるいはインターネットを通して海外の生徒へと伝えることで読者が増え、従来教員のみが読者であった場合と違い、伝達手段として英語を使っているという実感を生徒に与えることができる。また、授業外の課題としてエッセイの作成、プロジェクト(学んだ知識を活用して何かを作成する課題)を導入した。これには次のようなねらいがある。

- 授業の効果を最大限に引き出すために、授業のみを学習の場と考えず、学習者が自ら学習法を確立していくことで生徒の learner autonomy を確立させる。それにより、学習者は successful learner になるために goal を決め、learning strategies を選択し、学習の過程で自己評価をすることができるようになる。
- Self-access learning、あるいは independent learning の技法を身に付けることで、授業の中で学習した内容を、生徒の個に応じた目標や能力に合わせて広げていくことができる。
- 教員が mediator として、さまざまな英語学習の機会を紹介することで、motivation の低い生徒が自己学習を始めるきっかけになる。

こうした理由から、全ての単元で、個人あるいはグループ単位で授業外課題を与え、英語に向かう時間を多くするように工夫している。

4 単元の指導計画(3時間扱い)

第1時(本時) モデル文の理解 Key expressions の理解
第2時 Drills Exercises
第3時 小テスト(復習) 応用

〈授業外活動・課題〉 エッセイ、プロジェクト等

〈本単元のコミュニケーション活動〉

使用場面： 電子メール
言語の働き： 自己紹介をして相手からの返事を求める。

5 単元の評価計画

(1) 評価規準

関心・意欲・態度	表現の能力	理解の能力	知識・理解
<ul style="list-style-type: none"> 自己紹介文の課題を終了している。 予習を行っている。 モデル文・Key Expressionsについての質問に積極的に答えようとしている。 練習問題に積極的に取り組んでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> 目的・原因・理由を表す表現を使って正しく文を書くことができる。 自己紹介その他の課題で、正しい英文を書くことができる。 自己紹介その他の課題で、場面にあった表現を使って書くことができる。 	/	<ul style="list-style-type: none"> 目的・原因・理由を表す表現を理解している。 ホームページの構成と目的に応じたメッセージの伝え方の違いを理解している。

(2) 評価計画 ※太枠内が本時 【 】は評価方法

時	学習内容	評価項目			
		関心・意欲・態度	表現の能力	理解の能力	知識・理解
1	モデル文 Key Expressions を理解し、表現出来るように練習する。自己紹介文を書く。	積極的に課題に取り組み、発表する。 【観察・発表】	既習単語・表現を用いて場面に応じた英語が使える。自己紹介の課題で正しい文が書ける。 【発表・提出物】		インターネットのウェブサイトについて理解している。 【観察】
2	Drills Exercises エッセイを書く。	積極的に課題に取り組み、発表する。 【観察・発表】	新しい表現を入れるなどして積極的に書くことができる。 【観察】		海外の国の地理的な知識がある。職業についてのおおまかな知識がある。 【観察】
3	プロジェクト(学校HP作成)を行う。	積極的に課題に取り組み、発表する。 【観察・発表】	ホームページ掲載用学校紹介文(5文程度)を作成することができる。 【発表・提出物】		

(3) 観点別評価について

【関心・意欲・態度】

学習活動における具体の評価規準	・積極的に課題に取り組み、発表している。
-----------------	----------------------

「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	・積極的に課題に取り組み、発表する態度が常に見られる。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	・個別に声をかけ、取組を促す。

【表現の能力】

学習活動における具体的評価規準	・既習単語・表現を用いて正確に自己紹介文を書くことができる。 ・場面・目的(自己紹介・学校紹介)に応じて適切な表現を使い、英文を書くことができる。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	・自己紹介文、課題例文作成などのタスクで、安定的に(複数のプリントで)場面・目的に応じた正しい英文を書くことができる。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	・グループの中で協力を得られるように配慮する。

【知識・理解】

学習活動における具体的評価規準	・目的に応じたWeb Page の英語表現の違いを理解している。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	・目的に応じたWeb Page の英語表現の違いについて、質問に的確に答えることができる。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手だて	・個別に解説をし、プリントが完成できるように支援する。

注：生徒にはあらかじめ、評価の観点・評価の割合を知らせている。

6 本時の展開

(1) 本時の目標

- ① モデル文を理解し、インターネット、ホームページへの理解を深める。
- ② 目的・原因・理由を表す表現を理解し、それらを使って場面に応じて文を書くことができる。

(2) 本時の指導過程

過程	学 習 活 動	指 導 内 容	指導上の留意点	評価観点(方法)
導入 (20分)	グループ活動 (活動結果を発表) いくつかのホームページの例を比べ、ホームページの特徴を考える。	各グループに異なるホームページの例を紹介し、それをもとに話し合いをさせる。	グループ全員が参加をしているか確認する。	【関心・意欲・態度】 積極的に活動に取り組んでいる。(観察)

展開 (60 分)	モデル文・Key Expressionsの確認をする。 モデル文を基にしたワークシートを完成する。 (資料①) Key Expressionsを使ったライティング練習をする。 (資料②)	モデル文の穴埋めシートの作成(個人の情報をもとに) Key Expressionsを使い、ライティングを行う。 グループで解答の確認をさせ、リーダーに発表をさせる。	教科書のどの文を参照したらよいか机間指導しながら確認させる。 グループでは、各自の文の文法・意味を確認させる。	【表現の能力】 フォーマットに従って自己紹介文を書くことができる。 (ワークシート) 【表現の能力】 既習の表現を使って意味の通る英文を書くことができる。 (ワークシート)
まとめ (10 分)	Key Expressionsを使った文を口頭で言わせる。	Key Expressionsを板書し、日本語を伝え、英語に直させる。	教科書を見ないで英文を作らせる。	

7 単元全体の学習の経過

日頃から、さまざまな話題で英文を書く機会を多く与えているが、本単元では、インターネットという不特定多数の読者を想定したライティングに取り組んだ。第1時では、目的によってホームページに使われる表現やテキストタイプが異なり、それぞれの文章が読み手を想定して書かれていることをつかませた。第2時では教科書を中心にドリルを行うとともに、さまざまな国のホームページも参照してテキストの多様性について学びを深めた。第3時では、第1時・第2時で学んだ知識・技能を使って小テストに取り組んだ。

8 本時の様子

クラスサイズが小さく、生徒数が12名であるため、評価は行いやすかった。クラスサイズが小さいほど、指導者はきめ細かく生徒の活動・発言を観察でき、それが評価へと反映される。一つの活動に関して一授業時間内で全員を評価できる生徒数は、今回のクラスが限界であるように感じた。

指導過程では、予定していた時間配分が実際とかなり違った結果になった。導入の部分で、ホームページについて考える活動では、予定よりも時間がかかった。資料として用意したインターネットから検索したものが、authentic materialであったため、語彙の難しさ、分量の多さなどから、資料を理解するのに時間がかかったことが原因の一つである。authentic materialの利点はあるが、時間が限られている場合は、そうした資料をmodifyする、注目する文に下線を引くなどの事前の調整が必要であると思われる。

ワークシート1(資料①)は、教科書のモデル文を参考にして自分のWebsiteを書くtask1と、自分でない人物について書くtask2を入れた。こうすることで、教科書のモデル文をきちんと理解しているかということと、新しい表現などを入れた文を書く表現の能力を見ることができる。ワークシート2(資料②)の上段は、この単元で学習する、目的・原因・理由を表す表現を使えるようにするために、教科書の例文ではない新しいsituationを含んだ例文を出した。生徒の創造性を見ることができると同時に文を正しく書けるかということも見ることもできる。下段は、Websiteの種類をいくつか挙げ、例として提示されたインターネットのWebsiteを見ながらそのカテゴリーを当てると同時に、Websiteの書き方、特徴を考えることを目的としている。

展開の部分でも、ワークシート作成に予定よりも時間がかかった。ワークシート1)「自分のことを書く」では、ワークシートの内容を変えた方がよい点も観察された。Since I am a (), の文では、生徒の書く幅を広げるには a を削除した方がよい。2)「自分でない誰かについて書く」

では生徒が誰について書くかを決めるのに時間がかかってしまった。カテゴリーを限定し、actors / teachers / classmates などと具体的に示した方が生徒は書きやすい。また、グループ内で、各自が書いた内容について share をするために交換して読むことも有効である。資料②のワークシートでは、3) In order to (), Taro ...とあるが、Taro はIにした方がよかった。そうすることで、各生徒の独創的な発想を観ることができるだろう。こうした活動は、最大限授業の中で生徒同士が交換できる時間を持つことが好ましい。

まとめについては時間が無かった。まとめの部分は、次の時間に review として前の授業の再確認で行った方が効果的かもしれない。あるいは、課題としてその単元で学習した内容を含むものを与えれば、review の効果が期待できる。課題としては、たとえば、「インターネットで検索して、興味深い website を探し、どこが興味深いのかを英文でまとめてくる」「授業で学習した表現を使い、journal を書いてくる」などである。

9 単元の観点別評価の総括

(1) 関心・意欲・態度

少人数であったため、非常に評価が行いやすかった。ほとんどの生徒が積極的に参加していた。グループ活動については、授業の中で毎回行っているため、支障はなかった。グループワークや個別の活動の積極性が常に見られた生徒にAを与えた。結果は以下の通りである。

A・・・2名

B・・・8名

C・・・2名

(2) 表現の能力

表現の能力は、提出されたワークシート1, 2 (資料①②)および、第3時に提出されたワークシートで評価をした。3枚のワークシートにおいて3枚とも満足のいく解答をしていた生徒にはAを、1枚でも満足のいく解答をしていた生徒にはBを、一度も満足のいく解答を示さなかった生徒にはCを与えた。結果は以下の通りである。

A・・・6名

B・・・5名

C・・・1名

(3) 知識・理解

知識・理解では、インターネットの website について理解しているかを見るのが目的であったが、ワークシートに記入する task を入れていなかったため、提出物で評価をすることが難しかった。課題、あるいは小テストなどで評価することも検討すべきである。

10 今後の課題

- ・評価項目の「関心・意欲・態度」については、毎時間評価を行う必要があると思われるが、「表現の能力」「知識・理解」は、ライティングにおいては提出物で見ることがほとんどであるため、毎時間評価をしなくてもよいと思われる。「表現の能力」を提出物で評価する場合に、accuracy と fluency をどのように評価するかが課題である。特に、想像力を使い文を書く場合には、accuracy に重点を置きすぎないことが重要である。評価項目を多くすると、授業の流れ (flow) が妨げられることになる。教える部分と評価する部分、観察する部分の配分をあらかじめ計画しておくことが必要である。
- ・観点別評価では、従来行ってきた、授業案→授業・授業内活動→評価基準の設定、のように授業を行ってから評価するのではなく、始めに評価の観点があり、それにもとづいて授業を組み立てていく (シラバスを作る) ことが必要である。一見難しいように見えるが、そうではないことが実際に行ってみるとわかる。あらかじめ見る点 (評価する点) を設定するため、授業が散漫になることを防げるからである。しかし、逆の視点から見ると、評価の観点とそれにもとづいたシラバス・授業内容の妥当性および信頼性はどうかという問題が残る。評価方法が実際

に行ってみて妥当でなかった場合なども想定される。一度決定した評価内容・評価方法は、授業の流れ、生徒の反応などによって常に modify する準備をしておくことが必要であるように思われる。

- ・ 観点別評価では、評価をする回数が定期試験以外に増える。回数が増えるほど、評価の信頼性が上がるため、細かく評価を行うことは必要であるが、そのために 1) 煩雑になる、2) 授業の流れがあただしくなり、消化し切れない、3) 評価と教材研究・教材作成などにかかるエネルギーのバランスが取れない、などの問題点が予測される。教科内での話し合い、研修を定期的に受けることなど、研究・試行錯誤を繰り返しながら、reasonable な評価方法を組み立てていくことが必要である。
- ・ 観点別評価の目標には、「生徒が目標を達成すること」があり、評価の過程で、個々の生徒への feedback がなされることが必要である。例えば、B のついた生徒を A へ上げるためにどのような指導をしたらよいのか、B に到達しない生徒をどう支援するかが問われるのである。

資料①

Task 1 (自分のことを書く)

[生徒の作品と添削例]

Task 1

Welcome to (* * *)'s Website!

Hello. My name is (***). I'm a (**high school student**).
I (**belong to the dance club and ski club in my school.**).

Since I am a (**skier**), I want to (**become well [⇒good] at skiing**).
And thanks to the Internet, I can (**Know skill of skiing though site's boards.**)
[⇒ learn skills such as skiing through internet sites.]

I created this site so that you can (**enjoy this site [⇒enjoy it]**).
Please give me your comments!

The following are my (**favorite things**).

- (**eating**)
- (**cooking**)
- (**skiing**)

Task 2 では同じフォームを使って自分以外の誰かについて書く

Task 2 (自分でない誰かについて書く)

[生徒の作品と添削例]

Task 2

Welcome to (* * *)'s Website!

Hello. My name is (***). I'm a (**teacher of high school [⇒ high school teacher]**).
I (**am said that I am stylish and youthful!!**).
[⇒ am said to be stylish and youthful!!]

Since I am an (**English teacher**), I want (**you to enjoy English**).
And thanks to the Internet, I can (**teach you English in [⇒ on] this site.**)

I created this site so that you can (**enjoy this site [⇒enjoy it]**).
Please give me your comments!

(以下略)

☆ ここでは担当の英語の先生について書いている。

A. Complete the sentence.

- 1) I went to Paris to (**buy perfume**).
- 2) He worked hard to (**buy my** [$\Rightarrow a$] **house**).
- 3) In order to (**make her happy**), Taro bought many flowers.
- 4) Jane held a party in order to ([空欄]).
- 5) I will clean my room so that (**I don't give my girlfriend an unpleasant feeling**).
[$\Rightarrow uncomfortable$]
- 6) She borrowed 10,000 yen from her brother so that (**I will show off**).
[$\Rightarrow she could treat her friends.$]

B. Complete the sentence.

- 1) I do not like carrots because (**I am not horse**, [$\Rightarrow a horse$]).
- 2) He was not home because (**he went to** [*the*] **store to buy** [*some*] **fried chicken**).
- 3) Since it was raining hard yesterday, (**I felt that I may be** [$\Rightarrow was a$] ”**rain-bringer**”).
- 4) Since I ate too much last night, (**I grow fat!** [$\Rightarrow I will get fat!$]).
- 5) Because (**I was crying**), (**my eyes get** [$\Rightarrow got$] **swollen**).
- 6) Thanks to (**you give me present** [$\Rightarrow your present$]), (**I am happy**).

Types of Web Sites

Web sites are created by individuals, companies, organizations, and governments, and consequently, sites are developed for a variety of purposes.

Type	Purpose	URL Address
Advocacy	To influence public opinion To promote a cause	Frequently ends in .org
Business	To promote a product or service	Frequently ends in .com
Informational	To provide factual information	Variety of endings, .edu and .org
News	To provide information about local, regional, national, or international news	Frequently ends in .com
Personal	To fulfill a variety of reasons for an individual	Variety of endings, .com and .edu
Entertainment	To provide enjoyment	Variety of endings

● 次の資料が、上のどのカテゴリーに当てはまるか答えなさい。

● また、それぞれのウェブサイトの特徴を英語で箇条書きにしなさい。